

茨城県教育財団文化財調査報告第179集

十万原地区市街地開発事業 地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

十万原遺跡 1

平成 13 年 3 月

茨城県住宅供給公社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第179集

十万原地区市街地開発事業 地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

じゅうまんばら
十万原遺跡 1

平成 13 年 3 月

茨城県住宅供給公社
財団法人 茨城県教育財団



十万原遺跡遠景



第1号方形周溝墓出土遺物

序

茨城県水戸市藤井町字十万原地内において、十万原市街地開発事業が茨城県住宅供給公社によって計画されています。この計画は、21世紀の新しい街づくりのモデルとして、地区の環境特性を生かしつつ、これからの時代の新しい生活ニーズを先取りし、多様な機能が備わった個性的で魅力的な街づくりを目指すものであります。

その一環として、「十万原地区開発事業」が進められており、その予定地内に埋蔵文化財包蔵地であるニガサワ遺跡、十万原遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県住宅供給公社から埋蔵文化財発掘事業について委託を受け、平成10年4月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、既に「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」として刊行しました。

本書は、平成11年9月から平成12年6月まで調査を行った十万原遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として、御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県住宅供給公社からいただいた多大なる御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成13年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県住宅供給公社の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成11年9月から平成12年6月まで発掘調査を実施した、茨城県水戸市藤井町字^{じゅうまんぼら}十万原1,726番地ほかに所在する十万原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間および整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成11年9月1日～平成12年6月30日
整 理 平成12年4月1日～平成13年3月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、平成11年9月1日～平成12年3月31日は、調査第三班長仙波亨、首席調査員川津法伸、主任調査員藤田哲也、副主任調査員皆川修が、平成12年4月1日～平成12年6月30日は、調査第三班長仙波亨、主任調査員小林孝、和田清典、副主任調査員宮田和男が担当した。
- 4 当遺跡の整理および本書の執筆・編集は、整理課長川井正一の指揮のもと、主任調査員皆川修が担当した。
- 5 発掘調査及び整理に際し、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、X軸=+50,280m、Y軸=+51,000mの交点を基準点(B4a1)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 塚-TM 溝-SD

遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本土器-TP その他-Y

土層 攪乱-K

3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

竈・炉  粘土・柱痕  焼土・赤彩  黒色処理  繊維土器 

土器 ● 土製品 ○ 石器・石製品 □ 金属製品・古銭 △ 骨片 ★ 硬化面 -----

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺跡の全体図は縮尺400分の1とし、各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に縮尺をスケールで表示した。

6 「主軸方向」は、炉・竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その他の遺構については長軸（径）方向を主軸とみなした。主軸方向は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。なお、〔 〕を付したものは推定である。

7 土器の計測値は、口径-A 器高-B 底径-C 高台径-D 高台高-E 頸部最小径-H 胴部最大径-Iとし、単位はcmである。なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付してした。

8 遺物観察表の備考欄は、土器の残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

抄 録

ふりがな	じゅうまんばらちくしがいちかいはつじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	十萬原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書							
副書名	十萬原遺跡1							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第179集							
著者名	皆川 修							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2001年(平成13年)3月21日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
じゅうまんばらいせき 十萬原遺跡	いばらきけんみとし 茨城県水戸市 ふじいちょうあざじゅうまん 藤井町字十萬 ばら ばんち 原1726番地ほ か	08201 — 146	36度 26分 59秒	140度 24分 23秒	27 ~ 30m	19990901 ~ 20000630	14,033m ²	十萬原地区 市街地開発 事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
十萬原遺跡	包含層	旧石器	石器集中地点	1か所	石器(石核・剥片・スクレイパー)		旧石器時代から 中世にかけての 複合遺跡である。 旧石器時代では、 石器集中地点や 集石土坑を確認 した。住居跡は、 縄文時代早期か ら平安時代にか けて確認され、 古墳時代前期・ 中期には大きな 集落が形成され た。また、古墳 時代前期の方形 周溝墓からは、 遺物が数多く出 土した。中世で は、大規模な墓 域が確認されて いる。	
	集落跡	縄文	集石土坑	2基				
			竪穴住居跡	6軒	縄文土器(深鉢・浅鉢), 石器(石 鏃・敲石・磨石), 石製品(垂飾り)			
			陥し穴	2基				
			土坑	14基				
	弥生 古墳	弥生	竪穴住居跡	10軒	弥生土器(広口壺・片口皿), 土製品(紡錘車)			
			竪穴住居跡	31軒	土師器(坏・高坏・器台・埴・甕・台付 甕・壺・手捏土器), 須恵器(坏・把手 付碗), 土製品(紡錘車・羽口), 石製 品(紡錘車・双孔円板・勾玉・剣形品),			
鍛冶工房跡			1基	石器(砥石), 鉄製品(刀子・鏃), 鉄滓				
墓跡	平安	掘立柱建物跡	1棟	土師器(坏・甕), 須恵器(坏・鉢)				
		方形周溝墓	1基	土師質土器(香炉・皿・小皿・内 耳鍋), 陶器(甕・片口鉢・天目茶 碗), 鉄製品(短刀), 古銭				
		土坑	5基					
		地下式墳	14基					
		火葬施設	12基					
その他	時期不明	井戸跡	7基					
		集石遺構	4か所					
		掘立柱建物跡	4棟					
		道路跡	1条					
		堀跡	1条					
溝跡	12条							
不明遺構	9基							
ピット群	3か所							
土坑	758基							

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序の検討	9
第3節 遺構と遺物	10
1 旧石器時代の遺構と遺物	10
(1) 石器集中地点	10
(2) 集石土坑	15
2 縄文時代の遺構と遺物	17
(1) 竪穴住居跡	17
(2) 土 坑	32
(3) 陥し穴	48
3 弥生時代の遺構と遺物	50
(1) 竪穴住居跡	50
4 古墳時代の遺構と遺物	75
(1) 竪穴住居跡	75
(2) 鍛冶工房跡	167
(3) 掘立柱建物跡	172
(4) 方形周溝墓	174
(5) 土 坑	184
5 平安時代の遺構と遺物	188
(1) 竪穴住居跡	188
6 中・近世の遺構と遺物	194
(1) 墓 塚	194
(2) 墓塚の可能性が考えられる土坑	195

(3) 遺物が出土している土坑	204
(4) 土坑・土坑群	208
(5) 地下式墳	215
(6) 火葬施設	239
(7) 井戸跡	247
(8) 集石遺構	252
7 その他の時代の遺構と遺物	256
(1) 掘立柱建物跡	256
(2) 道路跡	261
(3) 溝跡	262
(4) 堀跡	265
(5) 不明遺構	266
(6) ピット群	271
(7) 土坑	274
(8) 遺構外出土遺物	299
8 十万原遺跡遺構一覧表	304
第4節 まとめ	309
写真図版	

挿 図 目 次

第1図	十万原遺跡周辺遺跡分布図	4	第25図	第35号土坑出土遺物実測図(1)	32
第2図	十万原遺跡調査区設定図	8	第26図	第35号土坑出土遺物実測図(2)	33
第3図	基本土層図	9	第27図	第56号土坑実測図	34
第4図	石器集中地点平面及び断面図	11	第28図	第56号土坑出土遺物実測図	34
第5図	石器集中地点出土遺物実測図(1)	11	第29図	第168号土坑・出土遺物実測図	35
第6図	石器集中地点出土遺物実測図(2)	12	第30図	第242号土坑・出土遺物実測図	36
第7図	石器集中地点出土遺物実測図(3)	13	第31図	第243号土坑・出土遺物実測図	37
第8図	石器集中地点出土遺物実測図(4)	14	第32図	第280号土坑・出土遺物実測図	38
第9図	第1号集石土坑実測図	16	第33図	第329号土坑実測図	38
第10図	第2号集石土坑実測図	16	第34図	第329号土坑出土遺物実測図	39
第11図	第19号住居跡出土遺物実測図	17	第35図	第341号土坑・出土遺物実測図	39
第12図	第19号住居跡実測図	18	第36図	第342号土坑・出土遺物実測図	40
第13図	第21号住居跡実測図	19	第37図	第550A・B号土坑実測図	41
第14図	第21号住居跡出土遺物実測図	20	第38図	第550A号土坑出土遺物実測図	41
第15図	第31号住居跡実測図	22	第39図	第550B号土坑出土遺物実測図(1)	42
第16図	第31号住居跡出土遺物実測図(1)	22	第40図	第550B号土坑出土遺物実測図(2)	43
第17図	第31号住居跡出土遺物実測図(2)	23	第41図	第550B号土坑出土遺物実測図(3)	44
第18図	第34号住居跡実測図	25	第42図	第550B号土坑出土遺物実測図(4)	45
第19図	第34号住居跡出土遺物実測図	26	第43図	第555号土坑・出土遺物実測図	46
第20図	第35号住居跡実測図	27	第44図	第888号土坑・出土遺物実測図	47
第21図	第42号住居跡実測図	29	第45図	第889号土坑実測図	48
第22図	第42号住居跡出土遺物実測図(1)	30	第46図	第889号土坑出土遺物実測図	48
第23図	第42号住居跡出土遺物実測図(2)	31	第47図	第1号陥し穴・出土遺物実測図	49
第24図	第35号土坑実測図	32	第48図	第2号陥し穴実測図	49

第49回	第1号住居跡実測図	50	第104回	第22号住居跡出土遺物実測図(3)	115
第50回	第1号住居跡出土遺物実測図	51	第105回	第24号住居跡実測図(1)	118
第51回	第16号住居跡実測図	52	第106回	第24号住居跡(2)・出土遺物実測図(1)	119
第52回	第16号住居跡出土遺物実測図	52	第107回	第24号住居跡出土遺物実測図(2)	120
第53回	第17号住居跡実測図	54	第108回	第24号住居跡出土遺物実測図(3)	121
第54回	第17号住居跡出土遺物実測図(1)	55	第109回	第27号住居跡実測図	125
第55回	第17号住居跡出土遺物実測図(2)	56	第110回	第27号住居跡出土遺物実測図	126
第56回	第20号住居跡実測図	59	第111回	第30号住居跡実測図	128
第57回	第20号住居跡出土遺物実測図(1)	60	第112回	第30号住居跡出土遺物実測図	129
第58回	第20号住居跡出土遺物実測図(2)	61	第113回	第32号住居跡実測図	130
第59回	第23号住居跡実測図	64	第114回	第32号住居跡出土遺物実測図(1)	131
第60回	第23号住居跡出土遺物実測図	65	第115回	第32号住居跡出土遺物実測図(2)	132
第61回	第25号住居跡実測図	67	第116回	第33号住居跡実測図	133
第62回	第25号住居跡出土遺物実測図	68	第117回	第33号住居跡出土遺物実測図	133
第63回	第26号住居跡実測図	69	第118回	第36号住居跡実測図	134
第64回	第26号住居跡出土遺物実測図	69	第119回	第36号住居跡出土遺物実測図(1)	135
第65回	第44号住居跡・出土遺物実測図	71	第120回	第36号住居跡出土遺物実測図(2)	136
第66回	第45号住居跡・出土遺物実測図(1)	73	第121回	第37号住居跡実測図	138
第67回	第45号住居跡出土遺物実測図(2)	74	第122回	第37号住居跡出土遺物実測図	139
第68回	第47号住居跡・出土遺物実測図	75	第123回	第38号住居跡実測図	140
第69回	第2号住居跡出土遺物実測図(1)	76	第124回	第38号住居跡出土遺物実測図(1)	140
第70回	第2号住居跡実測図	77	第125回	第38号住居跡出土遺物実測図(2)	141
第71回	第2号住居跡出土遺物実測図(2)	78	第126回	第39号住居跡実測図(1)	142
第72回	第3号住居跡実測図	79	第127回	第39号住居跡実測図(2)	143
第73回	第5号住居跡実測図	80	第128回	第39号住居跡出土遺物実測図(1)	145
第74回	第5号住居跡出土遺物実測図	81	第129回	第39号住居跡出土遺物実測図(2)	146
第75回	第7号住居跡実測図	83	第130回	第40号住居跡実測図	149
第76回	第7号住居跡出土遺物実測図(1)	83	第131回	第40号住居跡出土遺物実測図(1)	150
第77回	第7号住居跡出土遺物実測図(2)	84	第132回	第40号住居跡出土遺物実測図(2)	151
第78回	第7号住居跡出土遺物実測図(3)	85	第133回	第41号住居跡実測図	152
第79回	第8号住居跡実測図(1)	88	第134回	第41号住居跡出土遺物実測図	153
第80回	第8号住居跡実測図(2)	89	第135回	第43号住居跡実測図	154
第81回	第8号住居跡出土遺物実測図	89	第136回	第43号住居跡出土遺物実測図	155
第82回	第9号住居跡実測図	91	第137回	第46号住居跡実測図	156
第83回	第9号住居跡出土遺物実測図	92	第138回	第46号住居跡出土遺物実測図	157
第84回	第10号住居跡出土遺物実測図(1)	94	第139回	第48号住居跡実測図	158
第85回	第10号住居跡実測図	95	第140回	第48号住居跡出土遺物実測図	159
第86回	第10号住居跡出土遺物実測図(2)	95	第141回	第49号住居跡実測図	161
第87回	第10号住居跡出土遺物実測図(3)	96	第142回	第49号住居跡出土遺物実測図	161
第88回	第10号住居跡出土遺物実測図(4)	97	第143回	第50号住居跡実測図	162
第89回	第11号住居跡実測図	99	第144回	第50号住居跡出土遺物実測図	163
第90回	第11号住居跡出土遺物実測図(1)	100	第145回	第51号住居跡実測図	164
第91回	第11号住居跡出土遺物実測図(2)	101	第146回	第51号住居跡出土遺物実測図	165
第92回	第12号住居跡実測図	103	第147回	第52号住居跡実測図	166
第93回	第12号住居跡出土遺物実測図	103	第148回	第52号住居跡出土遺物実測図(1)	166
第94回	第13号住居跡実測図	104	第149回	第52号住居跡出土遺物実測図(2)	167
第95回	第13号住居跡出土遺物実測図	105	第150回	第1号鍛冶工房跡実測図(1)	169
第96回	第15号住居跡実測図(1)	106	第151回	第1号鍛冶工房跡実測図(2)	170
第97回	第15号住居跡実測図(2)	107	第152回	第1号鍛冶工房跡出土遺物実測図(1)	170
第98回	第15号住居跡出土遺物実測図	108	第153回	第1号鍛冶工房跡出土遺物実測図(2)	171
第99回	第18号住居跡実測図	109	第154回	第2号掘立柱建物跡実測図	173
第100回	第18号住居跡出土遺物実測図	110	第155回	第2号掘立柱建物跡出土遺物実測図	174
第101回	第22号住居跡実測図	113	第156回	第1号方形周溝墓実測図(1)	176
第102回	第22号住居跡出土遺物実測図(1)	113	第157回	第1号方形周溝墓実測図(2)	177
第103回	第22号住居跡出土遺物実測図(2)	114	第158回	第1号方形周溝墓出土遺物実測図(1)	177

第159図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図(2) ……178	第214図	第6号地下式壙出土遺物実測図(1) ……223
第160図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図(3) ……179	第215図	第6号地下式壙実測図 ……224
第161図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図(4) ……180	第216図	第6号地下式壙出土遺物実測図(2) ……224
第162図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図(5) ……181	第217図	第6号地下式壙出土遺物実測図(3) ……225
第163図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図(6) ……182	第218図	第7・8号地下式壙実測図 ……228
第164図	第278号土坑・出土遺物実測図 ……184	第219図	第7・8号地下式壙出土遺物実測図(1) ……229
第165図	第318号土坑・出土遺物実測図 ……185	第220図	第8号地下式壙出土遺物実測図(2) ……230
第166図	第320号土坑・出土遺物実測図 ……186	第221図	第9号地下式壙実測図 ……231
第167図	第321号土坑・出土遺物実測図 ……187	第222図	第9号地下式壙出土遺物実測図 ……232
第168図	第700号土坑実測図 ……187	第223図	第10号地下式壙実測図 ……233
第169図	第700号土坑出土遺物実測図 ……188	第224図	第11号地下式壙実測図 ……234
第170図	第4号住居跡実測図 ……189	第225図	第12号地下式壙実測図 ……235
第171図	第4号住居跡出土遺物実測図 ……190	第226図	第13号地下式壙・出土遺物実測図(1) ……236
第172図	第29号住居跡実測図 ……191	第227図	第13号地下式壙出土遺物実測図(2) ……237
第173図	第29号住居跡出土遺物実測図(1) ……192	第228図	第14号地下式壙実測図 ……238
第174図	第29号住居跡出土遺物実測図(2) ……193	第229図	第1・2号火葬施設実測図 ……240
第175図	第483号土坑実測図 ……194	第230図	第3号火葬施設実測図 ……240
第176図	第483号土坑出土遺物実測図 ……195	第231図	第4号火葬施設実測図 ……241
第177図	第47号土坑実測図 ……195	第232図	第5号火葬施設実測図 ……242
第178図	第47号土坑出土遺物実測図 ……196	第233図	第6号火葬施設実測図 ……243
第179図	第51号土坑実測図 ……197	第234図	第7号火葬施設実測図 ……243
第180図	第51号土坑出土遺物実測図(1) ……197	第235図	第8号火葬施設実測図 ……244
第181図	第51号土坑出土遺物実測図(2) ……198	第236図	第9号火葬施設実測図 ……244
第182図	第131号土坑・出土遺物実測図 ……199	第237図	第10号火葬施設実測図 ……245
第183図	第200号土坑・出土遺物実測図 ……199	第238図	第11号火葬施設実測図 ……245
第184図	第224号土坑・出土遺物実測図 ……200	第239図	第12号火葬施設実測図 ……246
第185図	第228号土坑・出土遺物実測図 ……201	第240図	第1号井戸跡実測図 ……247
第186図	第437号土坑・出土遺物実測図 ……201	第241図	第2号井戸跡実測図 ……247
第187図	第450号土坑・出土遺物実測図 ……202	第242図	第3号井戸跡実測図 ……248
第188図	第554号土坑・出土遺物実測図 ……203	第243図	第3号井戸跡出土遺物実測図(1) ……248
第189図	第836号土坑・出土遺物実測図 ……203	第244図	第3号井戸跡出土遺物実測図(2) ……249
第190図	第98号土坑実測図 ……204	第245図	第4号井戸跡実測図 ……250
第191図	第98号土坑出土遺物実測図 ……204	第246図	第5号井戸跡実測図 ……250
第192図	第100号土坑実測図 ……205	第247図	第6号井戸跡実測図 ……251
第193図	第100号土坑出土遺物実測図(1) ……205	第248図	第7号井戸跡実測図 ……251
第194図	第100号土坑出土遺物実測図(2) ……206	第249図	第1・2号集石遺構実測図 ……252
第195図	第207号土坑実測図 ……207	第250図	第1号集石遺構出土遺物実測図 ……252
第196図	第207号土坑出土遺物実測図 ……207	第251図	第3・4号集石遺構実測図 ……254
第197図	第792号土坑・出土遺物実測図 ……208	第252図	第3号集石遺構出土遺物実測図 ……255
第198図	土坑群A実測図 ……209	第253図	第4号集石遺構出土遺物実測図 ……255
第199図	土坑群B実測図 ……209	第254図	第1号掘立柱建物跡実測図 ……257
第200図	土坑群C実測図 ……210	第255図	第3号掘立柱建物跡実測図 ……258
第201図	土坑群D実測図 ……211	第256図	第4号掘立柱建物跡実測図 ……259
第202図	土坑群E実測図 ……212	第257図	第5号掘立柱建物跡実測図 ……260
第203図	土坑群F実測図 ……213	第258図	第1号道路跡実測図 ……261
第204図	中世の土坑実測図(1) ……214	第259図	第1～12号溝跡・第9号溝出土遺物 実測図 ……264
第205図	中世の土坑実測図(2) ……215	第260図	第1号堀跡実測図 ……266
第206図	第1号地下式壙実測図 ……216	第261図	第1号不明遺構実測図 ……267
第207図	第1号地下式壙出土遺物実測図 ……217	第262図	第3号不明遺構実測図 ……268
第208図	第2号地下式壙実測図 ……218	第263図	第4号不明遺構実測図 ……269
第209図	第3号地下式壙実測図 ……219	第264図	第6号不明遺構実測図 ……270
第210図	第3号地下式壙出土遺物実測図 ……220	第265図	第1号ピット群実測図 ……272
第211図	第4号地下式壙実測図 ……221	第266図	第1号ピット群出土遺物実測図 ……273
第212図	第5号地下式壙実測図 ……222	第267図	第2号ピット群実測図 ……273
第213図	第5号地下式壙出土遺物実測図 ……222		

第268図	第3号ピット群実測図	274
第269図	第26・236・532・595号土坑実測図	276
第270図	土坑実測図(1)	277
第271図	土坑実測図(2)	278
第272図	土坑実測図(3)	279

第273図	土坑実測図(4)	280
第274図	遺構外出土遺物実測図(1)	299
第275図	遺構外出土遺物実測図(2)	300
第276図	遺構外出土遺物実測図(3)	301
付 図	十万原遺跡遺構全体図	

表 目 次

表1	十万原遺跡周辺遺跡一覧表	5
表2	土坑一覧表<7 その他の時代の遺構と遺物(7)>	282
表3	縄文時代 竪穴住居跡一覧表	304
表4	縄文時代 土坑一覧表	304
表5	陥し穴一覧表	304
表6	弥生時代 竪穴住居跡一覧表	304
表7	古墳時代 竪穴住居跡一覧表	305
表8	古墳時代 土坑一覧表	305
表9	平安時代 竪穴住居跡一覧表	306
表10	土坑一覧表<6 中・近世の遺構と遺物(1)~(4)>	306
表11	地下式壙一覧表	307
表12	火葬施設一覧表	308
表13	井戸跡一覧表	308
表14	掘立柱建物跡一覧表	308
表15	溝跡一覧表	309
表16	不明遺構一覧表	309

写真図版目次

P L 1	遺構確認状況, 遺跡全景
P L 2	第550B号土坑遺物出土状況, 第1号方形周溝墓遺物出土状況
P L 3	第1号方形周溝墓遺物出土状況, 第47号土坑遺物出土状況
P L 4	第1号集石土坑確認状況, 第1号集石土坑・石器出土状況, 第1号集石土坑土層断面, 第19・31・42号住居跡完掘状況, 第31・42号住居跡遺物出土状況
P L 5	第2号陥し穴完掘状況, 第56・550B・555・889号土坑遺物出土状況, 第1・16号住居跡遺物出土状況, 第17号住居跡完掘状況
P L 6	第2・20・44・45号住居跡完掘状況, 第2・20・23・45号住居跡遺物出土状況
P L 7	第5・7・10号住居跡完掘状況, 第8・10・12号住居跡遺物出土状況
P L 8	第15・18・22・24号住居跡完掘状況, 第13・22・24号住居跡遺物出土状況
P L 9	第27・32・36号住居跡遺物出土状況, 第36号住居跡貯蔵穴内遺物出土状況, 第30・36・37・39号住居跡完掘状況
P L 10	第39・40・48~51号住居跡遺物出土状況, 第46号住居跡完掘状況
P L 11	第52号住居跡・第1号鍛冶工房跡・第51号土坑遺物出土状況, 第29号住居跡竈内遺物出土状況, 第1号鍛冶工房跡・第29号住居跡・第2号掘立柱建物跡完掘状況
P L 12	第100・437・446・450・483号土坑遺物出土状況, 第410~413号土坑完掘状況, 土坑群D完掘状況, 第1号地下式壙遺物出土状況, 第2号地下式壙土層断面
P L 13	第4号地下式壙完掘状況, 第6号地下式壙遺物出土状況, 第1・2・4・7号火葬施設完掘状況, 第6・10号火葬施設遺物出土状況
P L 14	第3号井戸跡・第3号不明遺構完掘状況, 第7号井戸跡完掘状況, 第1・3号集石遺構遺物出土状況, 第1・3・5号掘立柱建物跡完掘状況, 第6号不明遺構完掘状況
P L 15	第1号ピット群完掘状況, 第26・236号土坑遺物出土状況, 第1号堀完掘状況, 第1号道路跡完掘状況, 第5・6号溝完掘状況
P L 16	石器集中地点出土遺物
P L 17	第42号住居跡, 第35・56・329・550B号土坑出土遺物
P L 18	第1・17・19・20・23・42号住居跡, 第35・243・280・550A・550B・888号土坑出土遺物
P L 19	第1・2・20・26・44・45号住居跡出土遺物
P L 20	第5・7~9号住居跡出土遺物
P L 21	第8~11号住居跡出土遺物
P L 22	第11・12・15・18・22号住居跡出土遺物
P L 23	第24・27・30・32・36・38・39号住居跡出土遺物
P L 24	第36・39~41・43・46・48号住居跡出土遺物
P L 25	第50~52号住居跡, 第1号鍛冶工房跡, 第2号掘立柱建物跡, 第1号方形周溝墓出土遺物
P L 26	第1号方形周溝墓出土遺物
P L 27	第8~10・18・24・39・40号住居跡, 第1号鍛冶工房跡, 第1号方形周溝墓, 第320号土坑出土遺物
P L 28	第4・22・24・29・36・39・40・48号住居跡, 第1号鍛冶工房跡, 第47・100号土坑出土遺物
P L 29	第47・483・792号土坑, 第3・6・8・13号地下式壙, 第3号集石遺構, 第3号井戸跡出土遺物
P L 30	第51・228・483・836号土坑, 第8号地下式壙, 遺構外出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県住宅供給公社は、水戸市十万原地区において、21世紀の新しい街づくりのモデルとして、「次世代を担う複合機能都市の形成」を目標とし、十万原地区市街地開発事業を計画した。

平成8年10月11日、茨城県土木部都市局住宅課から茨城県教育委員会に、十万原地区住宅開発事業地内（水戸市藤井町及び東茨城郡常北町増井地内）の埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。平成10年1月8日、茨城県土木部都市局住宅課、茨城県教育委員会、茨城県住宅供給公社の協議により、今後の事業者側取り扱い窓口は住宅供給公社とすることを確認した。

茨城県教育委員会は、平成10年7月14日から8月20日にかけて現地踏査を、平成10年10月12日から12月9日にかけて試掘及び確認調査を実施した。その結果、茨城県教育委員会から茨城県土木部住宅課、水戸市及び常北町教育委員会に、事業地内に十万原遺跡が所在する旨の回答を行った。平成11年2月15日、茨城県住宅供給公社から茨城県教育委員会に、事業地内に所在する十万原遺跡の取り扱いに関する協議がなされ、茨城県教育委員会は文化財保護の立場から再協議を行ったが、現状保存が困難であることから、平成11年3月15日、茨城県住宅供給公社に対し、十万原遺跡を記録保存とする旨回答をし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成11年9月1日から平成12年6月30日にかけて、十万原遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

十万原遺跡の発掘調査は、平成11年9月1日から平成12年3月31日までの7か月間の予定で開始された。表土除去の結果、遺構が数多く確認されたため、平成11年2月15日に調査計画の変更が協議され、当初調査区域の一部を次年度に繰り越し、2か月間延長することとなった。平成12年度になり調査面積が追加されて、平成12年6月30日までの調査となった。以下、十万原遺跡の調査の経過について月ごとに略述する。

平成11年度

- 9 月 発掘調査を開始するため、現場事務所や倉庫の設置、調査器材の搬入、補助員募集等の諸準備を行った。7日に茨城県住宅供給公社と今後の調査についての打ち合わせを行った。10日から試掘調査を実施し、縄文・弥生時代の土器片や竪穴住居跡等を確認した。
- 10 月 山林部の伐開と調査区域までの進入路が確保できたことから、18日から補助員を投入し、人力による表土除去と遺構確認作業を行った。27日から重機による表土除去を開始し、引き続き遺構確認作業を行った。
- 11 月 前月に引き続き、重機による表土除去と遺構確認作業を行った。遺構確認作業の結果、竪穴住居跡、土坑、溝、井戸跡を確認した。26日に遺構確認状況の写真撮影を行い、調査区域の南側から遺構調査を開始した。
- 12 月 14日から方眼杭打ち測量を実施した。15日に現地において茨城県教育委員会（文化課）、茨城県住

宅供給公社，茨城県教育財団の関係三者が集まり，今後の調査計画について協議した。霜による影響で，調査の進行が滞りがちであったが，竪穴住居跡 3 軒，土坑40基の調査を終了した。

- 1 月 調査区域の南側と北西側の両方向から，遺構調査を継続した。31日までに，竪穴住居跡 6 軒，土坑 172基，掘立柱建物跡 1 棟，溝 2 条，不明遺構 4 基の調査を終了した。
- 2 月 25日に委託者に対する報告会を行い，28日に報道関係者へ公開した。28日までに竪穴住居跡20軒，掘立柱建物跡 3 棟，土坑296基，溝 8 条，井戸跡 4 基，集石遺構 1 か所，ピット群 2 か所，不明遺構 7 基の調査を終了した。
- 3 月 4日に現地説明会を実施し，今年度の調査成果を公開した。15日から撤収準備を始め，安全対策を含め，31日には今年度の現地調査を終了した。

平成12年度

- 4 月 補助員募集等の諸準備を行い，調査器材を搬入し，11日から遺構調査に入った。
- 5 月 遺構調査と平行して，16日から追加部分の重機による表土除去と遺構確認作業を開始した。その結果，竪穴住居跡，方形周溝墓，土坑，溝，堀等を確認した。
- 6 月 遺構調査を継続して行った。30日に航空写真撮影を実施し，すべての現地調査を終了した。最終的な遺構数は，竪穴住居跡49軒，鍛冶工房跡 1 基，方形周溝墓 1 基，掘立柱建物跡 5 棟，地下式壙14基，火葬施設12基，井戸跡 7 基，陥し穴 2 基，土坑846基，溝12条，石器集中地点 1 か所，集石土坑 2 基，集石遺構 4 か所，道路跡 1 条，堀 1 条，ピット群 3 か所，不明遺構 9 基を確認した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

十万原遺跡は、茨城県水戸市藤井町字十万原1,726番地ほかに所在している。

水戸市は、茨城県のほぼ中央に位置し、東は東茨城郡大洗町、ひたちなか市、西は笠間市、南は東茨城郡内原町・同郡茨城町に、北は那珂郡那珂町、東茨城郡常北町に接している。

当遺跡の所在する水戸市藤井地区は、北部に突き出した位置で、東・西・北の三方が常北町に接している。

常北町の地形は、西から東に丘陵性山地、台地、沖積低地に大別される。西部の丘陵性山地は、八溝山地の南の鶏足山塊の東縁部にあたり、標高200m程度の低山が連なる。鶏足山塊は、主に砂岩、頁岩の互層からなり、一部にチャートや石灰岩をはさんでいる。また、丘陵性山地周辺部には、凝灰岩、砂岩、泥岩等からなる地層が分布しており、台地の基盤岩となっている。常北町の台地は、那珂西台地あるいは石塚台地と呼ばれる洪積台地であり、市街地の大部分がここに形成されている。台地は、標高40～50m程度で低地との比高は約20mあり、急崖に囲まれている。那珂川の支流である藤井川、西田川等は、台地を開析し沖積低地を形成している。低地は主に水田に利用されている。

十万原遺跡は、那珂川の支流である藤井川と西田川に挟まれた那珂西台地の一部である十万原台地の最東端、西田川右岸の標高30m前後の河岸段丘上の中位段丘に位置している。西側の台地は畑地で、東側の低地は水田として利用されている。調査前の現況は、山林である。

第2節 歴史的環境

十万原遺跡付近は、那珂川とその支流によって開析された台地が展開している。そのため、古くから人々の絶好の生活の場であり、多くの遺跡が所在している。ここでは、西田川や藤井川流域に沿って当遺跡に関連する主な遺跡について時代ごとに述べることにする。

(1) 旧石器時代

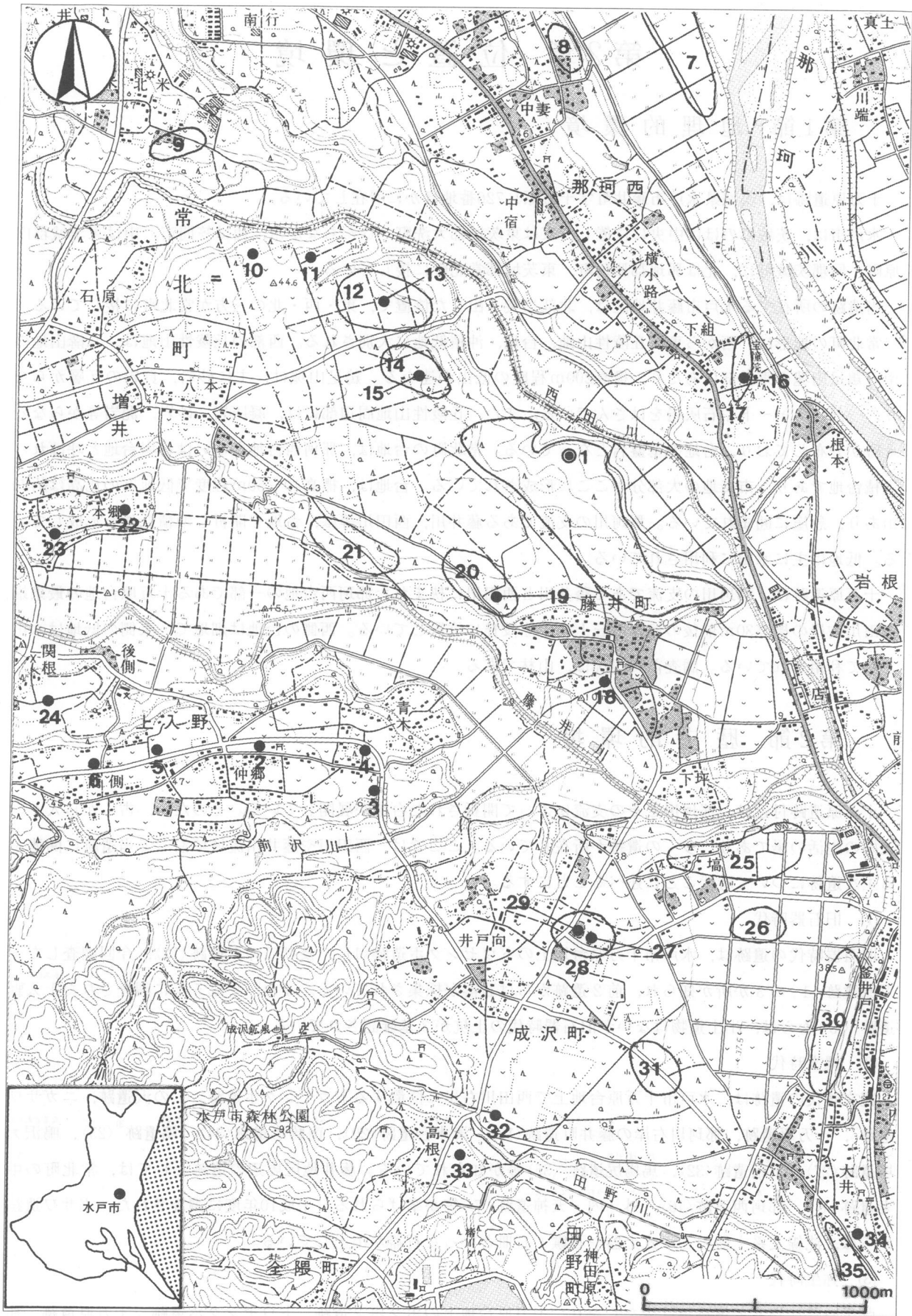
旧石器時代の遺跡は、水戸市十万原台地上のドウゼンクボ遺跡<11>、及び二の沢遺跡<12>、今回調査した十万原遺跡<1>の3か所が知られ、前2遺跡からは石器が採集されている。また、平成5年に調査された上入野遺跡¹¹⁾<3>からは、出土遺物はないが旧石器時代の土坑が3基確認されている。

(2) 縄文時代

縄文時代の遺跡は、水戸市十万原台地上で西田川右岸に位置するドウゼンクボ遺跡、二の沢遺跡、ニガサワ遺跡²⁾、十万原遺跡、那珂川右岸の藤井町遺跡<18>、清水台遺跡<20>、南駒形遺跡<34>、塙遺跡³⁾<25>、鳴沢大塚遺跡<27>、下宿遺跡<32>、馬場尻遺跡⁴⁾<35>等が知られている。藤井地区周辺の遺跡としては、常北町の中妻遺跡<8>、那珂西遺跡<16>、外ノ内・天神遺跡<7>等が挙げられる。平成10年度に調査されたニガサワ遺跡からは、沈線文系土器の三戸式土器や石鏃・石皿といった石器が出土している。

(3) 弥生時代

弥生時代になると遺跡数は少なくなり、十万原台地上のポンポン遺跡、ドウゼンクボ遺跡、十万原遺跡、那珂川右岸の馬場尻遺跡などがあげられている。藤井地区周辺の遺跡としては、常北町の片山遺跡、風隼前遺跡¹⁾、



第1図 十萬原遺跡周辺遺跡分布図

表1 十萬原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	十萬原遺跡	○	○	○	○	○	○		19	清水台古墳群		○		○			
2	仲郷遺跡				○	○	○		20	清水台遺跡		○		○	○		
3	上入野遺跡	○		○	○	○			21	南駒形遺跡		○		○	○		
4	青木遺跡				○	○	○	○	22	増井本郷遺跡		○		○	○		
5	後側遺跡		○		○	○			23	増井古墳				○			
6	前側遺跡					○			24	関根遺跡		○		○			
7	外ノ内・天神遺跡		○		○				25	塙遺跡		○		○	○		
8	中妻遺跡		○						26	神生館跡						○	○
9	北米遺跡					○			27	鳴沢町大塚遺跡		○		○			
10	ボンボン遺跡			○					28	鳴沢町大塚古墳群				○			
11	ドウゼンクボ遺跡	○	○	○	○	○			29	飯富遺跡		○	○	○	○		
12	二の沢遺跡	○	○	○	○	○			30	飯富火葬墓跡					○		
13	二の沢古墳群				○				31	塚山古墳群				○			
14	ニガサワ遺跡		○	○	○	○			32	下宿遺跡		○					
15	ニガサワ古墳群				○				33	高根遺跡				○	○		
16	那珂西城跡					○	○	○	34	大井下古墳群				○			
17	那珂西遺跡		○			○			35	馬場尻遺跡	○	○	○	○			
18	藤井町遺跡		○	○													

上入野遺跡などがあげられる。上入野遺跡では、十王台式期と思われる竪穴住居跡が1軒確認されている。また、ドウゼンクボ遺跡では中期の土器が採集されている。そのことから、弥生時代後期頃は、十萬原台地周辺や藤井地区において集落があったことが考えられる。

(4) 古墳時代

古墳時代前期・中期の遺跡は、現在のところ弥生時代と同様に数が少ない。しかし、平成10年度に調査したニガサワ遺跡では、この時期の竪穴住居跡が30軒確認されたことから、この時期の集落跡が今後増えていく傾向にあると思われる。古墳時代後期になると、本格的な集落形成が始まり、遺跡数も増加する。平成5年度に調査した青木遺跡⁶⁾〈4〉ではこの時期の住居跡が12軒、同じく後側遺跡⁷⁾では住居跡が2軒確認されている。平成8年度に調査した中郷遺跡⁸⁾〈2〉では、この時期の住居跡が2軒確認されている。那珂西地内の外ノ内・

天神遺跡からは、後期の土器が多数出土している。石塚地内の風隼前遺跡からは、多量の後期の土器とともに石製模造品、滑石製勾玉や白玉等が出土している。また、古墳では十万原台地のニガサワ古墳群¹⁴、二の沢古墳群¹³、清水台古墳群¹⁹等が知られている。藤井地区周辺では、飯富地区の御立山古墳群、大井下古墳群、常北町の増井古墳²³、南青山古墳群、長峰古墳群、石塚古墳群等が知られている。

(5) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡としては、水戸市の台渡廢寺跡がある。この寺は、「徳輪寺」、「仲寺」と呼ばれた那賀郡の「郡の寺」であり、これまでの調査で塔跡、門跡、工房跡、柵列等が確認されており、さらに寺の北側には、那賀郡の郡衙の存在も想定されている。また、南西約6kmの前沢川上流には木葉下窯跡⁹⁾(水戸市)があり、現在までに1.5km四方に金山支群、三ヶ野支群、高取山支群の3支群が確認されている。これらの窯跡は、8世紀初頭から9世紀後半まで操業していたと考えられている。当窯跡からは台渡廢寺に供給していたとみられる瓦も出土しており、台渡廢寺や那賀郡衙とかかわりのある官窯としての性格を有していたものと考えられている。さらに、南東3kmの那珂川右岸の台地上には、火葬骨を納めた蔵骨器が密集して発見された飯富火葬墓跡³⁰がある。常北町内では、中妻遺跡、北米遺跡⁹、那珂西遺跡、増井遺跡、上入野遺跡、青木遺跡、後側遺跡、前側遺跡¹⁰⁾、仲郷遺跡等が確認されている。仲郷遺跡の第35号土坑からは、甲冑の小札152点が出土している。

(6) 中世・近世

平安時代から中世にかけては、この地域は常陸大掾氏、那珂氏、佐竹氏の勢力下にあり、各種の抗争の舞台となった。そのため、各氏の一族や臣下の城館が各所に造られた。常北町内にある石塚城跡や県指定の那珂西城跡¹¹⁾は今でも堀や土塁の跡を留めている。周辺には、神生館跡²⁶をはじめ多くの城館が存在したと思われる。また、藤井側右岸の上入野台地最西部には小松寺¹²⁾があり、境内には平重盛のものと思われる墓がある。

近世になると、この地域は水戸藩領となり、佐竹氏、大掾氏、江戸氏の一族や家臣で帰農した者や、戦国以降に移住した武士や農民も加わり近世の村を形成した。

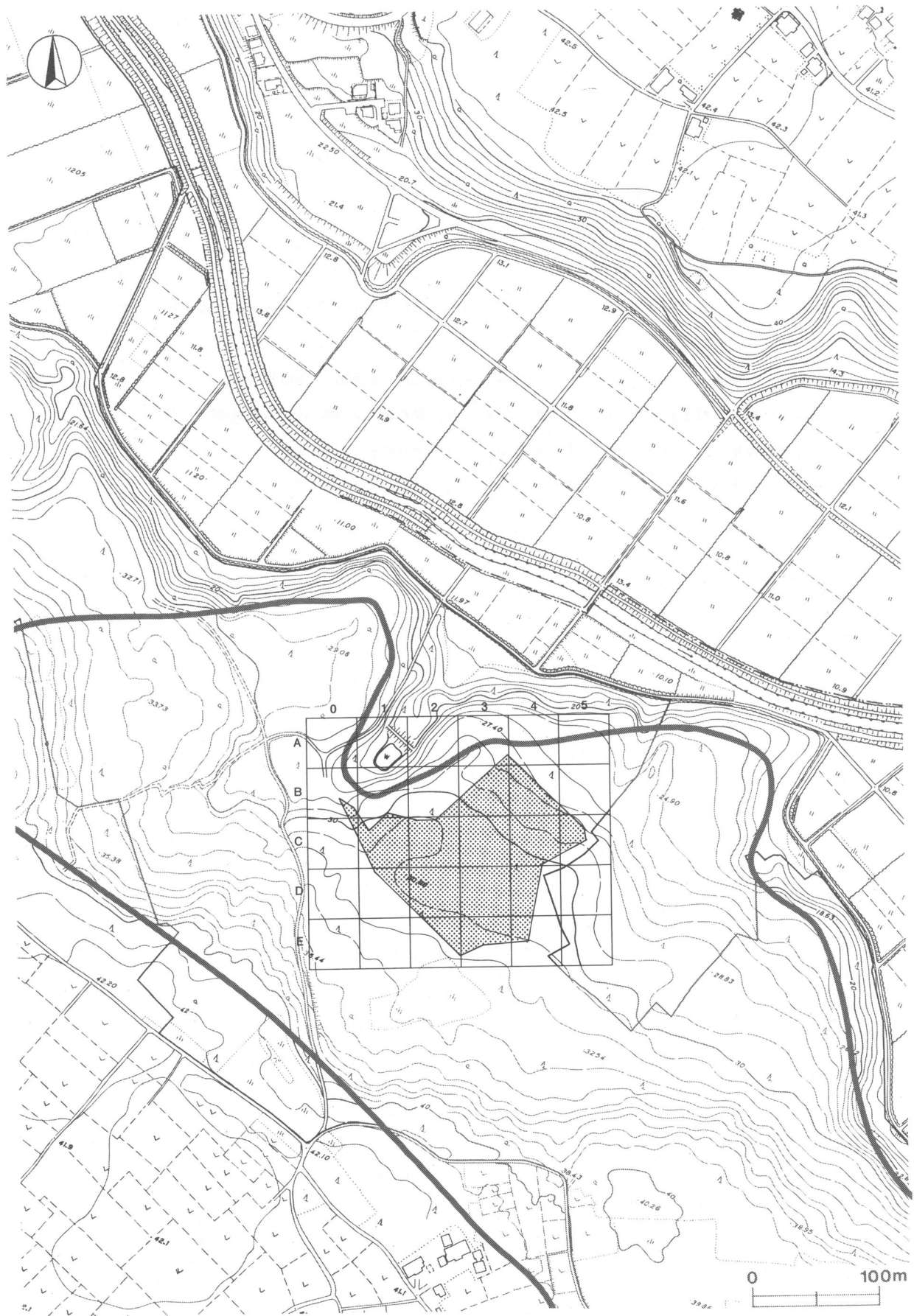
註

- 1) 茨城県教育財団 「主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ上入野遺跡 青木遺跡 後側遺跡 前側遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第108集 1996年3月
- 2) 茨城県教育財団 「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財報告書Ⅰニガサワ遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第169集 2000年3月
- 3) 茨城大学考古学研究会 『さらしい』 第V号 茨城大学 1982年2月
- 4) 3)と同じ。茨城高等学校史学部 『馬場尻遺跡』 茨城高等学校 1979年8月
- 5) 常北町史編さん委員会 『常北町史』 常北町 1988年3月
- 6) 1)と同じ。
- 7) 1)と同じ。
- 8) 茨城県教育財団 「主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ仲郷遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第124集 1997年6月
- 9) 水戸市史編さん委員会 『水戸市史 上巻』 水戸市 1963年9月
水戸市木葉下遺跡発掘調査会 『常陸木葉下窯跡』 水戸市 1985年12月

- 10) 1) と同じ。
- 11) 9) と同じ。
- 12) 5) と同じ。

参考文献

- ・ 大山年次, 蜂須紀夫 『茨城県 地学のガイド』 コロナ社 1977年 8月
- ・ 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 2版 1990年 3月
- ・ 常北町郷土文化研究会 『常北の文化』 第17号 常北町 1994年 3月
- ・ 茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 茨城県 1979年 3月
- ・ 茨城県史編集会 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 茨城県 1991年 3月
- ・ 茨城県史編さん原始古代史部会 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 茨城県 1974年 2月
- ・ 茨城県史編集会 『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 茨城県 1995年 3月
- ・ 茨城県史編集会 『茨城県史料 中世編』 茨城県 1986年 3月



第2図 十萬原遺跡調査区設定図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

十萬原遺跡は、常北町と接する水戸市の北部にあたり、藤井川と西田川に挟まれた舌状台地の最東端、西田川右岸の標高30m前後の河岸段丘上に位置する。調査面積は14,033㎡で、現況は山林である。

当遺跡は、旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。今回の調査により、旧石器時代の遺構は、調査区の中央から北側に位置し、石器集中地点1か所と集石土坑2基を確認した。縄文時代の遺構は、住居跡6軒、陥し穴2基、土坑14基を確認した。弥生時代の遺構は、住居跡10軒を確認した。古墳時代の遺構が最も多く、住居跡31軒、鍛冶工房跡1軒、掘立柱建物跡1棟、方形周溝墓1基、土坑5基を確認した。住居跡は前期から中期にかけての遺構が多く、後期は確認されなかった。平安時代の遺構は、住居跡2軒を確認した。中・近世の遺構は、墓壇を含めた土坑69基、地下式墳14基、火葬施設12基、集石遺構4か所を確認した。時期が特定できないその他の時代の遺構は、掘立柱建物跡4棟、道路跡1条、堀1条、溝12条、不明遺構9基、ピット群3か所、土坑758基を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に102箱出土した。縄文土器（深鉢・浅鉢）、弥生土器（広口壺）、土師器（坏・高坏・器台・埴・壺・甕・手捏土器）、須恵器（坏・把手付椀）、土製品（紡錘車・羽口）、石製品（紡錘車・双孔円板・勾玉・剣形品）、石器（石鏃・磨石・敲石・スクレイパー・砥石）等が出土している。

第2節 基本層序の検討

調査区域内（B1g9区）にテストピットを設定し、土層の堆積状況を確認した（第3図）。

第1層は、46～70cmの厚さで、白色粒子・赤色粒子を少量含む、黒色の耕作土である。

第2層は、10～20cmの厚さで、ローム粒子・白色粒子・赤色粒子を少量含む、黒色の耕作土である。

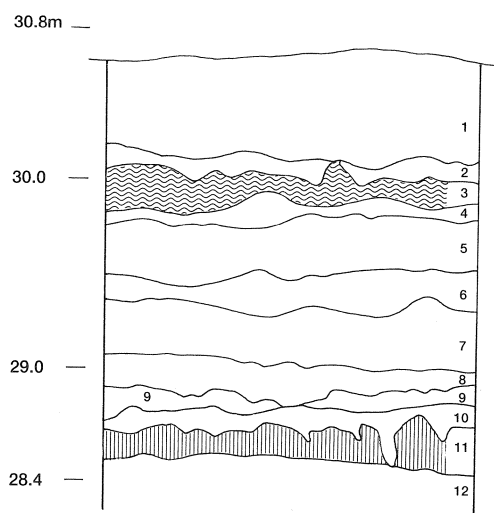
第3層は、8～26cmの厚さで、赤褐色粒子多量と黄白色粒子少量を含む赤褐色の層である。今市・七本桜軽石層である。

第4層は、4～18cmの厚さで、赤色微粒子を中量と白色微粒子を少量を含む、褐色のローム層である。

第5層は、23～34cmの厚さで、黒色粒子を少量含む、褐色のローム層である。第1黒色帯を含む層と思われる。

第6層は、6～24cmの厚さで、黒色粒子を微量含む、5層よりわずかに明るい黄褐色のハードローム層である。蛤良Tn火山灰を含む層と思われる。

第7層は、26～38cmの厚さで、黒色粒子を少量、白色粒子・赤色粒子を微量含む、暗い黄褐色のハードローム層である。第2黒色帯を含む層と思われる。



第3図 基本土層図

第8層は、16～24cmの厚さで、白色粒子を少量含む、褐色のハードローム層である。

第9層は、6～18cmの厚さで、白色粒子・赤色粒子を少量含む、褐色のハードローム層である。

第10層は、4～26cmの厚さで、鹿沼軽石粒子を中量含む、黄褐色の鹿沼漸移層である。

第11層は、8～30cmの厚さで、明黄褐色の鹿沼軽石層である。

第12層は、54cm前後の厚さで、礫を中量含んだ灰黄褐色の常総粘土層である。

遺構は、3層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の遺構と遺物

旧石器時代の遺構としては、石器集中地点1か所と集石土坑2基が確認された。いずれも調査区の北部寄りの、標高29～30mの台地平坦部から斜面部にさしかかる部分に位置している。調査は第24号住居跡の掘り方調査をした際に、瑪瑙やチャートの石核及び剥片が出土したため、住居跡調査終了後、第24号住居跡内のB3j5を基点として、ローム層の掘り下げを行った。以下、接合資料と主な石器について記述し、その他は出土遺物観察表に記載する。

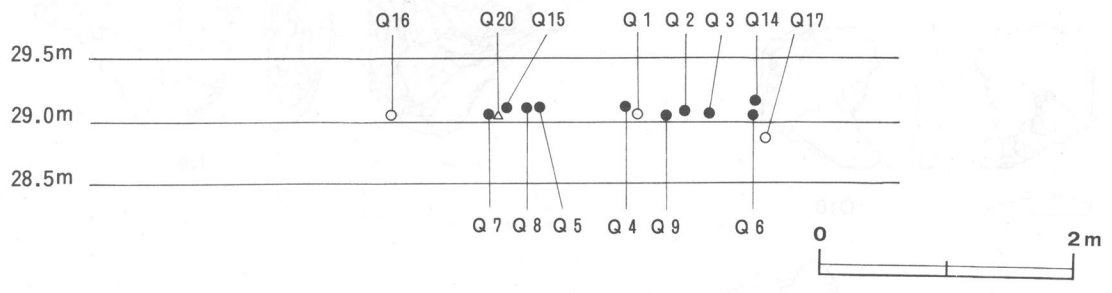
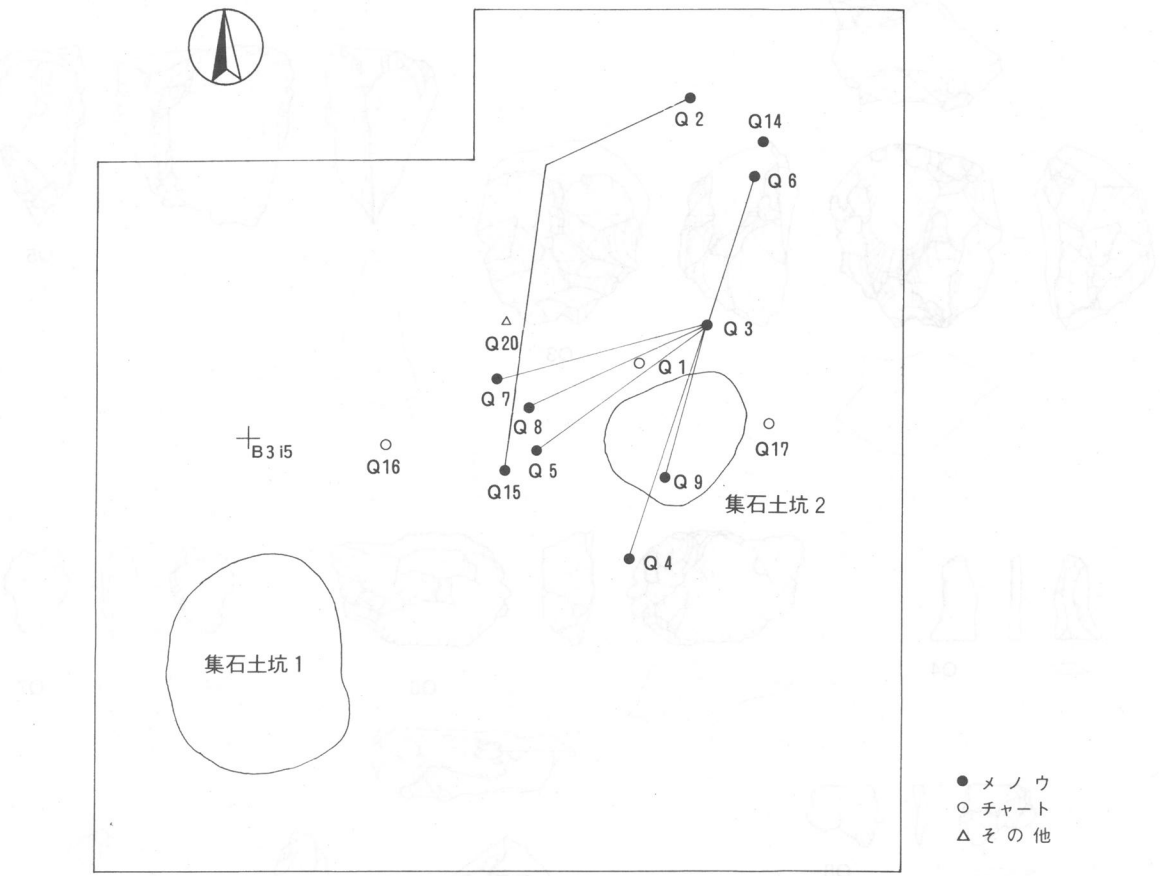
(1) 石器集中地点

位置 B3i5区・B3h5区を中心に出土している。出土遺物の平面分布及び垂直分布については第4図に示したとおりである。

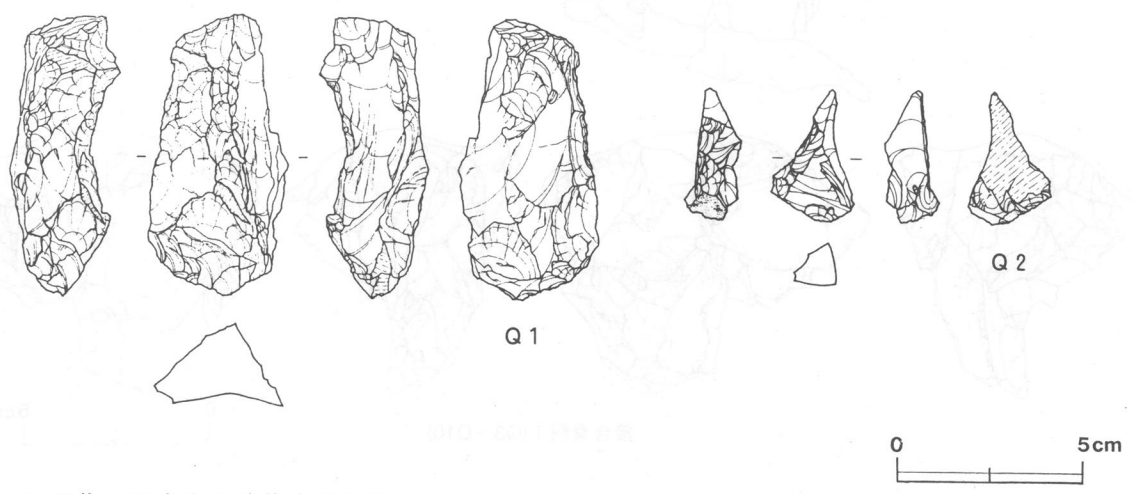
出土状況 石器は、東西4.3m、南北4.2mの不整形の範囲内から出土している。石器類はQ20の台石が北側にあり、その他の石器類はその南側から多く確認された。出土層位は、基本層序の鹿沼軽石層上層のハードローム層（第7層最下部から第8層上部）から出土しており、標高は28.8～29.1mの範囲である。

遺物 出土石器等の総数は20点で、内訳はスクレイパー2点、石核5点、剥片12点、台石1点である。石質は、瑪瑙12点、チャート7点、片岩1点である。接合資料は、第24号住居跡の掘り方の覆土から出土したものも含めて4点である。第6図の接合資料1は、Q3の瑪瑙の石核とQ4～Q8・Q10の剥片とQ9の剥片石核が接合したものである。Q3の自然面を打面として、Q6→Q9→Q5の順に剥離している。Q7は同じ自然面から剥離している。次に90度打面を移動させて、Q4・Q8をそれぞれ剥離している。Q9はQ3から剥離した後、Q10を剥離している。第7図の接合資料2は、Q11のチャートの石核とQ12の剥片が接合したもので、自然面に対して直角に打面を調整し、Q12を剥離している。第7図の接合資料3は、Q13の瑪瑙の石核とQ14の剥片が接合したものである。自然面を打面として、Q14の他数枚の剥片を剥離したものと考えられる。また、図示できなかったがQ2の瑪瑙のスクレイパーは、Q15の剥片から剥離している。

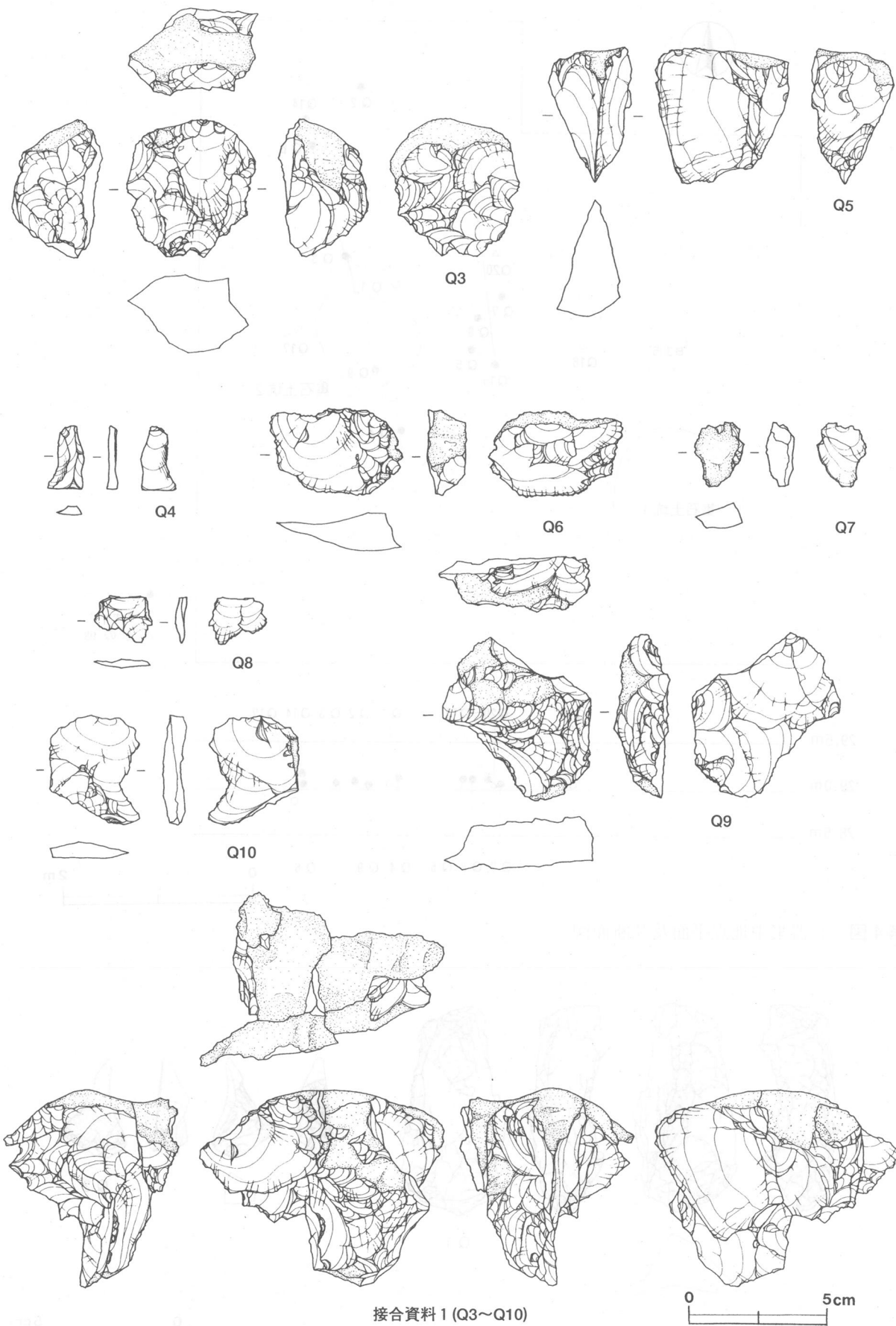
所見 出土したQ2～Q10・Q13～Q15の瑪瑙は、ひとつに接合できなかったが、石材の特徴から、同じ母岩から剥離した可能性が高い。本跡は、石核や剥片が台石の南側を中心に出土していることや接合関係にあることから、石器製作跡と考えられる。



第4図 石器集中地点平面及び断面図

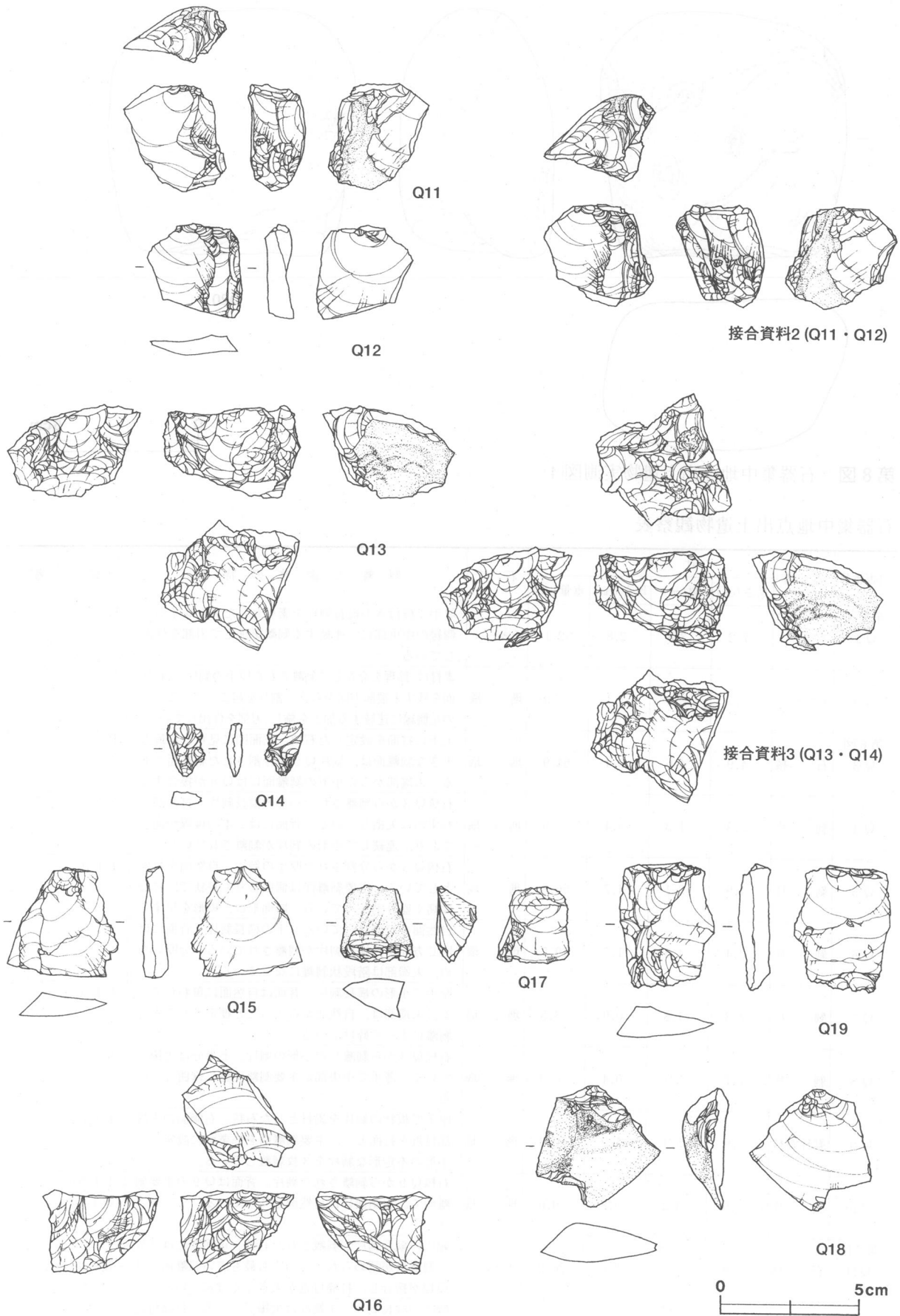


第5図 石器集中地点出土遺物実測図(1)

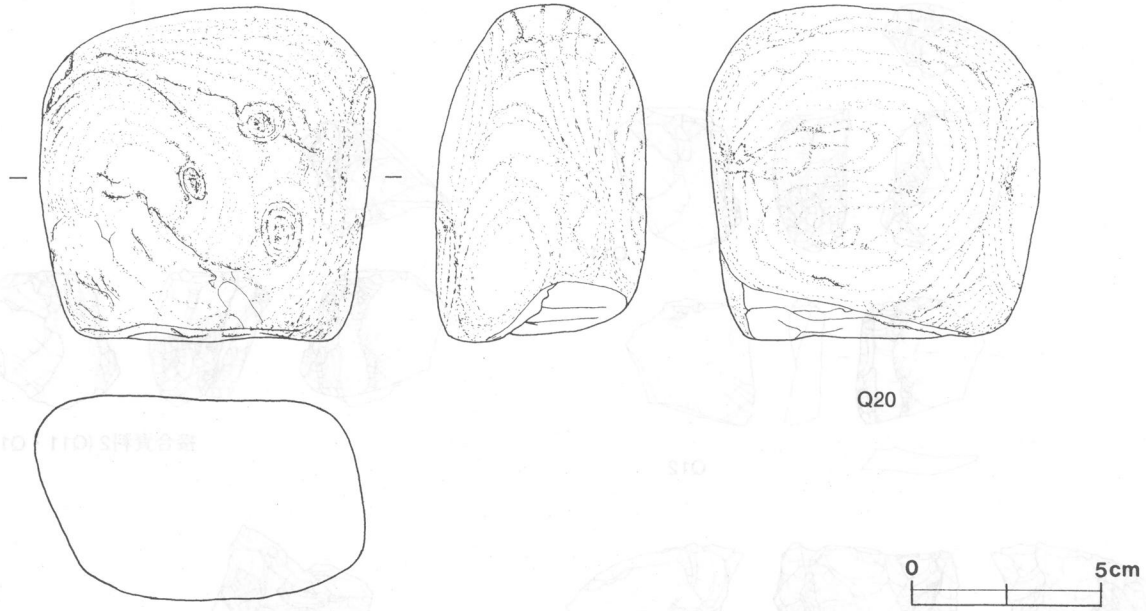


接合資料 1 (Q3~Q10)

第6図 石器集中地点出土遺物実測図(2)



第7図 石器集中地点出土遺物実測図(3)



第8図 石器集中地点出土遺物実測図(4)

石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石材	剥離と調整の特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第5図 Q1	スクレイパー	7.2	3.8	2.8	52.1	チャート	厚手で稜付きの縦長剥片を素材としたスクレイパー。側縁の中央部に、連続する剥離を加えて刃部を作している。	PL16
Q2	スクレイパー	3.5	2.2	1.1	5.9	瑪瑙	素材は、節理を介して剥離された厚手の剥片で、自然面を残す末端部方向から立て割れを起こしている。その左側縁に連続する加工を施し、刃部を作している。	PL16
第6図 Q3	石核	4.9	4.6	3.4	64.9	瑪瑙	上下に打面を設定した石核。正面図に見られる最も大きな剥離面は、剥片Q5が分割された剥離面である。末端部からの小形の剥離面にはQ8が接合する。	PL16
Q4	剥片	2.3	1.3	0.4	1.0	瑪瑙	石核Q3から剥離された小形の縦長剥片。打面部分はわずかに欠損している。背面には2本の稜線が通っており、連続して小形の剥片が剥離されている。	PL16
Q5	剥片	4.9	3.1	4.7	56.8	瑪瑙	石核Q3から分割された厚手の剥片。自然面を打面としている。主要剥離面は側面よりも長狭で、打瘤は高く盛り上がっている。断面形は、楔形を呈する。	PL16
Q6	剥片	3.4	4.5	1.5	19.7	瑪瑙	自然面を打面としている厚手の横長剥片。背面には、同じ方向から横長剥片が剥離されている。分厚いため、末端部は階段状剥離になっている。	PL16
Q7	剥片	2.3	1.8	0.9	3.5	瑪瑙	厚手で小形の横長剥片。背面は自然面に覆われている。末端部は、自然面から入ったと推定される先行剥離によって砕けている。	PL16
Q8	剥片	1.7	2.1	0.4	0.9	瑪瑙	石核Q3から剥離した小形の剥片。上半分は欠損している。薄手で中央部が主要剥離面側に彎曲している。	PL16
Q9	剥片石核	5.9	5.4	1.9	50.2	瑪瑙	厚手で板状の剥片を素材とした石核。右側面の末端部付近を打面とし、主要剥離面を作業面に設定して、小形の不定形な剥片を3枚剥離している。	PL16
Q10	剥片	3.9	3.2	0.8	9.6	瑪瑙	石核Q9から剥離された剥片。背面はQ9の主要剥離面で、右側面には自然面を残している。	PL16 覆土中
第7図 Q11	石核	3.8	3.7	2.0	26.2	チャート	幅広の縦長剥片が剥離された石核。正面図には3枚の剥離痕が認められ、そのうち最も広い剥離面にはQ12が接合し、打瘤付近が大きくくぼんでいる。	覆土中
Q12	剥片	3.4	3.4	0.9	10.4	チャート	幅広の縦長剥片。末端部は欠損している。打瘤付近が大きく盛り上がり、下半部は主要剥離面側へ彎曲している。末端部は欠損している。	覆土中

図版番号	器種	計測値				石材	剥離と調整の特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第7図 Q13	石核	3.4	4.9	3.0	72.5	瑪瑙	板状の角礫を横方向に用い、寸詰まりの剥片を連続して剥離した石核。打面は周囲からの広い剥離によって大まかに調整されている。	覆土中
Q14	剥片	1.2	2.1	0.6	1.3	瑪瑙	縦割れした小形の剥片。自然面を打面としている。背面には、節理によって多様な方向の剥離が認められる。	
Q15	剥片	4.1	4.1	0.9	12.9	瑪瑙	大形で幅広の縦長剥片。下半部を欠損している。自然面を打面としている。背面には主要剥離面と同方向の剥離の他に、反対方向の剥離も認められる。	
Q16	石核	3.1	4.1	3.0	38.8	チャート	厚手の剥片を素材にした石核。打面は1枚の大きな剥離により作り出されている。正面図に見られる作業面には、長狭な2枚の剥離痕が認められる。	
Q17	剥片	2.8	2.6	1.4	9.5	チャート	厚手で幅広の剥片。打面は単剥離面である。背面には自然面を大きく残している。	
Q18	剥片	4.4	4.2	1.6	23.7	チャート	厚手で幅広の剥片。背面の打面付近に、小形の剥離面がわずかに認められる。中央部で分厚くなり、末端部にかけて薄くなっていく。	覆土中
Q19	剥片	4.6	3.6	1.2	19.7	チャート	幅広の縦長剥片。打面は調整打面であるが、頭部調整は認められない。背面には主要剥離面と同方向の剥離の他に、左側面の方向からの剥離も認められる。	覆土中
第8図 Q20	台石	8.8	8.8	5.6	723.8	片岩	直方体を呈す。表面に敲打痕が認められる。	
第6図 接合資料1	—	7.1	8.7	6.3	141.4	瑪瑙	Q3からQ10が接合した資料。	PL16
第7図 接合資料2	—	3.7	4.0	3.2	36.6	チャート	Q11とQ12が接合した資料。	
接合資料3	—	3.5	6.0	4.8	73.7	瑪瑙	Q13とQ14が接合した資料。	

(2) 集石土坑

旧石器調査の際、石器が集中して出土したB3 i5区内から集石土坑が2基確認された。調査の結果、いずれも鹿沼軽石層を掘り込んでることから集石土坑とし、出土状態と出土遺物について記載する。

第1号集石土坑 (第9図)

位置 調査区の北部、第24号住居跡内のB3 i5区。

規模と形状 長径1.92m、短径1.38mの楕円形である。底面は皿状で、北東壁際と南東壁際にピット状の掘り込みがある。壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-5°-W

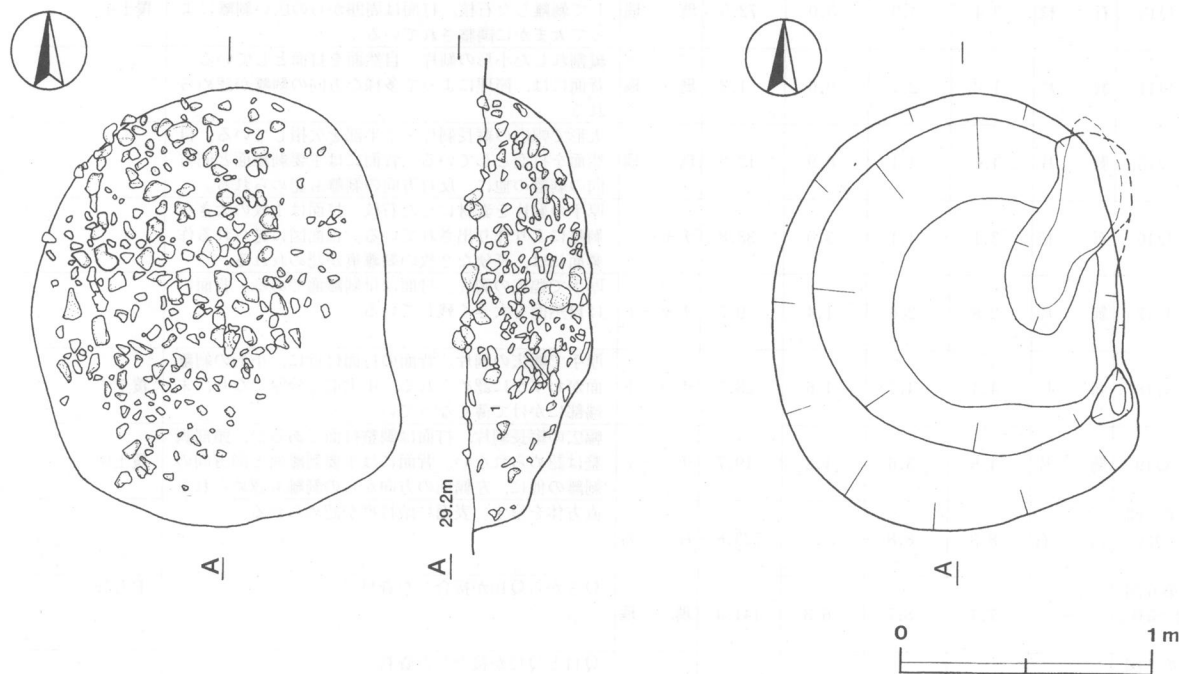
覆土 単一の礫混じりの褐色土であり、人為堆積と思われる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、礫多量

遺物 長径20cm程度の自然礫が20個、長径10cm程度の自然礫が242個、長径5cm程度の自然礫が1,783個、長径5cm以下の自然礫が5,831個の合計7,876個が出土している。石質は安山岩、砂岩、チャートなどである。礫の堆積状況は、層位によって礫の大きさが異なるようなことはなく、ロームと混じった状態である。一見礫層的であるが、礫を除くと壁及び底面が鹿沼軽石層である。礫の中には、熱によってひび割れているものや油脂分と思われるものが付着しているものも出土している。焼土や炭化物がないことから判断して、使用した礫を投棄したものと思われる。

所見 本跡は、第24号住居跡の掘り方の下から確認され、基本層序のハードローム層（第9層）から鹿沼軽石層（第10層）を掘り込んでいることなどから、鹿沼軽石降灰直後の可能性が高い。



第9図 第1号集石土坑実測図

第2号集石土坑（第10図）

位置 調査区の北部，第24号住居跡内のB3i5区。

規模と形状 長径1.13m，短径0.93mの不整楕円形である。底面は皿状で，壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-30°-E

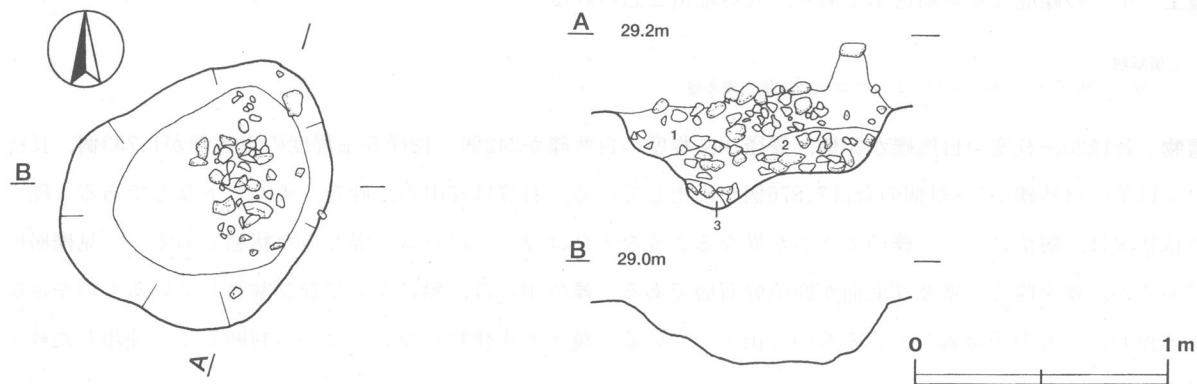
覆土 3層でいずれも礫混じりの褐色土であり，人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，鹿沼軽石粒子微量，礫中量
- 2 褐色 ローム粒子多量，黒色粒子・白色粒子微量，礫中量
- 3 黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼軽石粒子中量，礫少量

遺物 礫は，土坑の東側から多く出土している。長径20cm程度の自然礫が12個，長径10cm程度の自然礫が93個，長径5cm程度の自然礫が548個，長径5cm以下の自然礫が829個の合計1,482個が出土している。石質は安山岩，砂岩，チャートなどである。ロームと混じった状態にあり，一見礫層的であるが壁面が鹿沼層であることから，第1号集石土坑と同様に礫を投棄したものと考えられる。

所見 本跡は，第1号集石土坑と同時期と考えられる。



第10図 第2号集石土坑実測図

2 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡6軒、土坑14基、陥し穴2基が確認された。以下、確認された遺構の特徴や遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第19号住居跡（第12図）

位置 調査区の中央部，C3f3区。

規模と平面形 長径4.61m，短径3.91mの楕円形である。

長径方向 N-28°-W

壁 壁高は15～19cmで，わずかに外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，特に踏み固められた部分はない。

ピット 13か所（P1～P13）。P1は径42cmの円形，P2～P5は長径31～51cm，短径26～42cmの楕円形で，深さは21～32cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P11・P12は径18・28cmの円形で，P6～P10・P13は長径25～39cm，短径19～31cmの楕円形で，深さ12～23cmである。位置的に補助柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P1

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量 | |

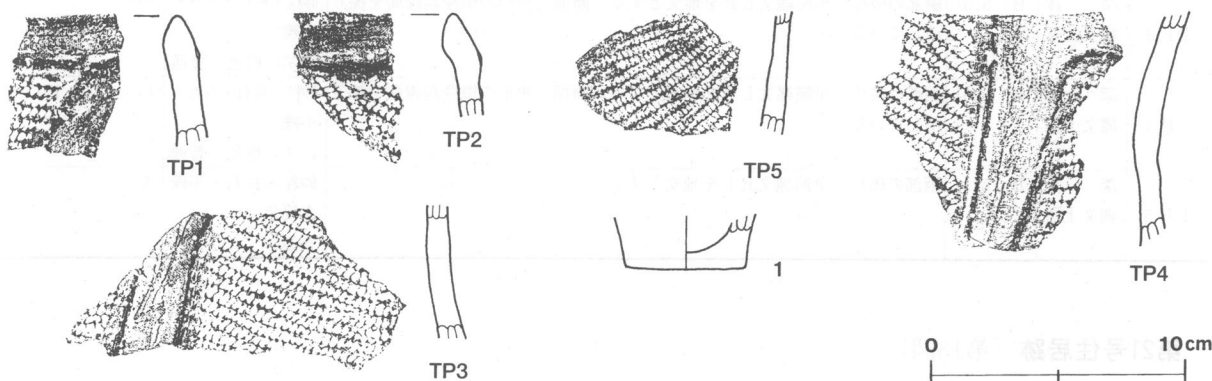
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と思われる。

土層解説

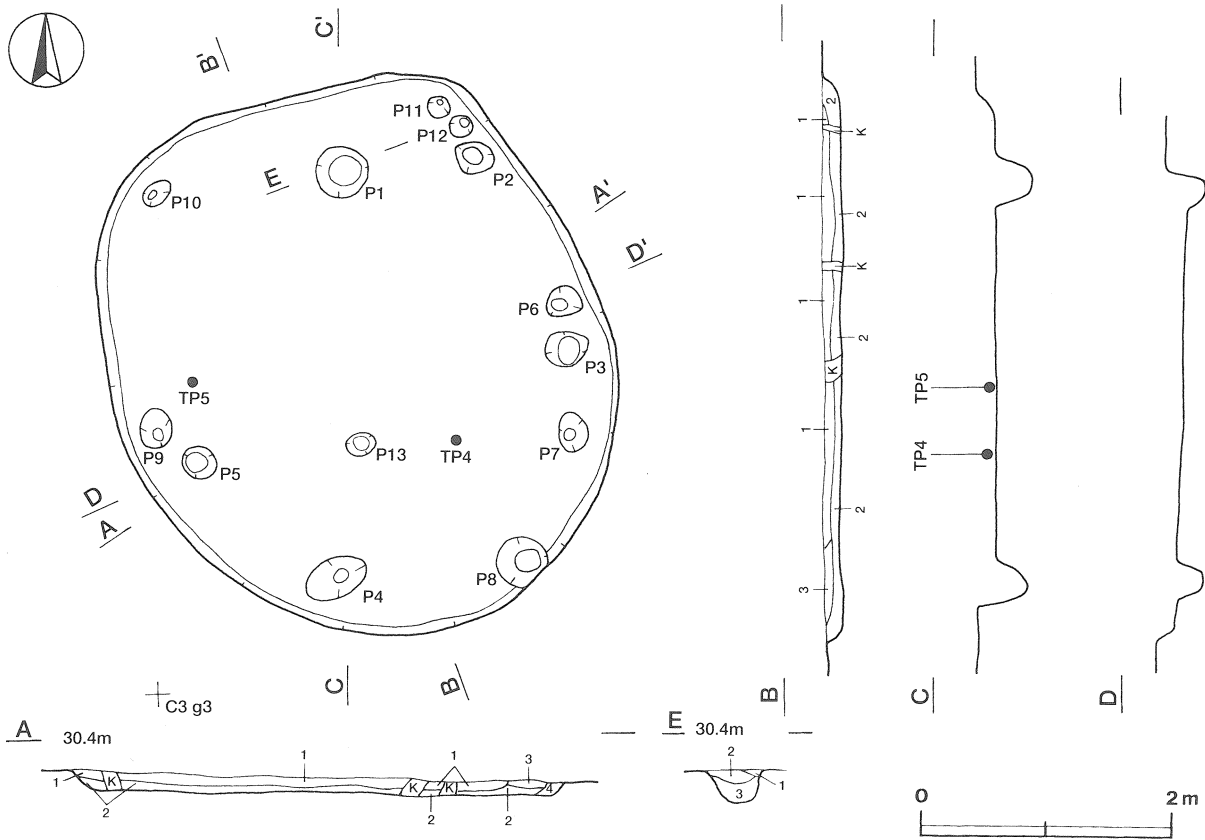
- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子微量 |

遺物 出土遺物は少なく，縄文土器片17点，弥生土器片5点，礫10点が出土しているだけである。弥生土器片は覆土上層からの出土であり，流れ込みによる混入と思われる。第11図TP1・TP2は深鉢の口縁部片で，TP3～TP5は，深鉢の胴部片である。TP4は，P13東側の覆土下層から出土している。TP5は，P9の北東側の床面から出土している。その他，1の深鉢の底部片が覆土から出土している。

所見 本跡からは，炉を確認することができなかった。時期は，出土土器及び柱穴の配列から判断して，中期（加曾利EⅣ式期）と考えられる。



第11図 第19号住居跡出土遺物実測図



第12図 第19号住居跡実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	深鉢 縄文土器	B(2.2) C 4.8	底部の破片。無文。	砂粒・長石・白色 粒子 にぶい橙色 普通	5%
TP1	深鉢 縄文土器	B(5.5)	口縁部の破片。口縁部は内彎して立ち上がり、波状口縁を呈する。口縁部は無文で、断面三角形の微隆起線が一巡する。単節縄文LRを地文とする。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	5%
TP2	深鉢 縄文土器	B(4.3)	口縁部の破片。口縁部は内彎して立ち上がる。口縁部は無文で、断面三角形の微隆起線が一巡する。単節縄文LRを地文とする。	砂粒・長石・小礫 にぶい橙色 普通	5%
TP3	深鉢 縄文土器	B(5.5)	胴部の破片。単節縄文LRを地文とする。断面三角形の微隆起線間を擦り消している。	砂粒・長石・雲母・ 小礫 にぶい橙色 普通	10%
TP4	深鉢 縄文土器	B(9.6)	胴部の破片。単節縄文LRを地文とする。断面三角形の微隆起線間を擦り消している。	砂粒・長石・石英・ 小礫 にぶい橙色 普通	10% PL18
TP5	深鉢 縄文土器	B(5.1)	胴部の破片。単節縄文RLを地文とする。	砂粒・長石・小礫 赤褐色 普通	5%

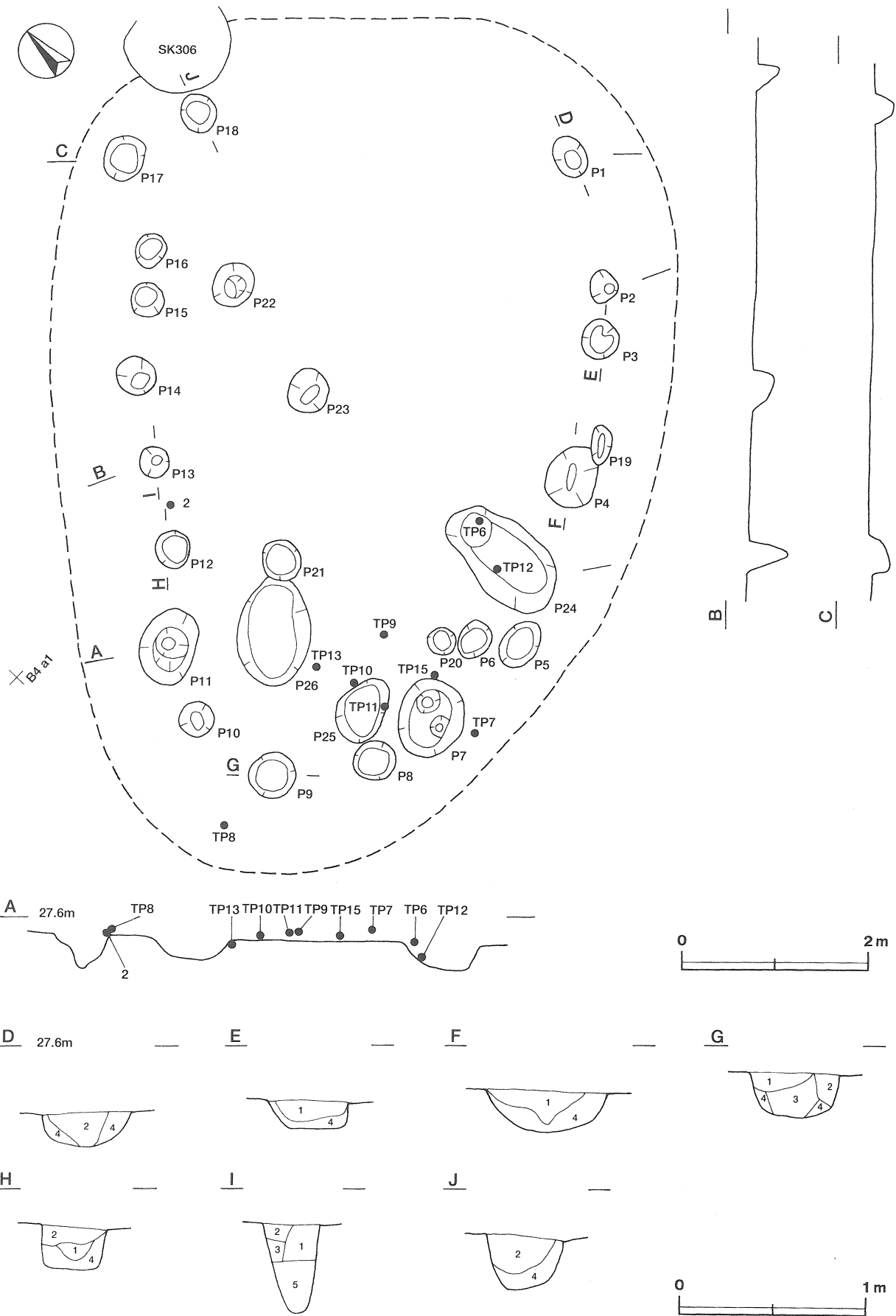
第21号住居跡 (第13図)

位置 調査区の南部，B4a2区。

重複関係 北側が第306号土坑と重複している。

規模と平面形 規模や平面形は明確ではないが、柱穴の配列から、長径9.23m、短径6.62mの楕円形と推定される。

長径方向 N-47°-Eと推定される。



第13图 第21号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、踏み固められた部分はない。

ピット 26か所 (P1~P26)。P1・P2・P4~P7・P11・P16・P17は長径36~83cm、短径30~70cmの楕円形、P3・P8~P10・P12~P15・P18は径30~50cmの円形で、深さは17~38cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P19・P22・P23は長径44~47cm、短径22~42cmの楕円形、P20・P21は径29~44cmの円形で、深さは18~27cmである。位置的に補助柱穴と考えられる。P24~P26は長径73~137cm、短径50~78cmの楕円形で、深さは19~32cmである。性格は不明である。

ピット土層解説

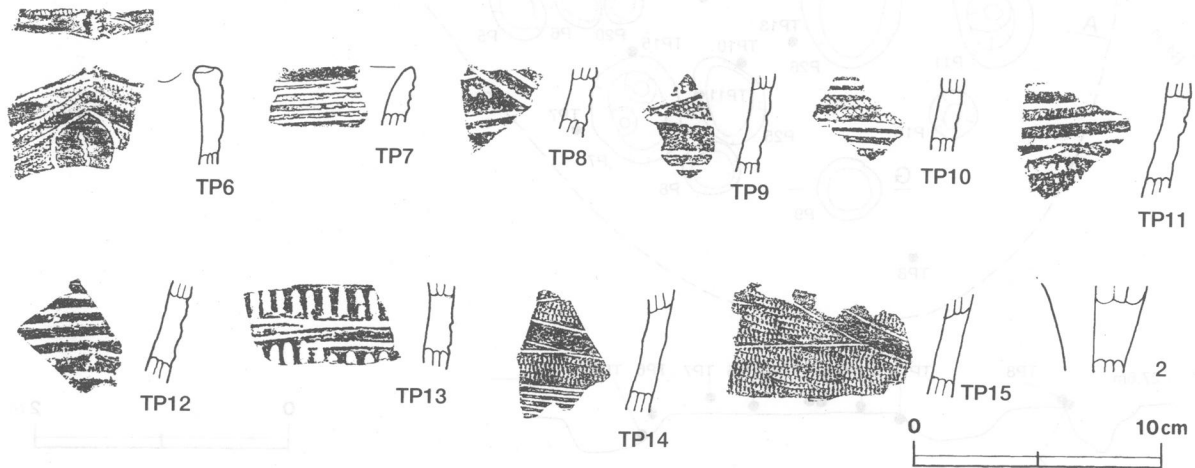
P1・P3・P4・P9・P12・P13・P18

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒色 | 白色粒子少量、ローム粒子・赤色粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム小ブロック・白色粒子少量、赤色粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 白色粒子少量、赤色粒子微量 | 5 黒色 | ローム粒子・白色粒子少量、赤色粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、白色粒子少量 | | |

覆土 遺構確認時に、縄文土器が出土し、精査したところ柱穴の配列から住居跡と確認されたもので、覆土はない。

遺物 確認面から、縄文土器片44点、礫29点が出土している。第14図の土器は、いずれも尖底土器である。確認面では、TP7の口縁部片とTP11・TP15の胴部片がP7付近から、TP9の胴部片がP25の北側から、TP8の胴部片がP9西側からそれぞれ出土している。床面では、2の尖底部片がP12の北東部から、TP10の胴部片がP25の北壁付近から、TP13の胴部片がP26の南側からそれぞれ出土している。また、P24の覆土上層からTP6の口縁部片が、P24の覆土中層からTP12の胴部片がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、壁・炉等を確認することができなかった。出土遺物及び柱穴の配列から住居跡と判断した。時期は、早期(田戸下層式期)の可能性が高いと思われる。



第14図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 2	尖底土器 縄文土器	B(3.5)	尖底部の破片。	砂粒・長石・石英・ 小礫 橙色 普通	5%
TP6	尖底土器 縄文土器	B(4.1)	口縁部の破片。口縁部は内彎して立ち上がり、波状口縁を呈する。波頂部と内面に、貝殻腹縁文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5%
TP7	尖底土器 縄文土器	B(2.5)	口縁部の破片。横位の平行細沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 小礫 明赤橙色 普通	5%
TP8	尖底土器 縄文土器	B(3.0)	胴部の破片。斜位の沈線文と刺突文が施されている。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 T P 9	尖底土器 縄文土器	B(4.5)	胴部の破片。横位の平行沈線文と貝殻腹縁文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 小礫 灰褐色 普通	5%
T P 10	尖底土器 縄文土器	B(3.1)	胴部の破片。横位の平行沈線文と貝殻腹縁文が施されている。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	5%
T P 11	尖底土器 縄文土器	B(5.0)	胴部の破片。横位・斜位の沈線文と、半截竹管による斜め刺突文が施されている。	砂粒・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	5%
T P 12	尖底土器 縄文土器	B(4.2)	胴部の破片。横位の平行沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・礫 にぶい赤褐色 普通	5%
T P 13	尖底土器 縄文土器	B(3.4)	胴部の破片。縦位の単沈線文と横位の沈線文が施されている。	砂粒・白色粒子・礫 にぶい赤褐色 普通	5%
T P 14	尖底土器 縄文土器	B(5.3)	胴部の破片。貝殻背圧痕の上に、横位の平行細沈線文と斜位の沈線文が施されている。	砂粒・白色粒子・礫 にぶい赤褐色 普通	5%
T P 15	尖底土器 縄文土器	B(4.5)	胴部の破片。貝殻背圧痕の上に、貝殻腹縁文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	5%

第31号住居跡（第15図）

位置 調査区の北部，A4j1区。

重複関係 北壁を第302号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.7m，短軸4.41mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-44°-E

壁 壁高は10～21cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，特に踏み固められた部分はない。

ピット 13か所（P1～P13）。P1～P5・P8～P11は径19～26cmの円形，P6・P7は長径24～30cm，短径20～26cmの楕円形で，深さは15～47cmである。規模と配列から支柱穴と考えられる。P12・P13は径57～86cmの円形で，深さ16cmである。性格は不明である。

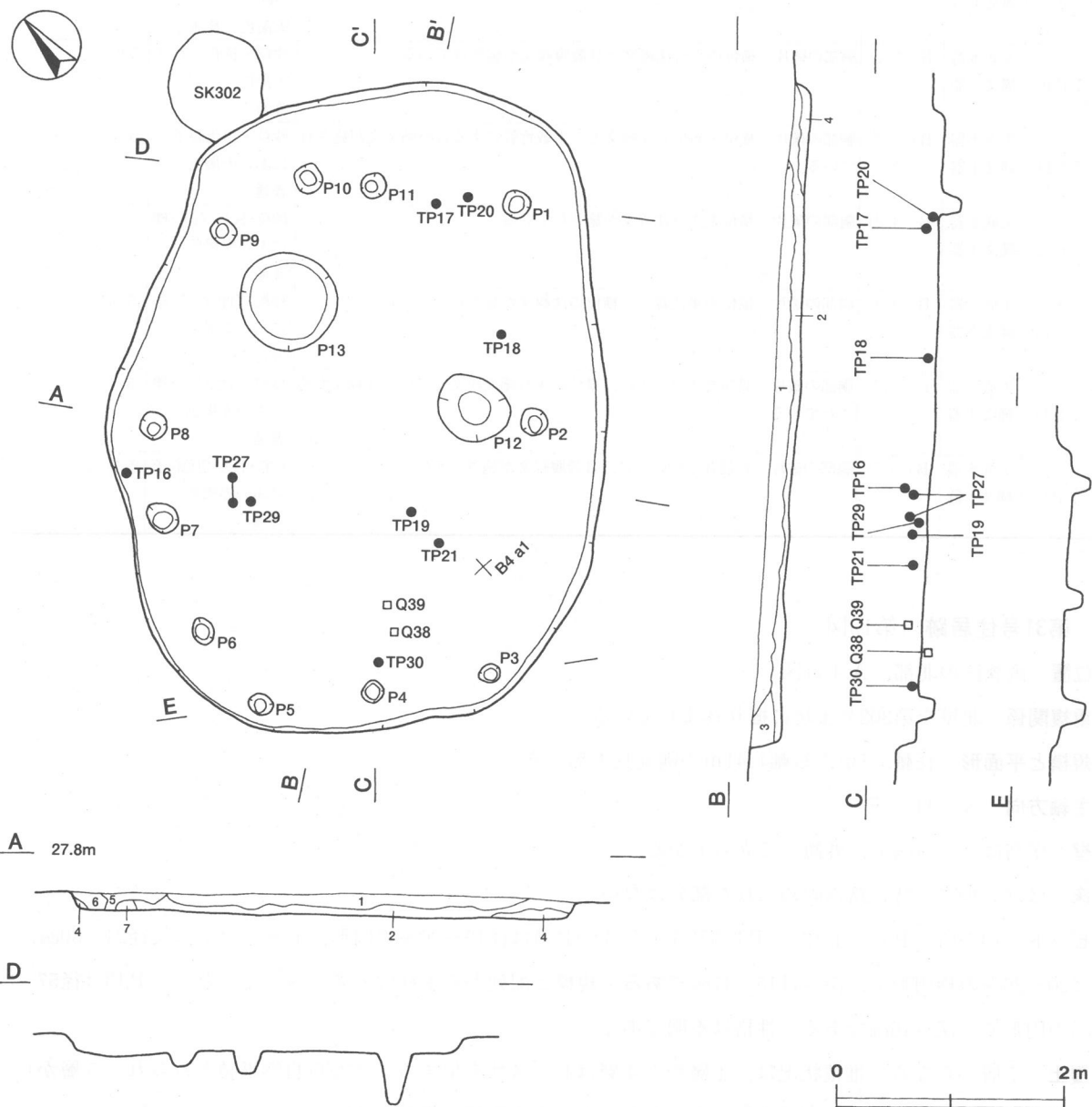
覆土 7層からなる。堆積状況は，1層から4層はレンズ状を呈することから自然堆積とみられ，5層から7層は土色の違いや堆積状況が不自然であることから，人為堆積と思われる。

土層解説

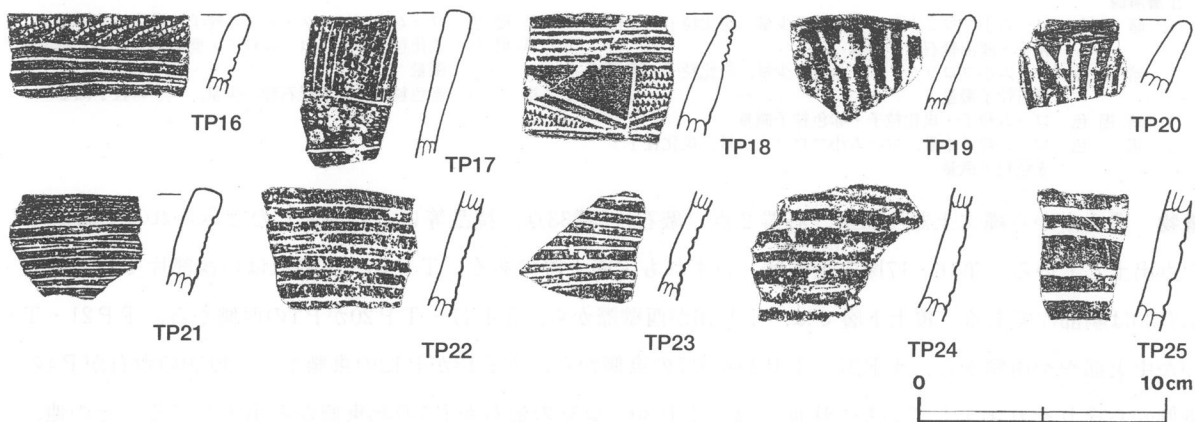
- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・赤色粒子・鹿沼軽石粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・鹿沼軽石粒子微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子少量，ローム粒子・鹿沼軽石粒子・赤色粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量 | 7 褐色 | 赤色粒子・鹿沼軽石粒子少量，ローム粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子・赤色粒子微量 | | |

遺物 覆土中から縄文土器片41点，石器2点（敲石），礫33点，攪乱等により混入したとみられる土師器片が1点出土している。第16・17図の土器は，いずれも尖底土器である。T P 16～T P 21は口縁部片で，T P 22～T P 30は胴部片である。覆土下層では，T P 16が西壁際から，T P 17・T P 20がP1の西側から，T P 21・T P 19が中央部やや南側から，T P 27・T P 29がP7の東側から，T P 18がP12の東側から，Q39の台石がP4の北東側からそれぞれ出土している。床面では，T P 30とQ38の敲石がP4の北東側から出土している。その他，3の尖底部片とT P 22～T P 27の胴部片が覆土から出土している。

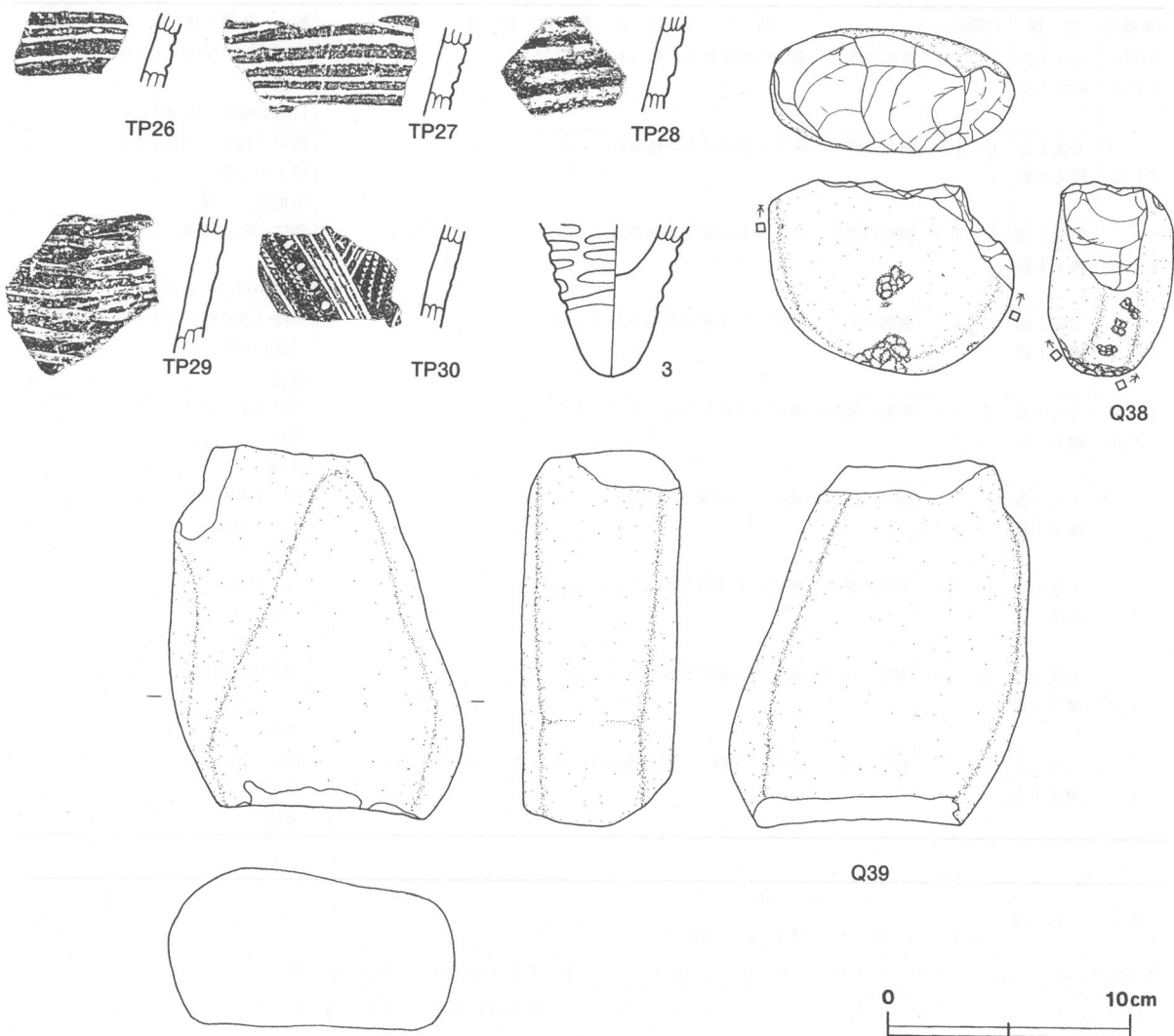
所見 本跡の時期は、出土土器が尖底土器片であることや柱穴の配列及び形状から判断して、早期（田戸下層式期）と思われる。



第15図 第31号住居跡実測図



第16図 第31号住居跡出土遺物実測図(1)



第17図 第31号住居跡出土遺物実測図(2)

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 3	尖底土器 縄文土器	B(6.3)	尖底部の破片。天狗鼻状を呈する。横位の太沈線文が施されている。	砂粒・長石・白色 粒子・礫 にぶい橙色 普通	5%
第16図 TP16	尖底土器 縄文土器	B(3.4)	口縁部の破片。口唇部断面は角頭状で、口唇直下から斜位の貝殻腹縁文、口縁部には横位の沈線文が施されている。	砂粒・長石・白色 粒子・小礫 灰褐色 普通	5%
TP17	尖底土器 縄文土器	B(5.9)	口縁部の破片。口唇部断面は角頭状で、口唇直下から縦位の沈線文と刺突文、口縁部には横位の沈線文と刺突文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 にぶい赤褐色 普通	5%
TP18	尖底土器 縄文土器	B(4.9)	口縁部の破片。口唇部断面は角頭状で、口唇直下には横位の沈線文が施されている。口縁部は横位の沈線文間に貝殻背圧痕が施されている。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	5%
TP19	尖底土器 縄文土器	B(4.2)	口縁部の破片。口唇部断面は丸頭状で、口唇直下から縦位の太沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 赤色粒子 灰褐色 普通	5%
TP20	尖底土器 縄文土器	B(3.6)	口縁部の破片。口唇部断面は角頭状で、口唇直下から縦位・斜位の太沈線文が施されている。	砂粒・白色粒子 暗褐色 普通	5%
TP21	尖底土器 縄文土器	B(4.2)	口縁部の破片。口唇部断面は角頭状で、口唇直下から横位の貝殻腹縁文と沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 T P 22	尖底土器 縄文土器	B (4.8)	胴部の破片。横位の細沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 小礫 にぶい橙色 普通	5 %
T P 23	尖底土器 縄文土器	B (4.5)	胴部の破片。横位の細沈線文が施されている。	砂粒・長石・赤色 粒子・小礫 灰褐色 普通	5 %
T P 24	尖底土器 縄文土器	B (5.5)	胴部の破片。横位の太沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 小礫 にぶい橙色 普通	5 %
T P 25	尖底土器 縄文土器	B (5.7)	胴部の破片。横位の太沈線文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	5 %
第17図 T P 26	尖底土器 縄文土器	B (3.0)	胴部の破片。横位の沈線文が施されている。	砂粒・長石・白色粒子 橙色 普通	5 %
T P 27	尖底土器 縄文土器	B (3.6)	胴部の破片。横位の太沈線文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	5 %
T P 28	尖底土器 縄文土器	B (4.1)	胴部の破片。横位の太沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 小礫 にぶい橙色 普通	5 %
T P 29	尖底土器 縄文土器	B (5.8)	胴部の破片。横位の沈線文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	5 %
T P 30	尖底土器 縄文土器	B (4.2)	胴部の破片。斜位に沈線文と貝殻腹縁文と刺突文が、平行して施されている。	砂粒・石英・白色粒子 灰褐色 普通	5 %

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第17図Q38	敲石	7.9	10.1	5.1	638.9	安山岩	平面は楕円形で、端部に敲打痕が残る。	
Q39	台石	15.5	12.0	6.4	1,853.6	砂岩	断面は長方形で、表面は滑らかであり、部分的に敲打痕が残る。	

第34号住居跡 (第18図)

位置 調査区の北部，B 4 c1区。

規模と平面形 規模や平面形は明確ではないが，柱穴の配列から，長径10.05m，短径6.5mの楕円形と推定される。

長径方向 N-49°-Eと推定される。

床 ほぼ平坦で，踏み固められた部分はない。

ピット 19か所 (P1～P19)。P1～P3・P6・P10～P13は長径37～55cm，短径30～48cmの楕円形，P4・P5・P8・P9は径43～52cmの円形で，深さは15～29cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P7・P14～P16は径34～71cmの円形，P17・P18は長径51・84cm，短径43・62cmの楕円形で，深さは22～27cmである。位置的に補助柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P1

1 暗褐色 白色粒子少量，ローム粒子・赤色粒子微量

2 褐色 赤色粒子中量，白色粒子微量

3 褐色 赤色粒子・白色粒子微量

P3

1 暗褐色 ローム粒子微量，赤色粒子・白色粒子微量

2 褐色 ローム粒子微量，赤色粒子・白色粒子微量

P4・P5

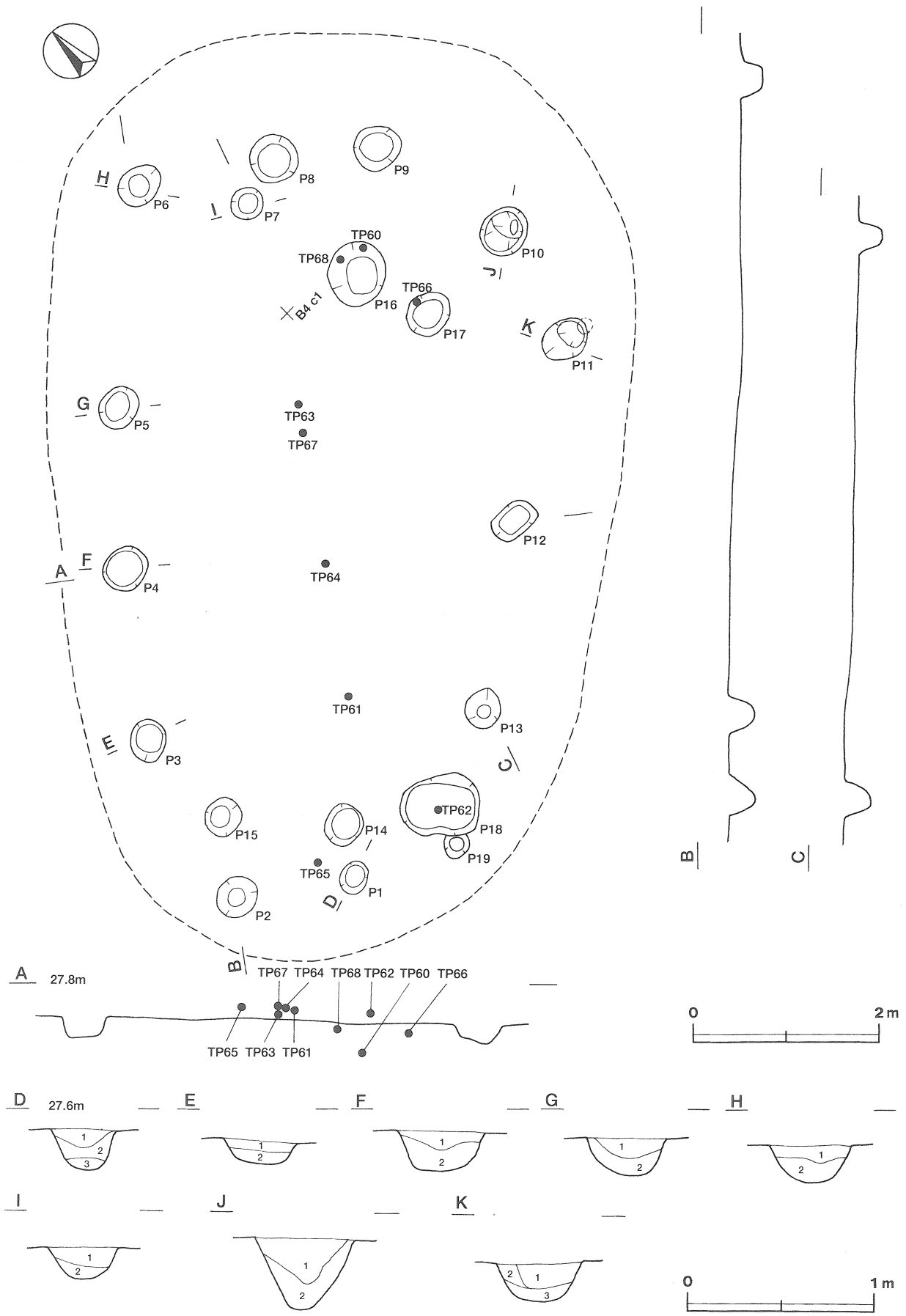
1 暗褐色 赤色粒子・白色粒子少量，ローム粒子微量

2 褐色 赤色粒子・白色粒子少量，ローム粒子微量

P6

1 暗褐色 ローム粒子・赤色粒子・白色粒子微量

2 褐色 赤色粒子少量，ローム粒子・白色粒子微量



第18图 第34号住居跡実測図

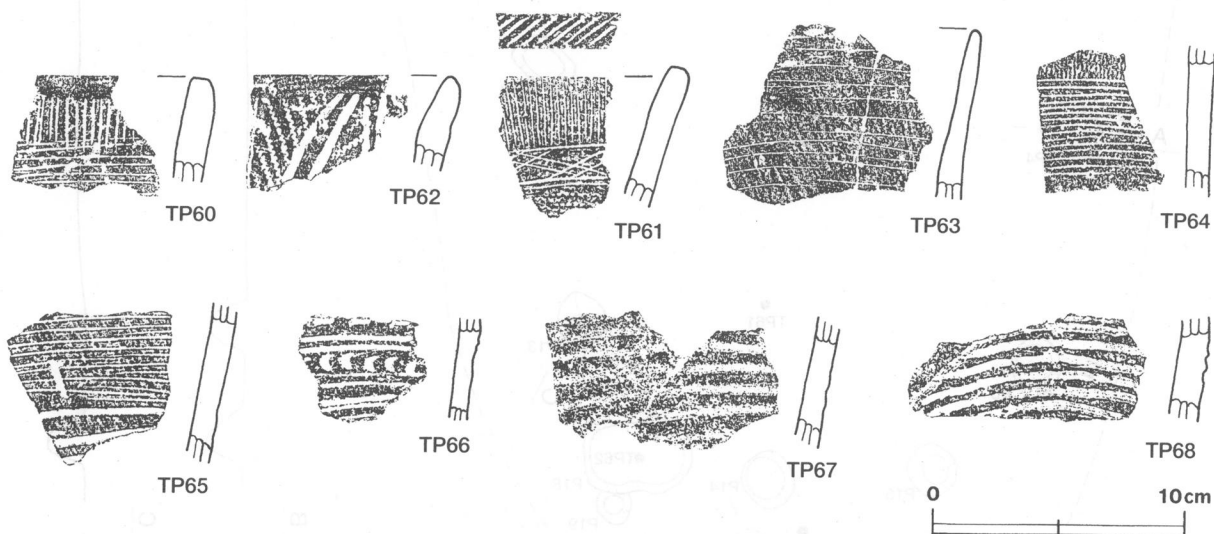
- P7
 1 暗褐色 白色粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・赤色粒子微量
 2 褐色 白色粒子少量, ローム粒子・赤色粒子微量
 P10
 1 暗褐色 白色粒子中量, ローム粒子少量, 赤色粒子微量
 2 褐色 ローム粒子・赤色粒子・白色粒子微量

- P11
 1 暗褐色 白色粒子少量, ローム粒子・赤色粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子・白色粒子・赤色粒子微量
 3 褐色 赤色粒子少量, ローム粒子微量

覆土 遺構確認時に、縄文土器が出土し、精査したところ柱穴の配列から住居跡と確認されたもので、覆土はない。

遺物 確認面から、縄文土器片27点、礫11点が出土している。第19図の土器は、いずれも尖底土器である。確認面では、TP61の口縁部片が中央からやや南西側から、TP64・TP67の胴部片が中央部から、TP65の胴部片がP1の北側から、それぞれ出土している。床面では、TP63の口縁部片が中央部から出土している。ピットでは、TP60の口縁部片とTP68の胴部片がP16内から、TP62の口縁部片がP18内から、TP66の胴部片がP17内から、それぞれ出土している。

所見 本跡は、壁・炉等を確認することができなかった。出土土器及び柱穴の配列から住居跡と判断した。時期は、早期（田戸下層式期）の可能性が高いと思われる。



第19図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 TP60	尖底土器 縄文土器	B(4.4)	口縁部の破片。口唇部断面は角頭状で、外削ぎ状を呈する。口唇直下から縦位の細沈線文と、その下に横位の細沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・小礫 にぶい赤褐色 普通	5%
TP61	尖底土器 縄文土器	B(5.6)	口縁部の破片。口唇部断面は角頭状で、外削ぎ状を呈する。口唇部に平行細沈線文、口唇直下から縦位の細沈線文、その下に格子目文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5%
TP62	尖底土器 縄文土器	B(3.8)	口縁部の破片。口唇部断面が丸頭状を呈する。口唇直下から、貝殻腹縁文に太沈線文が施されている。	砂粒・石英・白色 粒子・小礫 にぶい橙色 普通	5%
TP63	尖底土器 縄文土器	B(6.9)	口縁部の破片。口唇部断面は角頭状を呈する。横位の細沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5%
TP64	尖底土器 縄文土器	B(6.0)	胴部の破片。貝殻背圧痕文と横位の平行細沈線文が施されている。	砂粒・長石・白色粒子 橙色 普通	5%

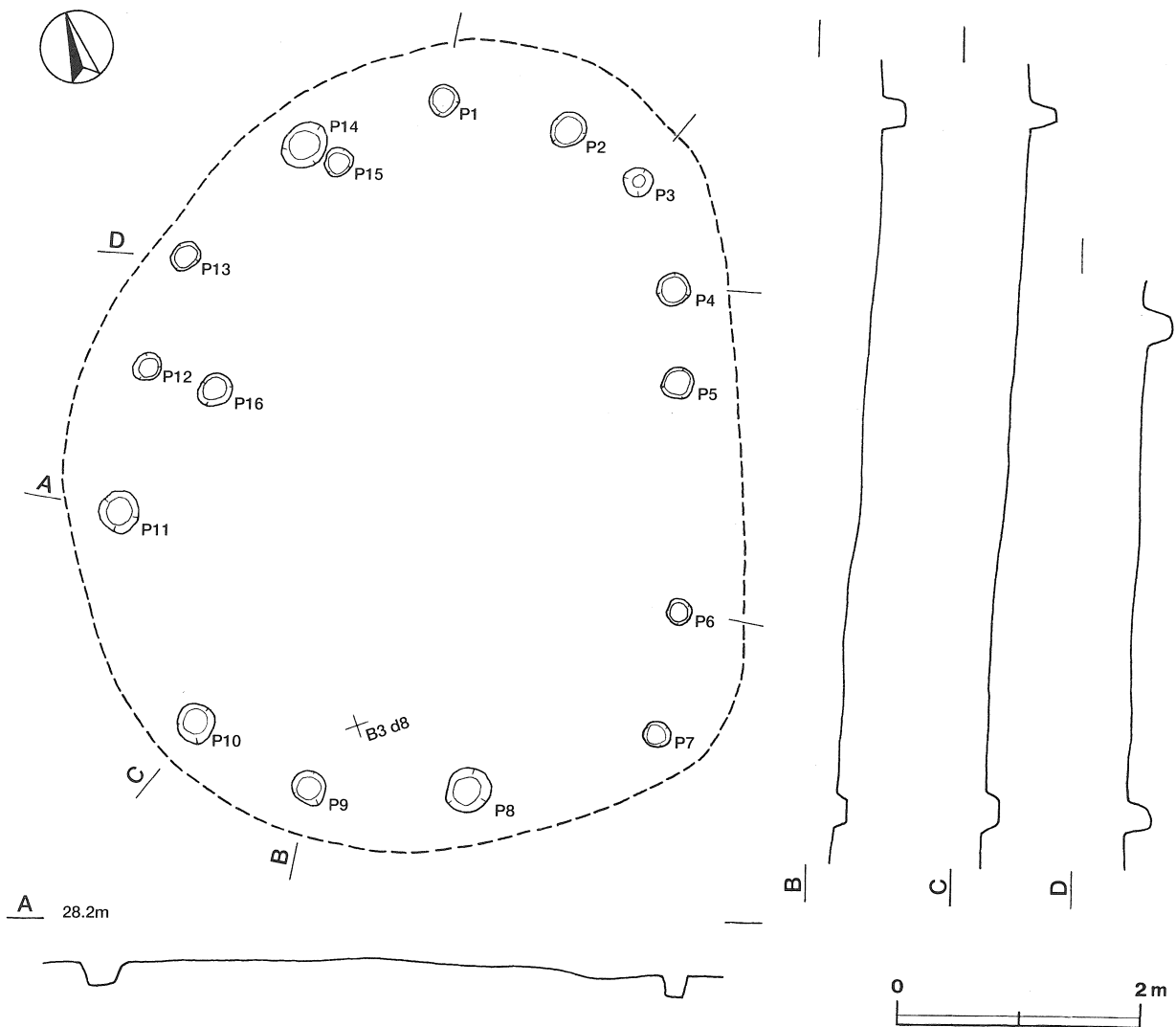
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 T P 65	尖底土器 縄文土器	B (6.5)	胴部の破片。横位の細沈線文と太沈線文が施されている。	砂粒・長石・白色粒子 灰褐色 普通	5%
T P 66	尖底土器 縄文土器	B (3.9)	胴部の破片。横位の沈線文間に爪形文が施されている。	砂粒・長石・白色粒子 にぶい黄橙色 普通	5%
T P 67	尖底土器 縄文土器	B (5.1)	胴部の破片。横位の平行太沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 明赤橙色 普通	5%
T P 68	尖底土器 縄文土器	B (4.3)	胴部の破片。横位の平行太沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5%

第35号住居跡 (第20図)

位置 調査区の北部, B 3 c8区。

規模と平面形 規模や平面形は明確ではないが, 柱穴の配列から, 長径6.72m, 短径5.55mの楕円形と推定される。

長径方向 N-30°-Eと推定される。



第20図 第35号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、踏み固められた部分はない。

ピット 16か所（P1～P16）。P1～P14は径20～40cmの円形で、深さが10～22cmである。規模と配列から柱穴と考えられる。P15・P16は径20・35cmの円形で、深さ19・20cmである。位置的に補助柱穴と考えられる。

覆土 遺構確認時に、精査したところ柱穴の配列から住居跡と確認されたもので、覆土はない。

所見 本跡は、壁・炉・遺物等を確認することができなかった。柱穴の配列及び周囲から縄文土器が出土していること、隣接する住居跡等から判断して、早期の可能性が高いと思われる。

第42号住居跡（第21図）

位置 調査区の南東部，D4c4区。

重複関係 中央部の西寄りを第4号地下式竈に掘り込まれている。

規模と平面形 長径5.7m，短径5.02mの楕円形である。

長径方向 N-14°-W

壁 壁高は30～35cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南側と北側の一部を除き、巡っている。上幅24～35cm，下幅10～21cm，深さ7～10cmで、断面形はU字状である。

壁溝土層解説

7 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

床 ほぼ平坦である。南側の壁際がよく踏み固められており、出入り口に伴う硬化面と考えられる。

ピット 5か所（P1～P5）。P1・P3・P4は径42～66cmの円形，P2は長径33cm，短径20cmの楕円形で、深さは55～78cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P1

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子少量
5 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量

P2

1 黒褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量

P3

1 黒褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子微量
3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
4 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

P4

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

P5

1 黒褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

炉 中央部に位置している石囲い炉である。西側半分を第4号地下式竈に壊されているため、南北方向55cm，東西方向は確認できたのが33cmで、楕円形と推定される。炉石は、深さ10cmほど掘りくぼめて、周りに石を配置した石囲い炉である。炉石の内側は、火熱によってひび割れや赤変している。炉の底面は焼土が堆積し、長期間使用されたものと思われる。

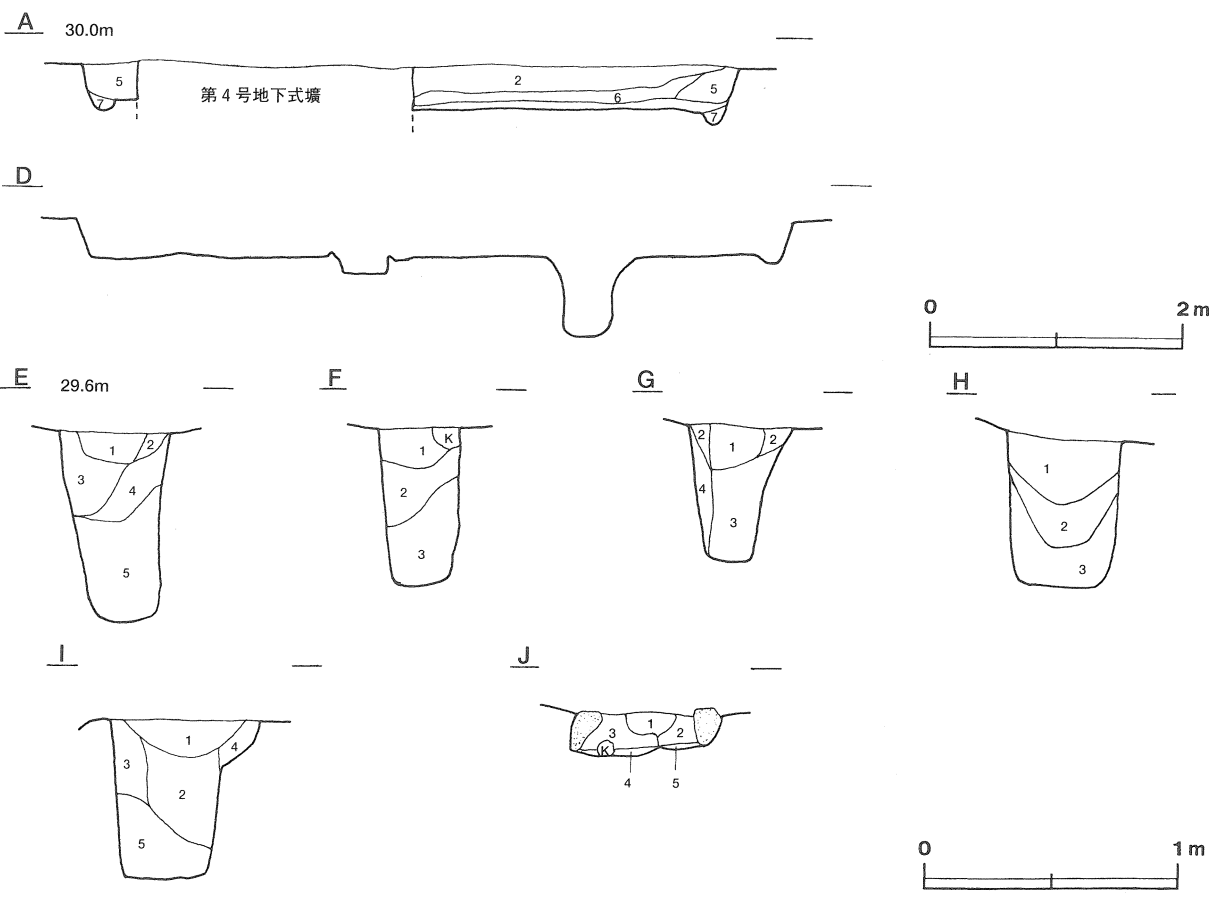
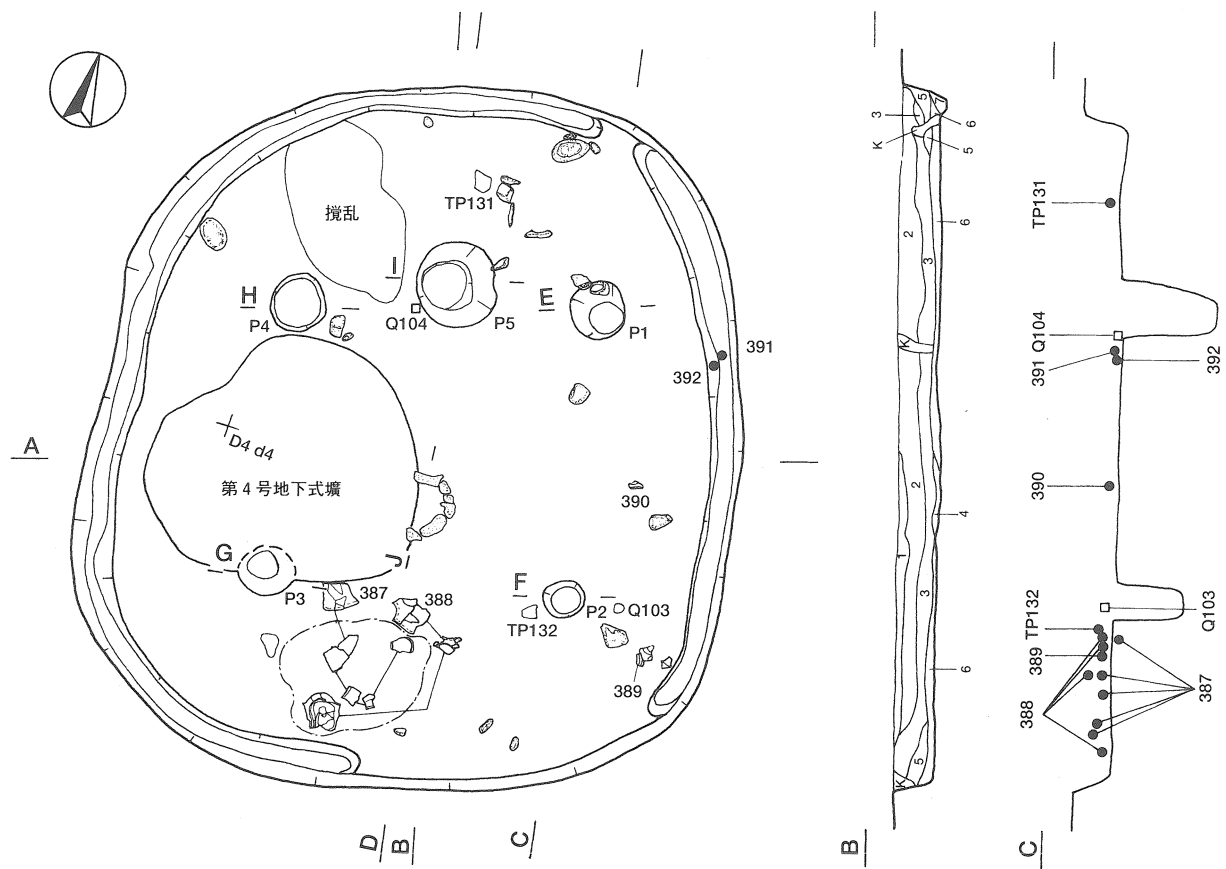
炉土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
5 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

覆土 6層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

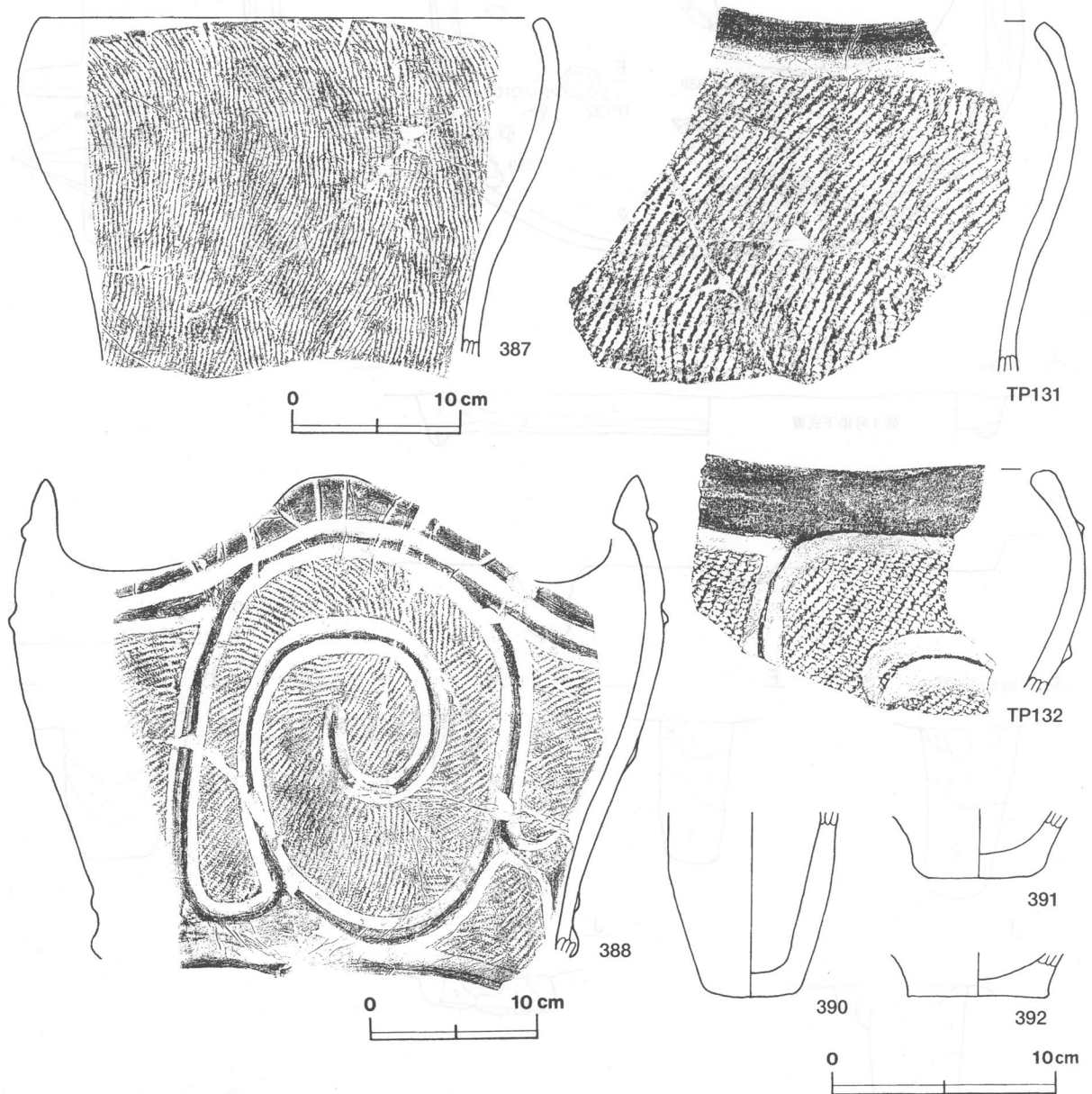
1 黒色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子微量
3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
5 黒褐色 ローム粒子少量
6 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量



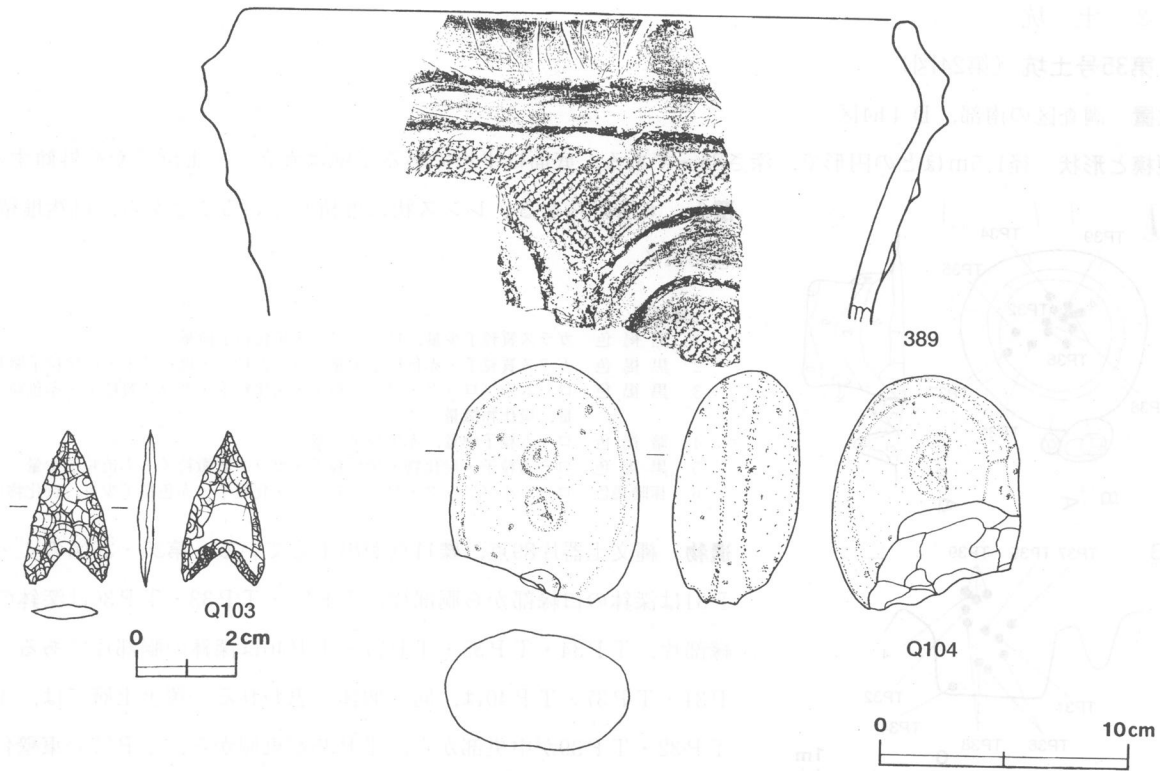
第21图 第42号住居迹实测图

遺物 縄文土器片80点，礫59点，石器2点（石鏃，磨石），攪乱等により混入したとみられる弥生土器片1点，土師器片20点が出土している。遺物は，炉の北側から南東側にかけての覆土から多く出土している。第22・23図の387～392，T P 131・T P 132は深鉢の破片である。覆土下層では，389の口縁部から胴部片が南東壁際から，390の底部片が東壁寄りから，T P 131の口縁部片がP 5の北側から，T P 132の口縁部片がP 2の西側から，Q 103の磨石がP 2の東側からそれぞれ出土している。387の口縁部から胴部片は，P 3の東側付近の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。388の口縁部から胴部片は，南壁寄りの覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。床面では，391・392の底部片が東壁際から，Q 104の石鏃がP 4の南西側からそれぞれ出土している。

所見 本跡からは，良好な状態で石囲い炉や土器が検出された。時期は，遺構の形態や覆土下層及び床面からの出土土器から判断して中期（加曾利EⅢ式期）と思われる。



第22図 第42号住居跡出土遺物実測図(1)



第23図 第42号住居跡出土遺物実測図(2)

第42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 387	深鉢 縄文土器	A 29.7 B (20.7)	口縁部から胴部の破片。胴部は外反して立ち上がり、口縁部は内彎する。胴部には、無節縄文Rが施されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい黄褐色 普通	60%
388	深鉢 縄文土器	A [35.0] B (28.6)	口縁部から胴部の破片。4単位の波状口縁を呈し、口縁部は内彎する。口縁部に隆帯による渦巻文を施し、区画文内に単節縄文RLが施されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい黄褐色 普通	40% PL17
第23図 389	深鉢 縄文土器	A [26.6] B (12.4)	口縁部から胴部の破片。口縁部は内傾する。胴部には、単節縄文RLを施し、2条の微隆起線により区画されている。	砂粒・雲母・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%
第22図 390	深鉢 縄文土器	B (8.2) C 4.0	底部の破片。無文。	砂粒・雲母・白色粒子 橙色 普通	5%
391	深鉢 縄文土器	B (3.0) C 4.3	底部の破片。無文。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	5%
392	深鉢 縄文土器	B (2.0) C 6.3	底部の破片。無文。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	5%
T P 131	深鉢 縄文土器	B (14.5)	口縁部の破片。口縁部は内彎する。単節縄文RLが施されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい黄褐色 普通	5%
T P 132	深鉢 縄文土器	B (10.1)	口縁部の破片。口縁部は内彎する。口縁部は無文帯で、微隆起線により区画され、区画内には単節縄文RLを充填している。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい黄褐色 普通	5% PL18

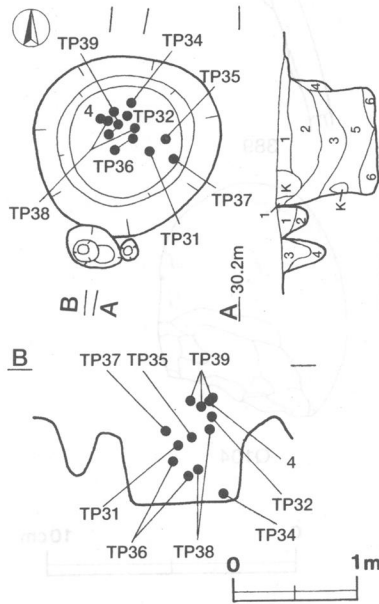
図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第23図Q103	石 鏃	3.1	1.8	0.3	1.2	硬質頁岩	無茎鏃。	PL18
Q104	磨 石	9.5	7.6	4.9	426.1	凝灰岩	表裏面に凹痕あり。	PL18

(2) 土坑

第35号土坑 (第24図)

位置 調査区の南部, D 4 h4区。

規模と形状 径1.5mほどの円形で, 深さ83cmである。底面は平坦である。壁は直立し, 上位でやや外傾する。



覆土 6層からなる。レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と思われる。

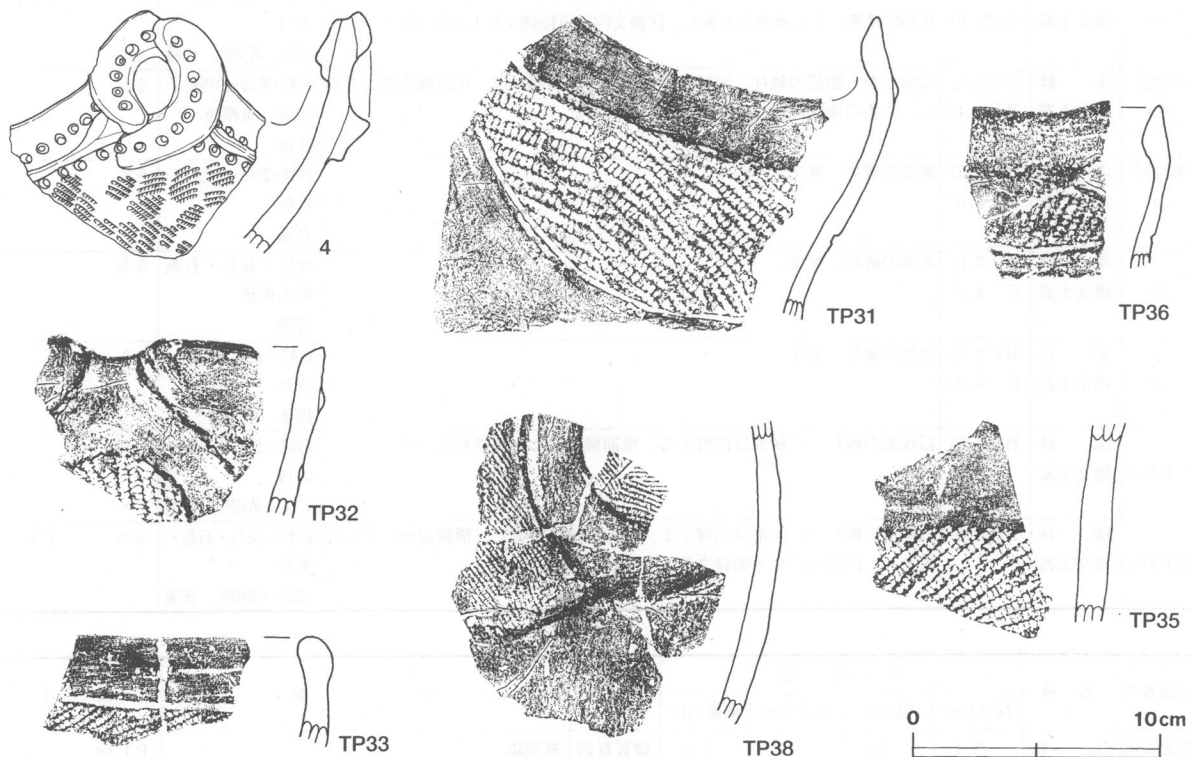
土層解説

- 1 黒褐色 ガラス質粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ガラス質粒子・赤色粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・ガラス質粒子・赤色粒子少量, 炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, 赤色粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子・ガラス質微粒子・赤色粒子少量
- 6 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子少量, 炭化物微量

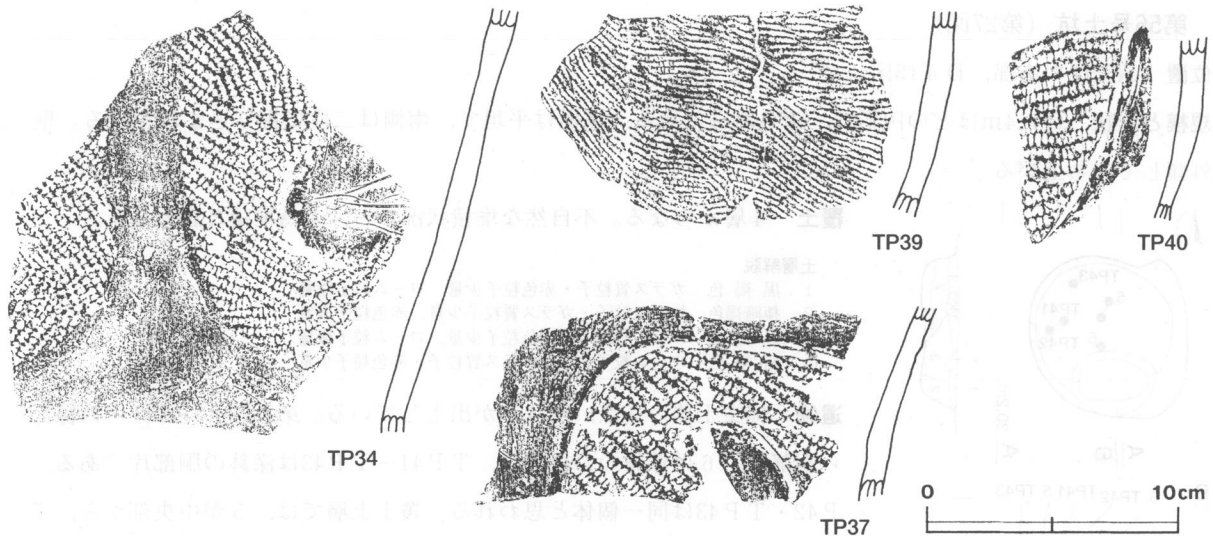
遺物 縄文土器片89点, 礫11点が出土している。第25・26図の4・TP31は深鉢の口縁部から胴部片, TP32・TP33・TP36は深鉢の口縁部片, TP34・TP35・TP37~TP40は深鉢の胴部片である。TP31・TP37・TP40は, 同一個体と思われる。覆土上層では, 4・TP32・TP39が中央部から, TP35が東側から, TP37が東壁付近からそれぞれ出土している。覆土中層では, TP36・TP38が中央部から, TP31が東側からそれぞれ出土している。覆土下層では, TP34が北側から出土している。また, TP33・TP40が覆土中から出土している。

第24図 第35号土坑実測図

所見 時期は, 遺構の形態及び出土土器から判断して, 中期末葉と思われる。性格は不明である。



第25図 第35号土坑出土遺物実測図(1)



第26図 第35号土坑出土遺物実測図(2)

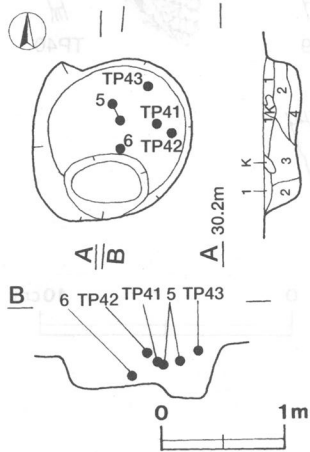
第35号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 4	深鉢 縄文土器	B(10.0)	口縁部から胴部の破片。波状口縁を呈する。内面の口唇直下には強い段をもつ。波頂部直下には「の」字状の隆帯が貼り付けられている。口縁部には円形刺突文が施されている。胴部には、無節縄文Lが施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	5% P L 17
TP 31	深鉢 縄文土器	B(12.8)	口縁部から胴部の破片。波状口縁を呈する。微隆起線間には単節縄文L Rが施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	10% P L 18
TP 32	深鉢 縄文土器	B(7.5)	口縁部の破片。双頭の小波状口縁を呈する。単節縄文R Lを地文とする。口唇部直下から微隆起線が施されている。	砂粒・長石・石英・ 小礫 にぶい赤褐色 普通	5%
TP 33	深鉢 縄文土器	B(4.5)	口縁部の破片。口唇部断面は平坦で、口唇直下には横位の沈線文が施されている。口縁部には、単節縄文R Lが施されている。	砂粒・石英・白色粒子 明黄褐色 普通	5%
第26図 TP 34	深鉢 縄文土器	B(17.3)	胴部の破片。単節縄文L Rを地文とする。隆帯と磨り消し帯が施されている。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 にぶい黄褐色 普通	10%
第25図 TP 35	深鉢 縄文土器	B(8.2)	胴部の破片。単節縄文L Rを地文とし、磨り消し帯が施されている。	砂粒・白色粒子・ 赤色粒子 橙色 普通	5%
TP 36	深鉢 縄文土器	B(6.4)	口縁部の破片。波状口縁を呈する。口縁部は沈線によって区画され、区画内には単節縄文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 褐色 普通	5%
第26図 TP 37	深鉢 縄文土器	B(7.6)	胴部の破片。単節縄文L Rを地文とし、沈線文と微隆起線によって区画されている。微隆起線間は磨り消されている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	5%
第25図 TP 38	深鉢 縄文土器	B(12.4)	胴部の破片。無節縄文を地文とし、微隆起線によって区画されている。微隆起線間は磨り消されている。	砂粒・石英・白色粒子 橙色 普通	5%
第26図 TP 39	深鉢 縄文土器	B(8.4)	胴部の破片。無節縄文Lと単節縄文R Lが施されている。	砂粒・長石・白色粒子 橙色 普通	5%
TP 40	深鉢 縄文土器	B(7.4)	胴部の破片。単節縄文L Rを地文とする。沈線文により区画され、微隆起線と磨り消しが施されている。	砂粒・石英・白色 粒子・小礫 橙色 普通	5%

第56号土坑 (第27図)

位置 調査区の南部, D 4 f5区。

規模と形状 径1.4mほどの円形で、深さ38cmである。底面は平坦で、南側は二段に掘り込まれている。壁は外傾して立ち上がる。



第27図 第56号土坑実測図

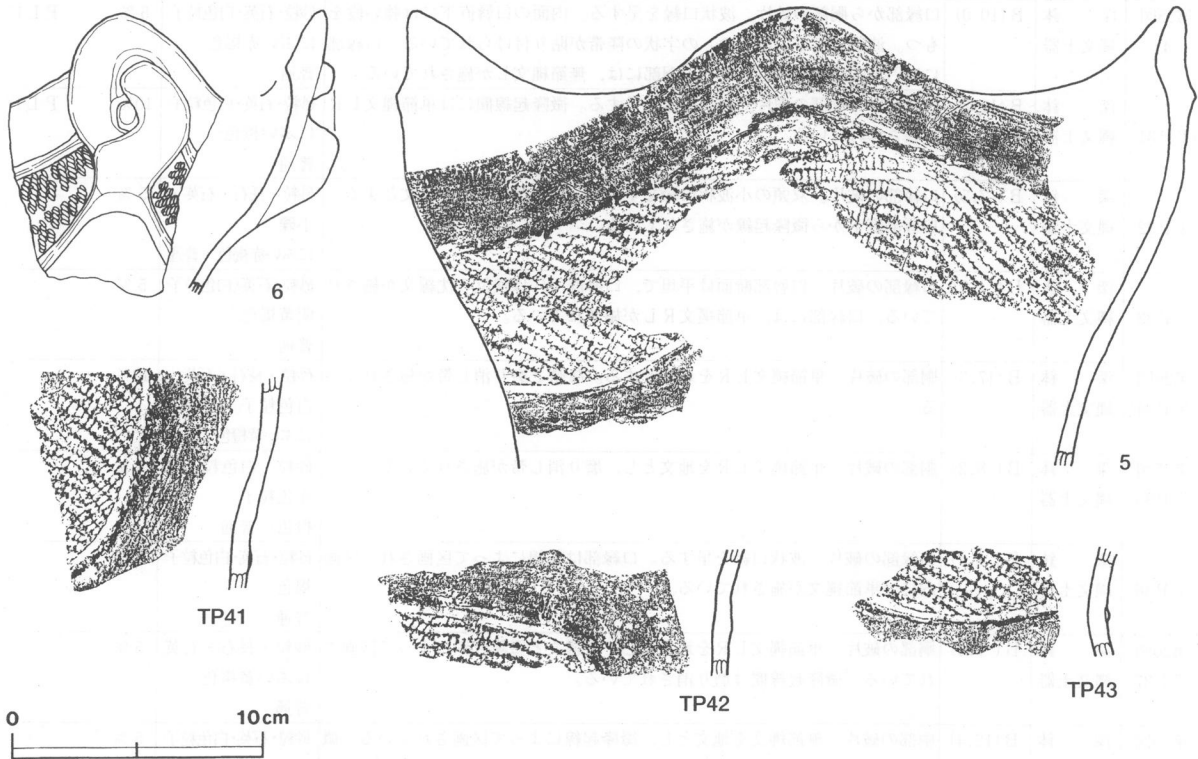
覆土 4層からなる。不自然な堆積状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ガラス質粒子・赤色粒子少量, ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・ガラス質粒子少量, 赤色粒子微量
- 3 黒褐色 ガラス質粒子・赤色粒子少量, ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ガラス質粒子・赤色粒子少量

遺物 縄文土器片9点, 礫2点が出土している。第28図5は深鉢の口縁部から胴部片, 6は深鉢の口縁部片, TP41~TP43は深鉢の胴部片である。TP42・TP43は同一個体と思われる。覆土上層では, 5が中央部から, TP41~TP43が東壁付近から出土している。覆土下層では, 6が中央部から出土している。

所見 時期は, 出土土器から判断して, 中期後葉(加曽利EIV式期)と思われる。



第28図 第56号土坑出土遺物実測図

第56号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 5	深鉢 縄文土器	A (30.8)	口縁部から胴部の破片。内面の口唇部直下には強い段をもつ。波状口縁を呈する。単節縄文LRを地文とし、沈線文と微隆起線によって区画されている。区画内は磨り消されている。	砂粒・石英・白色粒子・赤色粒子 にぶい橙色 普通	20%
		B (18.5)			
6	深鉢 縄文土器	B (11.3)	口縁部の破片。波状口縁の波頂部で、逆「の」の字状の隆帯を施している。口縁部には単節縄文LRが施されている。	砂粒・石英・白色粒子・赤色粒子・小礫 明黄褐色 普通	5% P L 17

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 TP41	深鉢 縄文土器	B(8.6)	胴部の破片。単節縄文LRを地文とする。沈線文により区画され、微隆帯と磨り消しが施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5%
TP42	深鉢 縄文土器	B(5.0)	胴部の破片。単節縄文LRを地文とする。沈線文により区画され、微隆起線と磨り消しが施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5%
TP43	深鉢 縄文土器	B(4.3)	胴部の破片。単節縄文が施されている。沈線文により区画され、微隆起線間を磨り消している。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5%

第168号土坑 (第29図)

位置 調査区の西部, C1b6区。

規模と形状 長径1.7m, 短径1.54mの楕円形で、深さ46cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-42°-E

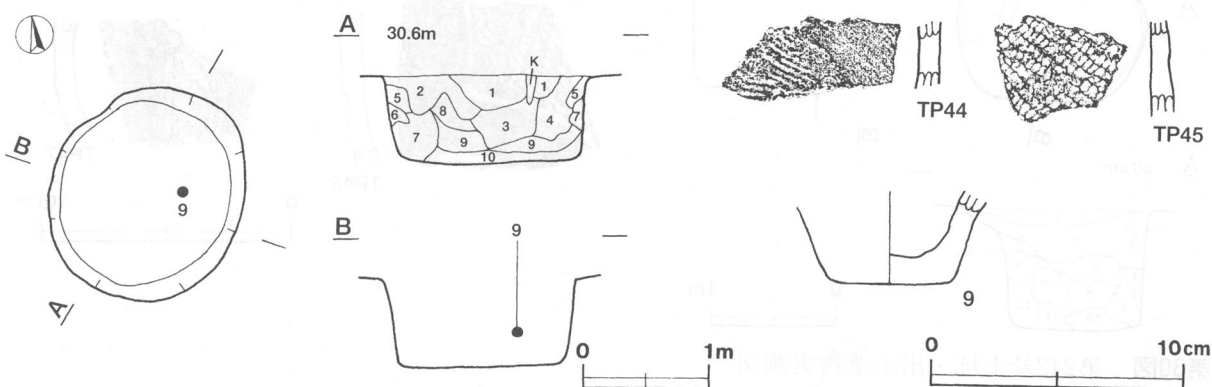
覆土 10層からなる。ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---|--------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量 | 10 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |

遺物 縄文土器片3点, 礫2点が出土している。第29図9は深鉢の底部片で、中央部の覆土中層から出土している。TP44・TP45は深鉢の胴部片で、覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から判断して、中期後葉(加曽利EIV式期)と思われる。



第29図 第168号土坑・出土遺物実測図

第168号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 9	深鉢 縄文土器	B(3.7) C 4.6	底部の破片。無文である。	砂粒・石英・白色 粒子・赤色粒子 橙色 普通	5%
TP44	深鉢 縄文土器	B(2.6)	胴部の破片。単節縄文LRと磨り消しが施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 TP45	深鉢 縄文土器	B(3.8)	胴部の破片。単節縄文LRを施している。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	5%

第242号土坑 (第30図)

位置 調査区の西部, C2b3区。

重複関係 上部を第15号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.56m, 短径1.2mの楕円形で, 深さ94cmである。底面は平坦で, 壁は直立する。

長径方向 N-82°-W

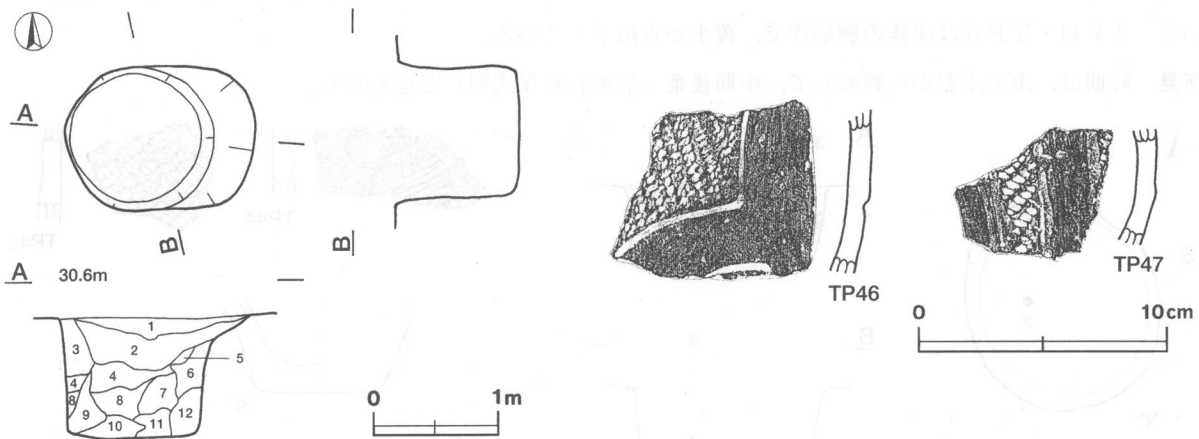
覆土 12層からなる。ブロック状の堆積状況から, 人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------------|--------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子少量 | 8 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子・鹿沼軽石粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・赤色粒子・鹿沼軽石粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量, 赤色粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック中量・ローム粒子少量, 炭化粒子・赤色粒子微量 | 10 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 鹿沼軽石粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 赤色粒子・鹿沼軽石粒子微量 | 11 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子・鹿沼軽石粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量 | 12 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子・鹿沼軽石粒子微量 | | |
| 7 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子・鹿沼軽石中ブロック微量 | | |

遺物 縄文土器片9点が出土している。第30図TP46・TP47は深鉢の胴部片で, 覆土中から出土している。

所見 時期は, 遺構の形態及び出土土器から判断して, 中期後葉と思われる。



第30図 第242号土坑・出土遺物実測図

第242号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 TP46	深鉢 縄文土器	B(6.5)	胴部の破片。縄文を地文とし, 沈線間を磨り消している。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	5%
TP47	深鉢 縄文土器	B(4.5)	胴部の破片。単節縄文RLを地文とし, 磨り消しが施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	5%

第243号土坑（第31図）

位置 調査区の西部，C 2 a3区。

重複関係 上部を第15号住居跡に，さらに北側上部を第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 径0.9mほどの円形で，深さ102cmである。底面は平坦で，壁は直立する。

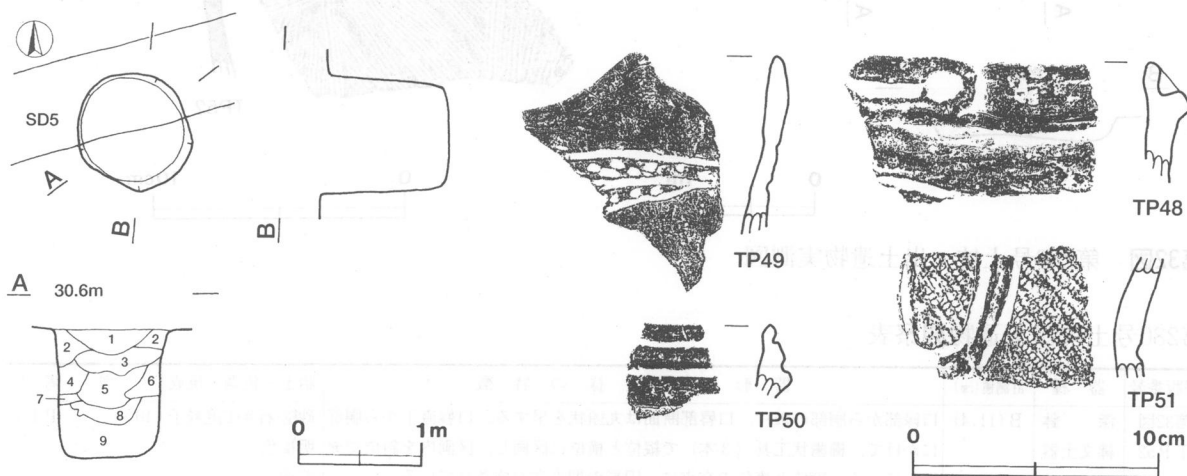
覆土 9層からなる。ブロック状の堆積状況から，人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・赤色粒子少量 | 5 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・赤色粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量 | 8 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| | | 9 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼軽石粒子微量 |

遺物 縄文土器片30点，礫1点が出土している。第31図TP48・TP49は深鉢の口縁部片，TP50は浅鉢の口縁部片，TP51は深鉢の胴部片である。いずれも覆土中から出土している。

所見 時期は，遺構の形態及び出土土器から判断して，後期前葉（称名寺式期）と思われる。



第31図 第243号土坑・出土遺物実測図

第243号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 TP48	深鉢 縄文土器	B(4.9)	口縁部の破片。口唇部断面は三角形を呈し，隆帯が一巡する。口唇部に太沈線文と，円形の刺突が施されている。	砂粒・長石・石英・小礫 橙色 普通	5% PL18
TP49	深鉢 縄文土器	B(7.2)	口縁部の破片。口唇部断面は丸頭状で，波状口縁を呈する。口縁部には横位の沈線文間に列点文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子にぶい 橙色 普通	5%
TP50	浅鉢 縄文土器	B(3.0)	口縁部の破片。口唇部断面は三角形を呈する。口唇直下には2本の沈線文が施されている。	砂粒・白色粒子・小礫 橙色 普通	5%
TP51	深鉢 縄文土器	B(5.0)	胴部の破片。単節縄文LRを地文に，太沈線文を施している。	砂粒・長石・石英・小礫 橙色 普通	5%

第280号土坑（第32図）

位置 調査区の北西部，B 2 j8区。

規模と形状 長径1.52m，短径1.15mの楕円形で，深さ28cmである。底面はやや凹凸で，壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-54°-W

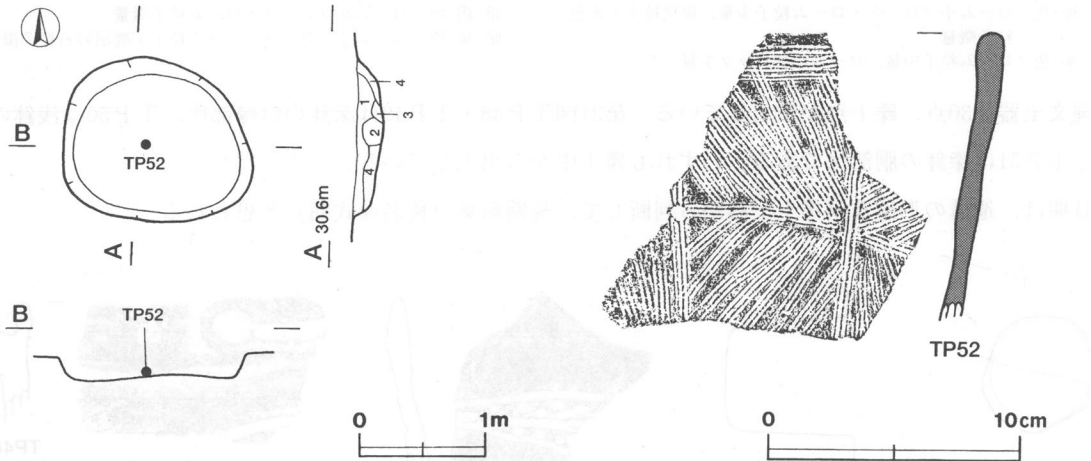
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 縄文土器片が1点出土している。第32図TP52は深鉢の口縁部から胴部片で、中央部の底面から出土している。

所見 時期は、遺構の形態及び出土土器から判断して、前期（黒浜式期）と思われる。



第32図 第280号土坑・出土遺物実測図

第280号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 TP52	深鉢 縄文土器	B(11.4)	口縁部から胴部の破片。口唇部断面は丸頭状を呈する。口唇直下から胴部にかけて、櫛歯状工具（3本）で縦位と横位に区画し、区画内を斜位で充填している。縦位と横位の交点に、円形の押点文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 明褐色 普通	10% P L 18

第329号土坑（第33図）

位置 調査区の北西部，C 2 a9区。

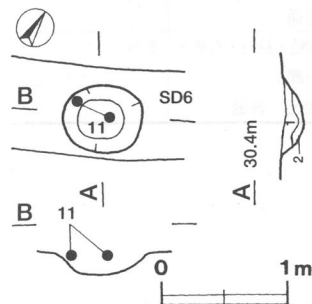
重複関係 上部を第6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 径0.6mほどの円形で、深さ14cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 2層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

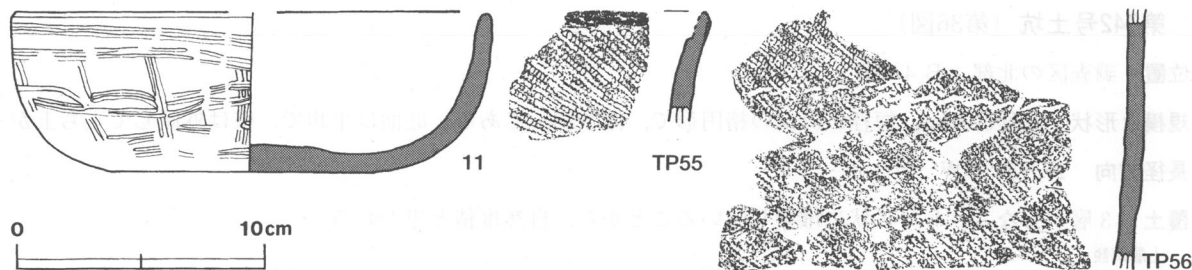
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量



遺物 縄文土器片15点が出土している。第34図の11は浅鉢の口縁部から底部片で、覆土中層から破片の状態出土している。TP55は深鉢の口縁部片，TP56は深鉢の胴部片で、いずれも覆土中から出土している。

所見 時期は、遺構の形態及び出土土器から判断して、前期（黒浜式期）と思われる。

第33図 第329号土坑実測図



第34図 第329号土坑出土遺物実測図

第329号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 11	浅鉢 縄文土器	A (19.0) B 6.5 C 10.5	口縁部から底部の破片。半截竹管による平行沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 にぶい黄橙色 普通	30% P L17
TP55	深鉢 縄文土器	B (4.5)	口縁部の破片。口唇部断面は丸みを帯び外傾する。口唇直下から、単節縄文RLが施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	10%
TP56	深鉢 縄文土器	B (10.6)	胴部の破片。結節縄文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 暗褐色 普通	5%

第341号土坑 (第35図)

位置 調査区の西部，B 4 b3区。

規模と形状 長径1.9m，短径1.2mの楕円形で，深さ20cmである。底面は平坦で，壁は緩やかに立ち上がる。

長径方向 N-89°-E

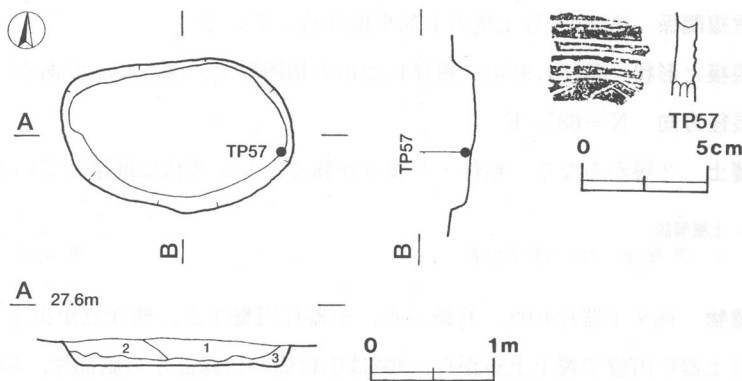
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，今市軽石粒子・七本桜軽石粒子・白色粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子・白色粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子・白色粒子微量

遺物 縄文土器片1点が出土している。第35図のTP57は尖底土器の胴部片で，東壁際の底面から出土している。

所見 時期は，遺構の形態及び出土土器から判断して，早期（田戸下層式期）と思われる。



第35図 第341号土坑・出土遺物実測図

第341号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 TP57	尖底土器 縄文土器	B (3.6)	胴部の破片。横位と斜位の沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 赤色粒子 灰褐色 普通	5%

第342号土坑（第36図）

位置 調査区の北部，B 4 b2区。

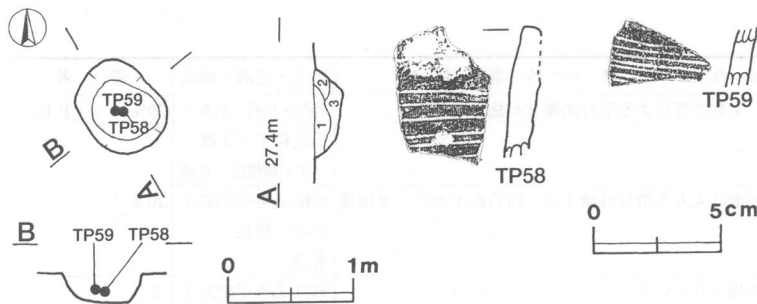
規模と形状 長径0.78m，短径0.61mの楕円形で，深さ23cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-30°-W

覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック微量 | 3 褐色 | ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子・白色粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子・白色粒子微量 | | |



遺物 縄文土器片2点が出土している。第36図のTP58は尖底土器の口縁部片，TP59は尖底土器の胴部片で，それぞれ中央部の下層から出土している。

所見 時期は，遺構の形態及び出土土器から判断して，早期（田戸下層式期）と思われる。

第36図 第342号土坑・出土遺物実測図

第342号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 TP58	尖底土器 縄文土器	B(5.5)	有段口縁部の破片。口唇部断面は角頭状を呈する。口縁部には沈線文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	5%
TP59	尖底土器 縄文土器	B(2.5)	胴部の破片。横位の細沈線文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	5%

第550A号土坑（第37図）

位置 調査区の中央部，C 4 f2区。

重複関係 第550B号土坑の上部を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.95m，短径1.22mの楕円形で，深さ43cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-68°-E

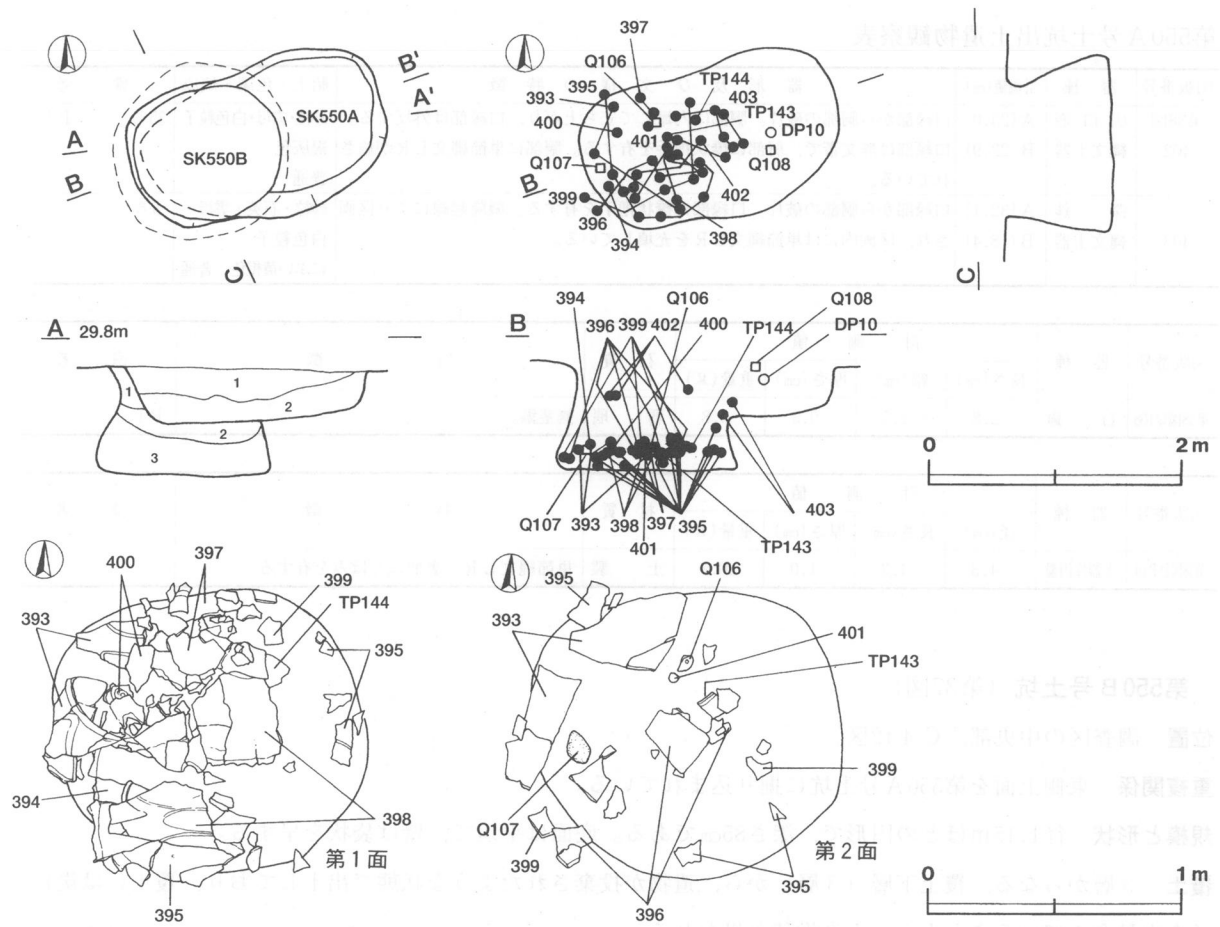
覆土 2層からなる。粘性・しまりが強く，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と思われる。

土層解説

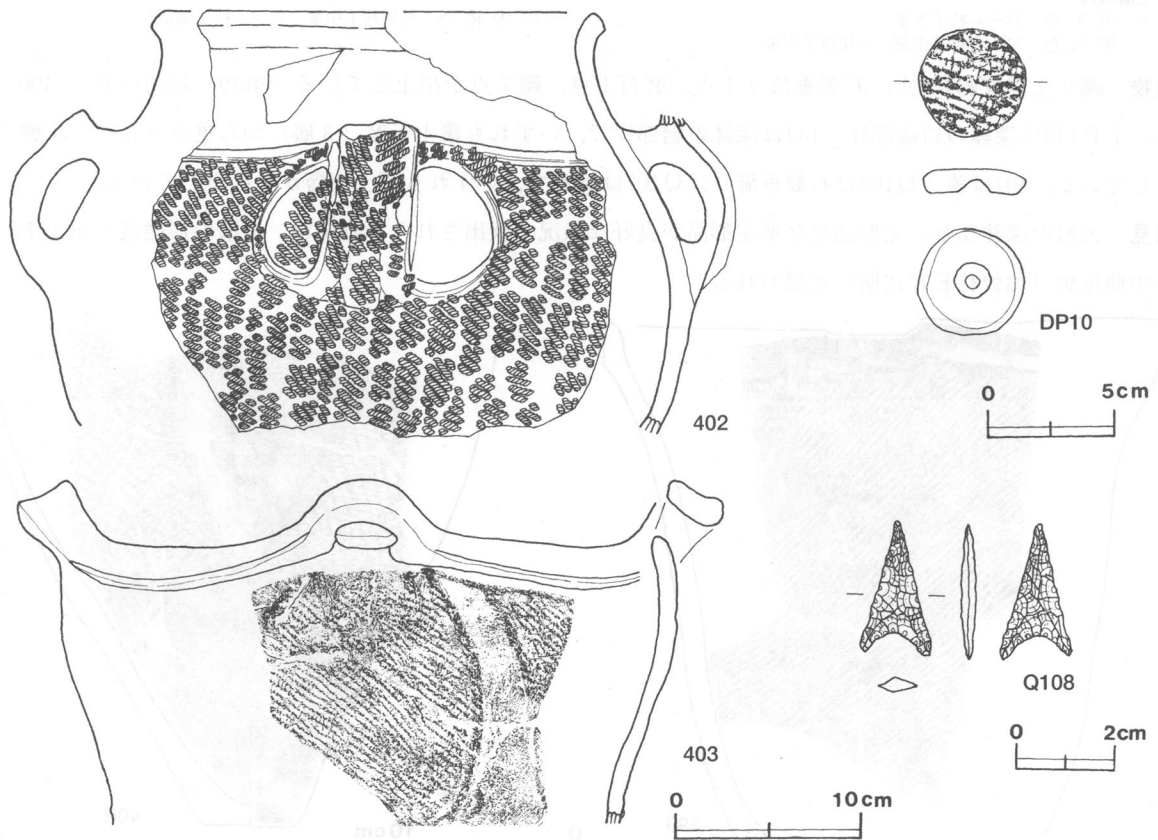
- | | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 2 黒褐色 | ローム粒子微量 |
|-------|---------|-------|---------|

遺物 縄文土器片40点，石鏃1点，土器片円盤1点，礫5点が出土している。第38図のQ108は石鏃，DP10は土器片円盤で覆土上層から，402は広口壺の口縁部から胴部片，403は深鉢の口縁部から胴部片が覆土下層から出土している。

所見 時期は，遺構の形態及び出土土器から中期後葉（加曾利EIV式期）と思われる。



第37图 第550A·B号土坑实测图



第38图 第550A号土坑出土遗物实测图

第550A号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 402	広口壺 縄文土器	A [23.0] B (22.9)	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は無文帯で、肩部に橋状把手を有する。胴部に単節縄文LRが施されている。	砂粒・雲母・白色粒子 褐灰色 普通	35% P L 18
403	深鉢 縄文土器	A [32.1] B (18.4)	口縁部から胴部の破片。口縁部に橋状把手を有する。微隆起線により区画され、区画内には単節縄文LRを充填している。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい黄橙色 普通	5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第38図Q108	石 鏃	2.8	1.5	0.3	0.8	瑪 璃	無茎鏃。	P L 18

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		径(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第38図DP10	土器片円盤	4.3	4.3	1.0	20.7	土 製	単節縄文LR。裏面にくぼみを有する。	

第550B号土坑 (第37図)

位置 調査区の中央部、C 4 f2区。

重複関係 東側上面を第550A号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 径1.15mほどの円形で、深さ85cmである。底面は平坦で、壁は袋状を呈する。

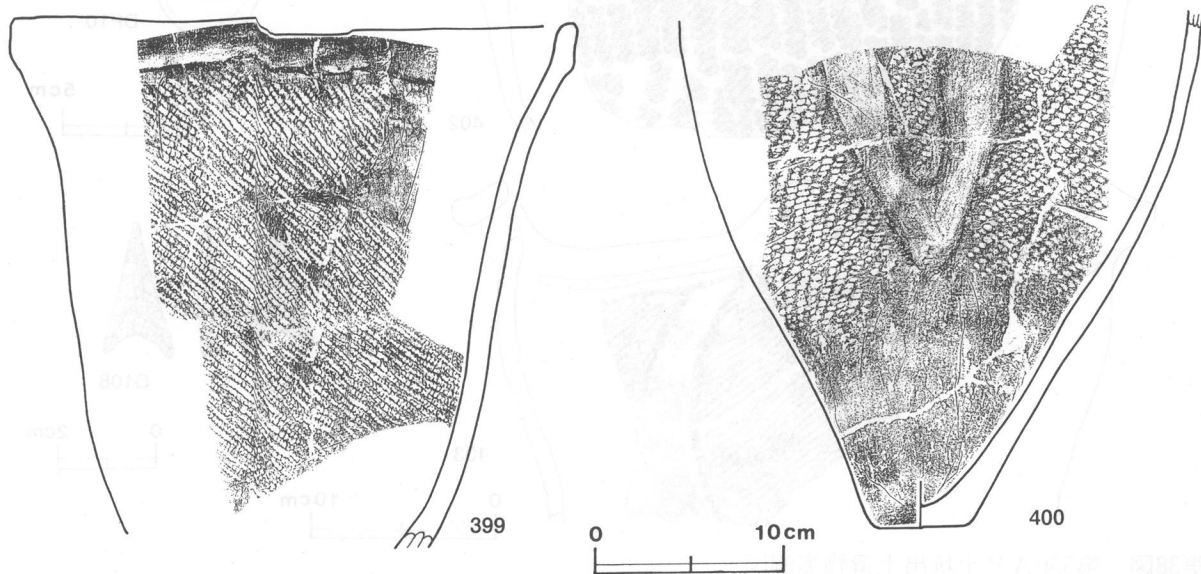
覆土 3層からなる。覆土下層(3層)から、遺物が投棄されたような状態で出土しており、覆土には炭化粒子を中量含んでいることから、人為堆積と思われる。

土層解説

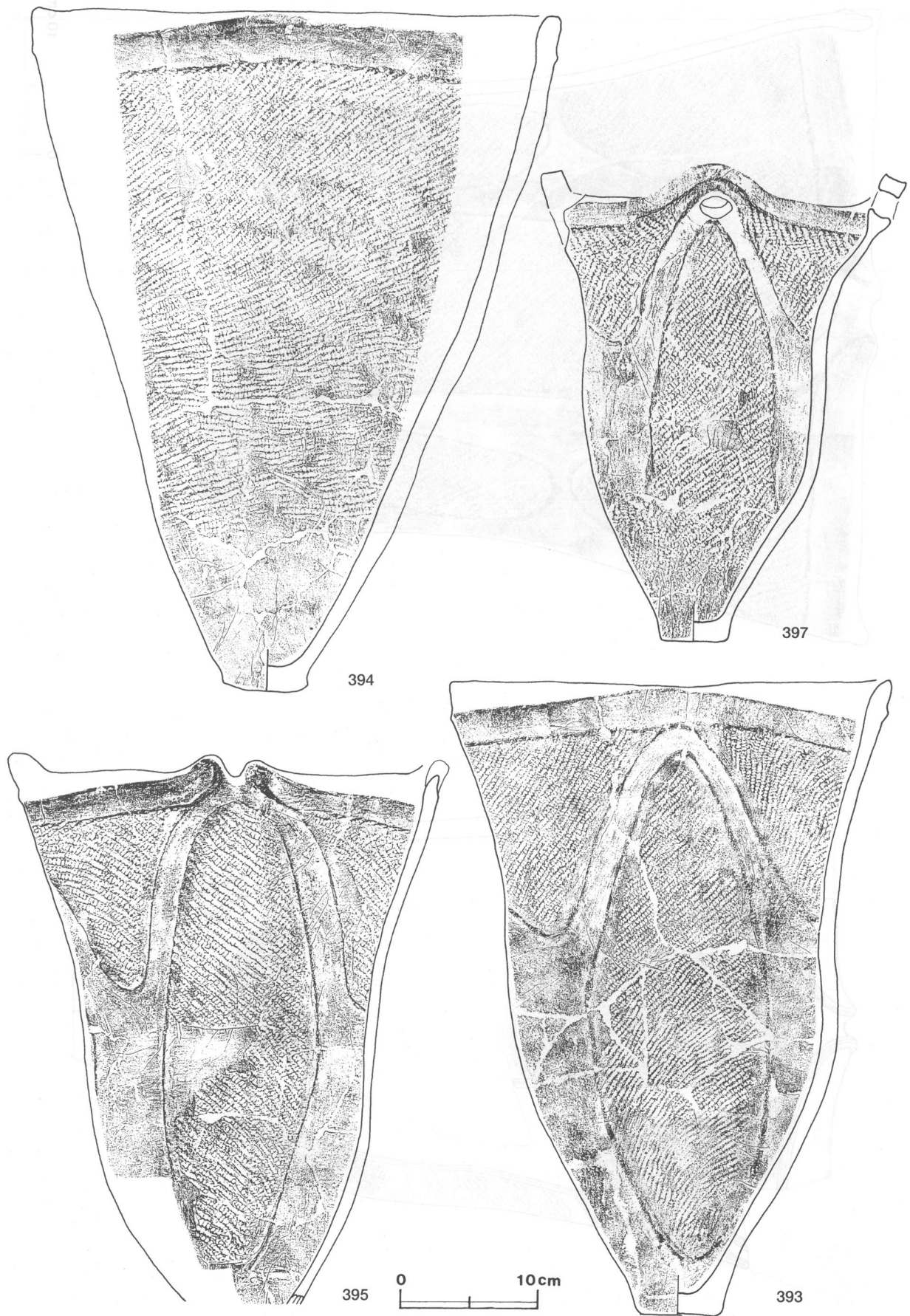
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子微量

遺物 縄文土器片約100点、石製垂飾り1点、磨石1点、礫7点が出土している。第39～42図の393～400は深鉢、TP143は深鉢の口縁部片、144は深鉢の胴部片で、いずれも覆土下層(3層)から重なり合った状態で出土している。401は蓋、Q106は石製垂飾り、Q107は磨石で、いずれも覆土下層から出土している。

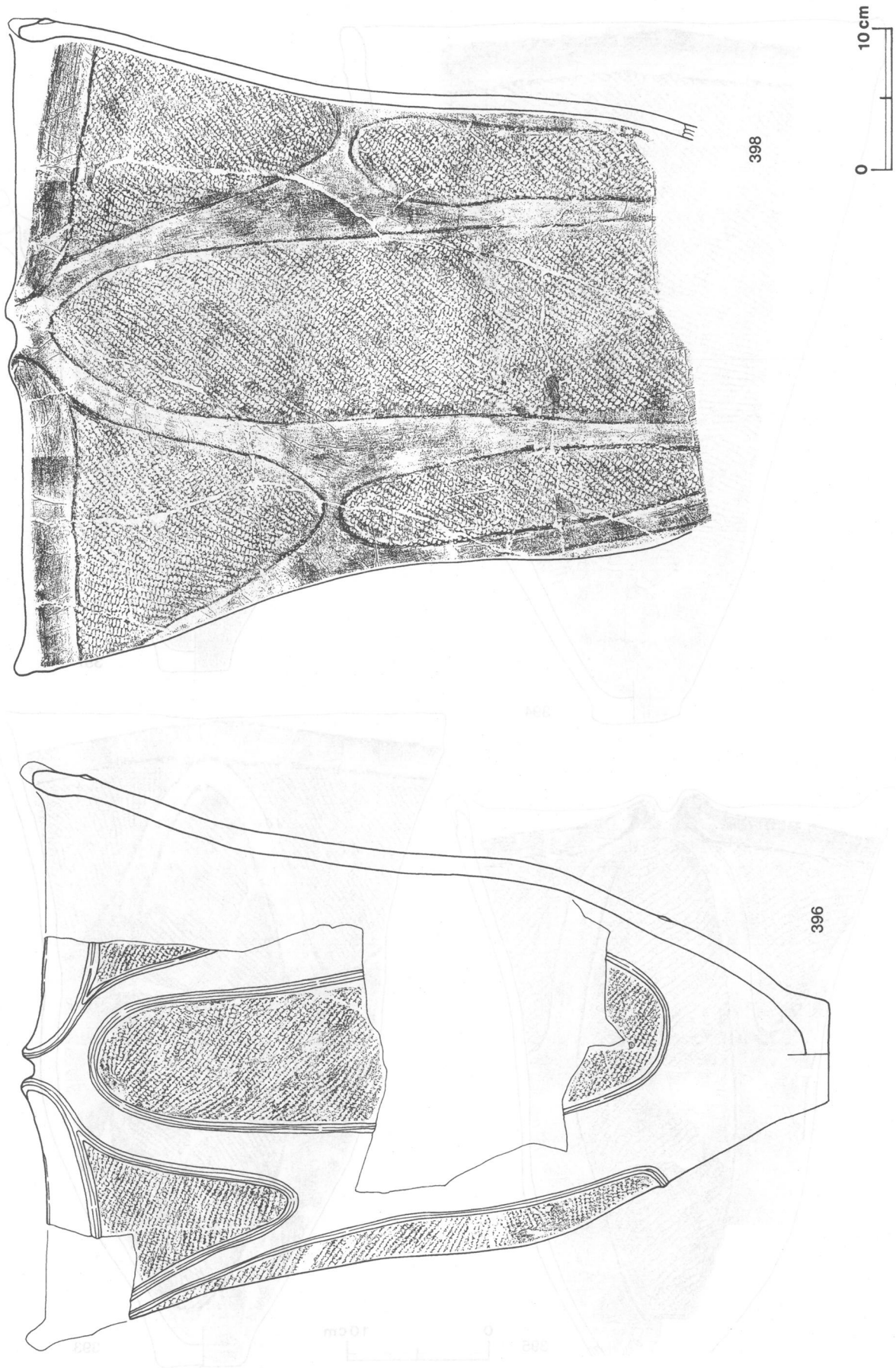
所見 大形の深鉢など、完形品及び準完形品が良好な状況で検出された。時期は、遺構の形態及び出土土器から中期後葉(加曾利EIV式期)と思われる。



第39図 第550B号土坑出土遺物実測図(1)

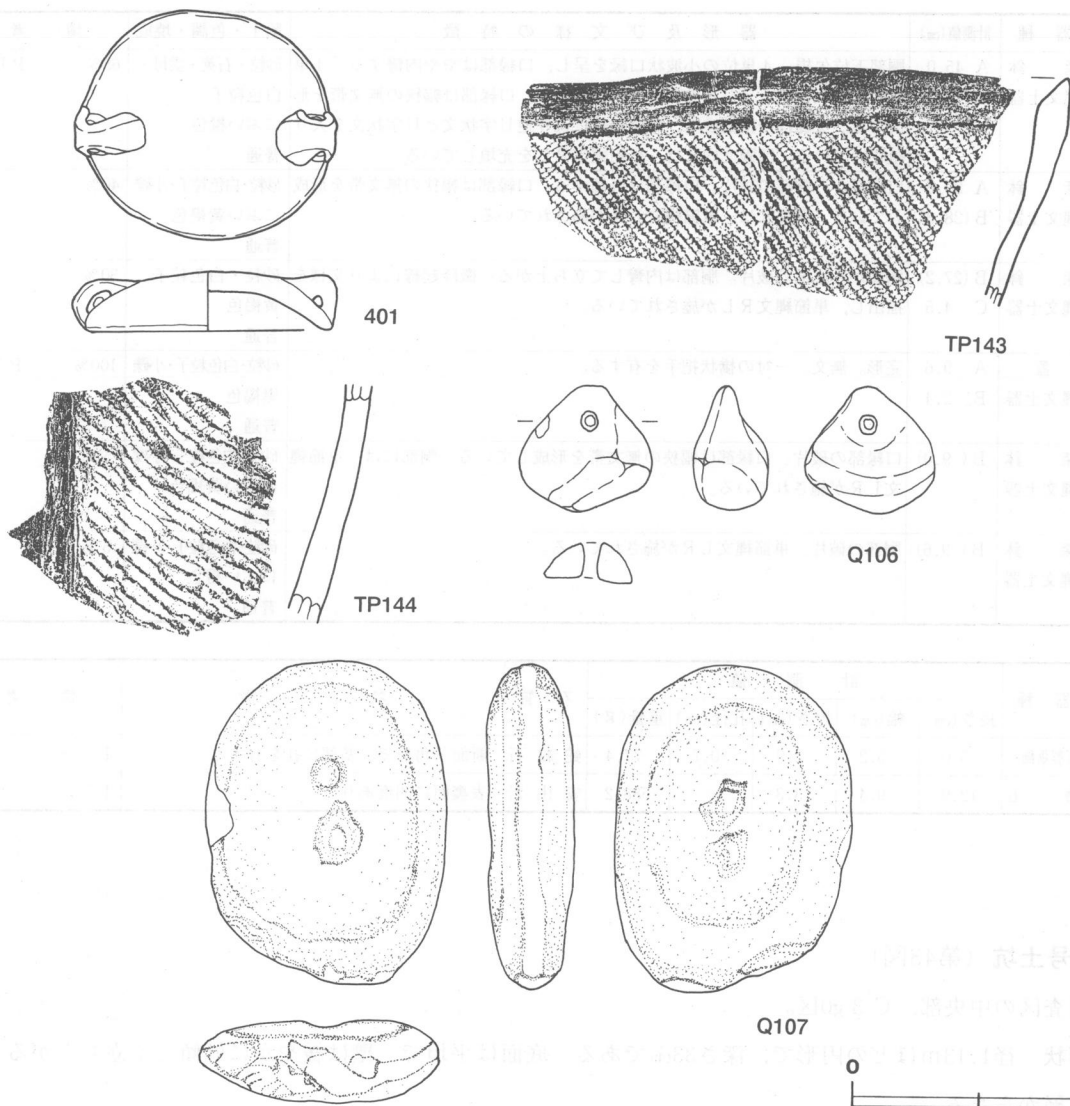


第40图 第550B号土坑出土遗物实测图(2)



第41图 第550B号土坑出土遗物实测图(3)

上海博物馆藏 上海博物馆藏 图0000



第42図 第550B号土坑出土遺物実測図(4)

第550B号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 393	深鉢 縄文土器	A 32.1	口縁部一部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。文様は一帯構成で、微隆起線により逆U字状文とU字状文を入り組ませている。区画文内には、単節縄文RLを充填している。	砂粒・白色粒子・小礫 橙色 普通	95% P L 17
		B 46.3			
		C 5.5			
394	深鉢 縄文土器	A 38.3	胴部一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は幅狭の無文帯を形成し、微隆起線により区画されている。胴部には、単節縄文LRが施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい黄橙色 普通	90% P L 17
		B 50.0			
		C 6.6			
395	深鉢 縄文土器	A 31.2	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。4単位の小波状口縁を呈し、波頂部は双頭となる。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。文様は一帯構成で、微隆起線により逆U字状文とU字状文を入り組ませている。区画文内には、単節縄文LRを充填している。	砂粒・白色粒子・小礫 にぶい黄橙色 普通	80% P L 17
		B (39.5)			
第41図 396	深鉢 縄文土器	A [39.7]	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。4単位の小波状口縁を呈し、波頂部は双頭となる。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。文様は一帯構成で、微隆起線により逆U字状文とU字状文を入り組ませている。区画文内には、単節縄文LRを充填している。	砂粒・雲母・白色粒子 にぶい橙色 普通	60% P L 17
		B 56.7			
		C 7.0			
第40図 397	深鉢 縄文土器	A [23.6]	口縁部一部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。4単位の小波状口縁を呈し、波頂部に橋状把手を有する。文様は一帯構成で、微隆起線により逆U字状文とU字状文を入り組ませている。区画文内には、単節縄文RLを充填している。	砂粒・白色粒子・小礫 にぶい黄橙色 普通	80% P L 17
		B 34.1			
		C 4.2			

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 398	深鉢 縄文土器	A 45.0 B (49.2)	胴部下位欠損。4単位の小波状口縁を呈し、口縁部はやや内彎する。4単位の小波状口縁を呈し、波頂部は双頭となる。口縁部は幅狭の無文帯を形成する。文様は二帯構成で、微隆起線により逆U字状文とU字状文を入り組ませている。区画文内には、単節縄文RLを充填している。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい橙色 普通	65% P L 17
第39図 399	深鉢 縄文土器	A 29.6 B (28.3)	口縁部から胴部の破片。口縁部は外傾する。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。胴部には、単節縄文LRが施されている。	砂粒・白色粒子・小礫 にぶい黄褐色 普通	40%
400	深鉢 縄文土器	B (27.2) C 4.5	胴部から底部の破片。胴部は内彎して立ち上がる。微隆起線により文様を描出し、単節縄文RLが施されている。	砂粒・白色粒子 黄褐色 普通	30%
第42図 401	蓋 縄文土器	A 9.6 B 2.4	完形。無文。一对の橋状把手を有する。	砂粒・白色粒子・小礫 黒褐色 普通	100% P L 17
T P 143	深鉢 縄文土器	B (9.0)	口縁部の破片。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。胴部には、単節縄文LRが施されている。	砂粒・白色粒子・小礫 にぶい黄褐色 普通	5%
T P 144	深鉢 縄文土器	B (9.6)	胴部の破片。単節縄文LRが施されている。	砂粒・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	5%

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第42図Q106	石製垂飾り	5.0	5.2	2.9	0.7	77.4	蛇紋石	断面三角形で、基部に孔を有する。	P L 18
Q107	磨石	12.9	9.4	3.3	—	588.2	安山岩	表裏面に凹痕あり。	P L 18

第555号土坑 (第43図)

位置 調査区の中央部、C 3 g0区。

規模と形状 径1.13mほどの円形で、深さ33cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土 2層からなる。

土層解説

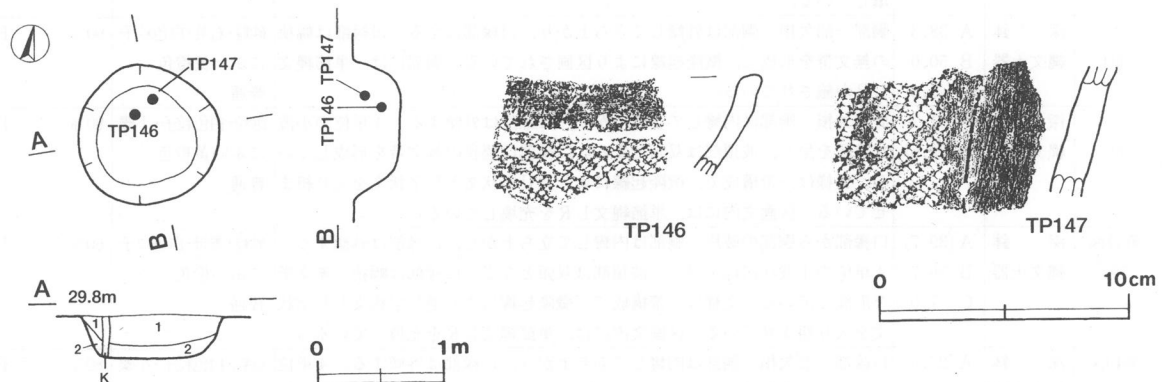
1 黒褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 縄文土器片21点が出土している。第43図のT P 146は深鉢の口縁部片、T P 147は深鉢の胴部片である。

T P 147は覆土中層から、P 146は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態及び出土土器から中期後葉（加曾利E IV式期）と思われる。



第43図 第555号土坑・出土遺物実測図

第555号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 TP146	深鉢 縄文土器	B(4.0)	口縁部の破片。口唇部直下に沈線を巡らし、単節縄文LRが施されている。	砂粒・白色粒子 にぶい褐色 普通	5%
TP147	深鉢 縄文土器	B(5.2)	胴部の破片。単節縄文RLが施されている。	砂粒・石英・雲母・ 小礫 黒褐色 普通	5%

第888号土坑 (第44図)

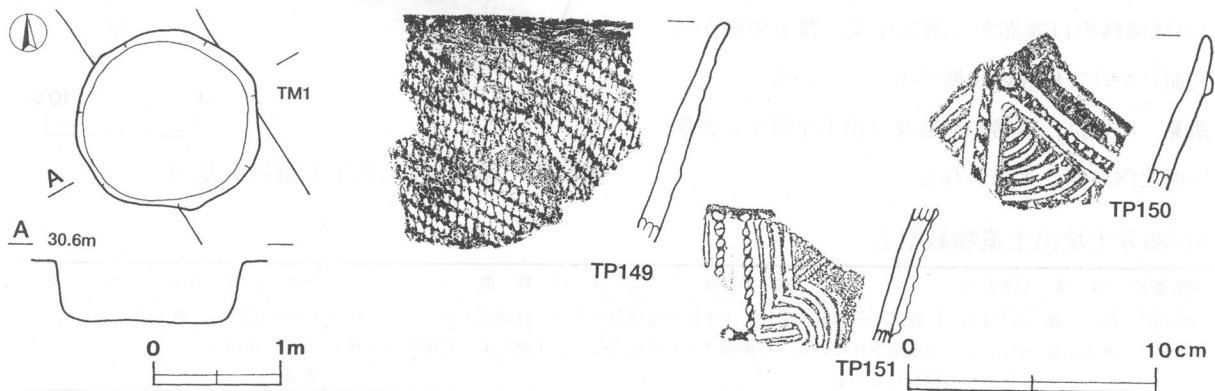
位置 調査区の北西部、C1d4区。

重複関係 上面を第1号方形周溝墓に掘り込まれている。

規模と形状 径1.48mほどの円形で、深さ54cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

遺物 縄文土器片57点、土師器片52点が出土している。上面は第1号方形周溝墓に掘り込まれているが、底面近くの覆土から破片の状態出土している。第44図のTP149～TP151は深鉢の口縁部片、TP151は深鉢の胴部片である。

所見 本跡の上面を、第1号方形周溝墓に掘り込まれており、覆土の堆積状況は不明である。時期は、出土土器から後期(堀之内式期)と思われる。



第44図 第888号土坑・出土遺物実測図

第888号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 TP149	深鉢 縄文土器	B(8.8)	口縁部の破片。口唇部内面は内削ぎ状を呈する。単節縄文RLが施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	5%
TP150	深鉢 縄文土器	B(6.3)	口縁部の破片。波状口縁を呈する。隆帯に沿って沈線文が施され、区画内には弧線文を充填している。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	5% PL18
TP151	深鉢 縄文土器	B(5.5)	胴部の破片。隆帯に沿って4条の沈線文が施されている。	砂粒・長石・小礫 にぶい褐色 普通	5% PL18

第889号土坑（第45図）

位置 調査区の北西部，C 1 d6区。

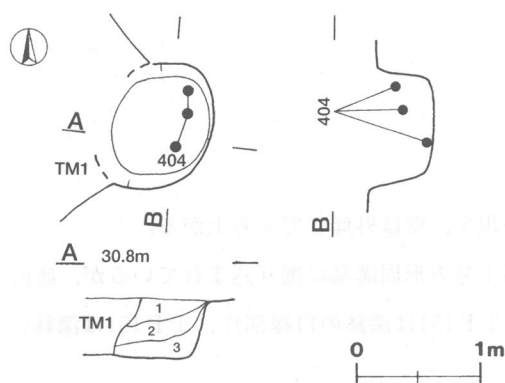
重複関係 西側を第1号方形周溝墓に掘り込まれている。

規模と形状 径1 mほどの円形で，深さ52cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がる。

覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と思われる。

土層解説

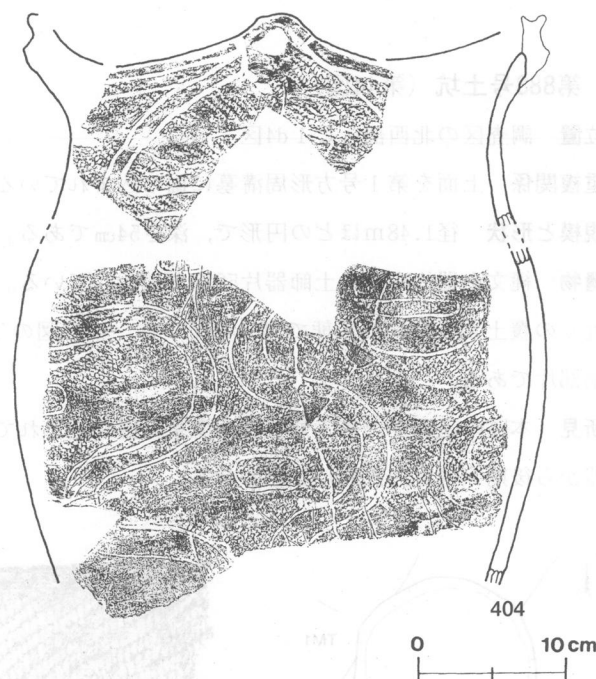
- | | | | |
|--------|------------------|-------|------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・白色粒子少量 | 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | | |



第45図 第889号土坑実測図

遺物 縄文土器片2点が出土している。第46図の404は深鉢の口縁部から胴部片で，覆土中層から底面にかけて破片の状態が出土している。

所見 時期は，遺構の形態及び出土土器から後期（堀之内式期）と思われる。



第46図 第889号土坑出土遺物実測図

第889号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 404	深鉢 縄文土器	A (34.6) B (38.7)	口縁部から胴部の破片。4単位の波頂部をもつ。口唇部上面と直下に押点文が施されている。単節縄文RLを地文とし，沈線により曲線状の文様を描出している。	砂粒・白色粒子・小礫 にぶい黄橙色 普通	15%

(3) 陥し穴

第1号陥し穴（SK 304）（第47図）

位置 調査区の北部，A 4 i1区。

規模と形状 長径1.6m，短径1.1mの楕円形で，深さ82cmである。底面は平坦で，横断面はU字状を呈している。壁は直立し，北西壁はオーバーハングしたあと上位で外傾する。

長径方向 N-62°-W

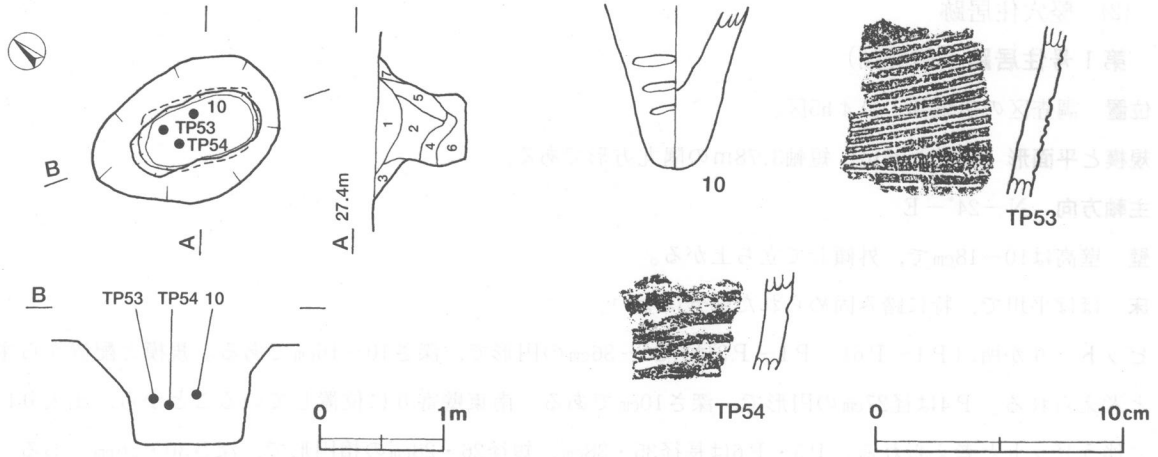
覆土 7層からなる。不自然な堆積状況から，人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒色 | 白色粒子・赤色粒子少量 | 5 暗褐色 | 白色粒子中量，ローム粒子少量，赤色粒子微量 |
| 2 黒色 | 白色粒子中量，赤色粒子少量 | 6 暗褐色 | 白色粒子中量，ローム粒子少量，赤色粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・白色粒子少量，赤色粒子微量 | 7 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・白色粒子少量 |
| 4 暗褐色 | 白色粒子中量，赤色粒子微量 | | |

遺物 縄文土器片 3点, 礫 2点が出土している。第47図10は尖底土器の尖底部片, TP53・TP54は尖底土器の胴部片である。いずれも覆土中層から出土している。

所見 本跡は, 東斜面の下段に位置し, 長径が傾斜に対して平行に構築されている。時期は, 遺構の形態及び出土土器から判断して, 早期(田戸下層式期)と思われる。



第47図 第1号陥し穴・出土遺物実測図

第1号陥し穴出土遺物観察表 (SK304)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 10	尖底土器 縄文土器	B(6.6)	尖底部の破片。天狗の鼻状を呈する。横位の沈線文が施されている。	砂粒・白色粒子・ 赤色粒子 にぶい橙色 普通	5%
TP53	尖底土器 縄文土器	B(7.1)	胴部の破片。横位の細沈線文と貝殻腹縁文が施されている。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい黄橙色 普通	5%
TP54	尖底土器 縄文土器	B(4.1)	胴部の破片。横位の太沈線文が施されている。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい黄橙色 普通	5%

第2号陥し穴 (SK363) (第48図)

位置 調査区の北部, B3d7区。

規模と形状 長径1.23m, 短径0.68mの楕円形で, 深さ110cmである。壁はほぼ直立する。底面は平坦で, 横断面はU字状を呈している。木杭を立てた痕と思われる小ピットが1か所確認された。小ピットは, 径10cmの円形で, 底面からの深さ21cmである。

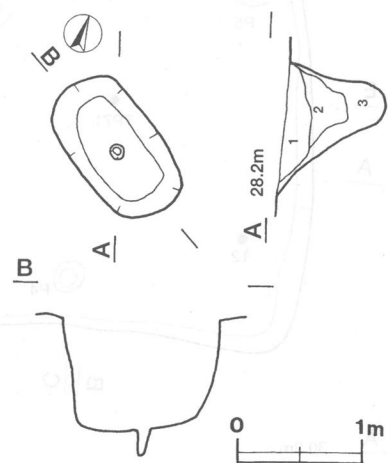
長径方向 N-59°-W

覆土 3層からなる。不自然な堆積状況から, 人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒色 白色粒子多量, 赤色粒子少量
- 2 黒色 白色粒子多量, 赤色粒子微量
- 3 暗褐色 白色粒子多量, ローム小ブロック・赤色粒子中量

所見 本跡は, 北東斜面の中段に位置し, 長径が傾斜に対してほぼ平行に構築されている。出土遺物がなく, 時期は不明であるが, 遺構の形態から判断して, 縄文時代と思われる。



第48図 第2号陥し穴実測図

3 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡10軒が確認された。以下、確認された遺構の特徴や遺物について記載する。

(2) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第49図)

位置 調査区の南東部, D 4 h5区。

規模と平面形 長軸3.95m, 短軸3.78mの隅丸方形である。

主軸方向 N-24°-E

壁 壁高は10~18cmで, 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 特に踏み固められた部分はない。

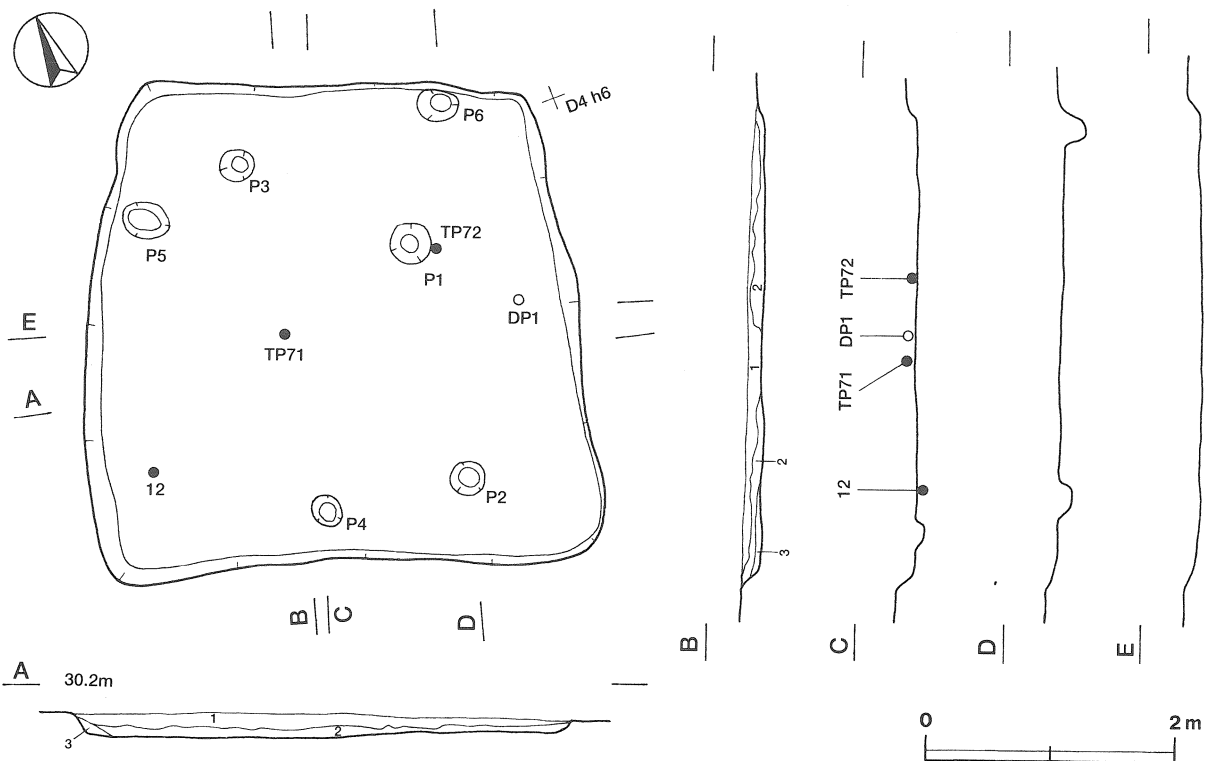
ピット 6か所 (P1~P6)。P1~P3は径26~36cmの円形で, 深さ10~16cmである。規模と配置から支柱穴と考えられる。P4は径27cmの円形で, 深さ10cmである。南東壁寄りに位置していることから, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5・P6は長径35・38cm, 短径26・28cmの楕円形で, 深さ30・36cmである。性格は不明である。

覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ガラス質粒子少量, 赤色粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子少量, ガラス質粒子・赤色粒子微量
- 3 暗褐色 今市軽石粒子・七本桜軽石粒子中量, ローム粒子・赤色粒子微量

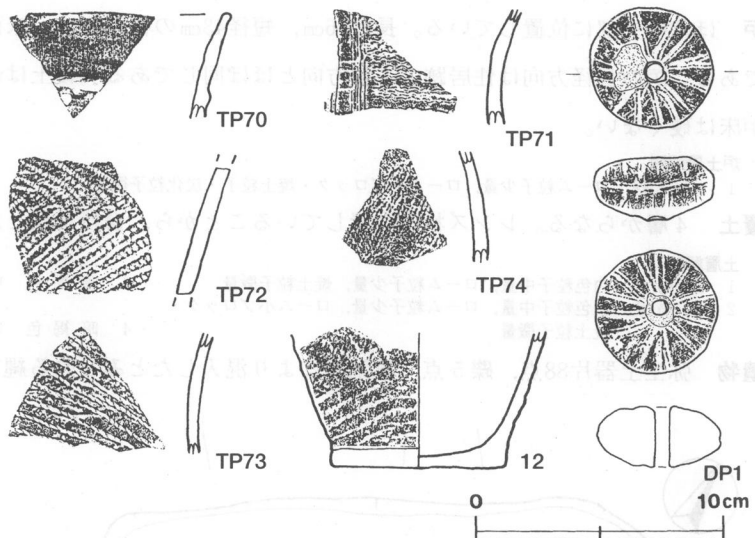
遺物 弥生土器片12点, 土製品1点 (紡錘車), 礫2点, 混入したとみられる縄文土器片6点, 土師器片1点が出土している。第50図12・TP70~TP74は弥生土器である。床直上では, TP71の広口壺の頸部片が中央部から, DP1の紡錘車が東壁際の中央部から斜位の状態でそれぞれ出土している。床面では, 12の広口壺の



第49図 第1号住居跡実測図

底部片が南西コーナー付近から横位の状態で、TP72の広口壺の胴部片がP1の東側からそれぞれ出土している。その他、TP70の広口壺の口縁部片、TP73・TP74の広口壺の胴部片が覆土からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土土器から判断して後期後半と思われる。



第50図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 12	広口壺 弥生土器	B(5.5) C 7.1	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 橙色 普通	10% P L 18
TP70	広口壺 弥生土器	B(4.3)	口縁部の破片。口縁部は無文。頸部との境には、隆帯が巡っている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5% 外面煤付着
TP71	広口壺 弥生土器	B(4.9)	頸部の破片。櫛歯状工具(3本)による縦区画により分割され、区画内には波状文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 灰黄褐色 普通	5%
TP72	広口壺 弥生土器	B(5.5)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・長石・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%
TP73	広口壺 弥生土器	B(4.9)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%
TP74	広口壺 弥生土器	B(4.5)	胴部の破片。胴部には、附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第50図DP1	紡錘車	5.0	2.5	0.6	47.4	土製	断面は楕円形で、2本単位の平行線文が、放射状に施されている。	P L 19

第16号住居跡(第51図)

位置 調査区の北西部、C3c1区。

規模と平面形 長軸4.85m、短軸3.88mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-63°-W

壁 壁高は24~31cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、踏み固めた部分はない。

ピット 4か所(P1~P4)。P1~P3は径42~50cmの円形、P4は、長径46cm、短径38cmの楕円形で、深さは32~64cmである。規模と配置から主柱穴と考えられる。

炉 ほぼ中央部に位置している。長径66cm, 短径43cmの楕円形で、床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は住居跡の主軸方向とほぼ同じである。覆土は焼土粒子や炭化粒子を微量含む程度で、炉床は硬くない。

炉土層解説

1 にぶい赤褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

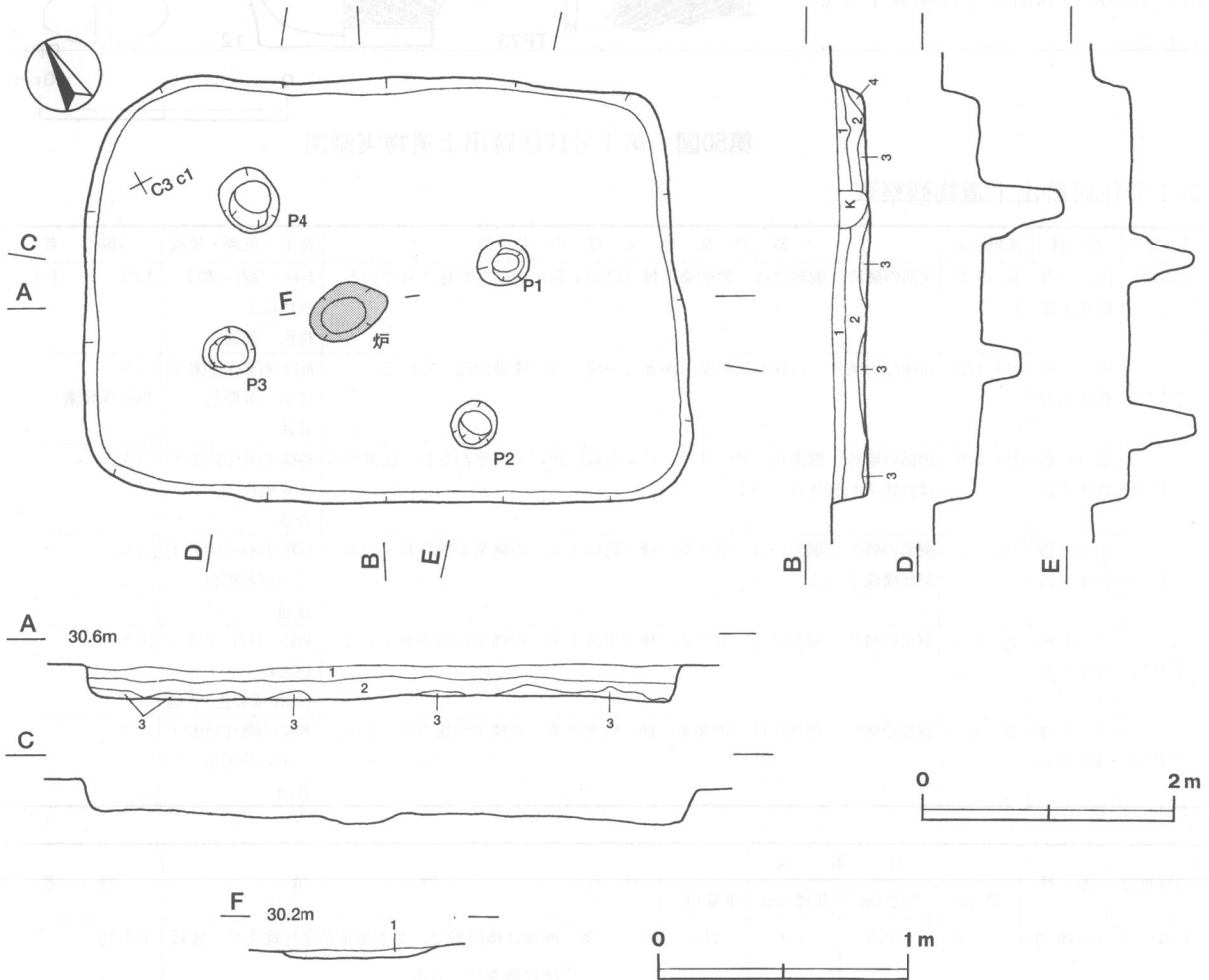
1 黒褐色 白色粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量

2 黒褐色 白色粒子中量, ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子微量

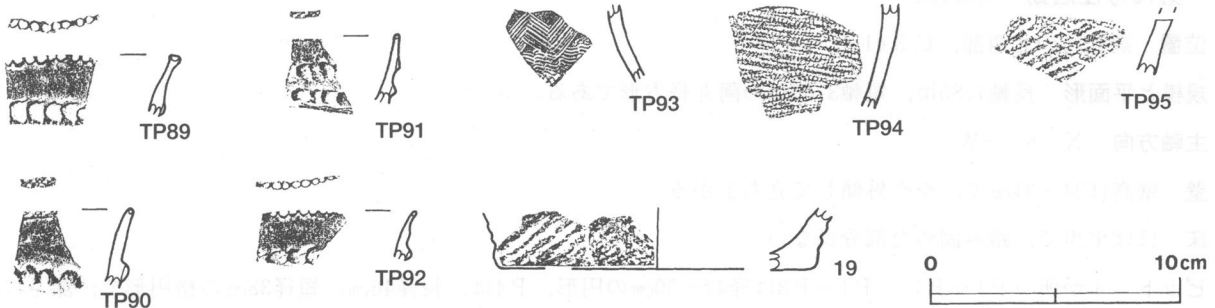
3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, 白色粒子微量

4 暗褐色 ローム粒子中量, 白色粒子微量

遺物 弥生土器片88点, 礫5点, 攪乱等により混入したとみられる縄文土器片3点, 土師器片9点が出土して



第51図 第16号住居跡実測図



第52図 第16号住居跡出土遺物実測図

いる。出土土器のほとんどは細片である。第52図19・T P 89～T P 95は弥生土器である。19は広口壺の底部片、T P 89～T P 92は口縁部片、T P 93は頸部片、T P 94・T P 95は胴部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土土器から考えて後期後半の可能性が高いと思われる。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52図 19	広口壺 弥生土器	B(2.5) C[12.6]	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部は摩滅し不明。	砂粒・雲母・白色粒子・赤色粒子・針状鉱物にぶい橙色 普通	5%
T P 89	広口壺 弥生土器	B(2.5)	口縁部の破片。口唇部には、棒状工具による押圧が施されている。	砂粒・白色粒子 橙色 普通	5%
T P 90	広口壺 弥生土器	B(3.2)	口縁部の破片。口唇部には、縄文が施されている。口縁部は無文。口縁部と頸部の境には、隆帯が巡っている。	砂粒・雲母・白色粒子 灰黄色 普通	5%
T P 91	広口壺 弥生土器	B(2.9)	口縁部の破片。口唇部には、縄文が施されている。口縁部は無文。口縁部と頸部の境には、隆帯が巡っている。	砂粒・雲母・白色粒子 灰黄色 普通	5%
T P 92	広口壺 弥生土器	B(2.0)	口縁部の破片。口唇部には、棒状工具による押圧が施されている。口縁部は無文。口縁部と頸部の境には、隆帯が巡っている。	砂粒・石英・白色粒子 橙色 普通	5%
T P 93	広口壺 弥生土器	B(3.0)	頸部の破片。楕円状工具による波状文を施文した後に、山形文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 橙色 普通	5%
T P 94	広口壺 弥生土器	B(4.2)	胴部の破片。胴部には、附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫にぶい黄褐色 普通	5%
T P 95	広口壺 弥生土器	B(2.2)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子・小礫 灰黄褐色 普通	5%

第17号住居跡(第53図)

位置 調査区の中央部、C 2 c7区。

規模と平面形 長径6.8m、短径6.75mの円形である。

壁 壁高は15～29cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほほ平坦で、出入口施設から炉に向かう付近が、よく踏み固められている。

ピット 7か所(P1～P7)。P1～P3は径42～50cmの円形、P4は長径48cm、短径42cmの楕円形で、深さは37～66cmである。規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は径40cmの円形で、深さ22cmである。南壁寄りに位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は長径54・63cm、短径48・55cmの楕円形で、深さ10・22cmである。性格は不明である。

炉 中央部に位置し、長径90cm、短径80cmの楕円形で、床面を6cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は、火熱を受けて赤変している。炉石は、炉内の南側に位置し、炉の長径と直交するように据えられている。炉石の上面は加熱を受けて赤変している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、ローム粒子・焼土中ブロック微量

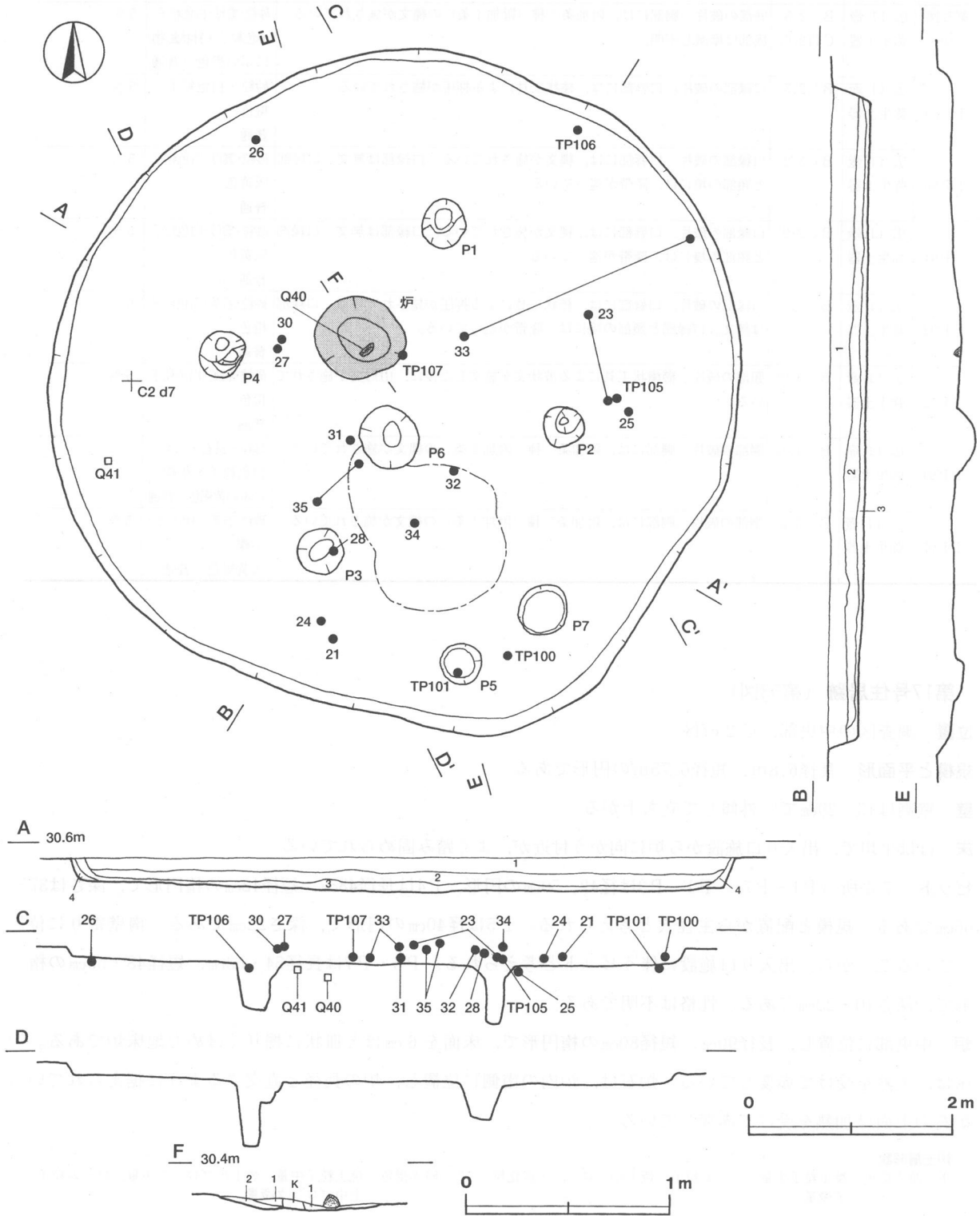
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

- 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

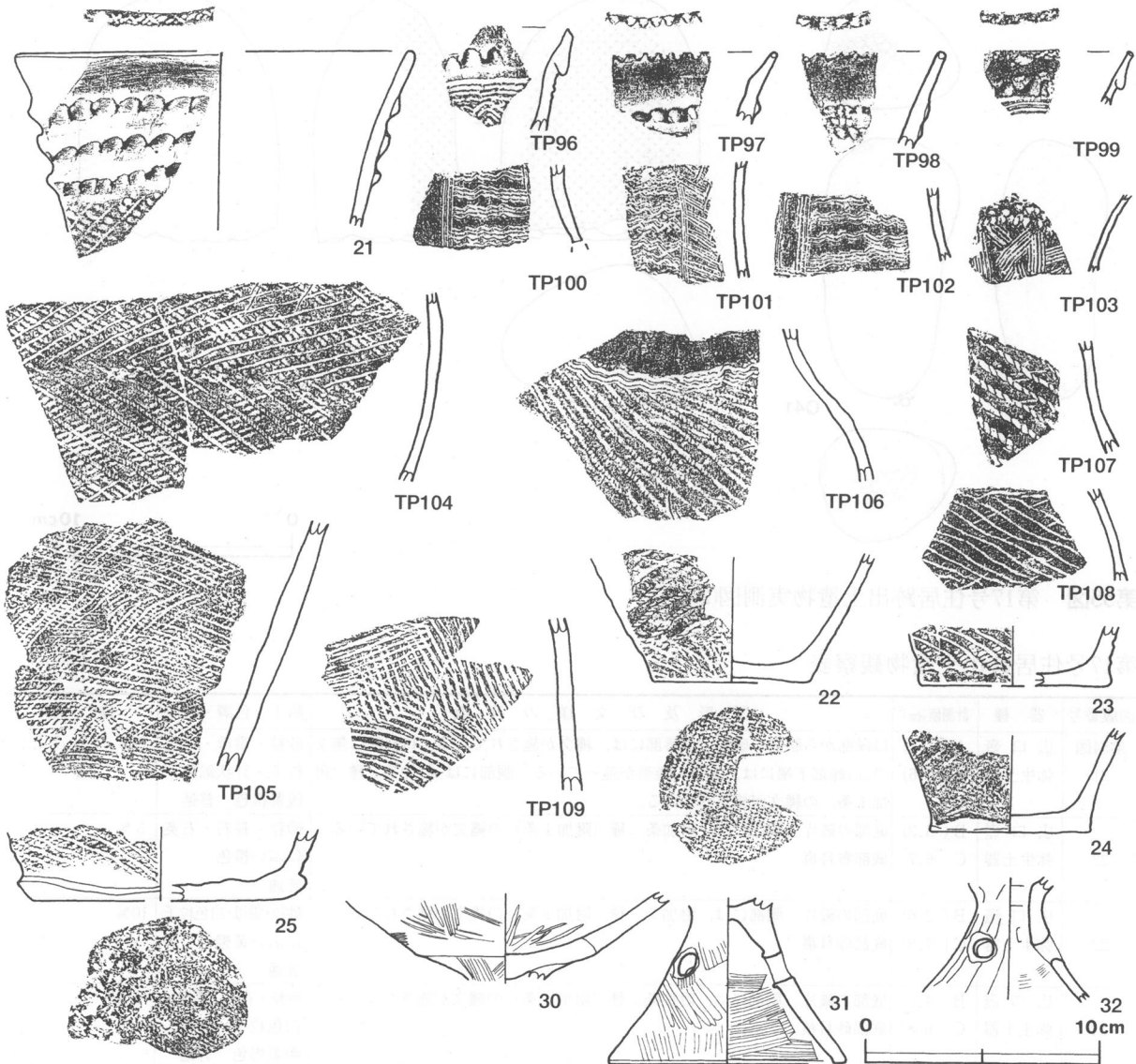
遺物 弥生土器片243点, 土師器片237点, 石器1点(敲石), 炉石1点, 礫18点, 混入したとみられる縄文土器片2点が出土している。遺物は全体に散在し, 覆土上層から下層にかけては土師器が, 下層から床面にかけては弥生土器が出土している。第54・55図21~28・TP96~TP109は弥生土器, 30~35は土師器である。覆土上層では, 27の広口壺の底部片が炉の西側から, 28の広口壺の底部片がP3の上面から, 30の高坏の坏部片



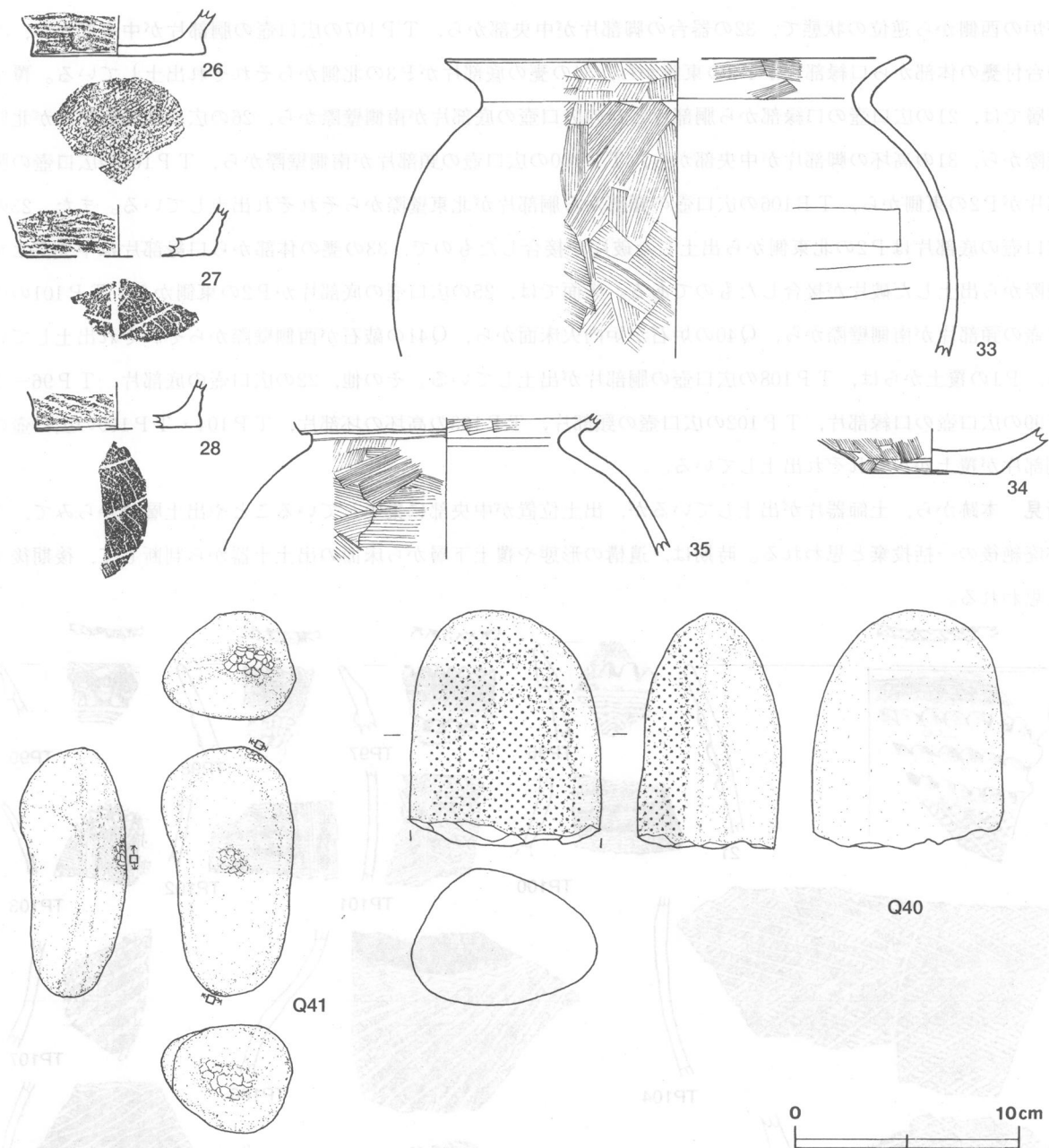
第53図 第17号住居跡実測図

が炉の西側から逆位の状態で、32の器台の脚部片が中央部から、TP107の広口壺の胴部片が中央部から、35の台付甕の体部から口縁部片がP3の東側から、34の甕の底部片がP3の北側からそれぞれ出土している。覆土下層では、21の広口壺の口縁部から胴部片と24の広口壺の底部片が南側壁際から、26の広口壺の底部片が北側壁際から、31の高杯の脚部片が中央部から、TP100の広口壺の頸部片が南側壁際から、TP105の広口壺の胴部片がP2の東側から、TP106の広口壺の頸部から胴部片が北東壁際からそれぞれ出土している。また、23の広口壺の底部片はP2の北東側から出土した破片が接合したもので、33の甕の体部から口縁部片は中央部と東壁際から出土した破片が接合したものである。床面では、25の広口壺の底部片がP2の東側から、TP101の広口壺の頸部片が南側壁際から、Q40の炉石が炉内火床面から、Q41の敲石が西側壁際からそれぞれ出土している。P1の覆土からは、TP108の広口壺の胴部片が出土している。その他、22の広口壺の底部片、TP96~TP99の広口壺の口縁部片、TP102の広口壺の頸部片、TP103の高杯の坏部片、TP104・TP109の広口壺の胴部片が覆土からそれぞれ出土している。

所見 本跡から、土師器片が出土しているが、出土位置が中央部に集中していることや出土層位からみて、本跡廃絶後の一括投棄と思われる。時期は、遺構の形態や覆土下層から床面の出土土器から判断して、後期後半と思われる。



第54図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第55図 第17号住居跡出土遺物実測図(2)

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 21	広口壺 弥生土器	A(17.2) B(7.6)	口縁部から胴部の破片。口唇部には、縄文が施されている。口縁部は無文で、口縁部下端には、3条の隆帯が巡っている。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・雲母・白色 粒子・針状鉱物 浅黄橙色 普通	5% P L 18
22	広口壺 弥生土器	B(5.3) C 6.7	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部布目痕。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5%
23	広口壺 弥生土器	B(2.6) C[7.8]	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部砂目痕。	砂粒・雲母・白色粒子 にぶい黄橙色 普通	10%
24	広口壺 弥生土器	B(4.2) C 6.8	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部砂目痕。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子・小礫 明黄褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 25	広口壺 弥生土器	B(3.1) C(10.6)	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部の縁の一部が焼成前につぶされた状態であり、靱圧痕や藁の繊維痕がある。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 明黄褐色 普通	5% 内面剥離
第55図 26	広口壺 弥生土器	B(1.9) C(7.8)	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部布目痕。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5% 外面煤付着
27	広口壺 弥生土器	B(2.3) C(8.3)	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい黄褐色 普通	5%
28	広口壺 弥生土器	B(2.1) C(7.2)	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい黄褐色 普通	5%
第54図 TP96	広口壺 弥生土器	B(4.4)	口縁部の破片。複合口縁を呈し、口縁部下端には、隆帯が巡っている。頸部には、櫛歯状工具による横走文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 小礫 にぶい褐色 普通	5%
TP97	広口壺 弥生土器	B(3.0)	口縁部の破片。口唇部には、棒状工具による押圧が施されている。口縁部は無文。口縁部下端には、隆帯が巡っている。	砂粒・雲母・白色 粒子・赤色粒子 橙色 普通	5%
TP98	広口壺 弥生土器	B(4.2)	口縁部の破片。口唇部には、縄文が施されている。口縁部は無文。口縁部下端には、隆帯が巡っている。	砂粒・白色粒子・ 赤色粒子 にぶい褐色 普通	5%
TP99	広口壺 弥生土器	B(2.3)	口縁部の破片。複合口縁を呈し、口縁部下端には、隆帯が巡っている。頸部には、櫛歯状工具による横走文が施されている。	砂粒・白色粒子 灰褐色 普通	5%
TP100	広口壺 弥生土器	B(3.4)	頸部の破片。櫛歯状工具(3本)による縦区画により分割され、区画内には波状文が施されている。	砂粒・雲母・白色粒子 灰黄褐色 普通	5%
TP101	広口壺 弥生土器	B(5.2)	頸部の破片。櫛歯状工具(3本)による縦区画により分割され、区画内には波状文と斜行文が施されている。	砂粒・雲母・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5% 外面煤付着
TP102	広口壺 弥生土器	B(3.4)	頸部の破片。櫛歯状工具(3本)による縦区画により分割され、区画内には波状文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい黄褐色 普通	5%
TP103	高坏 弥生土器	B(3.4)	坏部の破片。櫛歯状工具(5本)による山形文と、棒状工具による刺突文が施されている。	砂粒・雲母・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%
TP104	広口壺 弥生土器	B(8.2)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 明黄褐色 普通	10%
TP105	広口壺 弥生土器	B(10.7)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・長石・石英・ 雲母・小礫 にぶい黄褐色 普通	5%
TP106	広口壺 弥生土器	B(6.4)	頸部から胴部の破片。頸部は無文で、胴部との境に櫛歯状工具(4本)による波状文が巡っている。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい橙色 普通	5% 外面煤付着
TP107	広口壺 弥生土器	B(4.9)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%
TP108	広口壺 弥生土器	B(4.0)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	5%
TP109	広口壺 弥生土器	B(7.4)	胴部の破片。胴部には、撚り糸文が格子目状に施されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい橙色 普通	5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 30	高坏 土師器	B(3.9)	坏部の破片。坏は下位に稜をもち外傾して立ち上がる。脚部との接合はソケット式。	坏部外面ハケ目調整後、ヘラ磨き、内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 橙色 普通	20%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 31	高坏 土師器	B(7.1) D 10.1 E 6.6	脚部の破片。脚部はラッパ状に開き、中位に3孔が空けられている。	脚部外面斜位のハケ目調整後、斜位のヘラ磨き、内面横位のハケ目調整。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	40%
32	器台 土師器	B(5.3) E(4.6)	脚部の破片。脚部はラッパ状に開き、中位に3孔が空けられている。器受部中央部に単孔がある。	脚部外面ヘラナデ、内面斜位のハケ目調整後、ナデ。	砂粒・長石・雲母・ 小礫 にぶい橙色 普通	15%
第55図 33	甕 土師器	A[20.8] B(13.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面斜位のハケ目調整、内面横位のハケ目調整。体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 黒褐色 普通	20%
34	甕 土師器	B(2.0) C 5.8	底部の破片。やや突出した平底。	底部・体部外面斜位のハケ目調整。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 にぶい赤褐色 普通	10%
35	台付甕 土師器	B(6.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はS字状を呈し、端部は欠損し不明。	口縁部外面横ナデ、内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	10%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第55図Q40	炉石	(10.6)	8.5	6.0	(790.5)	安山岩	断面形はかまぼこ状を呈し、上面は加熱を受け赤変している。一部に煤付着。	
Q41	敲石	11.1	6.0	4.8	397.6	安山岩	平面は不整楕円形を呈し、端部及び中央部に敲打痕が残る。	

第20号住居跡（第56図）

位置 調査区の北西部，B 2 j9区。

重複関係 北側を東西に第7号溝に，南側を東西に第5号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.79m，短軸4.65mの隅丸方形である。

主軸方向 N-84°-E

壁 壁高は15～26cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほほ平坦で，小さな凹凸がみられる。

ピット 8か所（P1～P8）。P1・P3・P4は径25～37cmの円形，P2は長径36cm，短径30cmの楕円形で，深さは8～28cmである。規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は長径46cm，短径39cmの楕円形で，深さ19cmである。西壁寄りに位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P8は径25～30cmの円形，P7は長径24cm，短径20cmの楕円形で，深さは19～65cmである。位置的に補助柱穴と思われる。

炉 中央部に位置している。長径65cm，短径60cmの楕円形で，床面を9cm掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は住居跡の主軸方向と直交する。覆土は焼土粒子や炭化粒子を少量含む程度で，炉床は硬くない。

炉土層解説

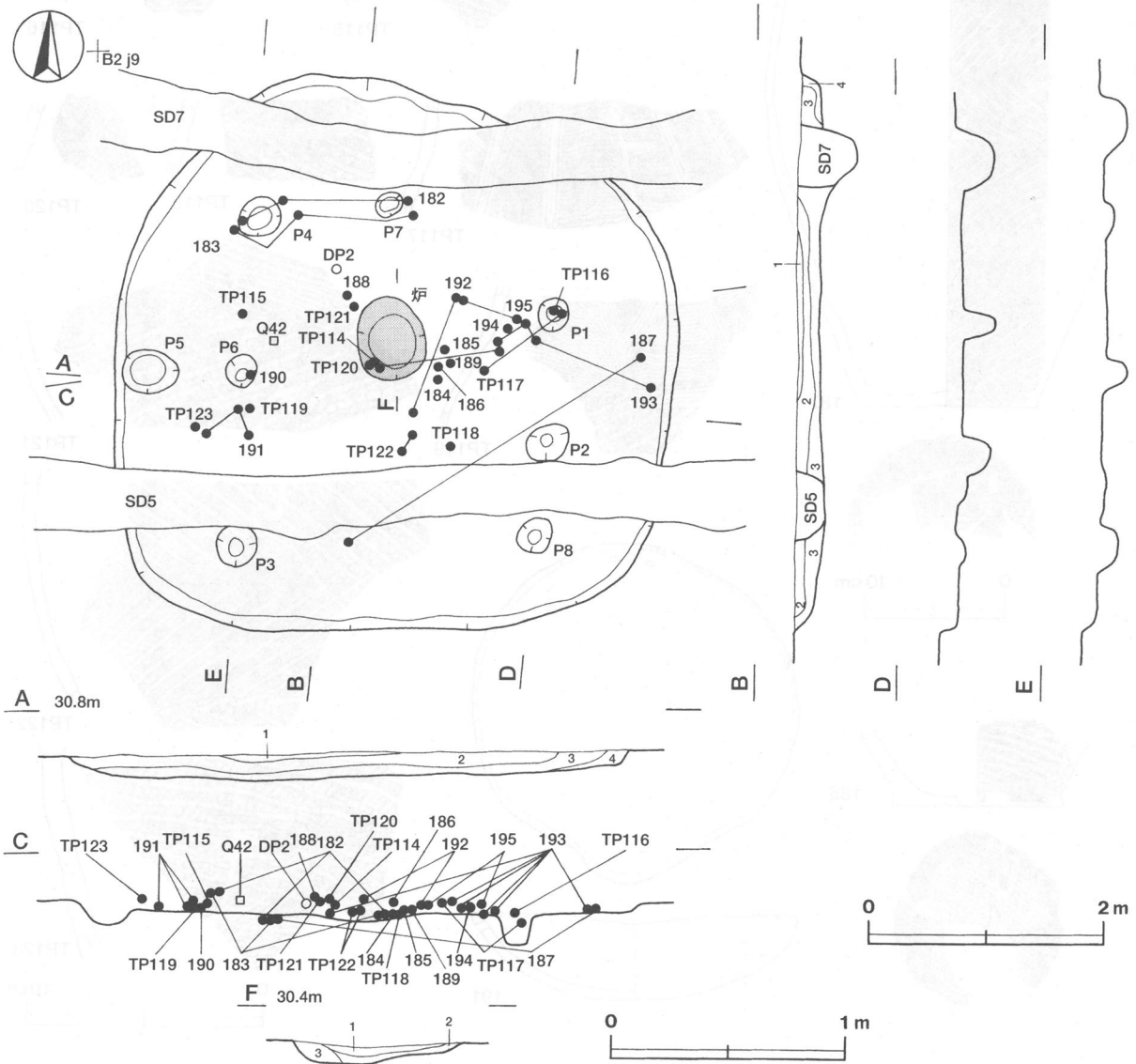
- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と思われる。

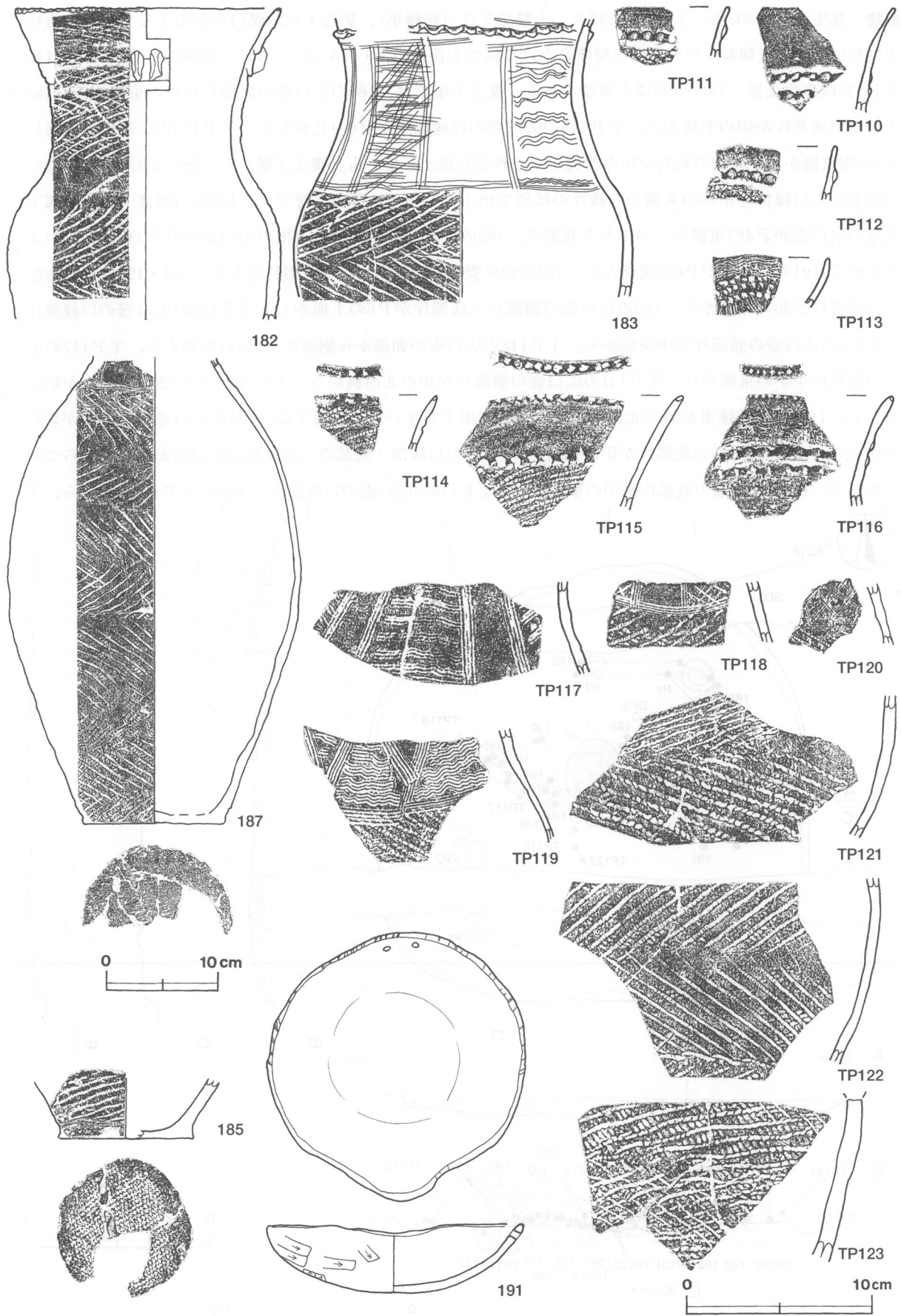
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 弥生土器片303点，土師器片242点，土製品3点（紡錘車），炉石1点，礫14点が出土している。遺物は中央部付近から土師器，中央部から壁際にかけて弥生土器が出土している。第57・58図182～191・T P 110～T P 123は弥生土器，192～195は土師器である。覆土上層では，186の広口壺の底部片が炉の東側から，188の広口壺の底部片が炉の北側から，T P 115の広口壺の口縁部片がP 6の北側から，T P 123の広口壺の胴部片がP 5の南東側から，Q 42の砥石が炉の西側からそれぞれ出土している。覆土上層から下層にかけては，193の甕の底部から口縁部片が炉の東側から破片の状態出土している。覆土下層では，182の口縁部一部・胴部下位欠損の広口壺がP 4の東側からつぶれた状態で，183の口縁部・胴部下位欠損の広口壺がP 7の東側からつぶれた状態で，191の片口皿がP 6の南側から，192の台付甕の脚台部片が炉の東側付近から，194・195の甕の体部から口縁部片が炉の東側から，190の広口壺の胴部から底部片がP 6の上面から，T P 114の広口壺の口縁部片，T P 120の広口壺の頸部片が中央部から，T P 118の広口壺の頸部から胴部片がP 2の西側から，T P 117の広口壺の頸部片が炉の東側から，T P 121の広口壺の胴部片が炉の北西側から，T P 122の広口壺の胴部片が炉の南側から，D P 2の紡錘車が炉の北西側からそれぞれ出土している。床面では，184の広口壺の底部片が炉の南東側から，185の広口壺の底部片が炉の東側から，187の口縁部・底部の一部欠損の広口壺が東壁際からつぶれた状態で，189の広口壺の底部片が炉の東側から，T P 116の広口壺の口縁部から頸部片がP 1の上面から，T P



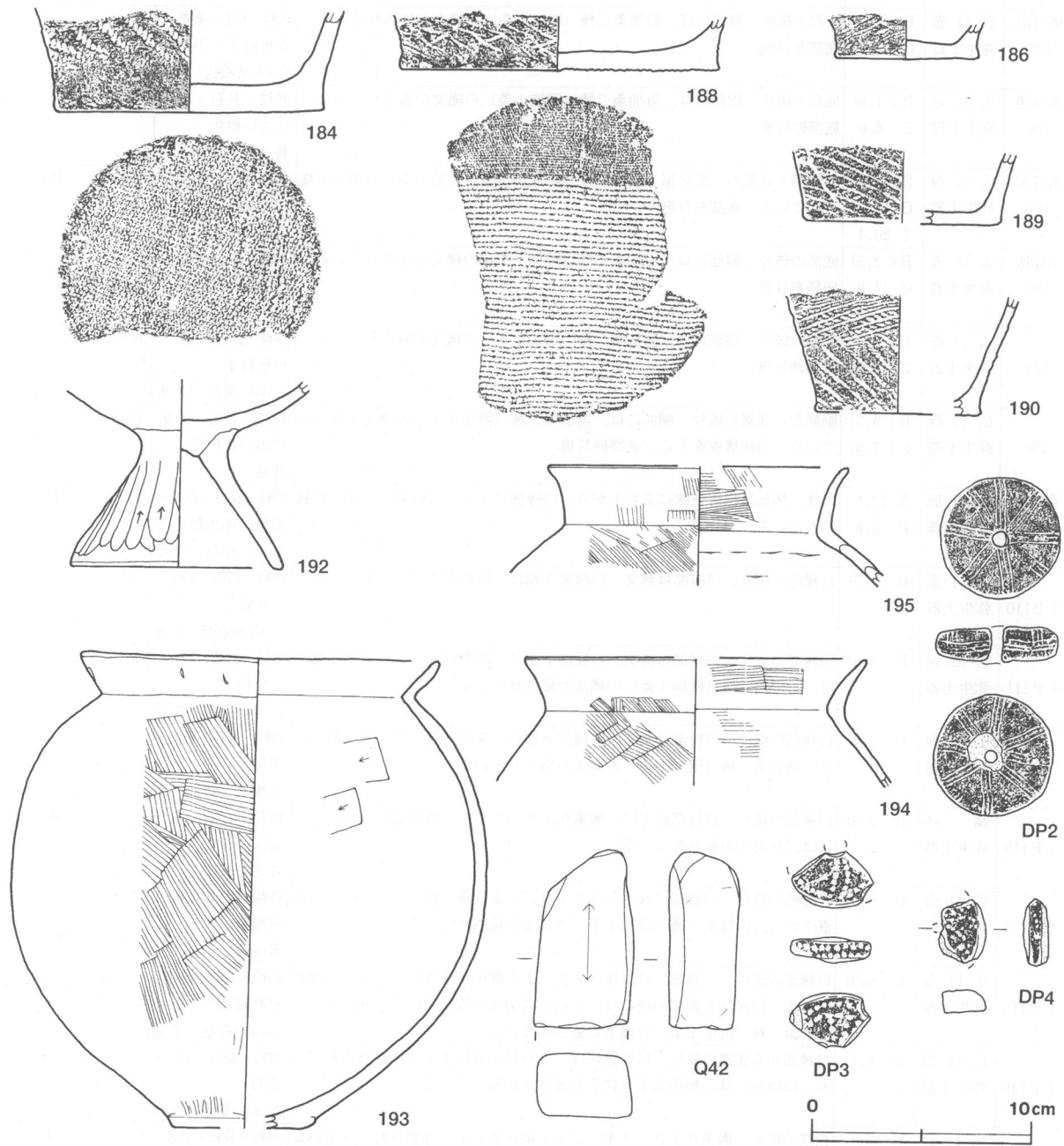
第56図 第20号住居跡実測図



第57图 第20号住居跡出土遺物実測図(1)

119広口壺の頸部片がP6の南側からそれぞれ出土している。その他、TP110～TP112の広口壺の口縁部片、TP113の高杯の口縁部片、DP3・DP4の紡錘車が覆土から出土している。

所見 本跡から、土師器片が出土しているが、出土位置が中央部付近であること、出土状況は破片が散らばった状態であることや出土層位から判断して、本住居が廃絶した後の一括投棄と思われる。時期は、遺構の形態や覆土下層から床面の出土土器から判断して後期後半と考えられる。



第58図 第20号住居跡出土遺物実測図(2)

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 182	広口壺 弥生土器	A 14.2 B (16.7) H 10.2 I 14.7	口縁部の一部・胴部下位欠損。口唇部には、ヘラ状工具による刻みが施されている。口縁部は複合口縁を呈し、1段目下端から2段目にかけて、2個1組の瘤が3単位にわたり貼られている。頸部から胴部にかけて、附加条二種(附加1条)の縄文が施され、胴部との境は無文帯が巡る。羽状構成をとる。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子・針状鉱物 にぶい赤褐色 普通	45% P L 19 外面煤附着 口縁部輪積み痕

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 183	広口壺 弥生土器	B(15.0) H 12.7 I 18.1	口縁部・胴部下位欠損。口縁部と頸部の境には、隆帯が貼られている。頸部は、櫛歯状工具(3本)による縦区画により5分割され、区画内は波状文の部分と、平行文に斜行文が施文されている部分がある。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・針状鉱物 にぶい赤褐色 普通	45% P L 19 外面煤付着
第58図 184	広口壺 弥生土器	B(4.7) C 12.2	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部布目痕。	砂粒・石英・白色 粒子・赤色粒子 にぶい橙色 普通	15%
第57図 185	広口壺 弥生土器	B(3.3) C 7.2	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部布目痕。	砂粒・長石・石英・ 赤色粒子・小礫 にぶい赤褐色 普通	15%
第58図 186	広口壺 弥生土器	B(1.8) C 6.6	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部砂目痕。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	10%
第57図 187	広口壺 弥生土器	B(41.5) C(12.1) I 26.4	口縁部・底部の一部欠損。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部布目痕。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 にぶい橙色 普通	60% P L 19
第58図 188	広口壺 弥生土器	B(2.5) C 14.6	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部布目痕。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・赤色粒子 にぶい橙色 普通	10% 内面剝離
189	広口壺 弥生土器	B(3.3) C(8.8)	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部砂目痕。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 にぶい橙色 普通	10%
190	広口壺 弥生土器	B(5.3) C(7.3)	胴部から底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。羽状構成をとる。底部砂目痕。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	10%
第57図 191	片口皿 弥生土器	A 13.6 B 3.8	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。口唇部にキザミが施されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	100% P L 18
T P 110	広口壺 弥生土器	B(5.7)	口縁部の破片。口縁部は無文。口縁部下端に、隆帯が巡っている。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい赤褐色 普通	5%
T P 111	広口壺 弥生土器	B(2.8)	口縁部の破片。口縁部は無文。口縁部下端に、隆帯が巡っている。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい褐色 普通	5%
T P 112	広口壺 弥生土器	B(2.9)	口縁部の破片。口縁部は無文。口縁部下端に、隆帯が巡っている。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 灰褐色 普通	5%
T P 113	高坏 弥生土器	B(2.8)	口縁部の破片。口唇部直下に、櫛歯状工具(5本)の波状文が巡り、下位には、刺突文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5% P L 19
T P 114	広口壺 弥生土器	B(3.0)	口縁部の破片。口唇部には、ヘラ状工具による刻みが施されている。口唇直下から、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・雲母・白色粒子 灰褐色 普通	5%
T P 115	広口壺 弥生土器	B(6.3)	口縁部の破片。口唇部には、棒状工具による押圧が施されている。口縁部は無文。口縁部と頸部の境には、1列の刺突文が巡っている。頸部から、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・雲母・石英・ 針状鉱物 にぶい橙色 普通	5% P L 19
T P 116	広口壺 弥生土器	B(6.1)	口縁部から頸部の破片。口唇部には、ヘラ状工具による刻みが施されている。口縁部には、櫛歯状工具による波状文が巡っている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい褐色 普通	5%
T P 117	広口壺 弥生土器	B(5.1)	頸部の破片。櫛歯状工具(4本)による縦区画により分割され、区画内には、波状文が施されている。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 浅黄橙色 普通	5% P L 19
T P 118	広口壺 弥生土器	B(3.4)	頸部から胴部の破片。頸部は、櫛歯状工具(4本)による縦区画により分割され、区画内には格子目文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	5%
T P 119	広口壺 弥生土器	B(6.0)	頸部の破片。櫛歯状工具(5本)で山形文による区画が施されている。区画内には、波状文が施されている。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 赤色粒子 にぶい橙色 普通	5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徵	胎土・色調・焼成	備考
第57図 T P 120	広口壺 弥生土器	B (3.2)	頸部の破片。櫛歯状工具（3本）による格子目文が施されている。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	5%
T P 121	広口壺 弥生土器	B (7.4)	胴部の破片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%
T P 122	広口壺 弥生土器	B (10.0)	胴部の破片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・石英・白色粒子 灰褐色 普通	5%
T P 123	広口壺 弥生土器	B (8.7)	胴部の破片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・長石・石英・ 小礫 明赤褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 192	台付甕 土師器	B (8.5) D 9.6 E 5.6	脚台部の破片。脚台部はハの字状に開く。	脚台部外面縦位のヘラ削り、内面横ナデ。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子・小礫 赤褐色 普通	15%
193	甕 土師器	A 16.4 B 21.3 C [6.1]	底部から口縁部の破片。平底。体部は球状を呈し、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面横位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 灰黄褐色 普通	55%
194	甕 土師器	A [15.6] B (5.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部は緩やかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面斜位・内面横位のハケ目調整後、横ナデ、体部外面斜位のハケ目調整、内面横位のハケ目調整後、ナデ。	砂粒・長石・石英・ 赤色粒子 にぶい褐色 普通	10%
195	甕 土師器	A [13.7] B (5.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部は緩やかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面縦位・内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。体部外面上位に輪積み痕。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	10%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第58図D P 2	紡錘車	5.5	1.8	0.7	55.2	土製	断面は長方形で、3本単位の平行線文が、放射状に施されている。	P L 19
D P 3	紡錘車	(3.7)	1.2	不明	(9.0)	土製	断面は長方形で、2列単位の円形刺突文が、放射状に施されている。	
D P 4	紡錘車	(3.1)	(1.1)	不明	(6.7)	土製	断面は長方形と推定され、2列単位の円形刺突文が、放射状に施されている。	

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第58図Q 42	砥石	(8.1)	4.5	3.0	(188.0)	砂岩	断面は長方形を呈し、研ぎ面は1面。	

第23号住居跡（第59図）

位置 調査区の南西部，C 3 b4区。

規模と平面形 長軸4.77m，短軸4.3mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-53°-E

壁 壁高は8～10cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，踏み固められた部分はない。

ピット 4か所（P1～P4）。P1・P4は長径30～36cm，短径23～26cmの楕円形，P2・P3は径26～32cmの円

形で、深さは40~59cmである。規模と配置から支柱穴と考えられる。

炉 ほぼ中央部に位置している。長径70cm、短径61cmの楕円形で、床面を6cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は住居跡の主軸方向と同じである。覆土は焼土粒子や炭化粒子を微量含む程度で、炉床は硬くない。

炉土層解説

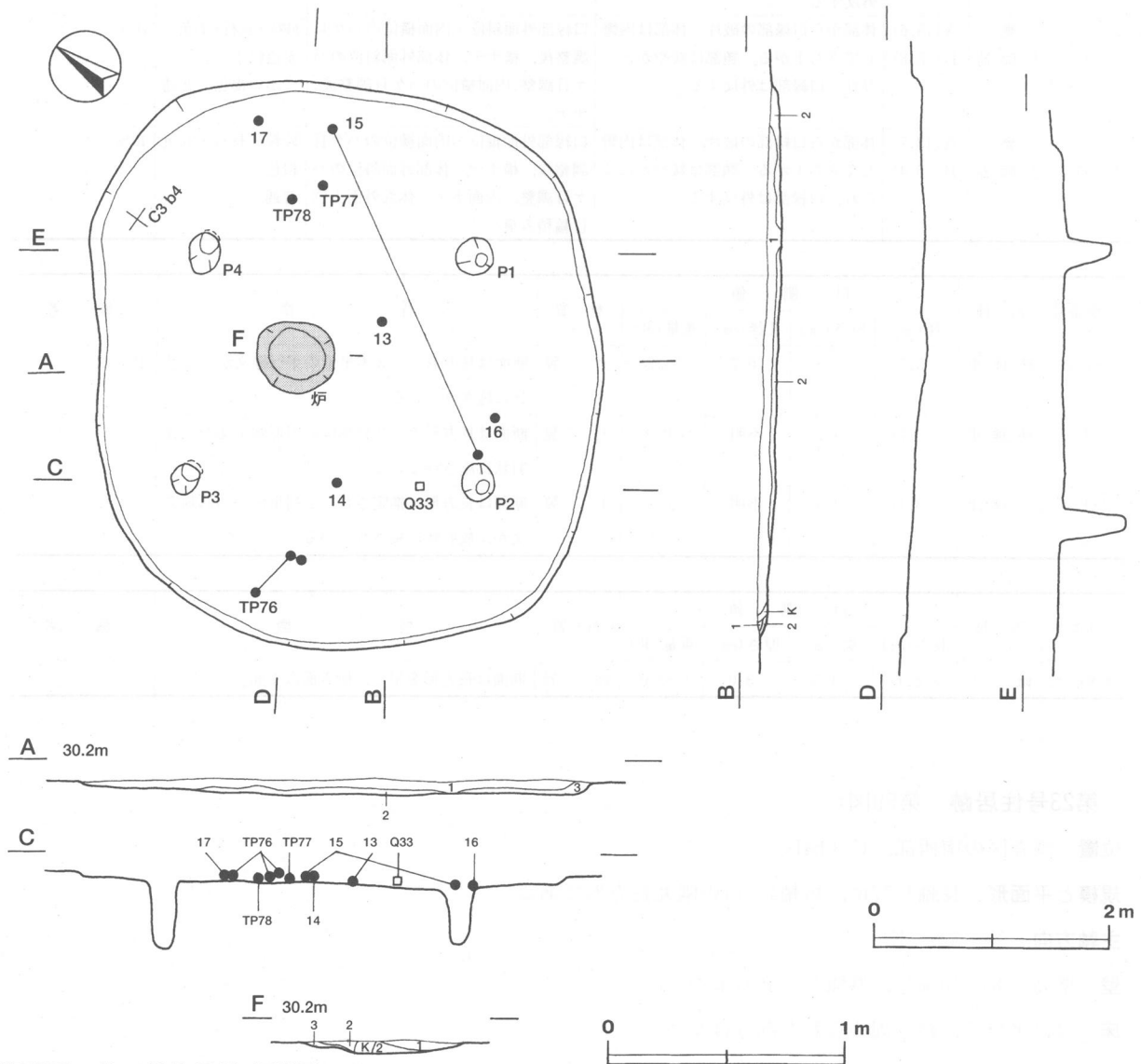
- 1 暗赤褐色 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, ローム粒子微量

覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

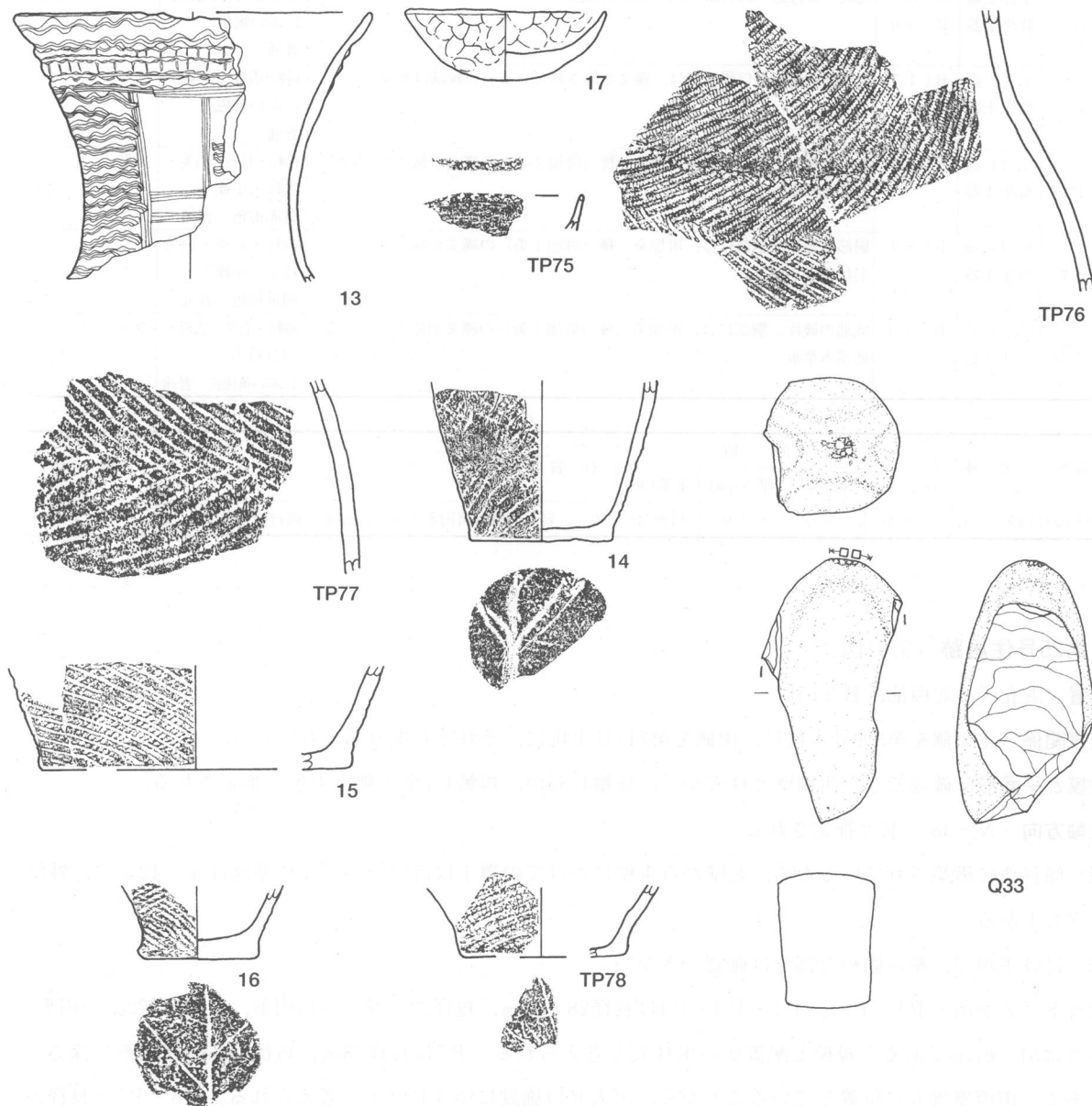
遺物 弥生土器片39点, 石器1点(敲石), 礫2点が出土している。これらの遺物の大部分は、遺構全体の覆土中に散在した状態で出土している。第60図13~17・TP75~TP78は弥生土器である。覆土中層では、TP76の広口壺の胴部片が西側壁寄りから出土している。覆土下層では、14の広口壺の胴部から底部片が炉の南西付近から横位の状態で、17の手捏土器が北東壁際から正位の状態で、Q33の敲石がP2の北西側からそれぞれ出土している。床面では、13の広口壺の口縁部から頸部片が炉の東側から横位の状態で、16の広口壺の底部片



第59図 第23号住居跡実測図

がP2の東側から正位の状態で、TP77の広口壺の胴部片とTP78の広口壺の底部片が北東壁寄りから、それぞれ出土している。15の広口壺の底部片は、P2の北側と北東壁際の破片が接合したものである。覆土からは、TP75の広口壺の口縁部片が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や床面の出土遺物から判断して後期後半と考えられる。



第60図 第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 13	広口壺 弥生土器	A (15.2) B (11.6)	口縁部から頸部の破片。口縁部には、楕歯状工具（3本）による波状文が施されている。口縁部と頸部の境には3条の隆帯が巡り軽い押圧が施されている。頸部は、楕歯状工具（4本）による縦区画により四分割され、区画内は波状文が施されている。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子・針状鉱物 浅黄橙色 普通	15% P L 18
14	広口壺 弥生土器	B (7.0) C 6.2	胴部から底部の破片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 にぶい橙色 普通	15% P L 18 外面煤付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徵	胎土・色調・焼成	備考
第60図 15	広口壺 弥生土器	B(4.5) C[13.2]	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部砂目痕。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%
16	広口壺 弥生土器	B(3.2) C 5.3	底部の破片。摩滅しているが胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・ 小礫 にぶい橙色 普通	10% 二次焼成
17	手捏土器 弥生土器	A 8.5 B 3.0	丸底。口縁部一部欠損。内・外面指頭痕あり。	砂粒・雲母・白色粒子 にぶい褐色 普通	95% P L 18
T P 75	広口壺 弥生土器	B(1.7)	口縁部の破片。口唇部には、縄文が施されている。口縁部は無文。	砂粒・雲母・白色粒子 にぶい褐色 普通	5%
T P 76	広口壺 弥生土器	B(12.3)	胴部の破片。胴部には、附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・長石・石英・ 雲母・小礫 暗赤褐色 普通	10%
T P 77	広口壺 弥生土器	B(8.4)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・石英・白色 粒子・小礫 明黄褐色 普通	5%
T P 78	広口壺 弥生土器	B(3.3)	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部木葉痕。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値				石質	特 徴	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第60図Q33	敲 石	(11.4)	6.0	5.9	(429.4)	砂 岩	平面は楕円形を呈し、端部に敲打痕が残る。	

第25号住居跡(第61図)

位置 調査区の北西部，B 3 g5区。

重複関係 北東側を第309号土坑に，南側を第314号土坑に，それぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 確認できた西側壁と柱穴から，長軸4.85m，短軸4.7mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-48°-Eと推定される。

壁 傾斜地に構築されているため，北壁から東壁にかけての覆土は流出している。壁高は3~12cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，踏み固めた部分は確認できない。

ピット 8か所(P1~P8)。P1・P3・P4は長径28~34cm，短径22~28cmの楕円形，P2は径22cmの円形で，深さは51~67cmである。規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は長径28cm，短径24cmの楕円形で深さ13cmである。南西壁寄りに位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は長径28~37cm，短径22~24cmの楕円形，P8は径52cmの円形で，深さは7~19cmである。性格は不明である。

ピット土層解説

P1

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量 4 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量

P2

1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量 3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

P3

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
2 暗褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

P4

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 4 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 |

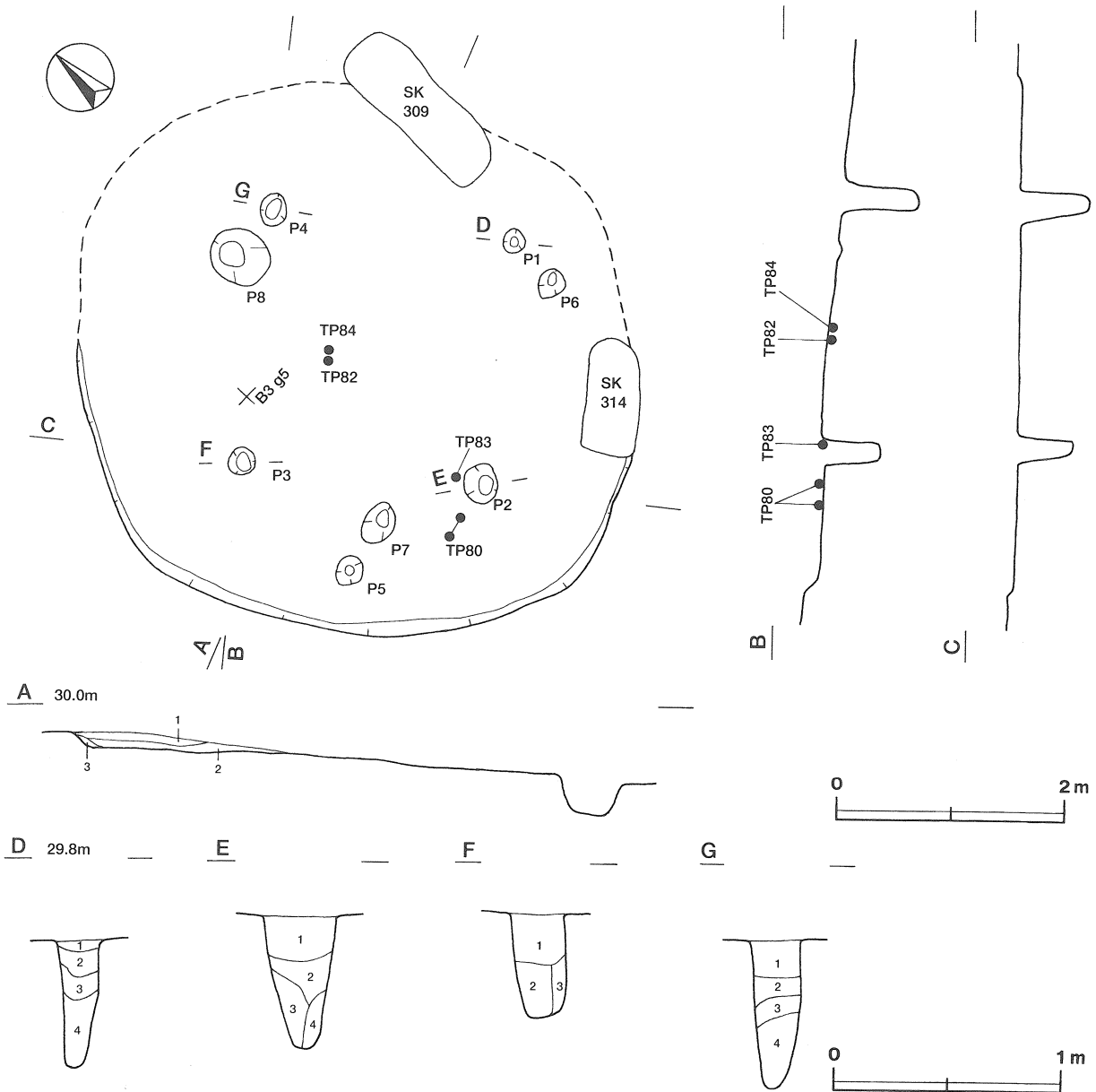
覆土 覆土は3層からなり、堆積状況がレンズ状を呈していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

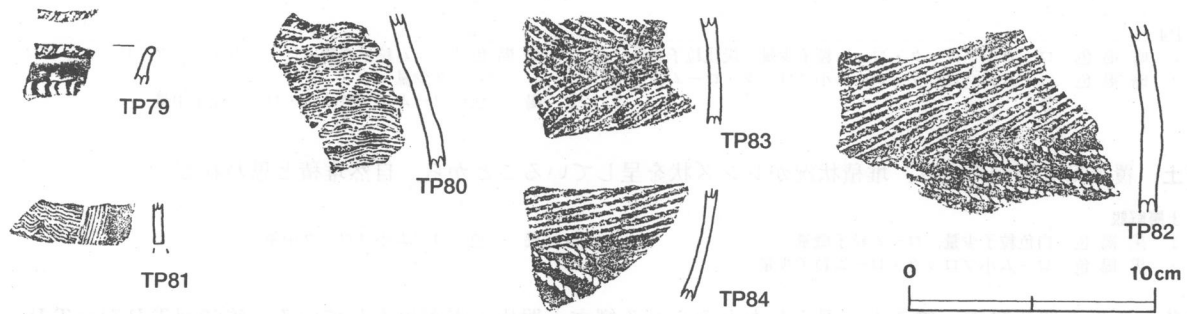
- | | | | |
|-------|------------------|------|------------|
| 1 黒褐色 | 白色粒子少量, ローム粒子微量 | 3 褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | | |

遺物 弥生土器片41点, 礫6点, 混入したとみられる縄文土器片1点が出土している。第62図T P 79~T P 84は弥生土器の広口壺である。覆土は薄くほとんどが床面からの出土である。T P 80の頸部片はP2の西側から, 同一個体と思われるT P 82・T P 84の胴部片が中央部から, T P 83の胴部片がP2の北側からそれぞれ出土している。覆土からは, T P 79の口縁部片が, T P 81の頸部片がそれぞれ出土している。

所見 本跡は, 東側部分が傾斜地にかかるため, 住居跡の全容をとらえられなかった。本跡の時期は, 遺構の形態や出土土器から判断して後期後半と思われる。



第61図 第25号住居跡実測図



第62図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 TP79	広口壺 弥生土器	B(1.5)	口縁部の破片。口唇部には、ヘラ状工具による刻みが施されている。口縁部は無文。頸部との境に、隆帯が巡っている。	砂粒・石英・白色粒子 明黄褐色 普通	5%
TP80	広口壺 弥生土器	B(6.2)	頸部の破片。櫛歯状工具による波状文が施されている。	砂粒・白色粒子・ 赤色粒子 橙色 普通	5%
TP81	広口壺 弥生土器	B(1.4)	頸部の破片。櫛歯状工具(5本)による縦区画により分割され、区画内には、波状文が施されている。	砂粒・雲母・白色 粒子・小礫 にぶい橙色 普通	5%
TP82	広口壺 弥生土器	B(7.9)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・雲母・白色粒子 灰黄褐色 普通	5%
TP83	広口壺 弥生土器	B(4.3)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 灰黄褐色 普通	5%
TP84	広口壺 弥生土器	B(4.7)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 灰黄褐色 普通	5%

第26号住居跡 (第63図)

位置 調査区の中央部, C3b9区。

規模と平面形 南東壁は削平され確認できなかったが、床面及び柱穴の配列から、長軸4.29m、短軸3.45mの隅丸長方形と推定される。

主軸方向 N-51°-W

壁 壁高は5~8cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部と南西コーナー付近が、特に踏み固められている。

ピット 3か所(P1~P3)。P1は径20~22cmの円形で、深さ50cmである。規模から主柱穴と考えられる。P2は径23~24cmの円形で、深さ15cmである。P3は長径37cm、短径30cmの楕円形で、深さ12cmである。どちらも、性格は不明である。

炉 中央からやや北側コーナー寄りに位置している。径42~46cmの円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。覆土は焼土粒子や炭化粒子を微量含む程度で、炉床は硬くない。炉石は、炉の東側に位置し、炉の長径と平行するように据えられている。炉石の上面は加熱を受けて赤変している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子微量

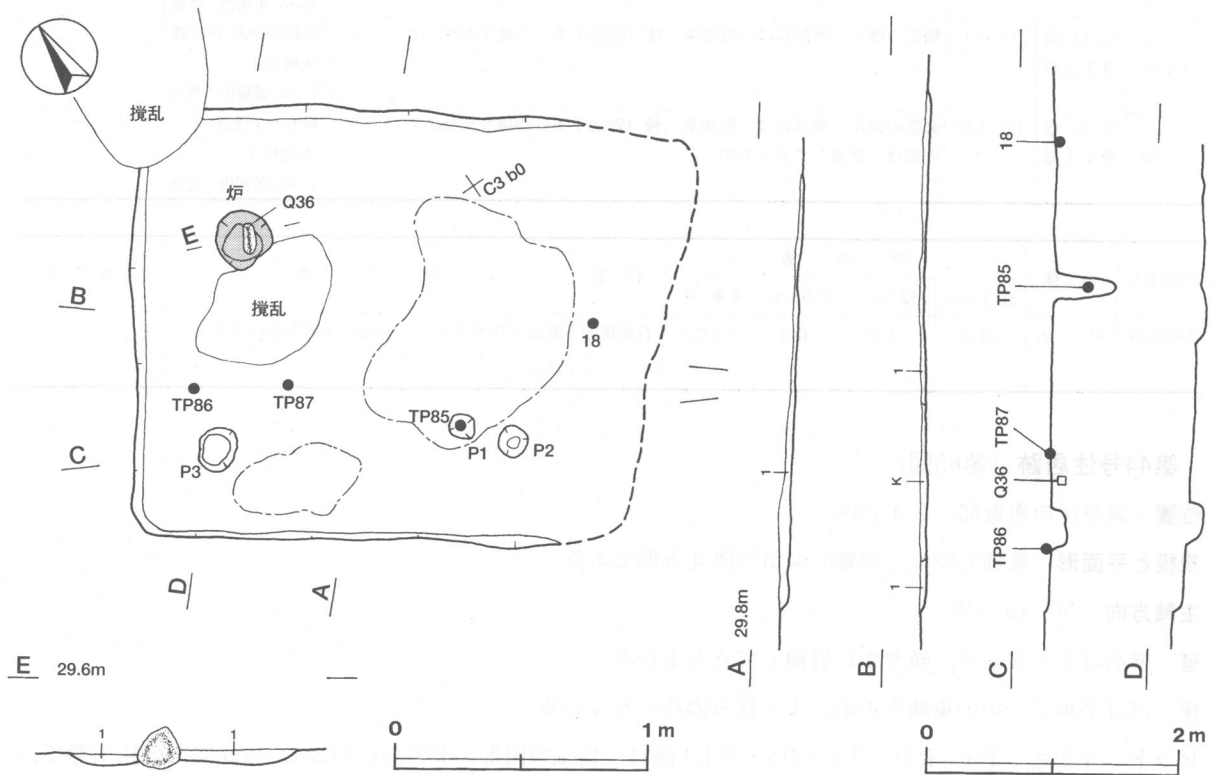
覆土 単一層であり、自然堆積と思われる。

土層解説

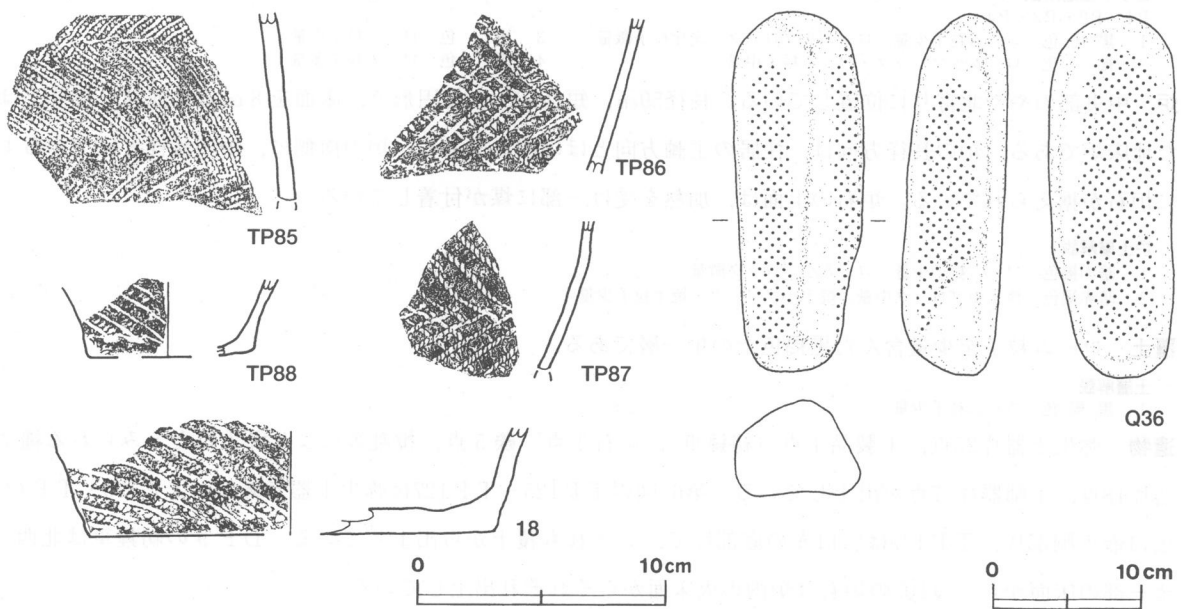
1 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

遺物 弥生土器片20点、炉石1点、礫6点、攪乱等により混入したとみられる土師器片3点、須恵器片2点が出土している。第64図18・T P 85～T P 88は弥生土器の破片である。覆土は薄くほとんどが床面からの出土である。18の広口壺の底部片がP2の東側から逆位の状態で、T P 86の胴部片が北西壁寄りから、T P 87の胴部片がP3の東側付近から、T P 85の胴部片がP1の覆土中層から、Q36の炉石が炉の火床面からそれぞれ出土している。覆土からは、T P 88の底部片が出土している。

所見 本跡は南東壁側が削平され、住居跡の全容をとらえられなかった。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して後期後半と思われる。



第63図 第26号住居跡実測図



第64図 第26号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 18	広口壺 弥生土器	B(4.2) C(16.2)	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。 底部砂目痕。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 にぶい黄褐色 普通	10%
T P 85	広口壺 弥生土器	B(7.6)	胴部の破片。胴部には、附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。 羽状構成をとる。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%
T P 86	広口壺 弥生土器	B(6.5)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・雲母・白色 粒子・小礫 にぶい黄褐色 普通	5%
T P 87	広口壺 弥生土器	B(6.1)	胴部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	砂粒・白色粒子・小礫 灰褐色 にぶい黄褐色 普通	5%
T P 88	広口壺 弥生土器	B(3.0)	底部の破片。胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。 底部は、摩滅しており不明。	砂粒・白色粒子・ 赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第64図Q36	炉石	24.5	9.0	6.4	2,132.6	石英斑岩	断面三角形を呈し、全面に火熱を受け赤変している。	P L 19

第44号住居跡 (第65図)

位置 調査区の南東部, C 4 j5区。

規模と平面形 長軸5.08m, 短軸5.04mの隅丸方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は5~8cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、炉の東側を中心によく踏み固められている。

ピット 4か所(P1~P4)。P1・P3・P4は径34~45cmの円形, P2は長径42cm, 短径35cmの楕円形で、深さは75~87cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P1・P2・P3・P4

- | | | | |
|-------|--------------------------|------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | 4 褐色 | ローム粒子多量 |

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径59cm, 短径50cmの楕円形で、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は、住居の主軸方向とほぼ同じである。炉の南側に、炉の長径と直交するように炉石が据えられている。炉石の上面は、加熱を受け一部に煤が付着している。

炉石層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック・焼土粒子少量

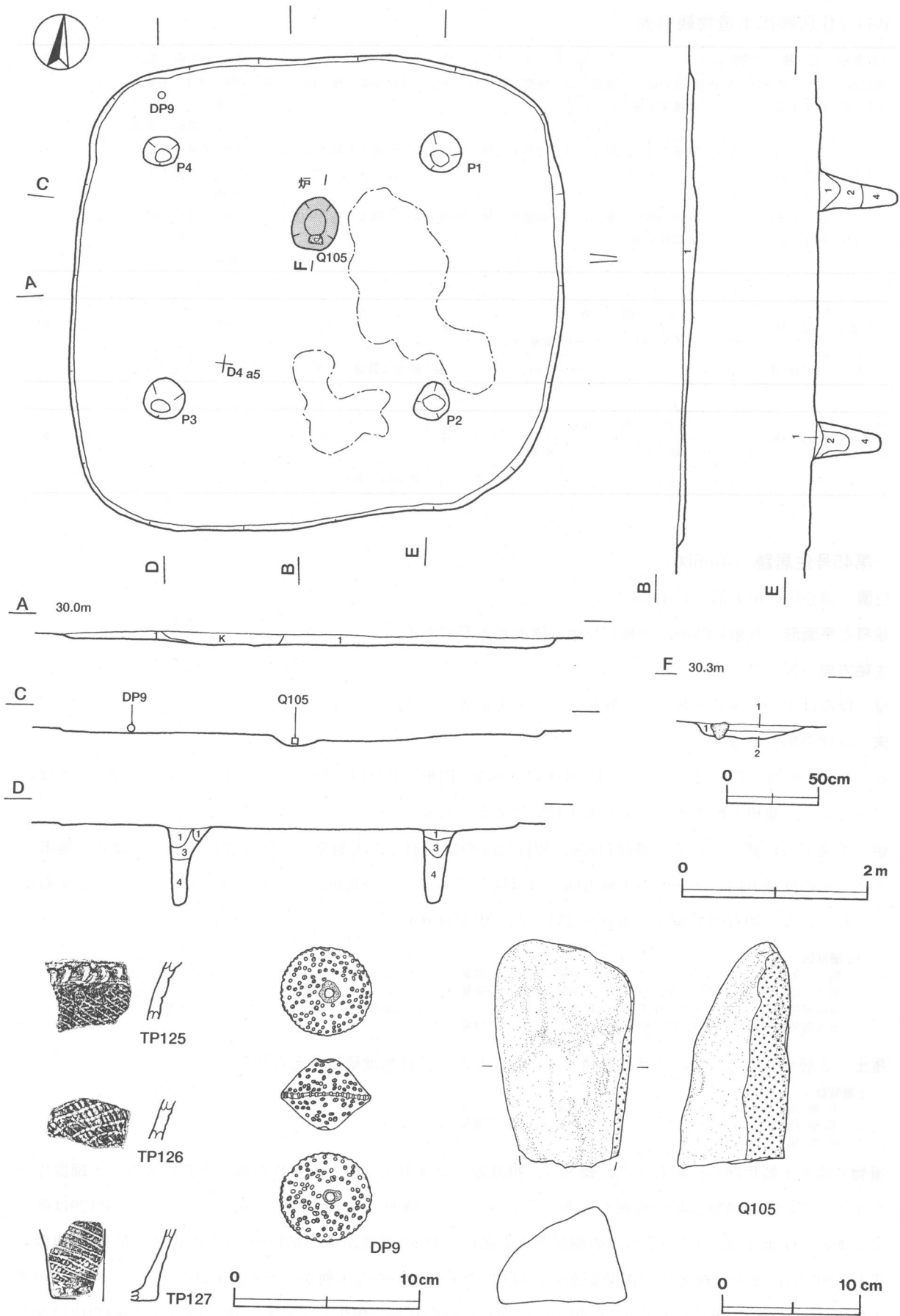
覆土 ローム粒子を少量含んだ黒褐色土の単一層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

遺物 弥生土器片25点, 土製品1点(紡錘車), 炉石1点, 礫5点, 攪乱等により混入したとみられる縄文土器片18点, 土師器片17点が出土している。第65図のT P 125~T P 127は弥生土器である。T P 125・T P 126は広口壺の胴部片, T P 127は広口壺の底部片で、いずれも覆土から出土している。D P 9の紡錘車は北西コーナー部の床面から, Q 105の炉石は炉内の火床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土土器から判断して後期後半と考えられる。



第65图 第44号住居跡・出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 T P 125	広口壺 弥生土器	B (3.4)	胴部の破片。胴部には、隆帯が貼られ、下位には附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・小礫 にぶい橙色 普通	5%
T P 126	広口壺 弥生土器	B (2.2)	胴部の破片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	5%
T P 127	広口壺 弥生土器	B (3.9)	底部の破片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。 底部砂目痕。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第65図D P 9	紡錘車	4.9	3.9	0.5	61.6	土製	断面は算盤玉状を呈し、表面に刺突文を有する。	P L 19

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第65図Q 105	炉石	(16.4)	10.1	7.7	(1,553.6)	砂岩	断面は三角形を呈し、上面は赤変している。	

第45号住居跡（第66図）

位置 調査区の南東部，C 4 d3区。

規模と平面形 長軸4.68m，短軸4.18mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-31°-E

壁 壁高は4～7cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。

ピット 4か所（P1～P4）。P1～P3は径32～48cmの円形，P4は長径50cm，短径42cmの楕円形で，深さは44～47cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。

炉 中央部に位置している。長径111cm，短径52cmの楕円形で，床面を13cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は，住居の主軸方向とほぼ同じである。炉の北側に，炉の長径と直交するように炉石が据えられている。炉石の上面は，加熱を受け一部に煤が付着している。

炉石層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|----------------------------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 5 暗赤褐色 | ローム小ブロック中量，ローム粒子・焼土中ブロック微量 |
| 2 褐色 | ローム中ブロック，ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 6 暗赤褐色 | ローム小ブロック中量，焼土中ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | | |
| 4 暗赤褐色 | 炭化粒子中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック微量 | | |

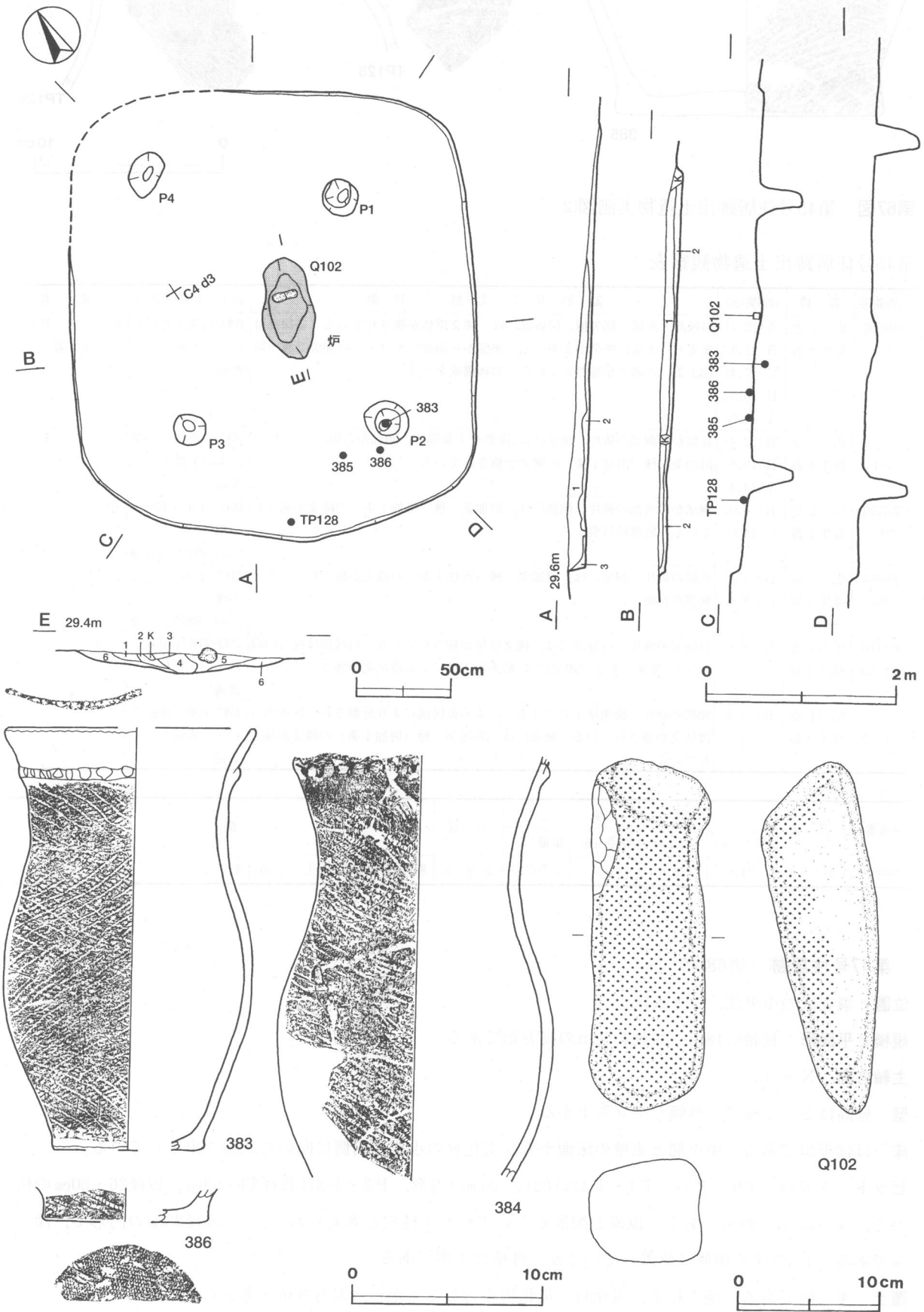
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

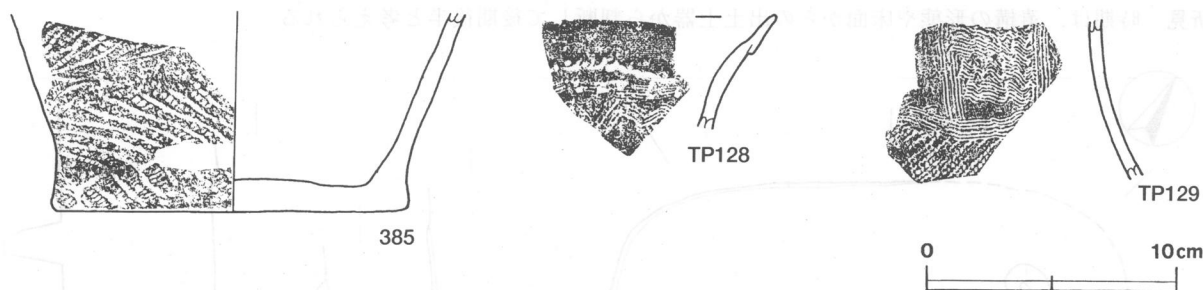
- | | |
|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量 |

遺物 弥生土器片76点，炉石1点，礫8点，攪乱等により混入したとみられる縄文土器片8点，土師器片36点が出土している。遺物は炉の南側から多く出土している。第66・67図の383～386，T P 128・T P 129は弥生土器である。床面では，385の広口壺の胴部から底部片がP2の西側から，386の広口壺の底部片がP2の西側から，T P 128の広口壺の口縁部片が南壁際から，Q 102の炉石が炉の火床面からそれぞれ出土している。P2の覆土下層では，383の口縁部・底部一部欠損の広口壺が正位の状態出土している。覆土からは，384の広口壺の頸部から胴部片，T P 129の広口壺の頸部片がそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や床面からの出土土器から判断して後期後半と考えられる。



第66図 第45号住居跡・出土遺物実測図(1)



第67図 第45号住居跡出土遺物実測図(2)

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 383	広口壺 弥生土器	A [12.7] B 22.4 C [7.4] H 10.5 I 13.0	口縁部・底部一部欠損。口唇部には、縄文原体が施されている。口縁部は無文で、下端に隆帯が1条巡る。頸部から胴部にかけて、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。羽状構成をとる。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	80% P L 19 外面煤付着
384	広口壺 弥生土器	B (22.4) H 10.6 I 14.4	頸部から胴部の破片。頸部には、隆帯が1条巡る。頸部から胴部にかけて、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。	砂粒・白色粒子・小礫 にぶい黄褐色 普通	40% P L 19
第67図 385	広口壺 弥生土器	B (8.0) C 14.0	胴部から底部の破片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。底部砂目痕。	砂粒・長石・雲母・小礫 にぶい黄褐色 普通	10%
第66図 386	広口壺 弥生土器	B (1.8) C [8.4]	底部の破片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。底部布目痕。	砂粒・長石・石英・小礫 にぶい黄褐色 普通	5%
第67図 T P 128	広口壺 弥生土器	B (4.6)	口縁部の破片。口唇部には、縄文原体が施されている。口縁部は複合口縁を呈し、無文である。頸部には、櫛歯状工具による波状文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	5%
T P 129	広口壺 弥生土器	B (6.4)	頸部の破片。櫛歯状工具（6本）による縦区画により分割され、区画内は波状文が施されている。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第66図Q102	炉石	24.6	8.0	7.4	2,507.0	安山岩	断面は長方形を呈し、上面は赤変している。	

第47号住居跡（第68図）

位置 調査区の中央部，C 3 g7区。

規模と平面形 長軸5.18m，短軸4.52mの長方形である。

主軸方向 N - 0°

壁 壁高は2～4cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。中央部と東壁の床面から，炭化材の小片が内側に向いた状態で出土している。

ピット 5か所（P1～P5）。P1・P4は径21・35cmの円形，P2・P3は長径33・59cm，短径26・50cmの楕円形で，深さは53～89cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P5は径33cmの円形で，深さ35cmである。P3のすぐ南側に位置しているが，性格は不明である。

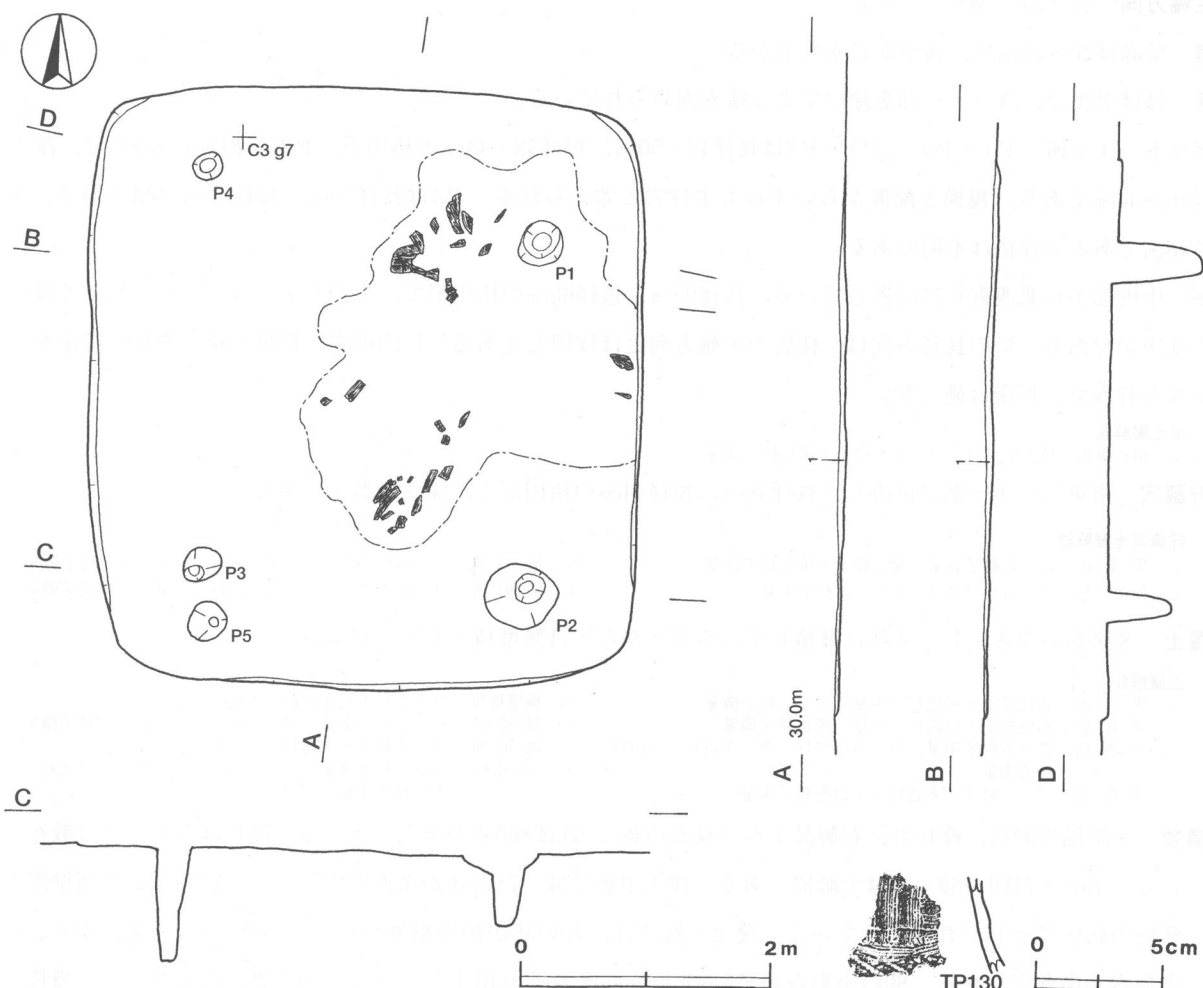
覆土 単一層である。焼土粒子，炭化材，炭化物を含むことから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 炭化材・炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量

遺物 弥生土器片 8 点, 礫 5 点が出土している。いずれも細片で図示できるものは 1 点のみである。第 68 図の TP 130 は弥生土器の広口壺の頸部片で, 覆土から出土している。

所見 床面から炭化材が出土していることから, 焼失住居の可能性が高い。時期は, 住居の形態や覆土の出土土器から判断して後期後半の可能性が高い。



第 68 図 第 47 号住居跡・出土遺物実測図

第 47 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 68 図 TP 130	広口壺 弥生土器	B (3.8)	頸部の破片。櫛歯状工具 (4 本) による縦区画により分割されている。	砂粒・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	5 %

4 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で, 竪穴住居跡 31 軒, 鍛冶工房跡 1 基, 掘立柱建物跡 1 棟, 方形周溝墓 1 基, 土坑 5 基を検出した。集落跡としては最も遺構数が多く, 当遺跡の中心となる時代である。以下, 検出された遺構の特徴と出土遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第2号住居跡（第70図）

位置 調査区の南部，E 4 a4区。

重複関係 中央部を第4号土坑，南東コーナー壁を第346号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.18m，短軸6.08mの方形である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は20～35cmで，緩やかに立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，コーナー部を除いてよく踏み固められている。

ピット 4か所（P1～P4）。P1・P3は長径46・50cm，短径38・44cmの楕円形，P2は径45cmの円形で，深さは16～44cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P4は長径70cm，短径53cmの楕円形で，深さ48cmである。性格は不明である。

炉 中央部から北西寄りに位置している。長径95cm，短径66cmの楕円形で，床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は，住居の主軸方向とほぼ同じである。炉内の覆土に焼土粒子や炭化粒子を微量含む程度で，炉床は硬くない。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し，長径56cm，短径44cmの楕円形で，深さは27cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子微量

- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量

覆土 8層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 赤色粒子・白色粒子少量，ローム粒子微量

- 2 黒褐色 赤色粒子・白色粒子少量，炭化粒子微量

- 3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・赤色粒子・白色粒子少量

- 4 黒褐色 ローム粒子・赤色粒子・白色粒子少量

- 5 極暗褐色 ローム粒子・赤色粒子少量

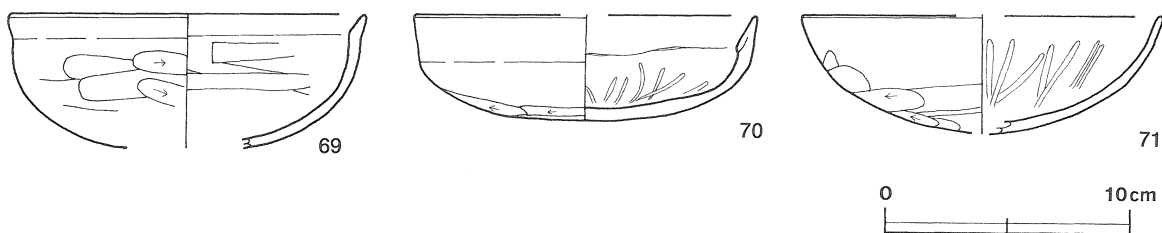
- 6 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子微量

- 7 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子少量

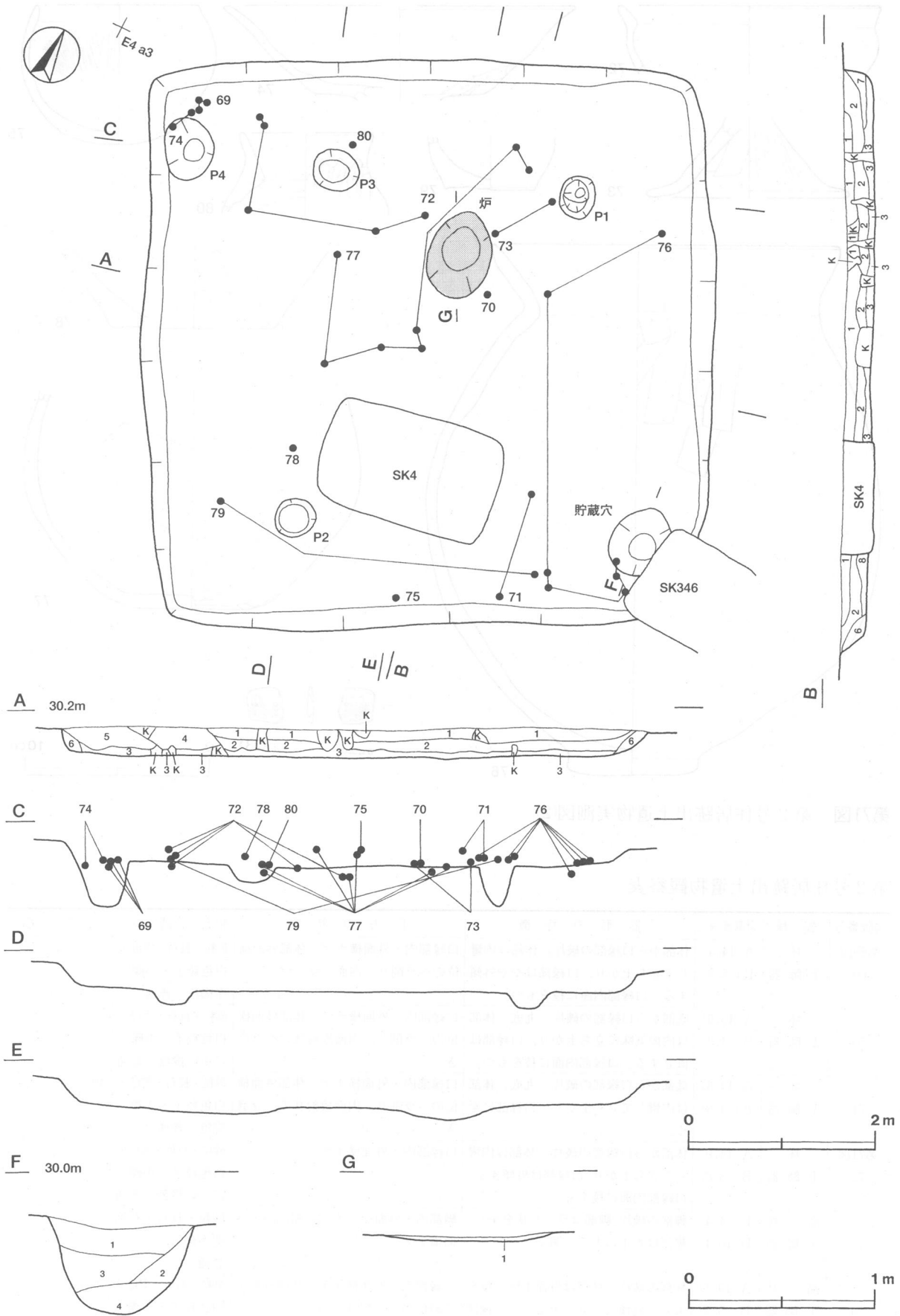
- 8 にぶい黄褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子・赤色粒子少量

遺物 土師器片90点，礫10点，石製品1点（双孔円板），鉄滓860gが出土している。遺物は覆土全体に散在している。第69・71図の69～80は土師器である。覆土中層では，71の坏が南西壁寄りから，75の碗が南西壁際から横位の状態でそれぞれ出土している。覆土下層では，70の坏が炉の東側から，78の甕がP2の北側から，79の小形壺が南壁寄りから，80の小形壺がP3の北側からそれぞれ出土している。76の甕は南東コーナー壁際から逆位のつぶれた状態で出土したものと，北東コーナーにかけて出土した破片が接合したものである。覆土下層から床面にかけては，72の坏がP3付近から，77の甕は中央部から北西壁寄りにかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。床面では，69の坏と74の高坏が北西コーナー部壁際から，73の高坏が炉の北東側からそれぞれ出土している。その他，Q31の双孔円板と鉄滓が覆土から出土している。

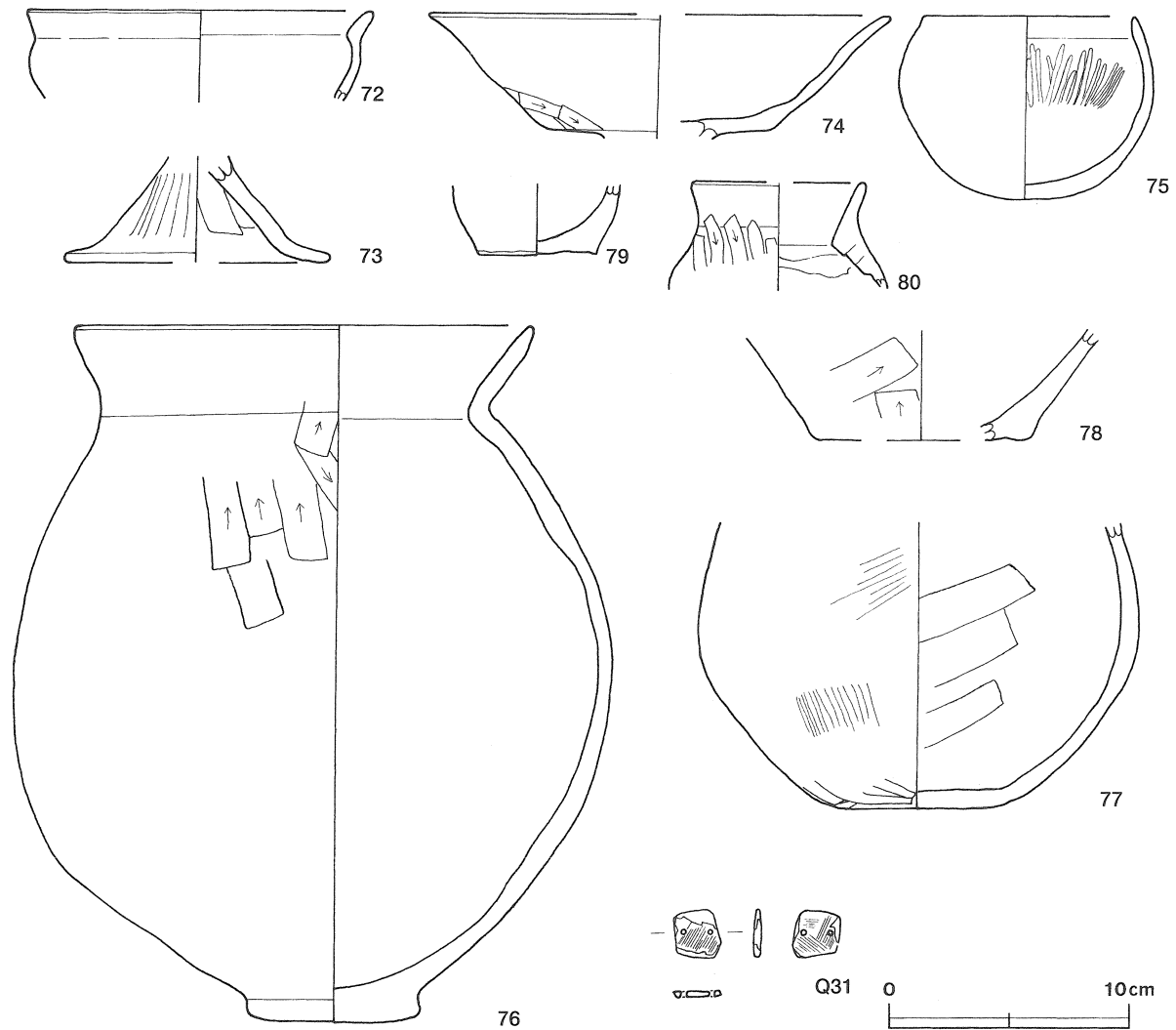
所見 本跡の覆土から鉄滓が出土しているが，鍛冶工房と関連する炉，羽口や金床石等は出土していない。時期は，遺構の形態や覆土下層及び床面の出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



第69図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第70图 第2号住居迹实测图



第71図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 69	坏 土師器	A 14.4 B (5.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 赤褐色 普通	45%
70	坏 土師器	A [13.9] B 4.3	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	45%
71	坏 土師器	A [14.6] B (4.9)	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 橙色 普通	40%
第71図 72	坏 土師器	A 14.0 B (3.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	10%
73	高坏 土師器	B (4.4) D [10.4]	脚部の破片。脚部はラッパ状を呈し、裾部は水平に大きく開く。	脚部内・外面ヘラナデ。裾部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	20%
74	高坏 土師器	A [19.1] B (5.1)	坏部の破片。坏部は外面下位に稜をもち、外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面下位斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・小礫 橙色 普通	25%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 75	椀 土師器	A 8.7 B 7.7	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面剝離のため調整不明。内面縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・小礫 浅黄橙色 普通	95% PL19
76	甕 土師器	A 18.8 B 28.7 C 6.4	口縁部・体部一部欠損。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位縦位のヘラ削り、下位ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・赤色粒子 赤褐色 普通	85% PL19 外面煤付着
77	甕 土師器	B (11.9) C 6.4	底部から体部の破片。平底。体部は球状を呈し、中位に最大径をもつ。	体部外面斜位のハケ目調整後、ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・小礫 にぶい橙色 普通	30%
78	甕 土師器	B (4.6) C (8.8)	底部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・小礫 褐色 普通	5%
79	ミニチュア土師器	B (2.9) C 4.8	壺形。底部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 にぶい褐色 普通	40%
80	ミニチュア土師器	A (7.0) B (4.5)	壺形。体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。	体部外面縦位のヘラ削り、内面粗いナデ。内面上位に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子・赤色粒子 にぶい橙色 普通	40%

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第71図Q31	双孔円板	(2.0)	(1.9)	0.3	0.2	(1.7)	滑石	2孔が空けられている。	

第3号住居跡（第72図）

位置 調査区の南部，E 4 b5区。

規模と平面形 東側が調査区域外であるため，南北方向3.25m，東西方向は確認できた長さ3.1mで隅丸方形または隅丸長方形と推定される。

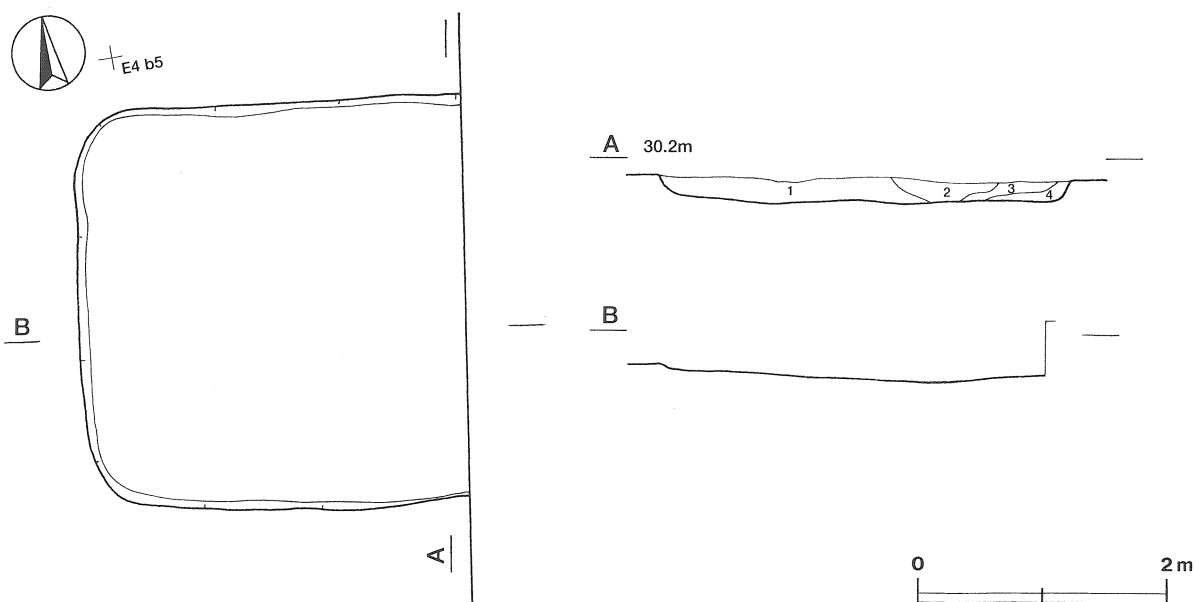
壁 壁高は5～9cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。土質は軟弱であり，踏み固められた部分は確認できない。

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 黒色 赤色粒子・白色粒子少量，ローム粒子微量 | 3 黒色 赤色粒子・ガラス質粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・赤色粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量，赤色粒子・白色粒子少量 |



第72図 第3号住居跡実測図

遺物 土師器片2点、礫1点のみの出土である。土器はいずれも小片で図示できなかった。

所見 本跡は、東部が調査区域外に延びているため、全容を確認できなかった。また、床面が軟弱であり柱穴や炉等が確認できなかった。時期は、出土土器の土師器甕や周囲の住居跡から、中期（5世紀中葉）の可能性が高いと思われる。

第5号住居跡（第73図）

位置 調査区の南部，D4 d2区。

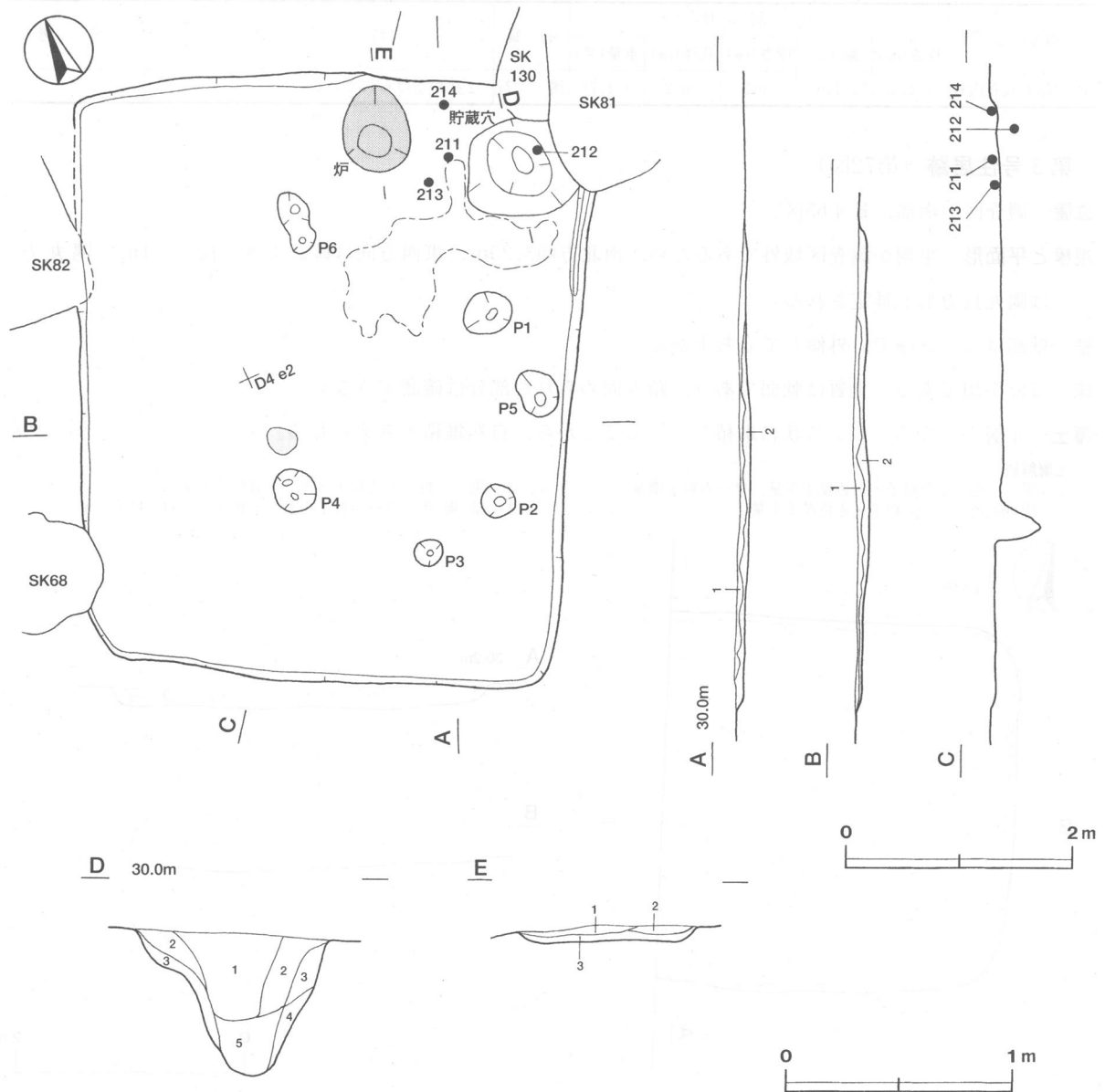
重複関係 北東コーナー部を第81号土坑と第130号土坑，西壁側を第82号土坑と第68号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.38m，短軸4.4mの長方形である。

主軸方向 N-29°-E

壁 壁高は3～6cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，貯蔵穴付近から炉にかけてよく踏み固められている。



第73図 第5号住居跡実測図

炉 北壁際の中央部に位置している。長径52cm，短径41cmの楕円形で，床面を7cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内の覆土に焼土粒子・炭化粒子を少量含む程度で，炉床は硬くない。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 6か所（P1～P6）。P1は長径44cm，短径36cmの楕円形，P2は径28cmの円形で，深さは33～35cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P3・P4は径23・37cmの円形で，深さ28・40cmである。規模と配列からいずれも補助柱穴と考えられる。P5・P6は，長径42・55cm，短径27・32cmの楕円形で，深さ26・33cmである。性格は不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し，長軸110cm，短軸86cmの楕円形で，深さ63cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 褐灰色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

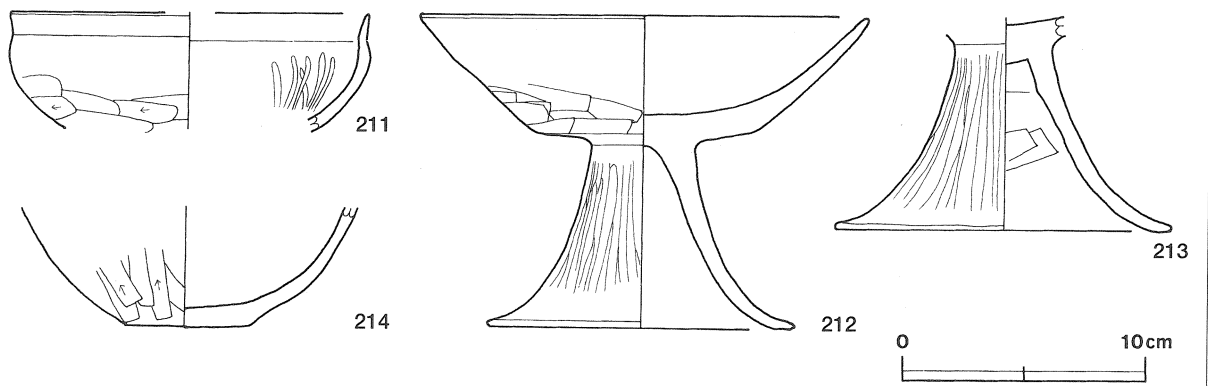
覆土 2層からなる。確認できた面からの覆土は薄い，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 白色粒子・赤色粒子少量，ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量

遺物 土師器片40点，礫5点が出土している。主な遺物は炉の周辺と貯蔵穴内から出土している。第74図の211～214はいずれも土師器である。床面では，211の坏，213の高坏及び214の甕が炉の東側からそれぞれ出土している。212の高坏は，貯蔵穴の覆土上層から横位のつぶれた状態で出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や床面及び貯蔵穴内の出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と考えられる。



第74図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 211	坏 土師器	A [14.6] B (4.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はやや外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・雲母・白色粒子 にぶい黄橙色 普通	25%
212	高坏 土師器	A 18.4 B 12.9 D 12.2 E 7.6	口縁部一部欠損。脚部はラッパ状を呈し，裾部は大きく開く。坏部は外面下位に稜をもち，内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面下位横位のヘラ削り，内面ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き，内面ヘラナデ。裾部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 にぶい黄橙色 普通	90% P L 20
213	高坏 土師器	B (8.8) D 13.7 E 7.6	坏部欠損。脚部はラッパ状を呈し，裾部は大きく開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面ヘラナデ。裾部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子・小礫 橙色 普通	50%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 214	甕 土師器	B(4.9) C 5.0	底部から体部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 褐灰色 普通	20%

第7号住居跡（第75図）

位置 調査区の南西部，D 2 c6区。

重複関係 中央部を第159号土坑，北西壁を第158号土坑，南東壁を第347号土坑にそれぞれ掘り込まれているが，床面までは達していない。

規模と平面形 長軸5.05m，短軸4.87mの隅丸方形である。

主軸方向 N-33°-W

壁 壁高は46～66cmで，ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で，踏み固められた部分は確認できない。

ピット 11か所（P1～P11）。P1～P3は径33～39cmの円形で，深さ12～66cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P4は長径27cm，短径23cmの楕円形で，深さ33cmである。南東壁寄りに位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P5・P6・P8～P10は径45～51cmの円形，P7・P11は長径62・87cm，短径44・64cmの楕円形で，深さは10～22cmである。いずれも性格は不明である。

炉 中央部からやや北西寄りに位置している。長径98cm，短径84cmの楕円形で，床面を6cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は，出入口施設をとおる住居跡の主軸から，やや西側をさしている。炉内の覆土に焼土粒子や炭化粒子を中量から微量含む程度で，炉床は硬くない。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量 | | |

貯蔵穴 南西コーナー部に位置し，径51～56cmの円形で，深さは22cmである。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・白色粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

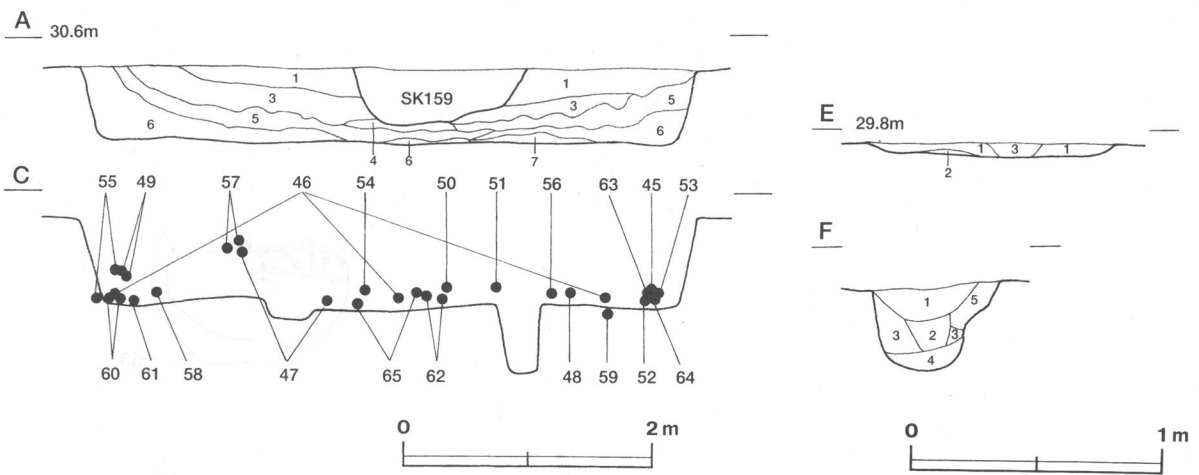
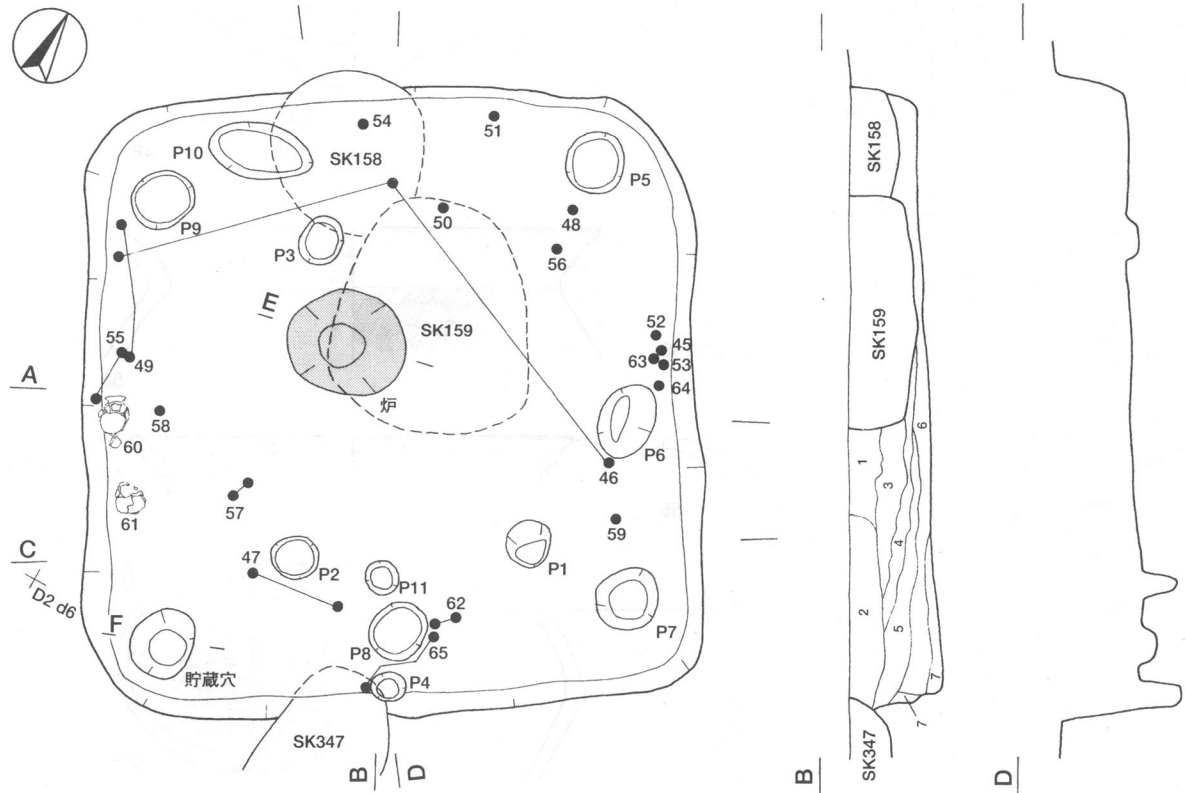
覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

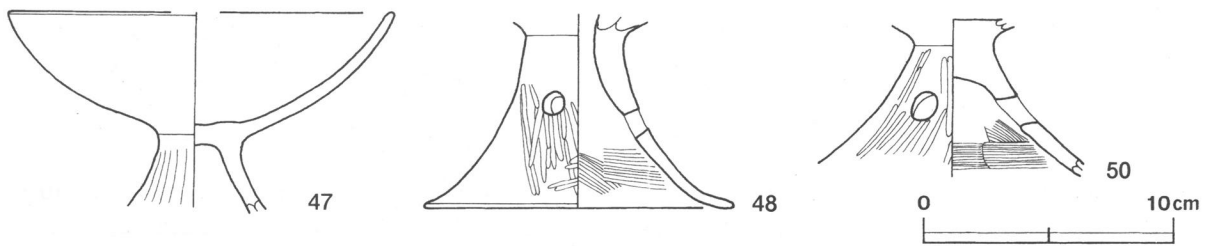
- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・赤色粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，赤色粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量，赤色粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・赤色粒子少量，炭化粒子微量 |
| 3 黒色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，赤色粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック・赤色粒子微量 | | |

遺物 土師器片249点，礫1点，攪乱等により混入したとみられる陶器片2点が出土している。遺物は南西壁際から南東壁際にかけてと，北コーナー付近の壁際から多く出土している。第76～78図の45～65は土師器である。覆土中層では，57の甕が中央部やや南寄りから出土している。覆土下層では，45の高坏が北東壁際から正位の状態，47の高坏がP2の南側から逆位の状態，48の高坏と56の壺がP5の南側から，49の高坏が南西壁際から，50の高坏が中央部やや北寄りから，51の埴が北西壁際から正位の状態，52・53の埴が北東壁際から斜位の状態，54の埴が北西壁際から斜位の状態，58の甕が南西壁寄りから，62の台付甕がP8の東側から，63の台付甕が北東壁際から出土している。また，46の高坏は南西壁際と北西壁寄り及びP6の南側から出土した破片が接合したものである。床面では，55の壺が南西壁際から，59の台付甕が北東壁寄りから，60・61の台付甕が南西壁際から横位のつぶれた状態で，64の台付甕が北東壁際から，65の台付甕が南東壁際から出土している。

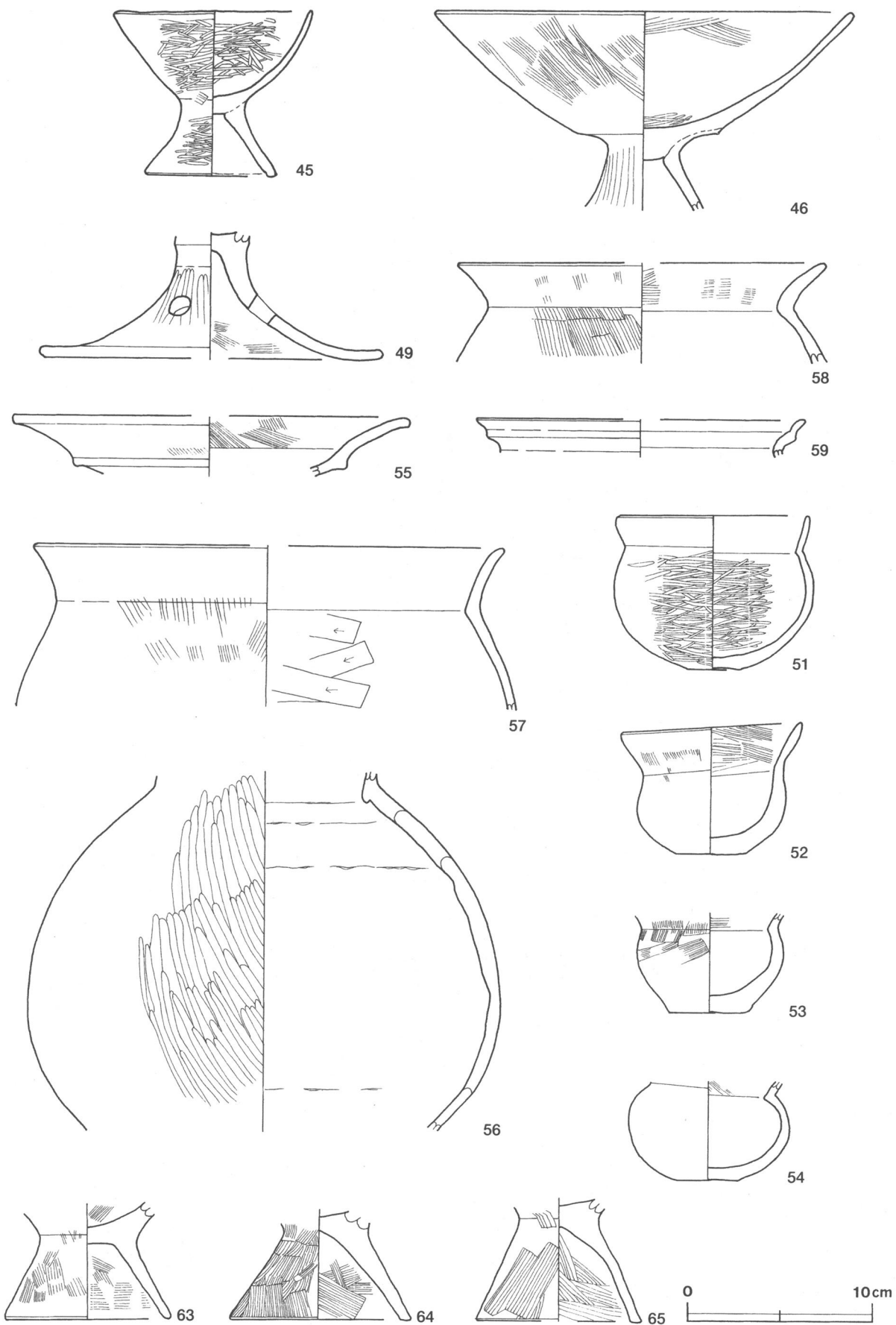
所見 本跡の時期は、遺構の形態や覆土下層及び床面からの出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と思われる。



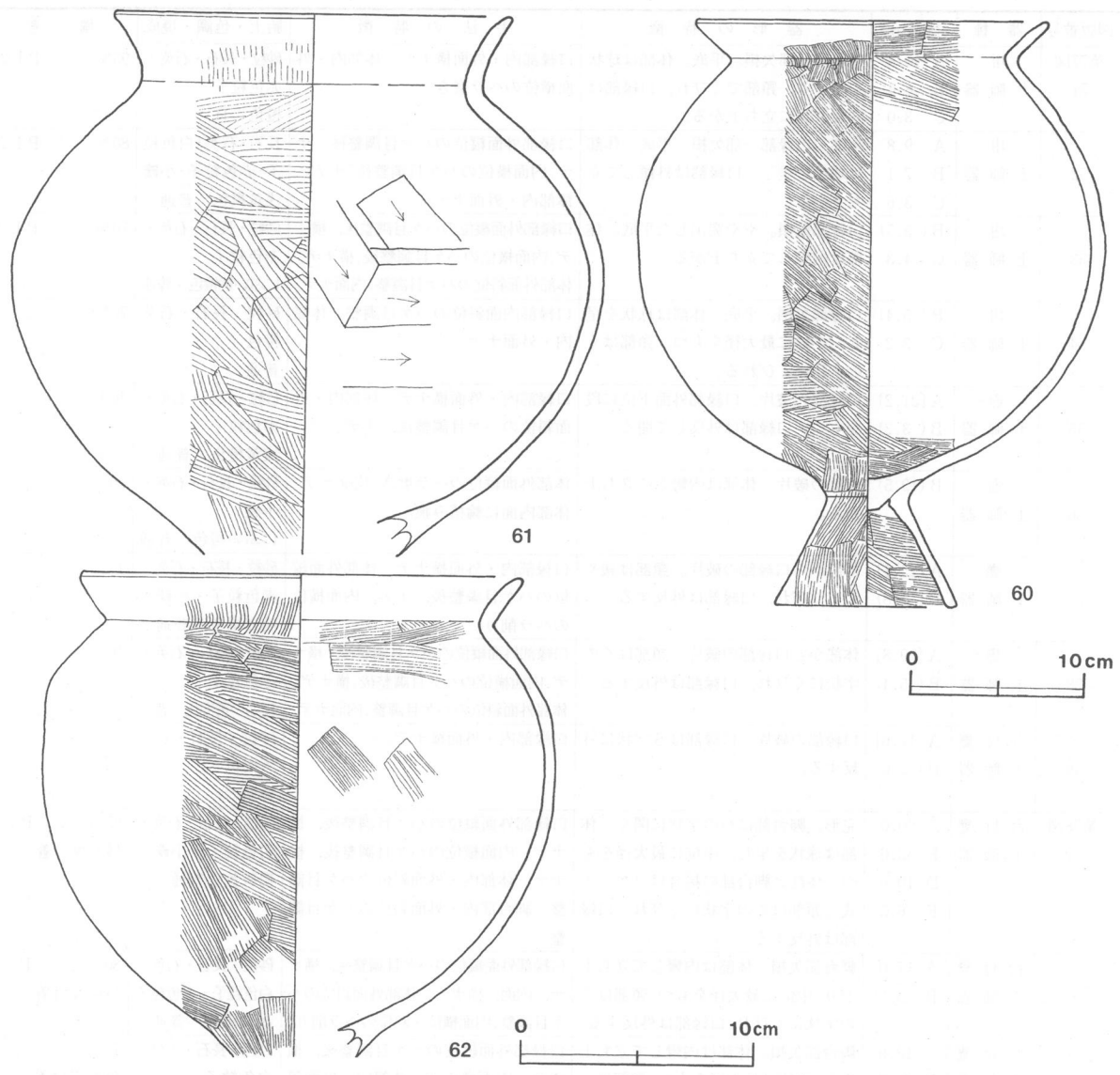
第75図 第7号住居跡実測図



第76図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



第77图 第7号住居跡出土遺物実測図(2)



第78図 第7号住居跡出土遺物実測図(3)

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 45	高 土 師 器	A 10.5 B 9.1 D 7.1	口縁部一部欠損。脚部はハの字状に開く。坏部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面横位のヘラ磨き。脚部外面横位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	95% P L 20
46	高 土 師 器	A 22.3 B (10.9) E (3.2)	脚部から口縁部の破片。脚部は外方に開く。坏部は外面下位に弱い稜をもち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面斜位のハケ目調整後、ナデ、内面下位縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・白色粒子・赤色粒子 灰白色 普通	70% P L 20
第76図 47	高 土 師 器	A [15.2] B (8.0) E (3.0)	脚部から口縁部の破片。脚部は外方に開く。坏部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。脚部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・小礫 灰白色 普通	60% P L 20
48	高 土 師 器	B (7.8) D 12.2 E 7.0	坏部欠損。脚部はラッパ状に開き、中位に3孔が空けられている。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面斜位のハケ目調整後、ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	40%
第77図 49	高 土 師 器	B (6.8) D [18.0] E (6.6)	脚部の破片。脚部はラッパ状を呈し、裾部は大きく開く。中位に3孔が空けられている。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面斜位のハケ目調整後、ナデ。裾部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・小礫 にぶい黄褐色 普通	35% P L 20
第76図 50	高 土 師 器	E (6.4)	脚部の破片。脚部は外方に開き、中位に3孔が空けられている。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	30%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 51	埴 土師器	A 10.3	口縁部一部欠損。平底。体部は球状を呈する。頸部でくびれ、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面横位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 橙色 良	95% P L 20
		B 8.4				
		C 3.0				
52	埴 土師器	A 9.8	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は球状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、ナデ、内面横位のハケ目調整後、ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・白色粒子・赤色粒子・小礫 浅黄橙色 普通	80% P L 20
		B 7.1				
		C 3.6				
53	埴 土師器	B (5.5)	口縁部欠損。やや突出した平底。体部は内彎して立ち上がる。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	70% P L 20
		C 4.3				
54	埴 土師器	B (5.4)	口縁部欠損。平底。体部は球状を呈し、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれる。	口縁部内面斜位のハケ目調整。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	70%
		C 3.2				
55	壺 土師器	A [21.2]	口縁部の破片。口縁部外面下位に段をもつ。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面斜位のハケ目調整後、ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 浅黄橙色 普通	10%
		B (3.2)				
56	壺 土師器	B (19.5)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・小礫 にぶい橙色 普通	20%
57	甕 土師器	A [25.1]	体部から口縁部の破片。頸部は緩やかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のハケ目調整後、ナデ、内面横位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英・赤色粒子・小礫 明赤褐色 普通	15%
		B (8.8)				
58	甕 土師器	A [19.8]	体部から口縁部の破片。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	10%
		B (5.4)				
59	台付甕 土師器	A [17.6]	口縁部の破片。口縁部はS字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	5%
		B (2.0)				
第78図 60	台付甕 土師器	A 20.0	完形。脚台部はハの字状に開く。体部は球状を呈し、中位に最大径をもつ。体部と脚台部の接合はソケット式。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部内・外面斜位のハケ目調整。脚台部内・外面斜位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 褐灰色 普通	95% P L 20 外面煤付着
		B 33.6				
		D 10.6				
		E 6.3				
61	台付甕 土師器	A 17.0	脚台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面横位・斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英・白色粒子・赤色粒子 浅黄褐色 普通	80% P L 20 外面煤付着
		B (23.3)				
62	台付甕 土師器	A 18.9	脚台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ。内面横ナデ。体部内・外面斜位のハケ目調整。	砂粒・長石・雲母・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	70% 外面煤付着
		B (20.9)				
第77図 63	台付甕 土師器	B (6.3)	脚台部の破片。脚台部はハの字状に開く。	脚台部内・外面斜位のハケ目調整後、横ナデ。	砂粒・長石・石英・小礫 橙色 普通	15%
		D 8.8				
		E 4.8				
64	台付甕 土師器	B (6.0)	脚台部の破片。脚台部はハの字状に開く。	脚台部内・外面斜位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 橙色 普通	15%
		D 9.8				
		E 5.0				
65	台付甕 土師器	B (6.7)	脚台部の破片。脚台部はハの字状に開く。	脚台部内・外面斜位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 明褐色 普通	5%
		D [8.8]				
		E 5.6				

第8号住居跡（第79・80図）

位置 調査区の中央部、C 3 i1区。

重複関係 東壁北コーナー寄りを第3号地下式壙に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸7.12m、短軸6.94mの方形である。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高は15～27cmで、やや外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅28～35cm、下幅9～15cm、深さ8～13cmで、断面形はU字状である。

壁溝土層解説

- 10 黒褐色 ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量
- 11 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子少量
- 12 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

床 主柱穴に囲まれた中央部が硬化している。北東コーナー部と南東コーナー部から焼土塊が確認された。

ピット 7か所（P1～P7）。P1・P3・P4は長径40～57cm，短径35～43cmの楕円形，P2は径47cmの円形で，深さは31～86cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P5は径29cmの円形で，深さ25cmである。南壁寄りに位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は長径62cm，短径50cmの楕円形，P7は径23cmの円形で，深さは6～14cmである。P6は掘り込みが浅く，P7は中央寄りに位置していることから，性格は不明である。

ピット土層解説

P1

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

P4

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

P5

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

炉 中央から北西コーナー寄りに位置している。長径110cm，短径61cmの楕円形で，床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は出入口施設をとる住居跡の主軸とほぼ同じである。炉床は加熱を受けて赤変硬化し，長期間使用したと思われる。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，焼土中ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック少量，炭化粒子微量
- 3 にい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック微量

貯蔵穴 南壁の南西コーナー寄りに位置し，長径123cm，短径63cmの楕円形で，深さは43cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・白色粒子・赤色粒子少量，炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量

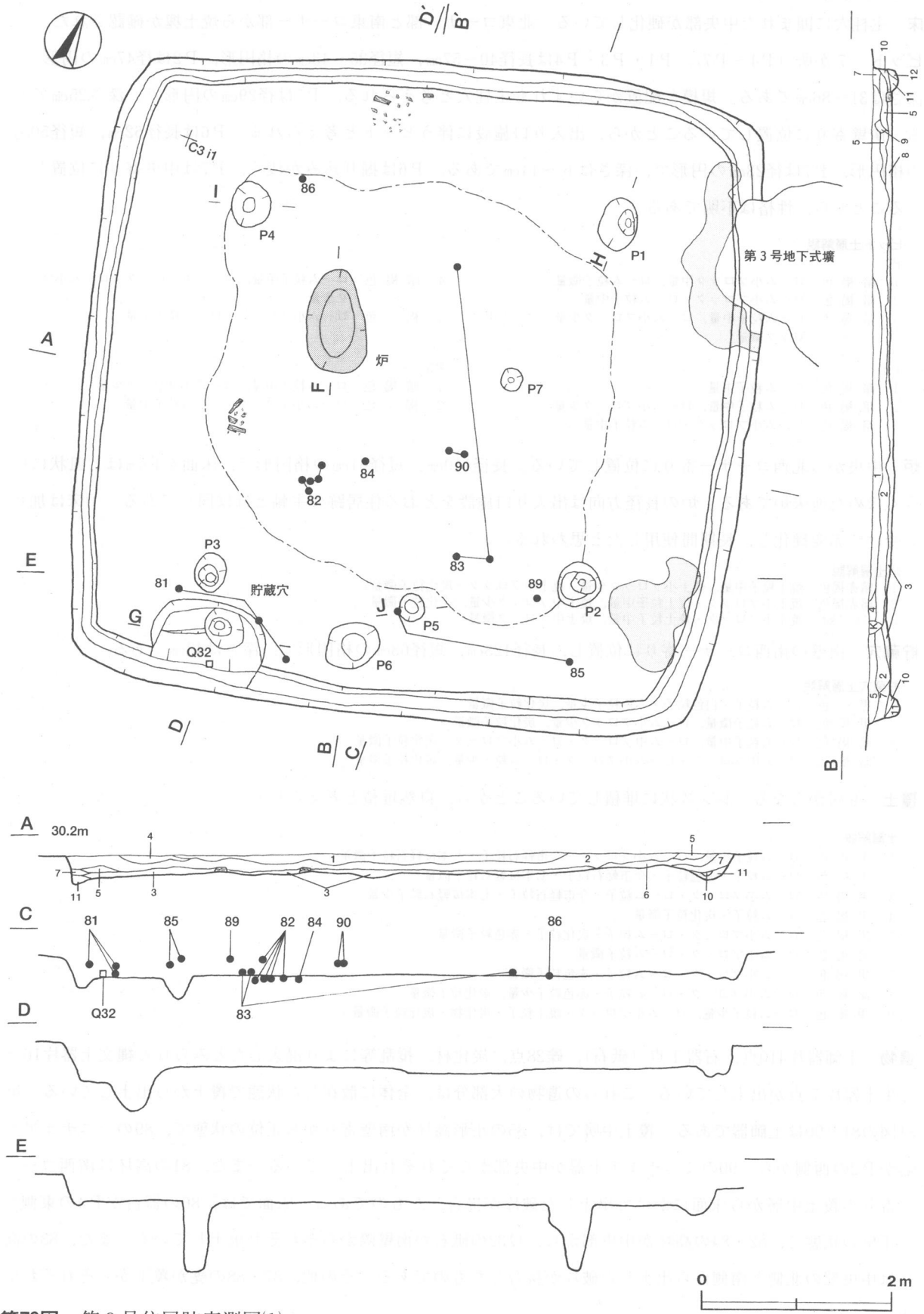
覆土 9層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

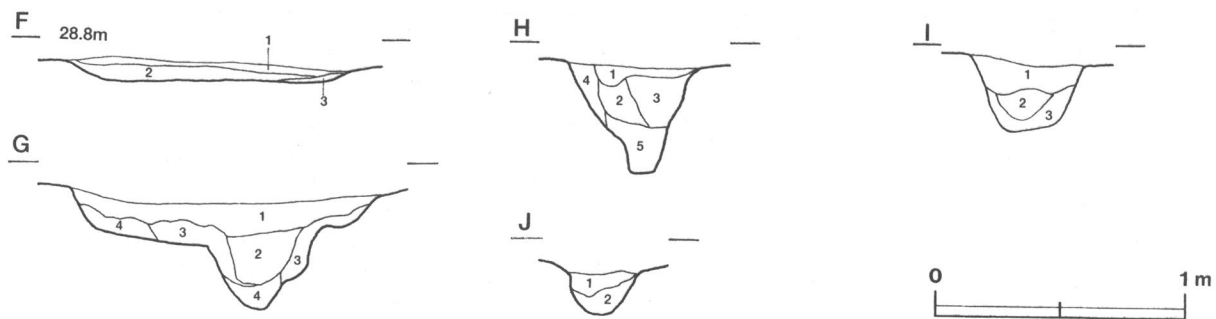
- 1 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・赤色粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 7 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・赤色粒子微量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・赤色粒子少量，炭化粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

遺物 土師器片410点，石器1点（砥石），礫28点，炭化材，攪乱等により混入したとみられる縄文土器片16点，弥生土器片7点が出土している。これらの遺物の大部分は，全体に散在した状態で覆土から出土している。第81図の81～90は土師器である。覆土中層では，85の小形高坏が南壁寄りから正位の状態，89のミニチュア土器がP2の西側から，90のミニチュア土器が中央部からそれぞれ出土している。また，81の高坏は南西コーナー寄りの覆土中層から床面に掛けて出土した破片が接合したものである。床面では，86の器台がP4の東側から正位の状態，82・84の高坏が中央部から，Q32の砥石が南壁際からそれぞれ出土している。また，83の高坏は中央部の北側と南側から出土した破片が接合したものである。その他，87・88の甕が覆土からそれぞれ出土している。

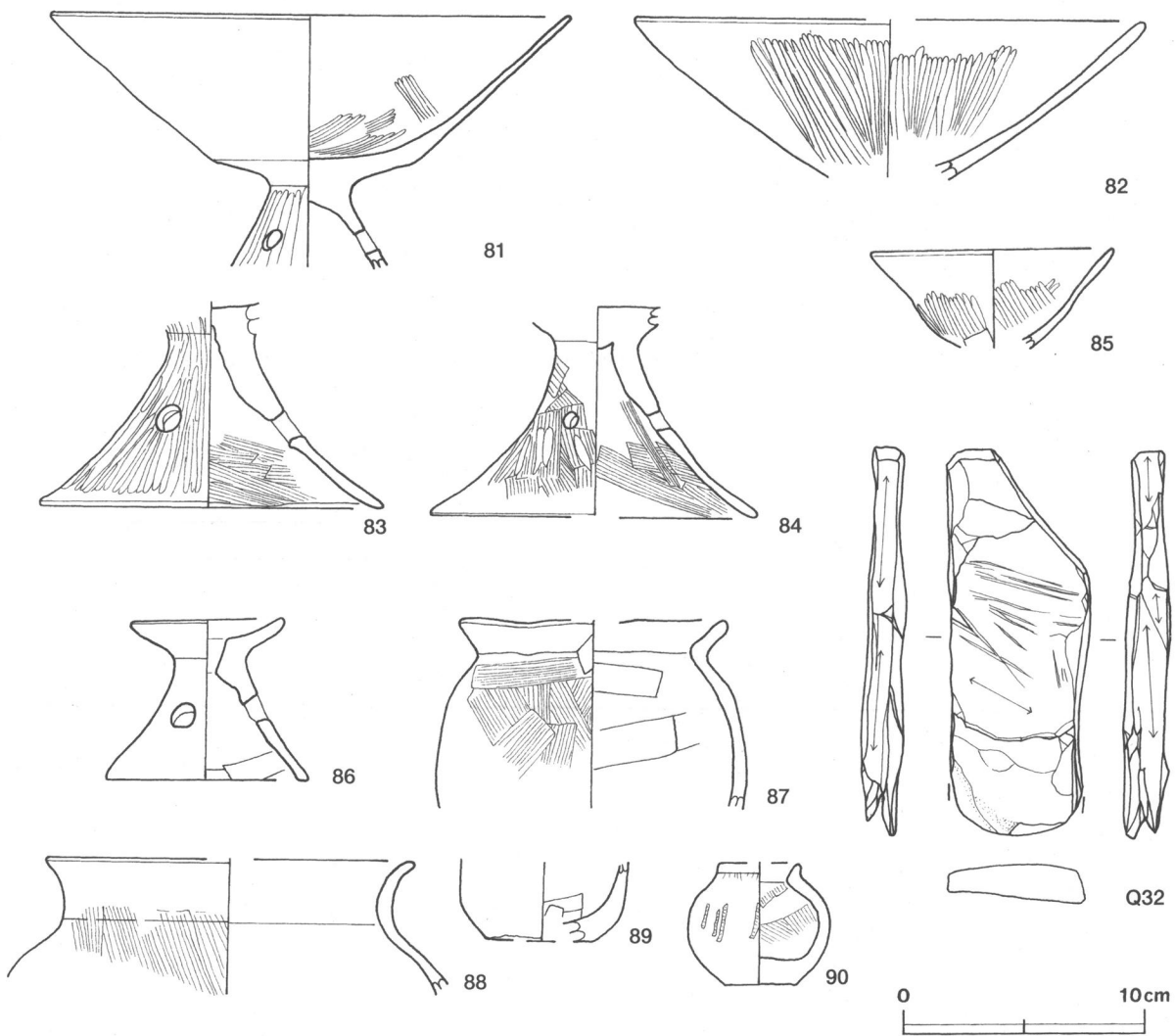
所見 本跡は、覆土・床面の炭化材及び焼土範囲の検出状況から判断して、焼失住居である可能性が高い。時期は、遺構の形態や床面からの出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と思われる。



第79図 第8号住居跡実測図(1)



第80図 第8号住居跡実測図(2)



第81図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 81	高坏 土師器	A 21.5 B (10.5) E (3.3)	坏部の一部・脚部下位欠損。脚部は外方に開き、中位に3孔が空けられている。坏部は外面下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ナデ、内面斜位のヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	75% P L 20

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 82	高坏 土師器	A [21.1] B (6.5)	坏部の破片。坏部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面縦位のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 赤灰色 普通	15%
83	高坏 土師器	B (8.5) D 13.8 E 7.2	脚部の破片。脚部はラッパ状に開き、中位に3孔が空けられている。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・ 雲母・白色粒子・ 赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	40%
84	高坏 土師器	B (8.7) D (13.4) E 7.3	脚部の破片。脚部はラッパ状に開き、中位に3孔が空けられている。	脚部外面斜位のハケ目調整後、縦位のヘラ磨き。内面斜位のハケ目調整。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 にぶい黄橙色 普通	40%
85	小形高坏 土師器	A 10.0 B (4.1)	坏部の破片。坏部は内彎気味に立ち上がり、中位から外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 灰黄褐色 普通	50%
86	器台 土師器	A 6.2 B 6.8 D 8.4 E 5.2	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開き、中位に3孔が空けられている。器受部は皿状を呈し、口縁部に至る。器受部中央に単孔がある。	口縁部内・外面横ナデ。脚部外面ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 黒褐色 普通	85% P L 21
87	甕 土師器	A [10.9] B (7.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	15%
88	甕 土師器	A [15.0] B (5.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 黒褐色 普通	15%
89	ミニチュア土器 土師器	B (3.4) C [4.2]	鉢形。底部から体部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	35%
90	ミニチュア土器 土師器	A [3.2] B 5.1 C 2.8	壺形。体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハケ目押圧、内面斜位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・ 赤色粒子 黄橙色 普通	50% P L 21

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第81図Q32	砥石	(15.7)	6.2	(1.2)	(177.8)	凝灰岩	断面は長方形を呈し、研ぎ面は3面。不規則な線刻12本有り。	P L 27

第9号住居跡 (第82図)

位置 調査区の中央部、C 3 i 4区。

規模と平面形 長軸5.65m、短軸5.57mの方形である。

主軸方向 N-47°-W

壁 壁高は23~35cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、踏み固められた部分は確認できない。

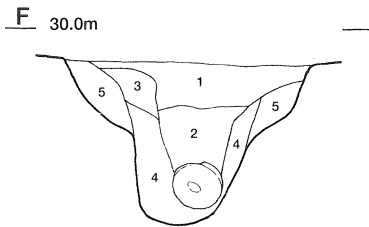
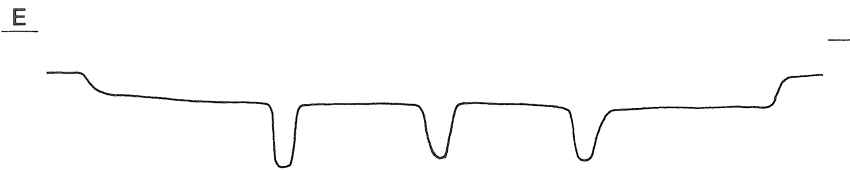
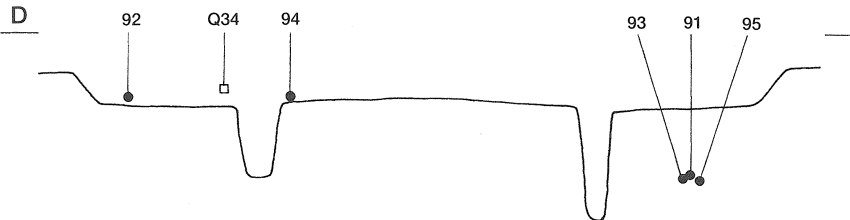
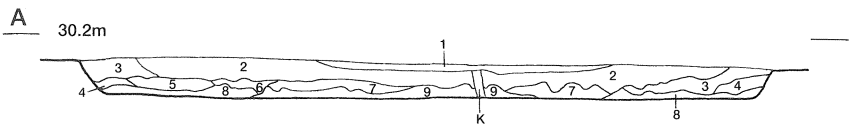
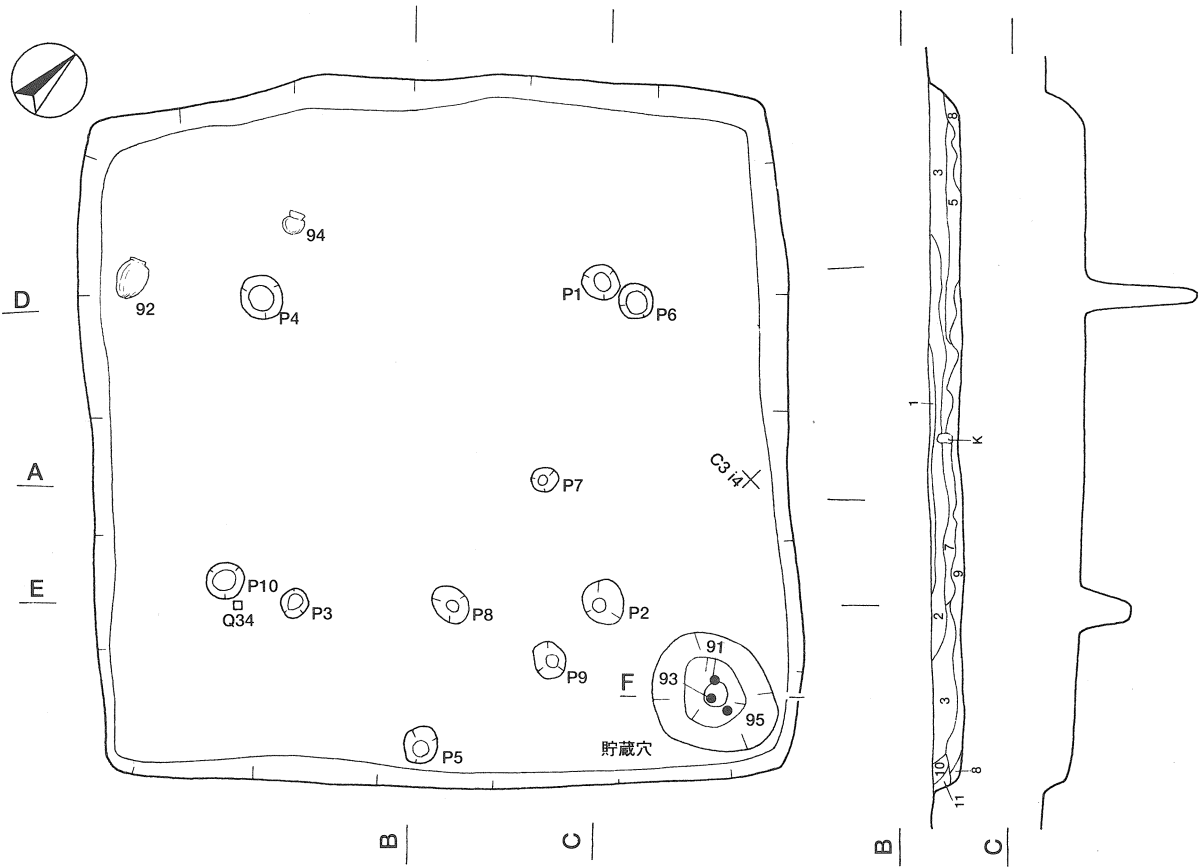
ピット 10か所 (P1~P10)。P1~P4は径25~37cmの円形で、深さ45~88cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P5は径30cmの円形で、深さ12cmである。南東壁寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6~P10は、径20~32cmの円形で、深さ12~44cmである。配列からいずれも補助柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径110cm、短径95cmの楕円形で、深さ72cmである。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|------|-----------------------------|
| 1 黒色 | 白色粒子少量、赤色粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量 | | |

覆土 11層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。



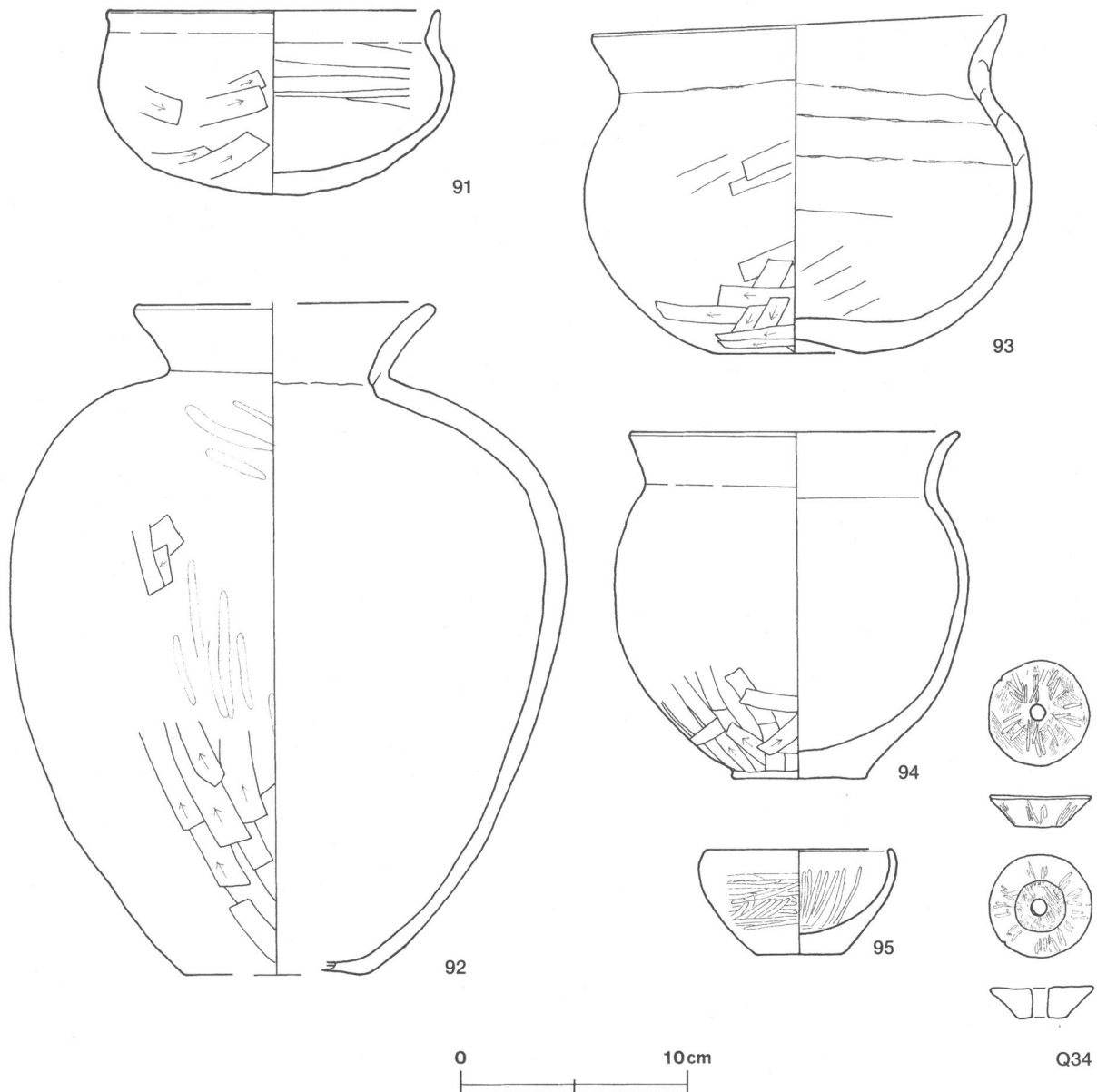
第82图 第9号住居跡实测图

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|--------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・赤色粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・赤色粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・赤色粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量 | 9 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、赤色粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子・赤色粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 赤色粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・赤色粒子微量 | | |

遺物 土師器片60点、石製品1点（紡錘車）、礫10点、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片3点、弥生土器片16点が出土している。これらの遺物の大部分は細片で、壁際の覆土に散在している。第83図の91～95は土師器である。覆土中層では、Q34の紡錘車がP10の東側から出土している。床面では、92の甕が南西壁際から横位の状態で、94の甕が北西壁寄りから横位の状態でそれぞれ出土している。貯蔵穴の覆土下層からは、91の椀が逆位の状態で、93の甕が横位の状態で、95の小形椀が正位の状態でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や床面及び貯蔵穴内の出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



第83図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 91	碗 土師器	A 14.4 B 8.2	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・小礫 赤褐色 普通	90% P L 21 口縁部内面稜痕
92	甕 土師器	A [12.9] B 29.7 C 8.0	底部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位縦位のヘラ削り、中位縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子・小礫 黄橙色 普通	95% P L 20 外面煤付着
93	甕 土師器	A 18.1 B 14.9 C 6.4	完形。中央がくぼむ平底。体部は内彎して立ち上がる。頸部は緩やかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。体部内面上位に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・小礫 灰褐色 普通	100% P L 20 外面煤付着
94	甕 土師器	A 14.4 B 15.2 C 6.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がる。頸部は緩やかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位縦位・斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・赤色粒子 橙色 普通	95% P L 20 外面煤付着
95	小形碗 土師器	A 8.1 B 4.6 C 3.8	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 にぶい橙色 良	100% P L 21

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第83図Q34	紡錘車	4.5	1.4	0.7	35.2	安山岩	断面は台形を呈し、放射状に線刻されている。	P L 27

第10号住居跡 (第85図)

位置 調査区の中央部、C 2 g7区。

重複関係 南東壁を第282号土坑に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸5.46m、短軸5.16mの方形である。

主軸方向 N-33°-W

壁 壁高は43~54cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、コーナー部を除いてよく踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1・P4は長径42・48cm、短径35・40cmの楕円形、P2・P3は径35・55cmの円形で、深さは39~50cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P5は長径56cm、短径42cmの楕円形で、深さ41cmである。南東壁寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

炉 中央部からやや北西寄りに位置している。長径79cm、短径56cmの楕円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は、出入り口施設をとる住居跡の主軸方向とほぼ同じである。炉内の覆土に焼土粒子や炭化粒子を中量から少量含む程度で、炉床は硬くない。

炉土層解説

1 にぶい赤褐色 炭化粒子・ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量

貯蔵穴 北コーナー部に位置し、長径56cm、短径44cmの楕円形で、深さは41cmである。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量

4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土 13層からなる。上層から中層にかけては、ローム小ブロックやローム粒子をまばらに含むことや不自然な堆積状況から判断して人為堆積、下層はレンズ状を呈していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色 ローム粒子微量

2 黒色 ローム粒子・白色粒子微量

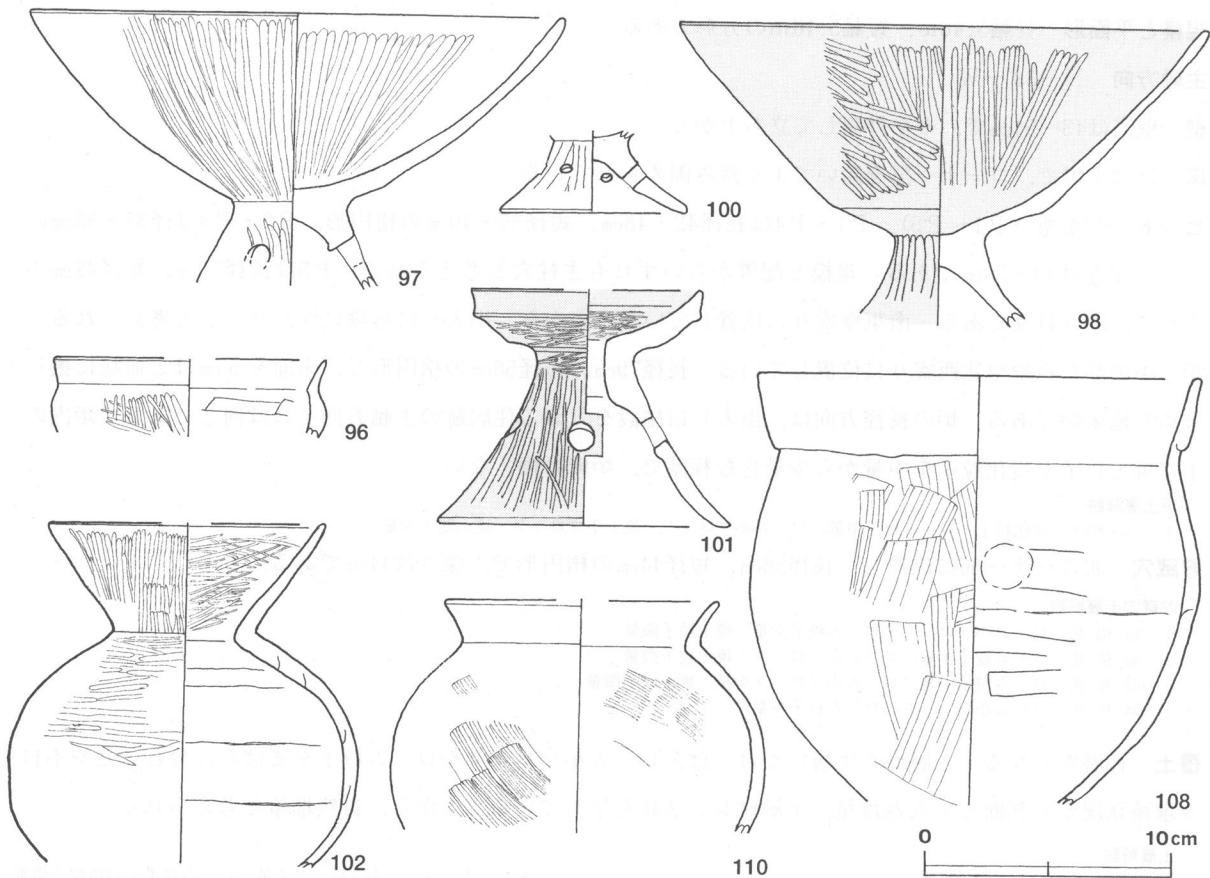
3 黒色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・白色粒子微量

4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・白色粒子微量

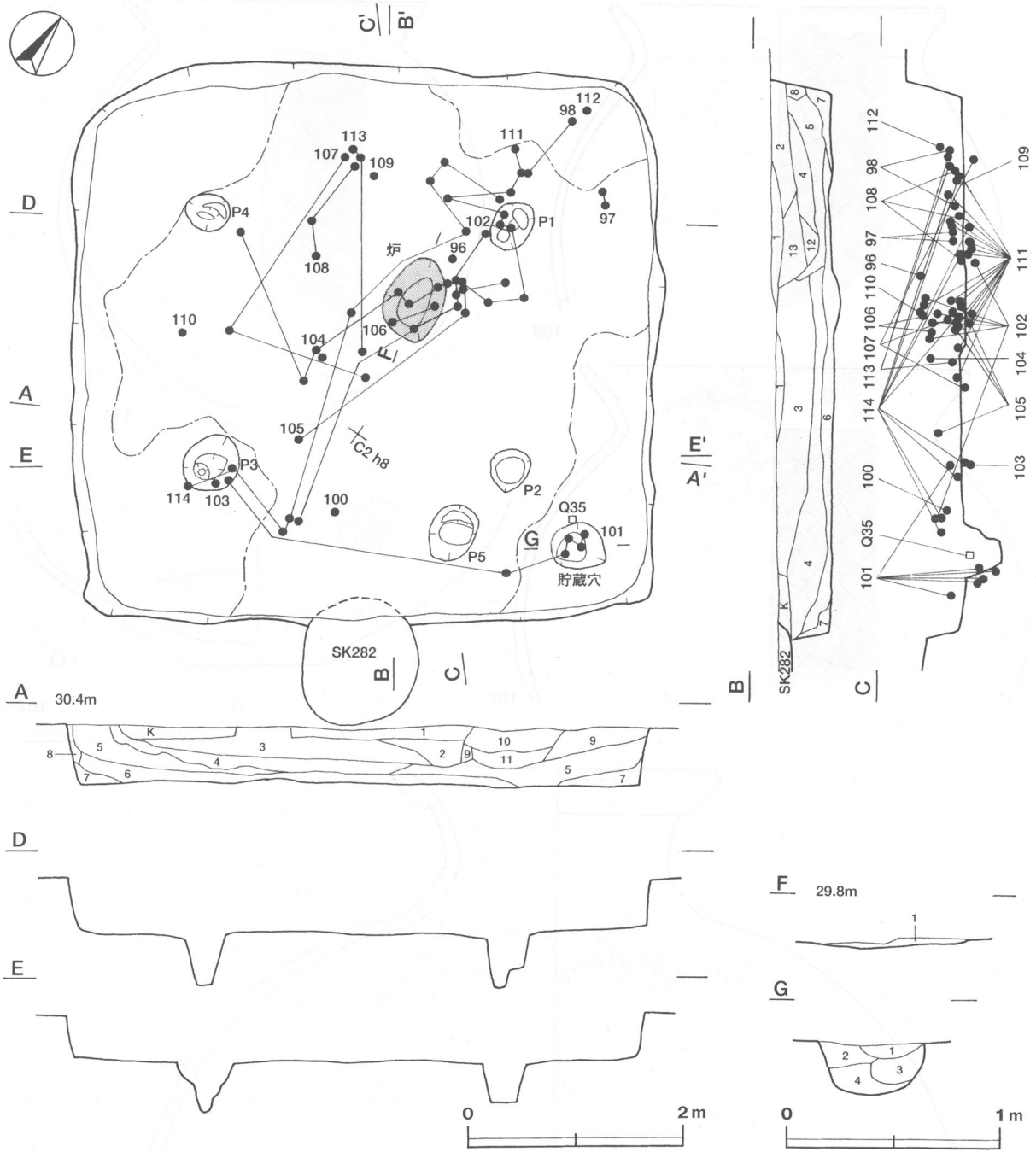
- | | | | |
|-------|----------------------------------|--------|-----------------------------|
| 5 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 白色粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量 | 11 黒褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量 | 12 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 白色粒子微量 |
| 8 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | 13 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック・白色粒子微量 |
| 9 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 白色粒子・赤色粒子微量 | | |

遺物 土師器片720点, 石器1点(砥石), 礫17点, 攪乱等により混入したとみられる縄文土器片7点, 弥生土器片21点が出土している。遺物は中央部から北東コーナー部にかけてと, 南東コーナー部の覆土に集中して出土している。第84・86~88図の96~114は土師器である。覆土上層では, 96の坏が炉の北側から出土している。102の罎は南側から中央部付近の覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合したものである。覆土中層では, 106の小形壺が炉の上面から, 104の壺が炉の南西側から, 110の甕が南西壁寄りから, それぞれ出土している。覆土下層では, 97の高坏が北側コーナー部から横位の状態で, 98の高坏は112の甕に逆位の重なった状態で, 108の甕が中央部の北西側から, 109の甕が北西壁寄りからそれぞれ出土している。また, 101の器台はP3の上面と南東コーナー付近の覆土下層から床面にかけて出土した破片が, 105の壺は中央部付近の覆土下層から床面にかけて出土した破片が, 107の甕は中央部付近の覆土下層から床面にかけて出土した破片が, 111の甕は中央部から北側付近の覆土中層から床面にかけて出土した破片が, 114の甕は南東壁寄りから北西壁寄りの覆土下層から床面にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。床面では, 100の小形高坏がP3の東側から正位の状態で, 103の壺がP3の上面から横位の状態で, Q35の砥石が貯蔵穴の北側からそれぞれ出土している。また, 113の甕は中央部から北西側にかけて出土した破片が接合したものである。

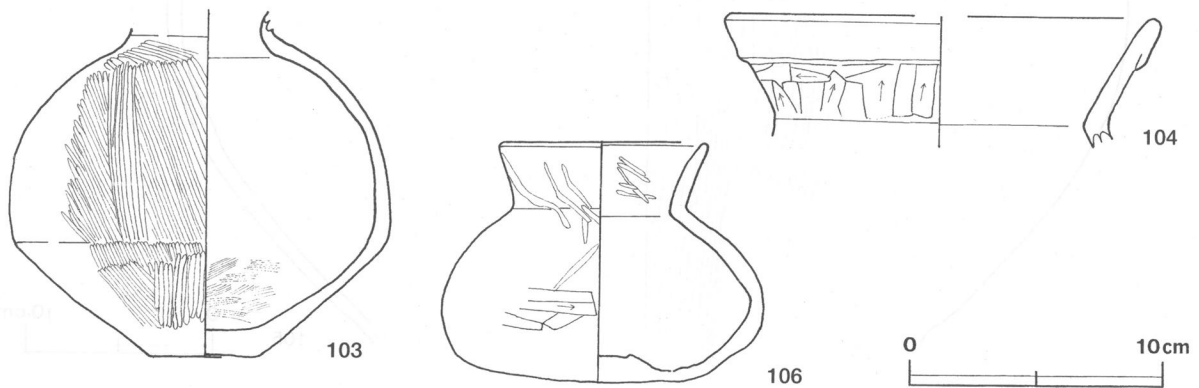
所見 本跡の時期は, 遺構の形態や覆土下層及び床面の出土土器から判断して前期(4世紀中葉)と思われる。



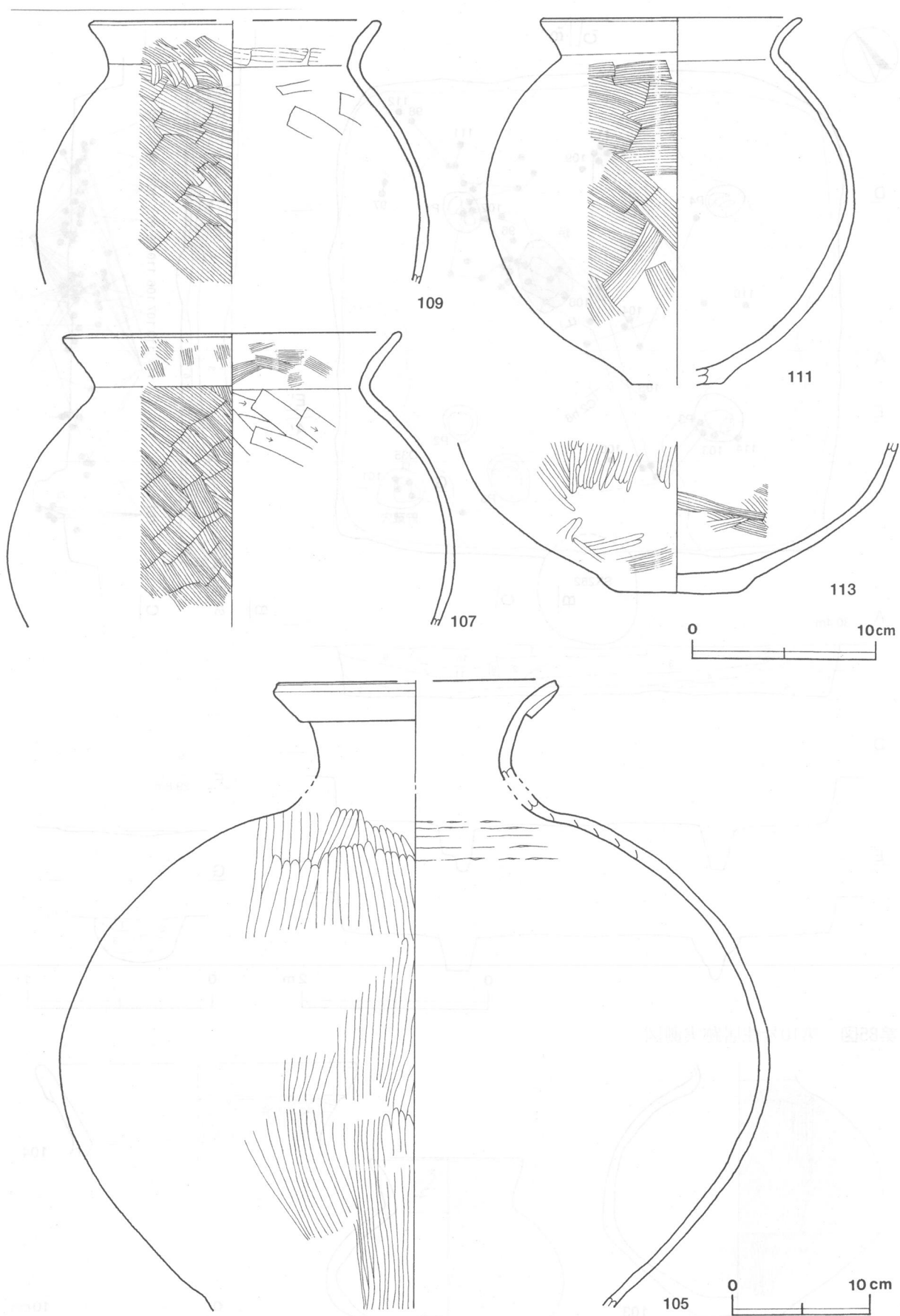
第84図 第10号住居跡出土遺物実測図(1)



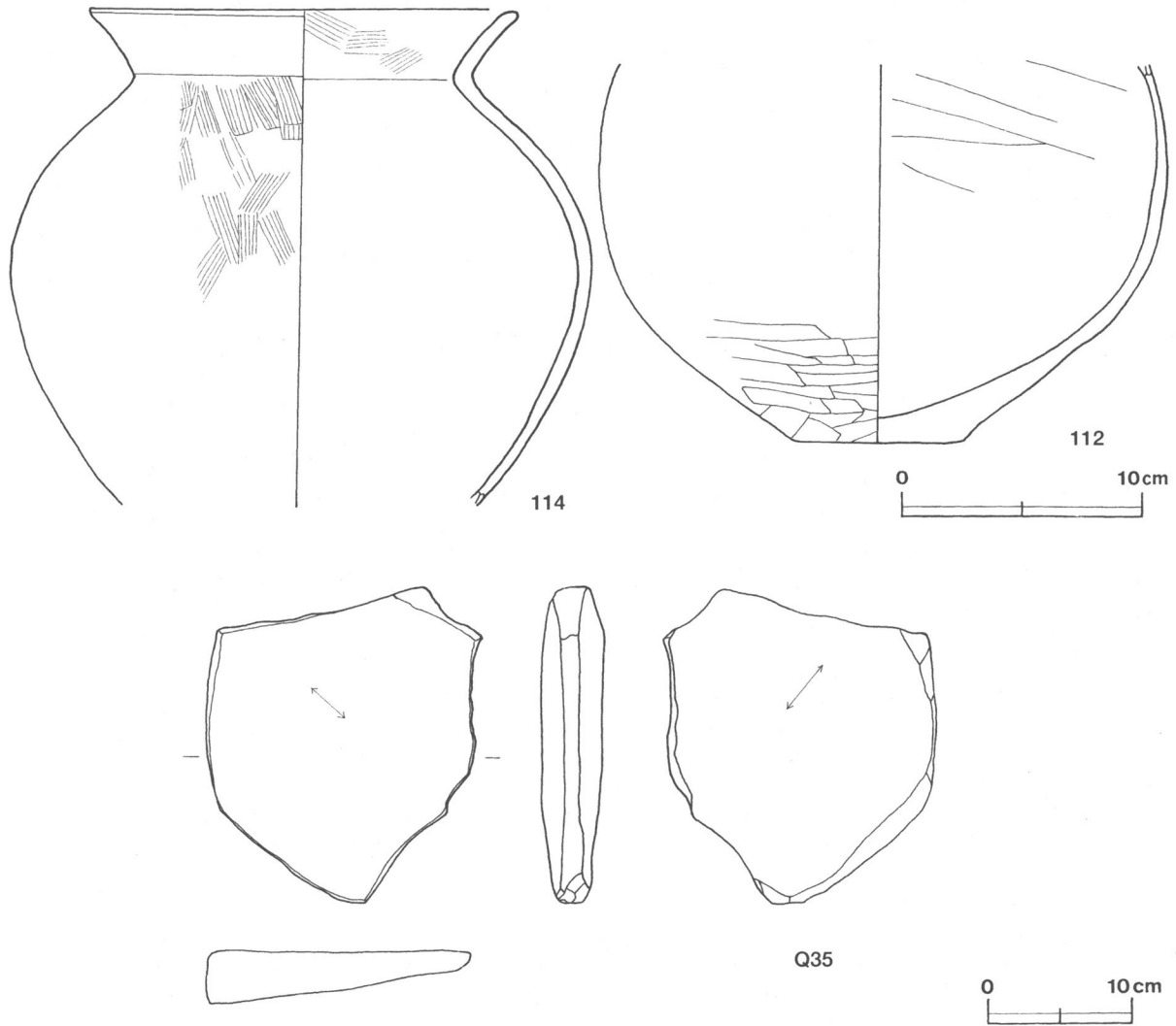
第85图 第10号住居迹实测图



第86图 第10号住居迹出土遗物实测图(2)



第87图 第10号住居跡出土遺物実測図(3)



第88図 第10号住居跡出土遺物実測図(4)

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 96	坏 土師器	A [10.7] B (3.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子 赤橙色 普通	10%
97	高坏 土師器	A 21.4 B (11.1) E (3.4)	脚部下位欠損。脚部は外方に開き、中位に3孔が空けられている。坏部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面縦位のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	80% P L 21
98	高坏 土師器	A 21.3 B (12.2) E (3.6)	口縁部一部・脚部下位欠損。脚部は外方に開く。坏部外面下位に稜をもち、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面縦位・斜位のヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。坏部内・外面、脚部外面赤彩。	砂粒・石英・白色粒子・小礫 にぶい赤褐色 普通	80% P L 21
100	小形高坏 土師器	B (3.4) D 7.5 E 3.0	坏部欠損。脚部はラッパ状に開き、中位に6孔が空けられている。	脚部外面縦位のヘラ磨き後、下位横ナデ。内面横ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・赤色粒子 にぶい橙色 普通	50% P L 21
101	器台 土師器	A [9.1] B (9.4) D 11.6 E 7.0	器受部一部欠損。脚部はラッパ状に開き、中位に4孔が空けられている。器受部は皿状を呈し、端部はつまみ上げられている。器受部中央に単孔がある。	口縁部内・外面横ナデ。器受部内・外面横位のヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。器受部内・外面、脚部外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 赤橙色 普通	75% P L 21
102	埴 土師器	A [11.0] B (14.2)	体部から口縁部の破片。体部は球状を呈し、中位に最大径をもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面縦位のヘラ磨き、内面縦位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 良	35%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 103	壺 土師器	B (13.8) C 4.2	口縁部欠損。平底。体部下位は外傾して立ち上がり、中位から緩やかに内彎する。	体部外面縦位のヘラ磨き、内面上位ナデ、下位斜位のハケ目調整後、ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・赤色粒子 明黄褐色 普通	80% P L 21
104	壺 土師器	A [16.7] B (5.2)	口縁部の破片。複合口縁を呈し、外傾して立ち上がる。	口縁端部ナデ、口縁折り返し部ナデ。頸部外面縦位・横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 にぶい赤褐色 普通	5%
第87図 105	壺 土師器	A [20.5] B (46.0)	体部から口縁部の破片。体部は球状を呈し、中位に最大径をもつ。頸部は直立し、口縁部は大きく外反する。複合口縁を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。体部上位に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	50% P L 21
第86図 106	小形壺 土師器	A 8.0 B 9.6	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ後、一部斜位のヘラ磨き。体部外面上位ナデ後、斜位のヘラ磨き、下位横位のヘラ削り、内面ナデ。底部外面剝離のため調整不明。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 赤褐色 良	95% P L 21
第87図 107	甕 土師器	A 17.8 B (16.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面斜位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面上位斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 橙色 普通	40%
第84図 108	甕 土師器	A 17.8 B (17.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部で緩やかにくびれ、口縁部はやや外傾する。複合口縁を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のハケ目調整、内面ナデ。体部内面に指頭圧痕・輪積み痕。	砂粒・長石・石英・赤色粒子・小礫 橙色 普通	50%
第87図 109	甕 土師器	A [15.4] B (14.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面斜位のハケ目調整後、横ナデ、内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・石英・白色粒子・小礫 黄褐色 普通	30%
第84図 110	甕 土師器	A [10.6] B (9.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面斜位のハケ目調整後、ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 赤褐色 普通	20%
第87図 111	甕 土師器	A 14.0 B 20.0 C (4.8)	体部一部欠損。やや突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・赤色粒子・小礫 黄褐色 普通	65% P L 21
第88図 112	甕 土師器	B (15.6) C 6.8	底部から体部の破片。やや突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。	体部外面下位横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・礫 橙色 普通	40%
第87図 113	甕 土師器	B (8.3) C 6.6	底部から体部の破片。やや突出した平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ磨き、内面斜位のハケ目調整。	砂粒・石英・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	20%
第88図 114	甕 土師器	A 17.6 B (20.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ、内面斜位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面上位斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・小礫 にぶい黄褐色 普通	50%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第88図Q35	砥石	22.2	18.9	3.7	1,880.9	砂岩	断面は長方形を呈し、研ぎ面は2面。光沢あり。	P L 27

第11号住居跡（第89図）

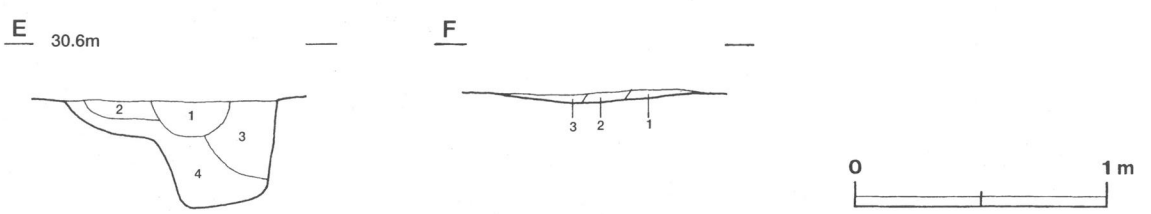
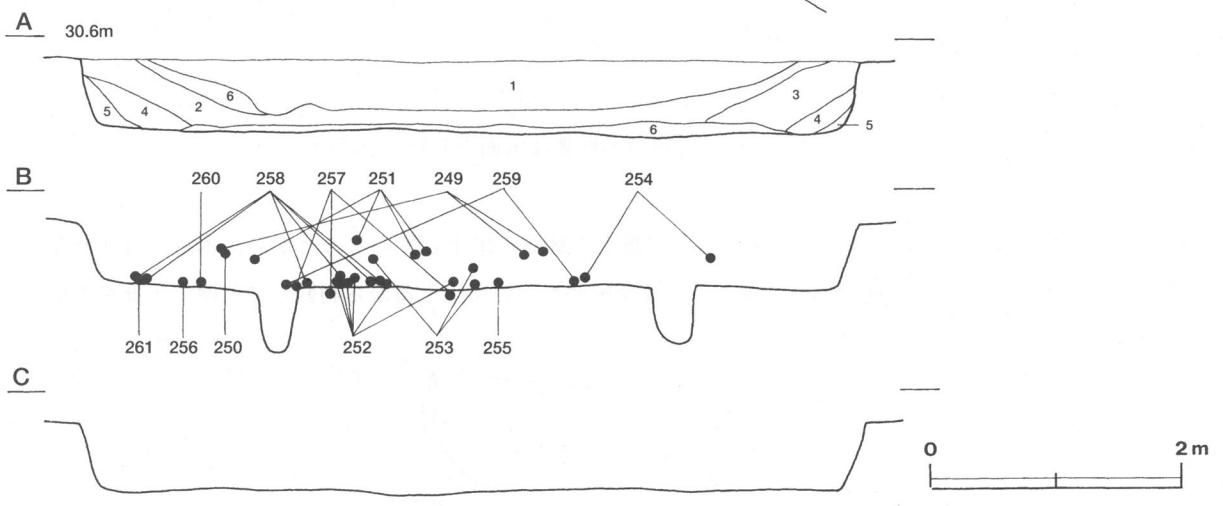
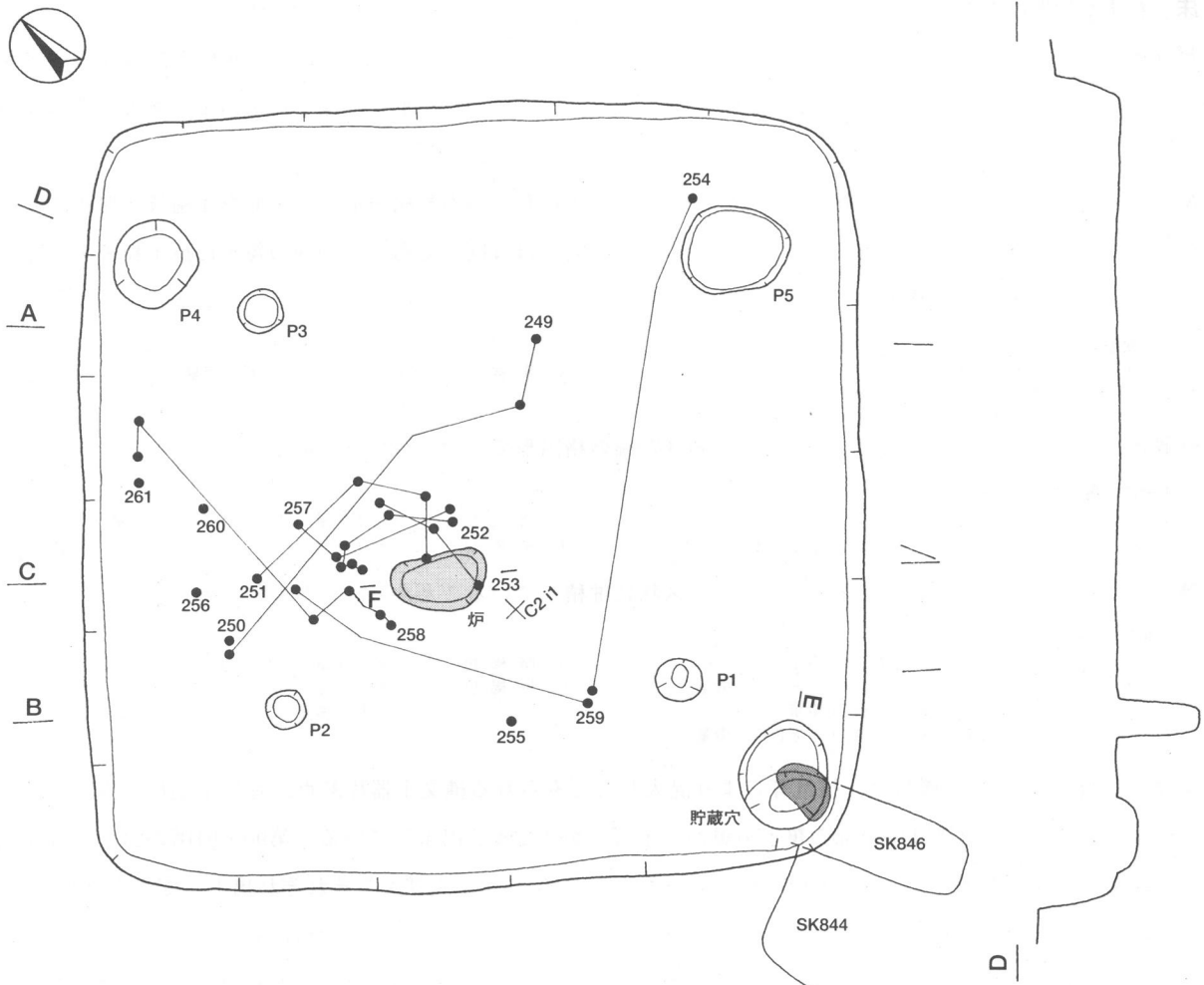
位置 調査区の西部，C 1 h0区。

重複関係 南コーナー部を第844・846号土坑に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸6.28m，短軸6.22mの方形である。

主軸方向 N-45°-W

壁 壁高は55～63cmで、ほぼ外傾して立ち上がる。



第89图 第11号住居跡実測図

床 わずかに凹凸がある。踏み固められた部分はない。南コーナー部から、粘土塊が確認された。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1~P3は径32~38cmの円形で、深さ45~71cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P4・P5は長径73・88cm、短径65・69cmの楕円形で、深さ12・14cmである。性格は不明である。

炉 中央部からやや西寄りに位置している。長径79cm、短径45cmの不整楕円形で、床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は、住居の主軸方向とほぼ同じである。炉内の覆土に焼土粒子を中量から多量含み、炉床はやや硬化している。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子多量, ローム小ブロック少量 | 3 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量 | |

貯蔵穴 南コーナー部に位置し、長径89cm、短径70cmの楕円形で、深さは43cmである。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |

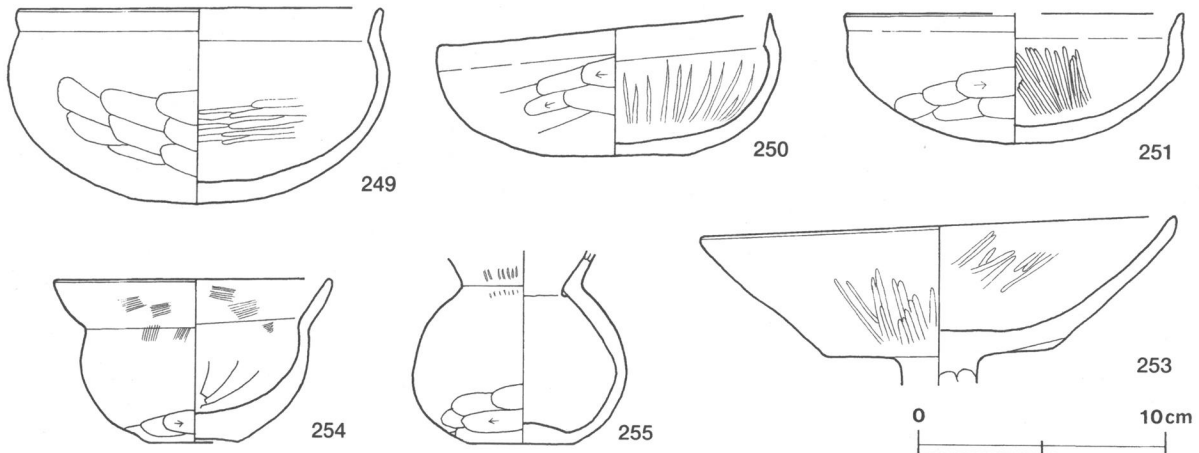
覆土 6層からなる。土層のしまりが強くレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

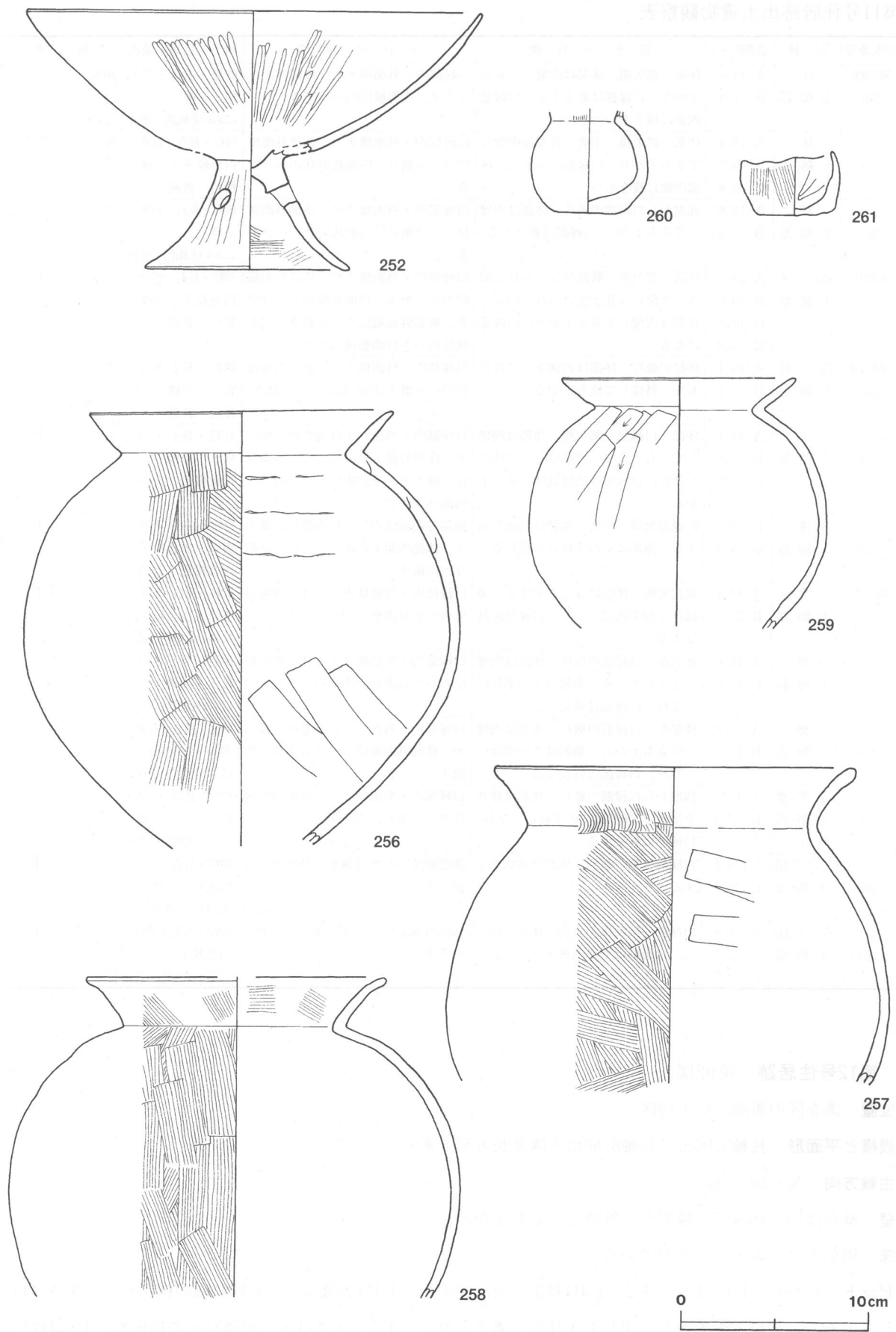
- | | |
|----------------------------|---|
| 1 黒色 ローム粒子少量, 白色粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・赤色粒子微量 | 6 灰褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子中量, 赤色粒子微量 | |
| 4 黒色 ローム粒子中量, 白色粒子・赤色粒子微量 | |

遺物 土師器片488点、礫17点、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片35点、弥生土器片3点、陶器2点が出土している。遺物は中央部の覆土中層から床面にかけて多く出土している。第90・91図の249~261は土師器である。覆土中層では、250の坏がP2の北側から、251の坏が中央部からそれぞれ出土している。249の坏、253の高坏は、中央部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。254の罎は、中央部と東コーナー付近の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。床面では、252の高坏、257の甕が中央部から、255の罎が南西壁寄りから斜位の状態で、256の甕が北西壁寄りから正位の状態で、260のミニチュア土器が北西壁寄りから、261のミニチュア土器が北西壁際からそれぞれ出土している。258の甕は中央部の床面と北西壁際から出土した破片が接合したもので、259の小形甕は床面のP1の西側と炉の西側から出土した破片が接合したものである。

所見 249~251の坏、253の高坏は、中央部付近の覆土中層から出土していることから、本跡には伴わないものと考えられる。時期は、遺構の形態や覆土下層及び床面からの出土土器から判断して前期(4世紀中葉)と思われる。



第90図 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第91图 第11号住居迹出土遺物実測図(2)

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 249	坏 土師器	A 14.6 B 7.9	体部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面横位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・白色 粒子・礫 にぶい赤褐色 普通	80%
250	坏 土師器	A 13.4 B 5.7 C 5.8	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 橙色 普通	80% P L 21
251	坏 土師器	A [13.6] B 5.3	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・ 小礫 にぶい赤褐色 普通	50%
第91図 252	高坏 土師器	A 24.2 B [13.9] D 10.8 E 5.8	坏部一部欠損。脚部はラッパ状に開き、上位に3孔が空けられている。坏部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面縦位のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のハケ目調整後、ナデ。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子・小礫 橙色 普通	80% P L 21
第90図 253	高坏 土師器	A [19.1] B (6.7)	坏部の破片。坏部は外面下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面縦位のヘラ磨き、内面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・白色 粒子・小礫 橙色 普通	40%
254	埴 土師器	A 11.1 B 6.6 C 3.6	体部・口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部外面上位縦位のハケ目調整後、横ナデ、下位横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・白色 粒子・小礫 浅黄橙色 普通	70% P L 22
255	埴 土師器	B (7.8) C 4.3	口縁部欠損。平底。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれる。	頸部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ。体部内面上位ナデ、下位ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・赤色粒子 浅黄橙色 普通	80% P L 21
第91図 256	甕 土師器	A 16.1 B (23.2)	底部欠損。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・白色粒子 にぶい黄橙色 普通	80% P L 22
257	甕 土師器	A 19.0 B (16.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・白色 粒子・小礫 にぶい黄橙色 普通	45%
258	甕 土師器	A [15.8] B (17.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部外面縦位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・白色粒子 にぶい橙色 普通	30%
259	小形甕 土師器	A 12.4 B (13.3)	体部から口縁部の破片。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 にぶい赤褐色 普通	60%
260	ミニチュア土器 土師器	B (5.6) C 3.5	口縁部欠損。壺形。体部は球状を呈する。	頸部縦位のハケ目調整。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 灰白色 普通	90% P L 22
261	ミニチュア土器 土師器	A 4.8 B 3.5 C 3.5	口縁部一部欠損。平底。体部は直立し、口縁部はやや内彎する。	体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい黄橙色 普通	95% P L 22

第12号住居跡 (第92図)

位置 調査区の西部、C 1 f 8区。

規模と平面形 長軸5.06m、短軸3.86mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-50°-E

壁 壁高は10~18cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。

床 褐色のローム土で、平坦である。

ピット 6か所 (P1~P6)。P2~P4は径35~38cmの円形、P1は長径52cm、短径45cmの楕円形で、深さは14~25cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P5は長径41cm、短径35cmの楕円形、P6は径51cmの円形で、深さは8・12cmである。いずれも性格は不明である。

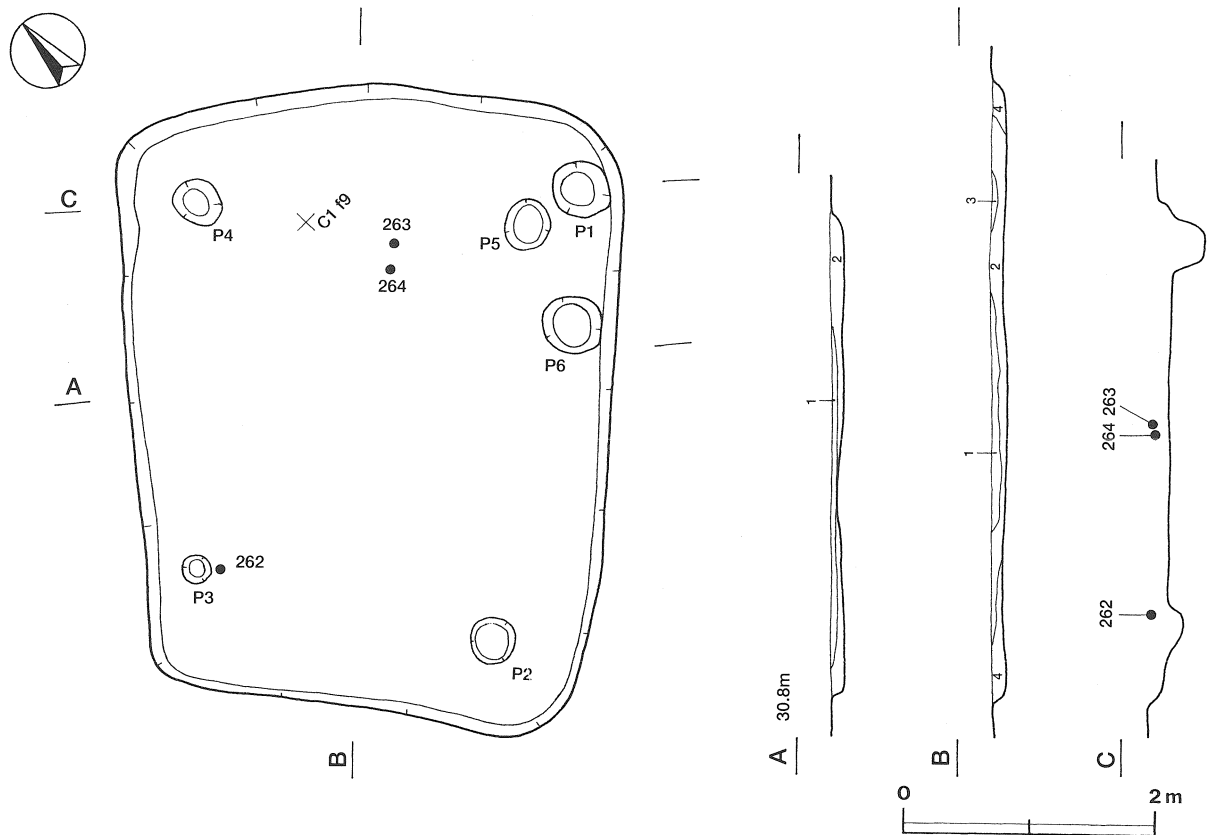
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

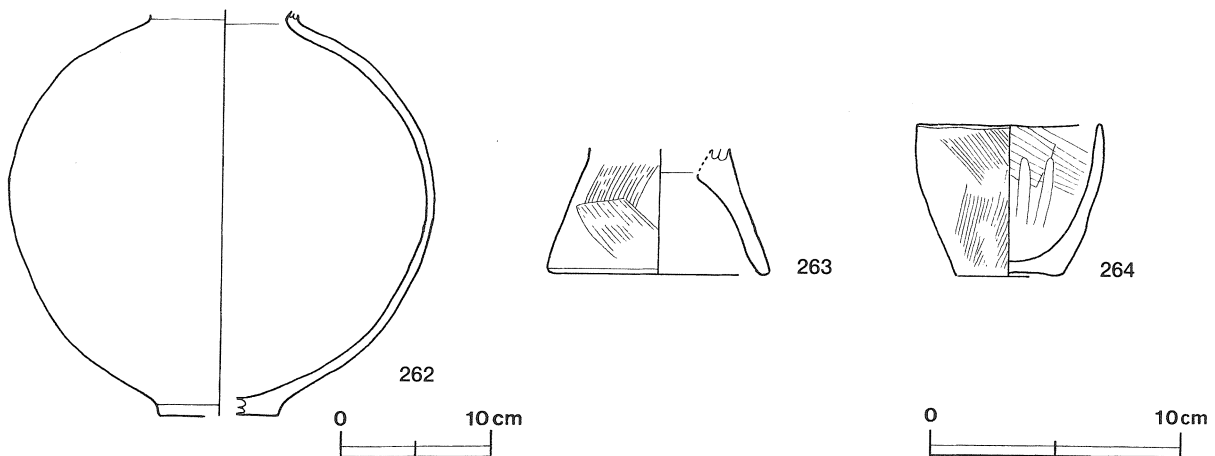
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 黒色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量

遺物 土師器片250点、礫6点、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片12点が出土している。遺物は全体の覆土に散在した状態で出土している。第93図の262～264は土師器である。いずれも覆土下層から確認され、262の壺がP3の南東側から、263の台付甕と264のミニチュア土器が中央部の北東寄りからそれぞれ出土している。

所見 264は、ハケ目調整が施されている鉢形のミニチュア土器で、第13号住居跡からも同様の土器が出土している。時期は、遺構の形態や覆土下層からの出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と思われる。



第92図 第12号住居跡実測図



第93図 第12号住居跡出土遺物実測図

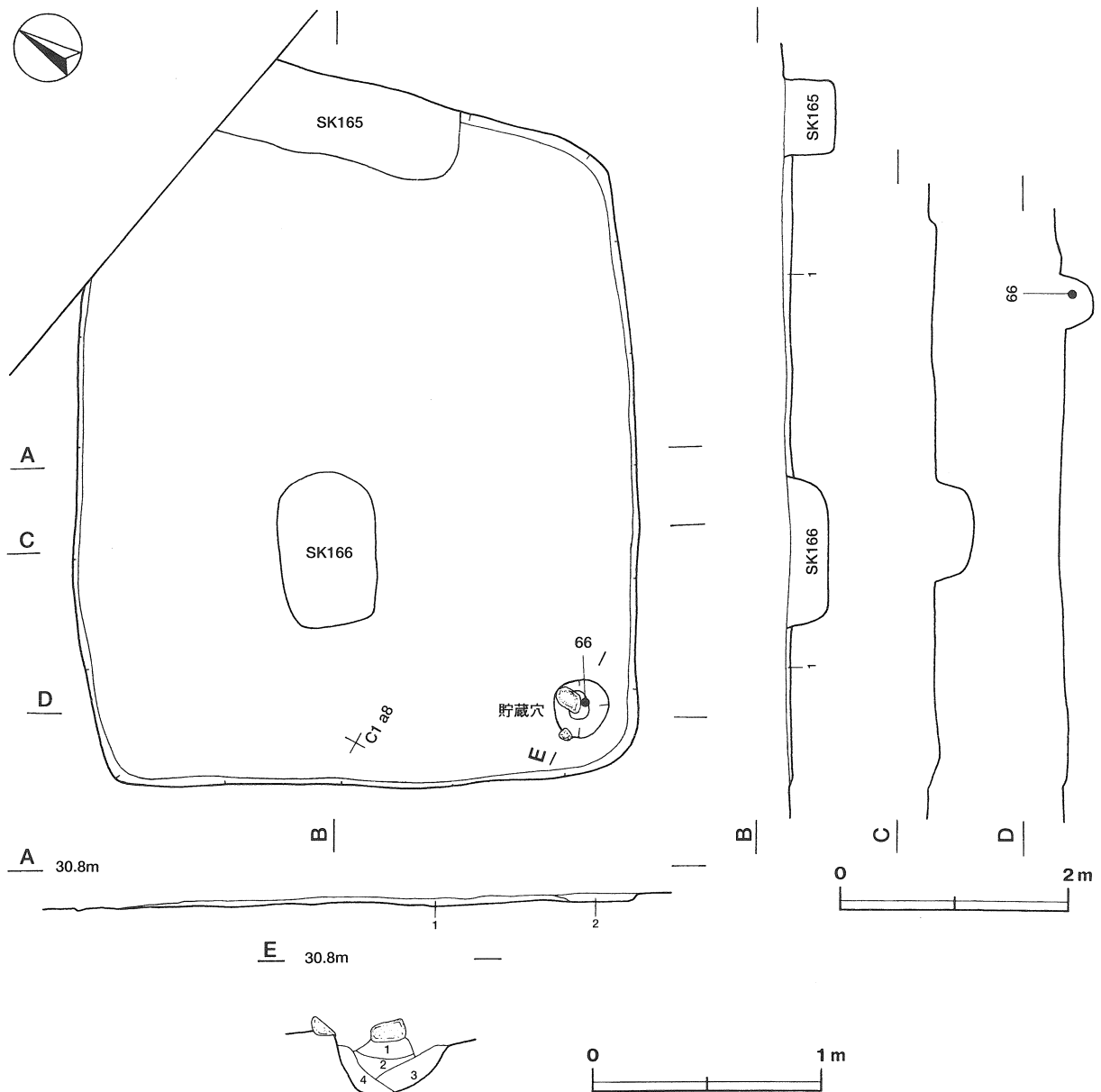
第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 262	壺 土師器	B (27.0) C [7.8]	底部から体部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 中位に最大径をもつ。	体部外面剥離のため調整不明, 内面ナデ。	砂粒・石英・白色 粒子・小礫 赤橙色 普通	40%
263	台付甕 土師器	D 8.6 E 5.0	脚台部の破片。脚台部はハの字状に開く。	脚台部外面斜位のハケ目調整, 内面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・小礫 橙色 普通	5%
264	ミチュア土器 土師器	A 7.4 B 6.1 C 4.2	完形。鉢形。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部に至る。	体部外面斜位のハケ目調整後, ナデ。 内面斜位のハケ目調整後, 指頭によるナデ。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい黄橙色 普通	100% P L 22

第13号住居跡 (第94図)

位置 調査区の北西部, B 1 j8区。

重複関係 中央部を第166号土坑, 北東壁を第165号土坑にそれぞれ掘り込まれている。



第94図 第13号住居跡実測図

規模と平面形 北西コーナー部は、調査区域外のため確認できなかった。長軸5.9m、短軸4.93mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-62°-E

壁 壁高は5~10cmで、緩やかに立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。土質は軟弱で、踏み固められた部分はない。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置し、径50cmの円形で、深さは28cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・赤色粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量

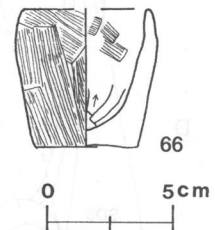
覆土 2層からなる。ローム粒子等が均一に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量

遺物 土師器片12点、礫2点が出土している。ほとんどが土師器の細片である。第95図の66は土師器のミニチュア土器である。貯蔵穴内の覆土中層から逆位の状態で出土している。

所見 ほとんどが細片のため、図示できた土器は1点のみであった。第95図の66は、ハケ目調整が施されている鉢形のミニチュア土器で、第2号掘立柱建物跡からも同様の土器が出土している。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と思われる。



第95図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 66	ミニチュア土器	A [4.9]	鉢形。口縁部一部欠損。平底。体部	体部外面斜位のハケ目調整、内面上位斜位のハケ目調整、内面下位ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・白色粒子 灰黄褐色 普通	70%
	土師器	B 5.6	は直立し、口縁部でやや内彎する。			
		C 4.0				

第15号住居跡（第96・97図）

位置 調査区の北西部、C 2 a4区。

重複関係 第242号土坑と第243号土坑をそれぞれ掘り込み、南東コーナー部を第241号土坑、北側を東西方向に第5号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.54m、短軸6.34mの隅丸方形である。

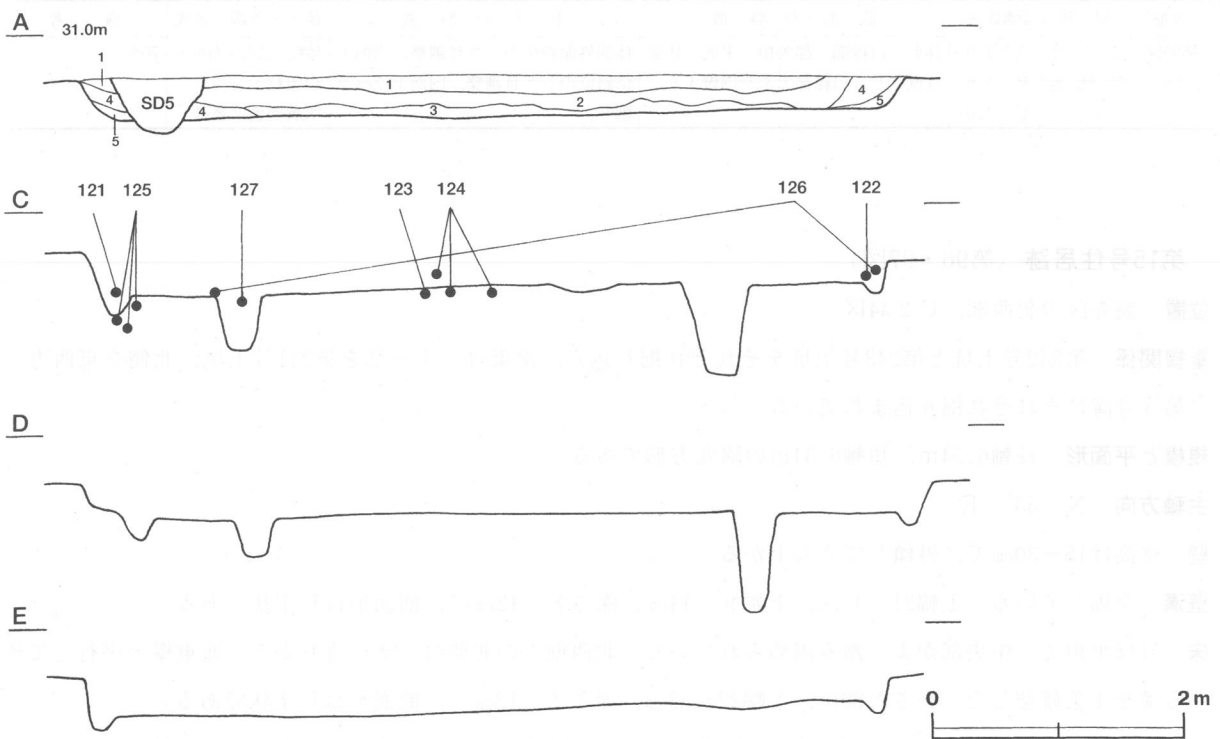
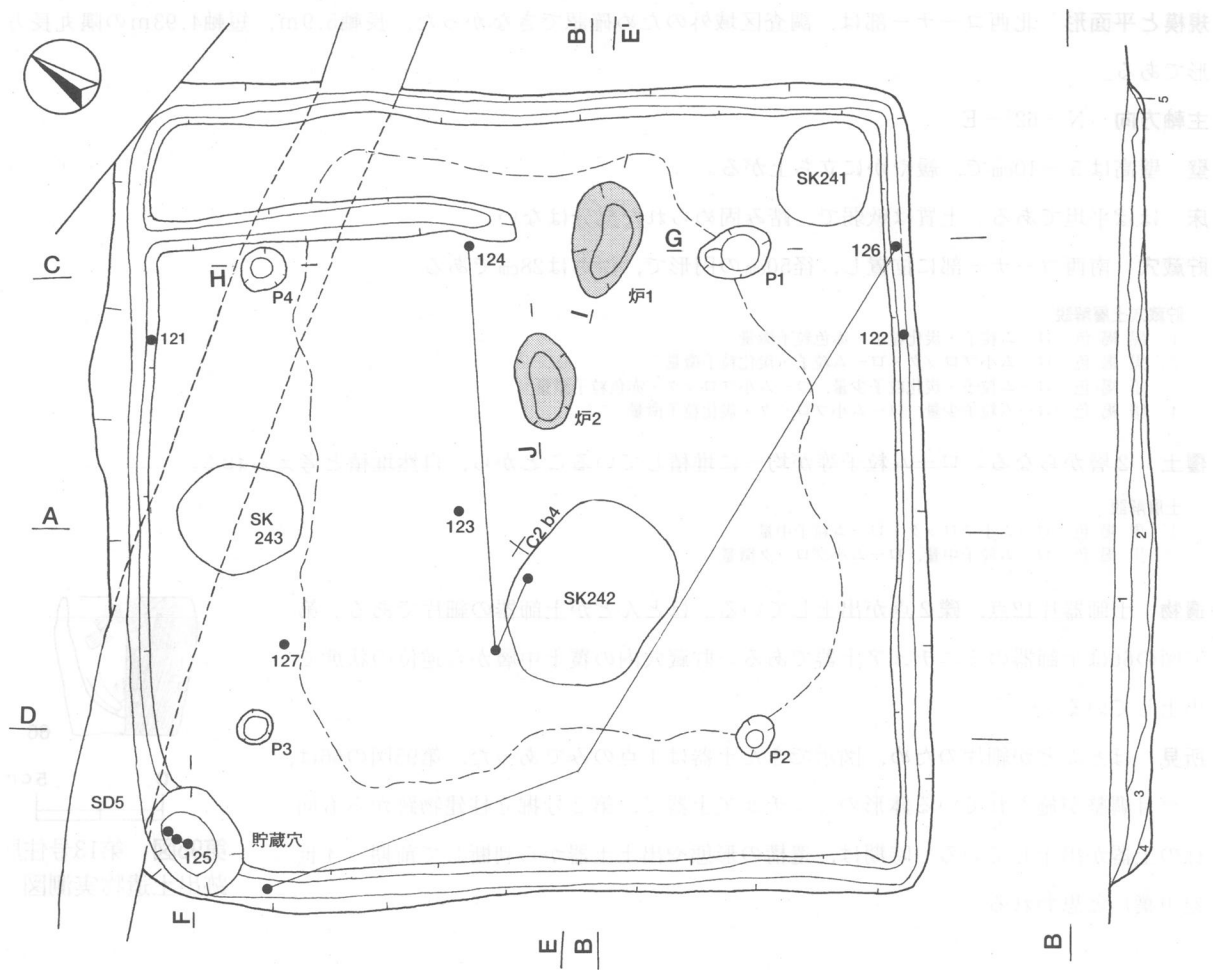
主軸方向 N-53°-E

壁 壁高は18~30cmで、外傾して立ち上がる。

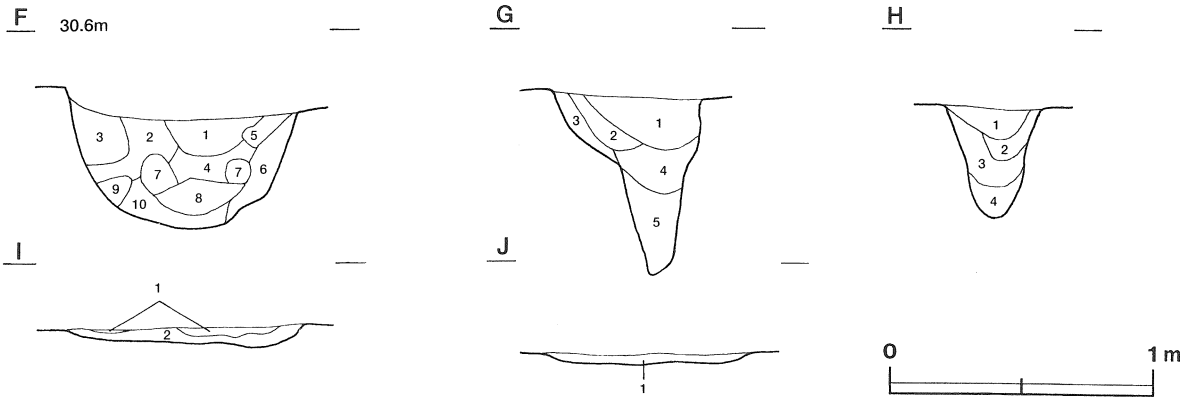
壁溝 全周している。上幅21~43cm、下幅9~14cm、深さ8~12cmで、断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。北西壁下の北側コーナー寄りから、北東壁と平行して延びる溝を1条確認した。長さ2.89m、上幅22~33cm、深さ7~12cmで、断面形はU字状である。

ピット 4か所（P1~P4）。P1・P2は長径34・57cm、短径28・39cmの楕円形、P3・P4は径28・38cmの円形で、深さは32・79cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。



第96图 第15号住居迹实测图(1)



第97図 第15号住居跡実測図(2)

ピット土層解説

P1		P4	
1 暗褐色	ローム小ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	1 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量	3 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
4 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量	4 褐色	ローム小ブロック多量, ローム粒子中量
5 褐色	ローム小ブロック多量, ローム粒子中量		

炉 2か所。炉1は北東壁寄りに位置している。長径92cm, 短径55cmの楕円形で、床面を9cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉2は中央部からやや北東寄りに位置している。長径86cm, 短径50cmの楕円形で、床面を3cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。ともに加熱を受けているが、あまり赤変硬化していない。

炉1土層解説

1 にぶい赤褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量, 焼土小ブロック微量	2 にぶい赤褐色	ローム粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
----------	---------------------------------	----------	------------------------------

炉2土層解説

1 にぶい赤褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量
----------	-------------------------

貯蔵穴 西コーナー部に位置し、長径53cm, 短径41cmの楕円形で、深さは27cmである。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量	7 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量
2 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量	8 暗褐色	ローム小ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	9 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
4 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
5 暗褐色	ローム小ブロック中量, ローム粒子少量		
6 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量		

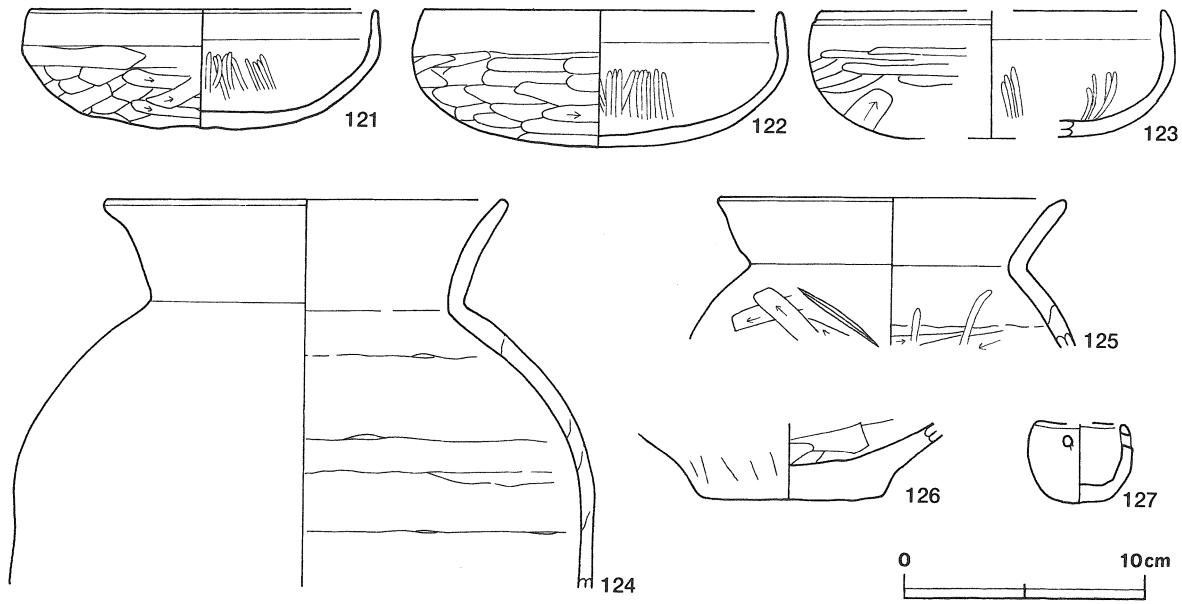
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色	白色粒子少量, 赤色粒子微量	4 黒色	ローム粒子中量
2 黒色	ローム粒子中量, 炭化粒子少量	5 暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
3 黒褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量		

遺物 土師器片215点, 礫31点, 炭化物, 攪乱等により混入したとみられる縄文土器片14点, 弥生土器片39点が出土している。これらの遺物の大部分は、全体の覆土に散在した状態で出土している。第98図の121~127は土師器である。覆土下層では、122の坏が南東壁際から出土している。126の甕は、南東壁際と西側コーナー部から出土した破片が接合したものである。124の甕は、中央部と北東部の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。床面では、121の坏が北西壁際から正位の状態、123の坏が中央部から、127のミニチュア土器がP3の北東側から正位の状態それぞれ出土している。貯蔵穴の下層からは、125の甕が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や床面及び貯蔵穴内の出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



第98図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 121	坏 土師器	A 14.2 B 5.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	95% P L 22
122	坏 土師器	A 14.7 B 5.7	口縁部・体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 橙色 普通	80% P L 22
123	坏 土師器	A (14.2) B (5.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位横位のヘラナデ、下位斜位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	25%
124	甕 土師器	A 16.4 B (16.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面剝離のため調整不明。体部内面に輪積み痕。	砂粒・石英・白色粒子・小礫 褐色 普通	30%
125	甕 土師器	A 14.1 B (6.1)	口縁部一部・体部中位以下欠損。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面横位のヘラ削り後、縦位のヘラ磨き。体部内面に輪積み痕。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 にぶい橙色 普通	30% 体部外面砥石転用痕
126	甕 土師器	B (3.2) C 7.4	底部の破片。突出した平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子・小礫 明赤褐色 普通	10%
127	ミニチュア土器 土師器	A (3.5) B 3.3	鉢形。口縁部・体部一部欠損。体部は球状を呈し、内彎して立ち上がる。口縁部に、2孔が空けられている。	体部内・外面指頭によるナデ。	砂粒・長石・白色粒子 暗赤褐色 普通	50% P L 22

第18号住居跡 (第99図)

位置 調査区の中央部、C 3 e2区。

重複関係 北西部を第277号土坑に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸5.15m、短軸4.72mの隅丸方形である。

主軸方向 N-60°-E

壁 壁高は20~25cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、踏み固められた部分は確認できない。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1・P2は、径28・33cmの円形で、深さ8・10cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P3・P4は、径37・41cmの円形で、深さ7cmである。位置的に補助柱穴と考えられる。P5は、長径40cm、短径30cmの楕円形で、深さ21cmである。位置的に壁柱穴と考えられる。

炉 中央部からやや北東コーナー寄りに位置している。径98cmほどの円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内の覆土に焼土粒子や炭化粒子を少量から微量含む程度で、炉床は硬くない。

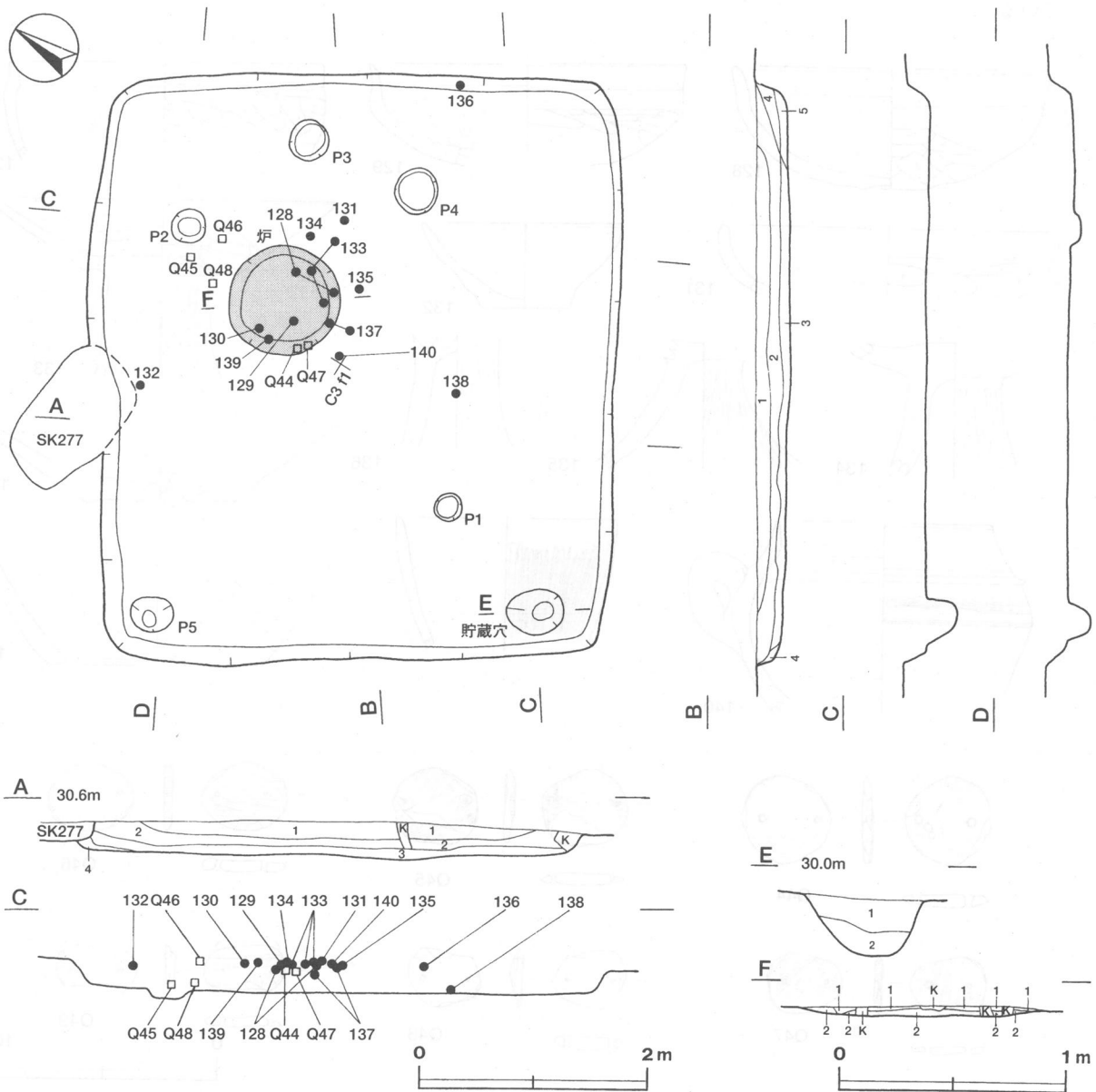
炉土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量

貯蔵穴 南西コーナー部に位置し、長径53cm、短径41cmの楕円形で、深さは48cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・今市軽石粒子・七本桜粒軽石粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量



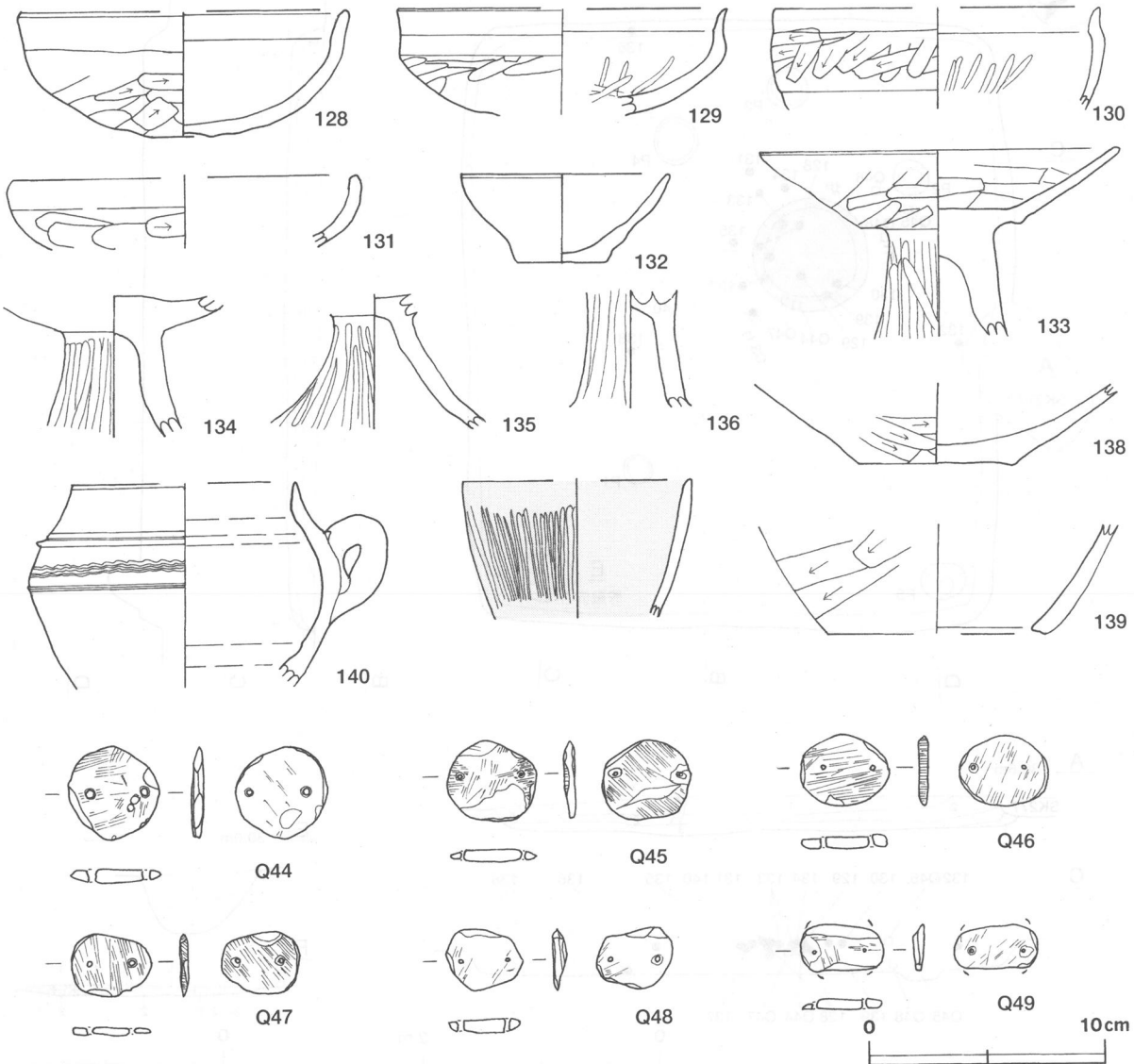
第99図 第18号住居跡実測図

覆土 5層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---|-------|---|
| 1 黒色 | ローム小ブロック・ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量 | 4 暗褐色 | 今市軽石粒子・七本桜軽石粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物 土師器片450点, 須恵器片1点, 石製品6点(双孔円板), 礫9点, 混入したとみられる縄文土器片21点, 弥生土器片21点が出土している。これらの遺物は中央部のやや北側の覆土から、破片の状態ですとまって出土している。第100図の128~139は土師器で, 140は須恵器である。覆土上層では, 128~131の坏, 134・135の高坏, 139の甑, 140の把手付椀, Q46の双孔円板が中央部のやや北側から, 132の小形鉢が北西壁際から, 136の高坏が北東壁際から, Q44・Q47の双孔円板が中央部から, 133の高坏が北西壁寄りから, 137の埴が中央部のやや南側からそれぞれ出土している。覆土下層では, Q45・Q48の双孔円板が中央部のやや北側から出土している。床面では, 138の甕が中央部のやや南側から出土している。その他, Q49の双孔円板が覆土から出土している。



第100図 第18号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、中央部付近の覆土上層から中層にかけて、土器片等がまとまって出土している。ほとんどが破片の状態であることから、投棄された可能性が考えられる。覆土上層から出土した坏と、床面から出土した甕はほぼ同時期であることから、中期（5世紀中葉）と思われる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 128	坏 土師器	A [13.6] B 5.3 C 2.8	底部から口縁部の破片。底部中央に指頭ほどのくぼみをもつ。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 暗赤褐色 普通	30%
129	坏 土師器	A [14.0] B (4.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 暗赤褐色 普通	15%
130	坏 土師器	A [13.8] B (4.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り。内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 暗赤褐色 普通	10%
131	坏 土師器	A [14.4] B (3.0)	口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	10%
132	小形鉢 土師器	A 8.7 B 3.8 C 3.7	口縁部一部欠損。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	95% P L 22
133	高坏 土師器	A 15.0 B (7.9) E (4.6)	坏部一部・脚部一部欠損。脚部は柱状を呈している。坏部は外面下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ヘラナデ。脚部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	70%
134	高坏 土師器	B (6.1) E (4.5)	脚部の破片。脚部はやや外方に開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・小礫 淡赤褐色 普通	20%
135	高坏 土師器	B (5.7) E (4.8)	脚部の破片。脚部は外方に開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	15%
136	高坏 土師器	E (5.0)	脚部の破片。脚部は柱状を呈する。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	10%
137	埴 土師器	A [9.6] B (6.0)	口縁部の破片。口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。	口縁部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。口縁部内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・小礫 赤褐色 普通	15%
138	甕 土師器	B (3.5) C 6.6	底部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 明赤褐色 普通	10%
139	甗 土師器	B (4.5) C [9.4]	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 褐色 普通	5%
140	把手付腕 須恵器	A [9.4] B (8.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁端部は尖る。体部にC字状の把手を貼り付けている。体部と口縁部の境に断面三角形の鋭い凸線を1条有す。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部に櫛歯状工具（5本）による波状文を施し、把手貼り付け後、ナデ。口縁部内・外面、把手上位、体部内面下位に自然釉付着。	砂粒・長石・石英・白色粒子 灰色 普通	35% P L 22

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第100図Q44	双孔円板	3.9	3.9	0.5	0.4	12.9	滑石	2孔の他、2つの途中が空けられている。	P L 27
Q45	双孔円板	3.4	3.7	0.5	0.2	7.6	粘板岩	2孔が空けられている。	P L 27
Q46	双孔円板	3.0	3.7	0.5	0.2	8.2	滑石	2孔が空けられている。	P L 27
Q47	双孔円板	2.6	3.3	0.3	0.2	3.7	粘板岩	2孔が空けられている。	P L 27
Q48	双孔円板	2.5	3.2	0.5	0.2	5.4	粘板岩	2孔が空けられている。	P L 27
Q49	双孔円板	(1.9)	3.5	0.4	0.2	(4.9)	粘板岩	2孔が空けられている。1/3欠損。	P L 27

第22号住居跡（第101図）

位置 調査区の北部，B2h0区。

重複関係 北東コーナー部を第337号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.2m，短軸3.1mの長方形である。

主軸方向 N-80°-E

壁 壁高は21～32cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，西部から中央部にかけてよく踏み固められている。南東コーナーの貯蔵穴上面には焼土，南西部の床面には炭化材が確認された。

ピット 3か所（P1～P3）。P1は長径26cm，短径20cmの楕円形，P2・P3は径15・27cmの円形で，深さは24～65cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。

炉 東壁際の中央に位置している。長径76cm，短径65cmの楕円形で，床面を13cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内の覆土に焼土粒子や炭化粒子を中量から微量含む程度で，炉床は硬くない。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し，長径64cm，短径55cmの楕円形で，深さは48cmである。土層解説の1・2層は，貯蔵穴の上面で確認された焼土である。

焼土・貯蔵穴土層解説

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| | 5 黒色 ローム粒子・炭化粒子少量 |
| | 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 |

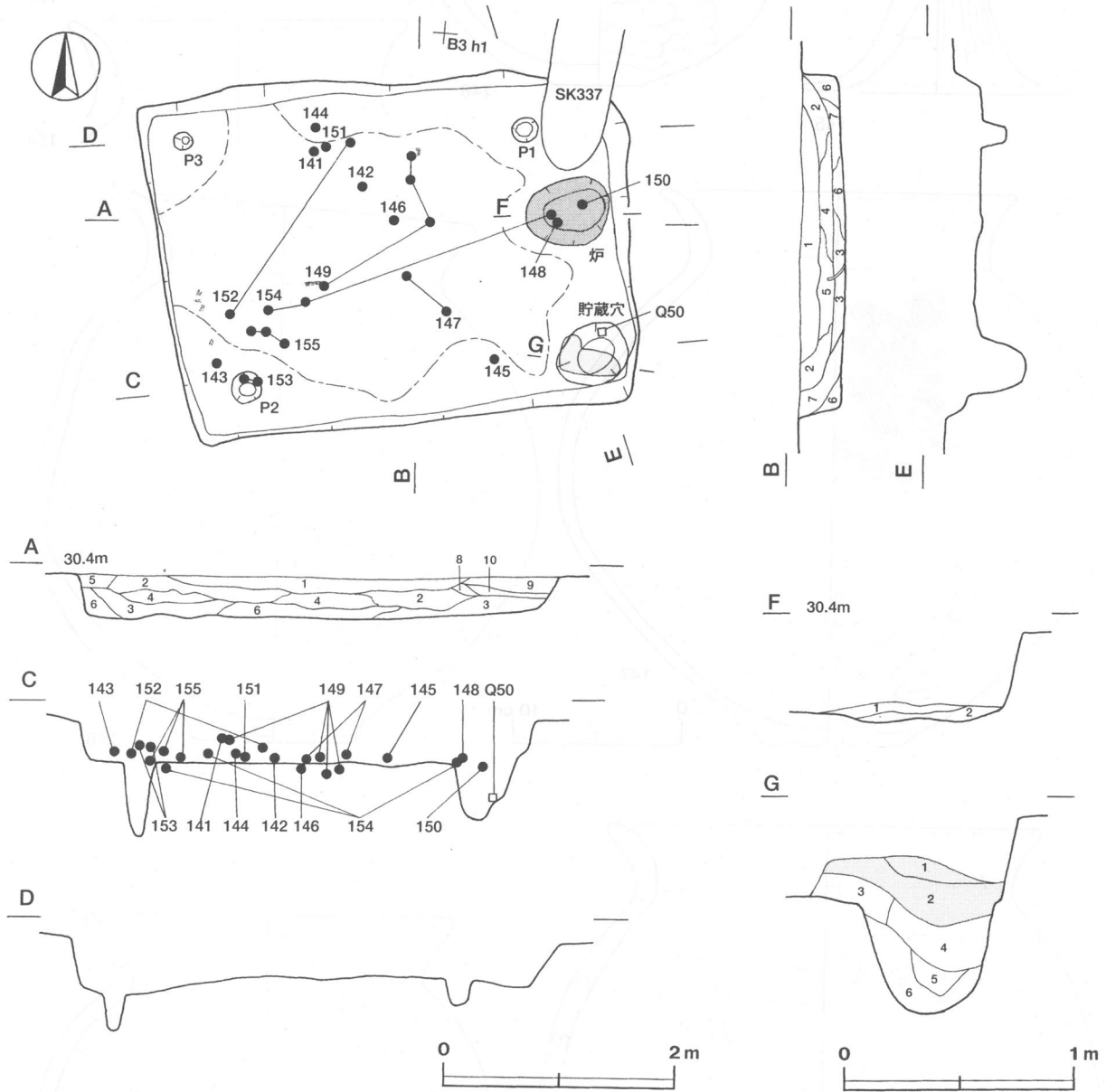
覆土 10層からなる。中層から下層にかけて焼土粒子，炭化物，炭化粒子が少量から微量含まれていることや，ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

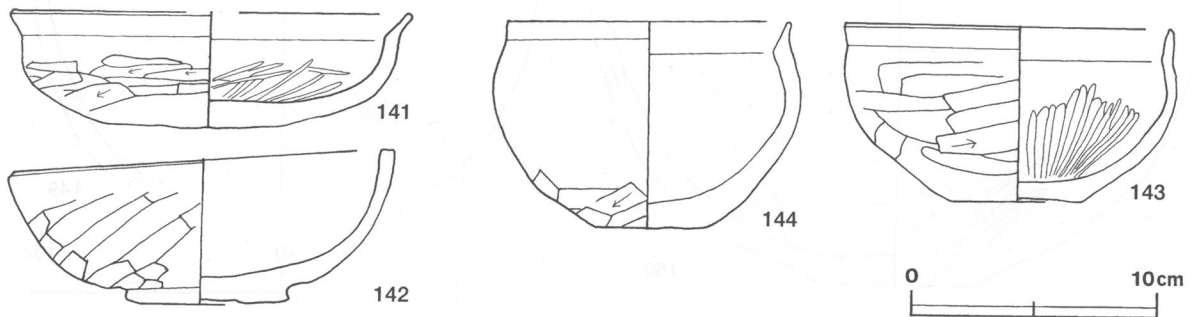
- | | |
|---|--------------------------------|
| 1 黒色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量 | 6 褐色 ローム粒子多量，炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物微量 |
| 2 黒色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 | 7 黒色 ローム粒子中量，焼土粒子微量 |
| 3 灰褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 4 黒色 ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック微量 | 9 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量 |
| 5 黒色 ローム粒子微量 | 10 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 |

遺物 土師器片440点，須恵器片1点，石製品2点（剣形品・双孔円板），不明鉄製品1点，礫20点，炭化物，混入したとみられる縄文土器片2点，弥生土器片5点が出土している。これらの遺物の多くは，西壁の中央部から東壁の中央部にかけての覆土から出土している。第102～104図の141～155は土師器である。覆土中層では，141の坏が北壁寄りから正位の状態で出土している。覆土下層では，142の椀が中央部のやや北側から逆位の状態で，143の椀が南西コーナー部から斜位の状態で，144の椀が北壁寄りから逆位の状態で，145の高坏が南壁寄りから，148の甕が東壁寄りから斜位の状態で，150の甕が東壁寄りから正位のつぶれた状態で，151の甕が北壁寄りから，153の甕が南西コーナー部からそれぞれ出土している。また，152の甕は西壁寄りと北壁寄りから出土した破片が接合したものである。149の甕は中央部と北壁寄りの覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。床面では，146の埴が中央部から正位の状態で，147の甕が中央部から横位のつぶれた状態で，155の甕が南西コーナー寄りからそれぞれ出土している。また，154の甕は，中央部西側と東壁寄りから出土した破片が接合したものである。貯蔵穴の下層から，Q50の剣形品が出土している。その他，Q51の双孔円板とM1の不明鉄製品が覆土からそれぞれ出土している。

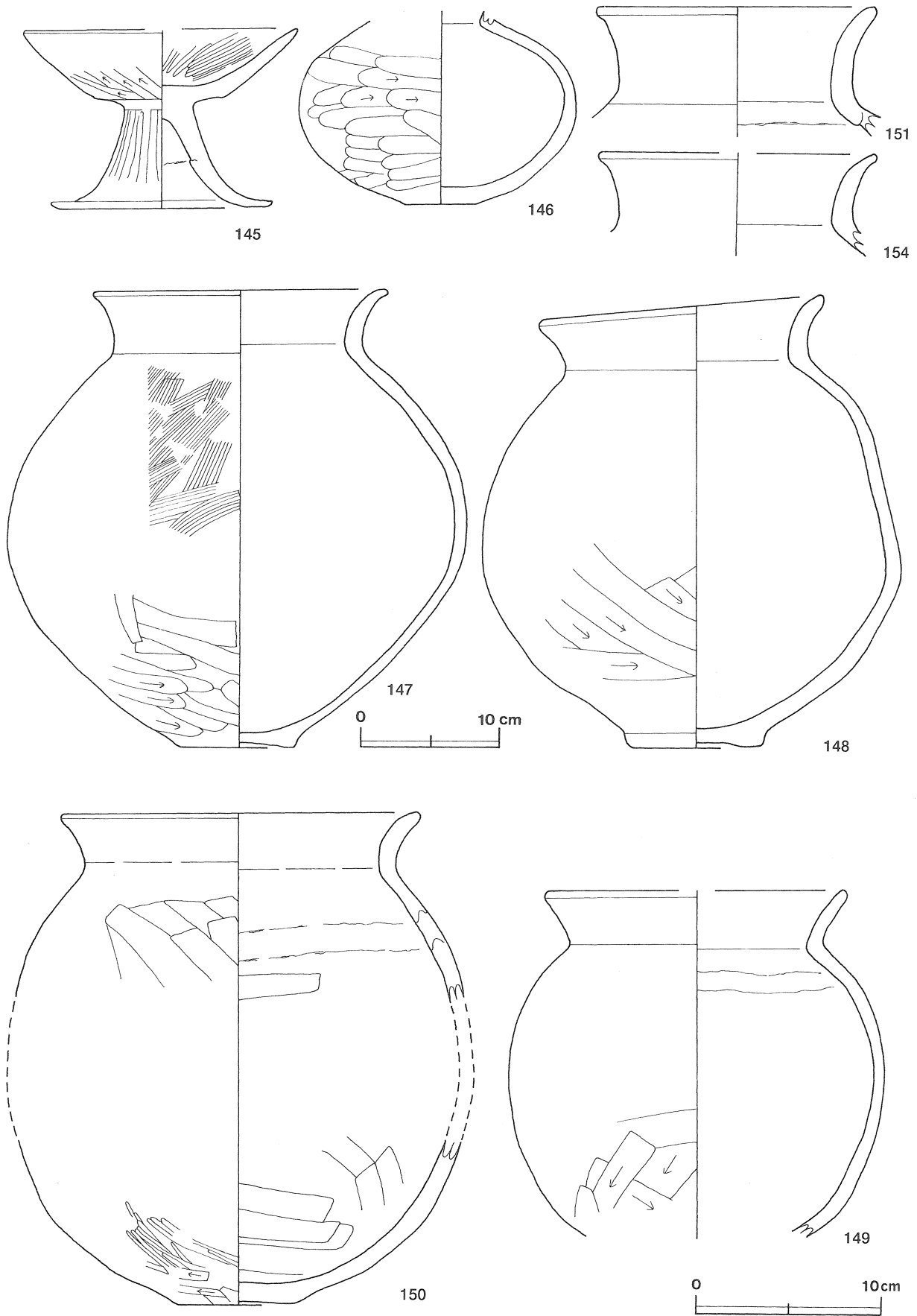
所見 本跡の炉は、東壁際の中央に位置している。位置的に竈であった可能性もあるが、砂質粘土粒子や補強材を含んだ構築状況がなかったことから炉と判断した。また、床面に焼土や炭化材がみられることから、焼失住居の可能性も考えられる。時期は、遺構の形態や覆土下層及び床面の出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



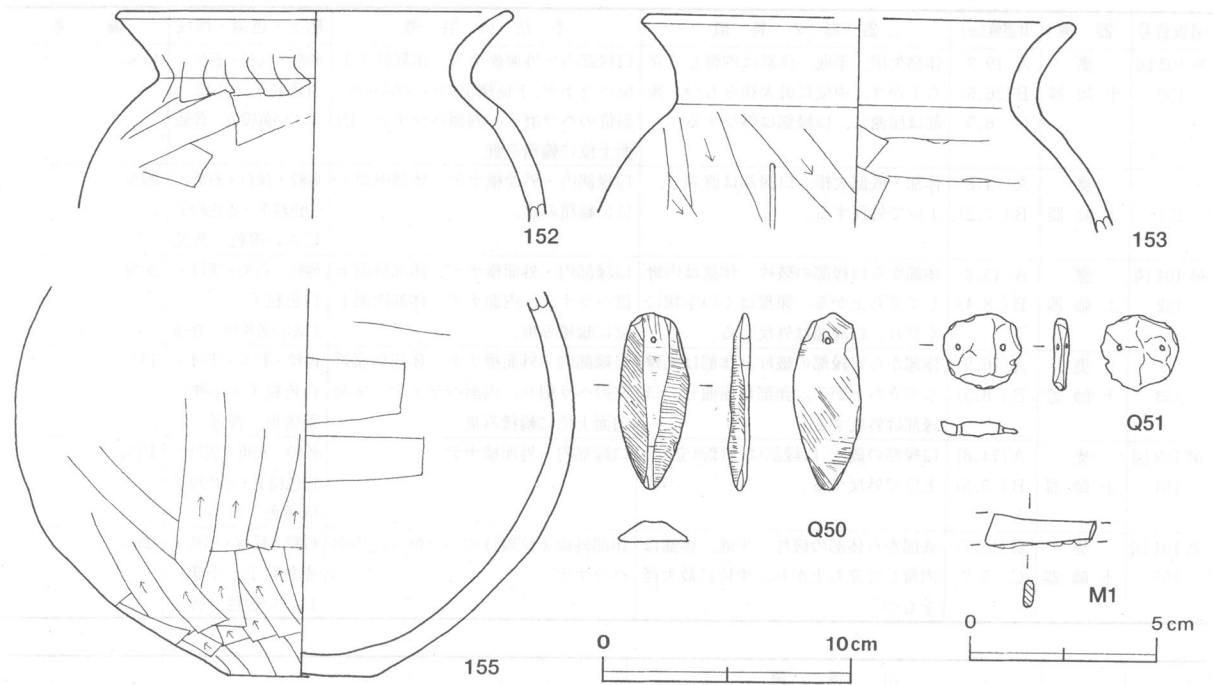
第101図 第22号住居跡実測図



第102図 第22号住居跡出土遺物実測図(1)



第103图 第22号住居跡出土遺物実測図(2)



第104図 第22号住居跡出土遺物実測図(3)

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 141	坏 土師器	A [16.1] B 4.8	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・礫 にぶい橙色 普通	75%
142	碗 土師器	A 15.3 B 6.5 C 6.4	完形。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・赤色粒子 明赤褐色 普通	100% P L 22 体部外面煤付着
143	碗 土師器	A 13.2 B 7.2 C 5.2	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・雲母・白色 粒子 にぶい橙色 普通	100% P L 22
144	碗 土師器	A 11.3 B 8.6 C 4.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位横位のヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母・白色粒子・小礫 橙色 普通	95%
第103図 145	高坏 土師器	A [14.8] B 9.7 D 11.2 E 5.8	坏部一部欠損。脚部はラッパ状を呈し、裾部は水平に大きく開く。坏部は外面下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	坏部外面下位斜位のヘラ削り、内面斜位のヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。裾部内・外面横ナデ。脚部内面中位に輪積み痕。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	70%
146	埴 土師器	B (10.5) C 3.7	口縁部欠損。平底。体部は算盤玉状を呈し、中位に最大径をもつ。	体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	70% P L 22 体部外面煤付着
147	甕 土師器	A 20.6 B 32.9 C 8.1	体部一部欠損。突出した平底で、中央がややくぼむ。体部は球状を呈し、中位に最大径をもつ。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位斜位のハケ目調整後、ナデ、下位斜位のヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	90% P L 22
148	甕 土師器	A 15.0 B 24.3 C 7.2	口縁部・体部一部欠損。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子・小礫 にぶい黄褐色 普通	80% P L 22
149	甕 土師器	A [16.1] B (18.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位斜位のヘラ削り、内面ナデ。体部内面上位に輪積み痕。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・小礫 橙色 普通	65%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 150	甕 土師器	A 19.3 B (26.5) C 6.5	体部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ、下位横位のヘラ削り後、斜位のヘラ磨き。内面ヘラナデ。内面上位に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 にぶい黄橙色 普通	40%
151	甕 土師器	A 14.8 B (7.2)	体部・底部欠損。口縁部は直立し、上位で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面上位に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子・赤色粒子 にぶい橙色 普通	20%
第104図 152	甕 土師器	A 15.6 B (8.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ、内面ナデ。体部内面上位に輪積み痕。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 にぶい黄橙色 普通	20%
153	甕 土師器	A (16.9) B (8.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面ヘラナデ。体部内面上位に輪積み痕。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・小礫 褐灰色 普通	15%
第103図 154	甕 土師器	A (14.8) B (5.5)	口縁部の破片。口縁部はほぼ直立し、上位で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・赤色粒子 灰黄色 普通	15%
第104図 155	甕 土師器	B (15.7) C 5.7	底部から体部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。	体部外面下位縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	25%

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第104図Q50	剣形品	7.1	2.8	0.8	0.2	21.3	滑石	基部に小孔が空けられている。断面は台形を呈し、片面に鑄を有する。	P L28
Q51	双孔円板	3.1	3.0	0.6	0.2	5.9	粘板岩	2孔が空けられ、表面は凹凸である。	

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第104図M1	不明鉄製品	(3.1)	0.9	0.3	(2.2)	鉄	断面は長方形で、一方の端部が屈曲している。	

第24号住居跡 (第105図)

位置 調査区の北部、B 3 i5区。

重複関係 東側を南北方向に第8号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 一辺が7.6mほどの方形である。南西壁側を除く壁際に、棚状施設が巡っている。北西壁側の棚状施設は、幅728cm、奥行き44～60cm、床面からの高さ11cmほどである。北東壁側の棚状施設は、幅695cm、奥行き46～60cm、床面からの高さ15cmほどである。南東壁側の棚状施設は、幅735cm、奥行き51～82cm、床面からの高さ18cmほどである。

主軸方向 N-58°-E

壁 壁高は18～60cmで、やや外傾して立ち上がる。それぞれの棚状施設からの壁高は、北西壁側で40cmほど、北東壁側で12cmほど、南東壁側で35cmほどである。

床 ほぼ平坦で、支柱穴を結んだ中央部がよく踏み固められている。

ピット 8か所 (P1～P8)。P1・P3・P4は径28～32cmの円形、P2は長径59cm、短径50cmの楕円形で、深さは41～76cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P5は径28cmの円形、P6は長径26cm、短径22cmの楕円形で、深さは11～13cmである。いずれも北西壁側の棚状施設部分に位置し、規模と配置から壁柱穴と考えられる。P7は径70cmほどの円形で、深さ44cmである。P8は長径28cm、短径22cmの楕円形で、深さ20cmである。いずれも性格は不明である。

ピット土層解説

P3

- | | | | | | |
|---|-----|-----------------------------|---|-----|---------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量,炭化粒子微量 | 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 | | | |
| 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量,ローム中ブロック微量 | | | |

P4

- | | | | | | |
|---|-----|----------------------------------|---|-----|---------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,炭化粒子・鹿沼軽石粒子微量 | 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量,鹿沼軽石粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量,炭化粒子・鹿沼軽石粒子微量 | 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼軽石粒子微量 |

炉 中央部から北東壁寄りに位置している。長径70cm,短径54cmの楕円形で,床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内の覆土に焼土粒子や炭化粒子を少量から微量含む程度で,炉床は硬くない。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量,ローム粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴 東コーナー部に位置し,長径72cm,短径65cmの楕円形で,深さ54cmである。

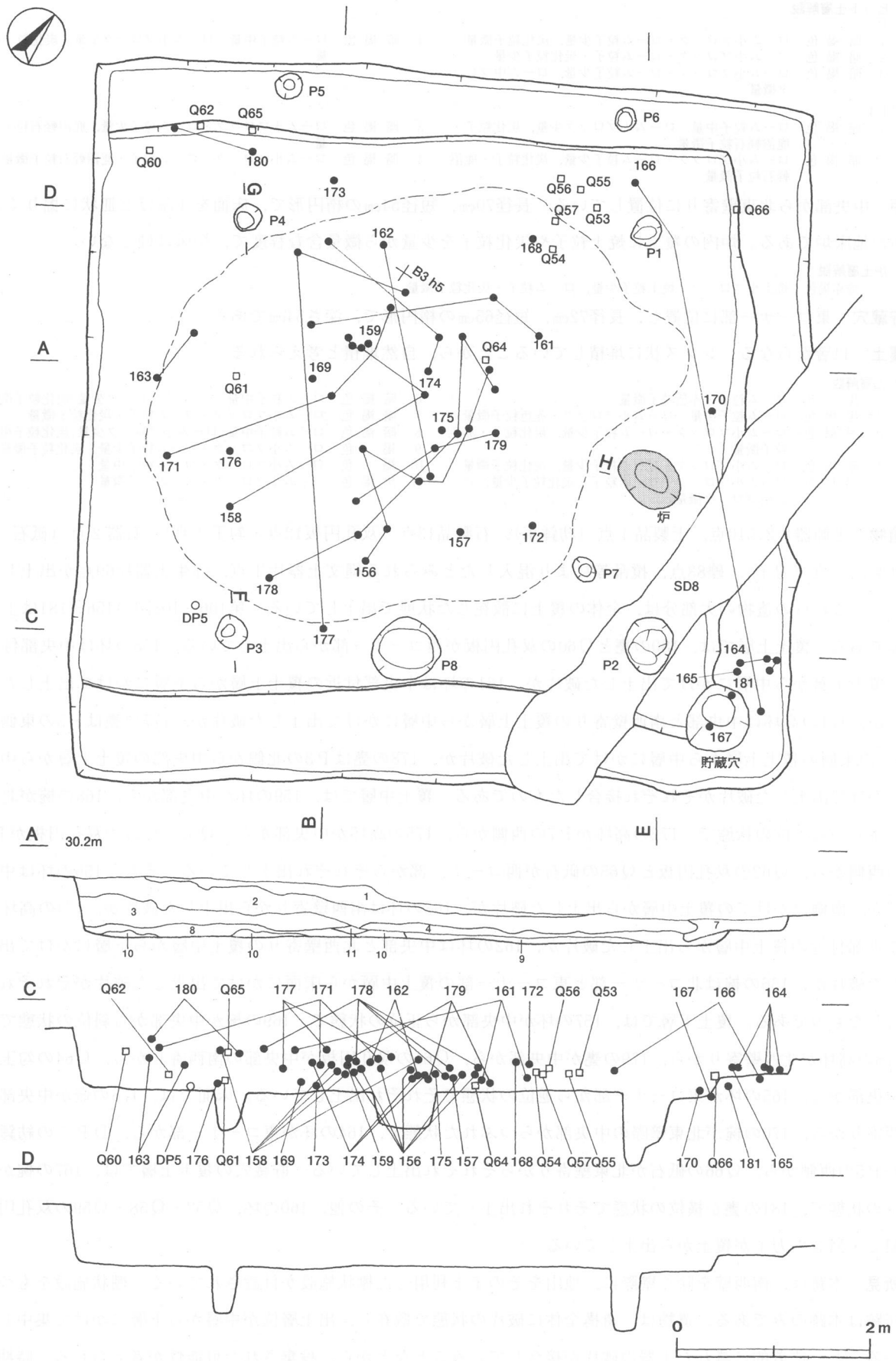
覆土 11層からなる。レンズ状に堆積していることから,自然堆積と考えられる。

土層解説

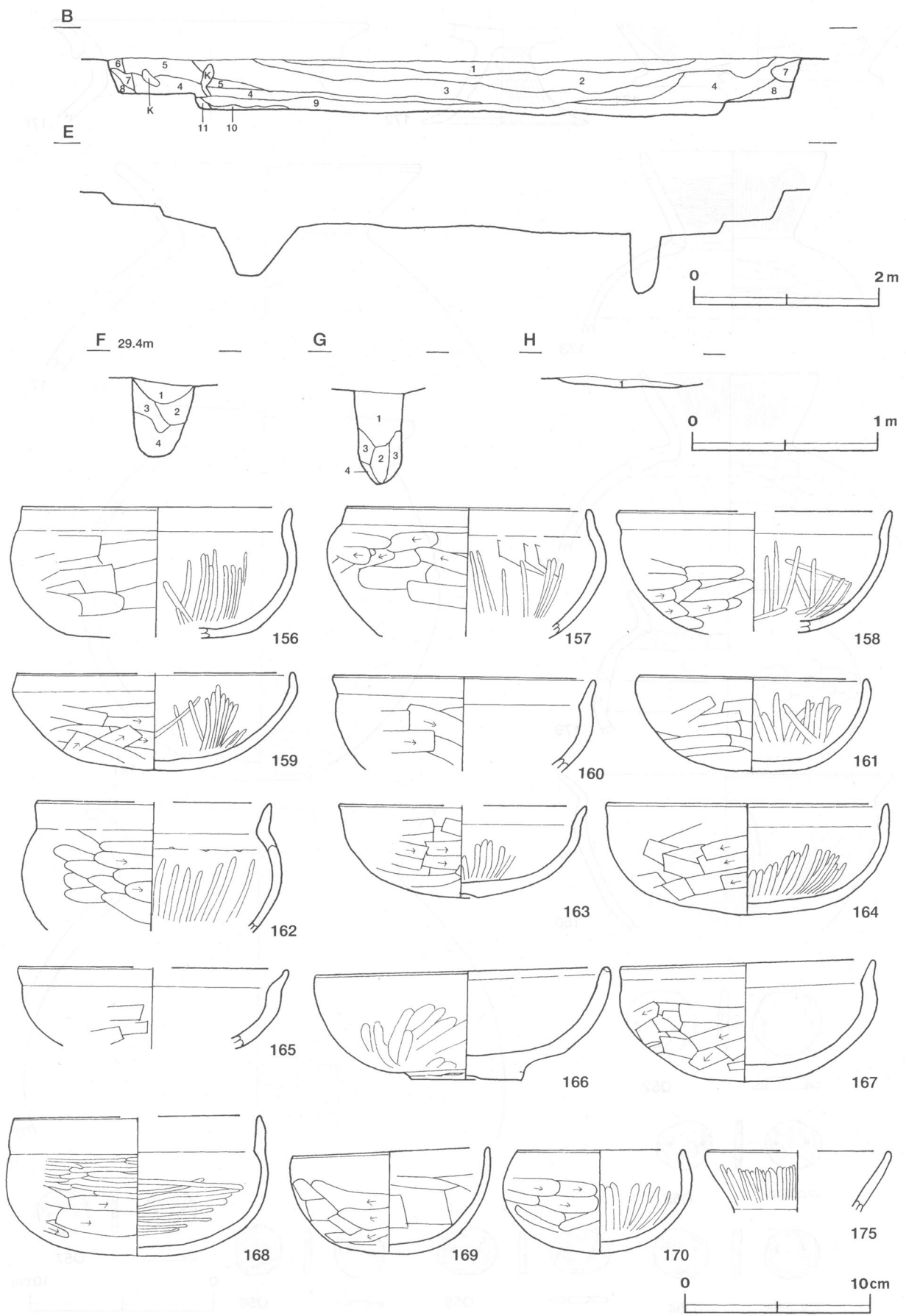
- | | | | | | |
|---|-----|----------------------------------|----|-----|---------------------------|
| 1 | 黒色 | ローム粒子・赤色粒子微量 | 6 | 暗褐色 | ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子少量,ローム小ブロック・赤色粒子微量 | 7 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量,炭化粒子・赤色粒子微量 | 8 | 暗褐色 | ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,炭化粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量,炭化粒子微量 | 9 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量,炭化粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量,ローム中ブロック微量 | 10 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 |
| | | | 11 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |

遺物 土器器片2,510点,土製品1点(紡錘車),石製品13点(双孔円板12点・勾玉1点),石器2点(砥石),鉄製品2点(刀子),礫83点,攪乱等により混入したとみられる縄文土器片1点,弥生土器片69点が出土している。これらの遺物の大部分は,全体の覆土に散在した状態で出土している。第106~108図の156~181は土器である。覆土上層では,180の甕とQ60の双孔円板が西コーナー部から出土している。158の坏は中央部付近の覆土上層から中層にかけて出土した破片が,161の坏は中央部付近の覆土上層から下層にかけて出土した破片が,171の高坏は中央部と南西壁寄りの覆土上層から中層にかけて出土した破片が,177の甕はP3の東側とP4の東側の覆土上層から中層にかけて出土した破片が,178の甕はP3の北側から中央部の覆土上層から中層にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。覆土中層では,159の坏が中央部から,168の碗が北西壁寄りから正位の状態,172の高坏がP7の西側から,175の高坏が中央部から,Q53~Q57の双孔円板がP1の西側から,Q62の双孔円板とQ65の砥石が西コーナー部からそれぞれ出土している。また,156の坏は中央部から南側にかけての覆土中層から出土した破片が,163の坏は南西壁寄りから出土した破片が,174の高坏は中央部付近の覆土中層から出土した破片が,162の坏は中央部と北西壁寄りの覆土中層から下層にかけて出土した破片が,166の碗は北コーナー部と東コーナー部の覆土中層から床面にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。覆土下層では,157の坏が中央部から正位の状態,169の碗が中央部から斜位の状態,173の高坏が北西壁寄りから,179の甕が中央部から,Q61の双孔円板が中央部の南西寄りから,Q64の勾玉が中央部から,165の坏が東コーナー部から逆位の状態それぞれ出土している。床面では,176の壺が中央部の西寄りから,170の碗が北東壁際の中央部からつぶれた状態で,164の坏が東コーナー部から,D P 5の紡錘車がP5の西側から,Q66の砥石が北東壁寄りからそれぞれ出土している。貯蔵穴の覆土上層では,167の碗が横位の状態,181の甕が横位の状態それぞれ出土している。その他,160の坏,Q52・Q58・Q59の双孔円板,M2・M3の刀子が覆土から出土している。

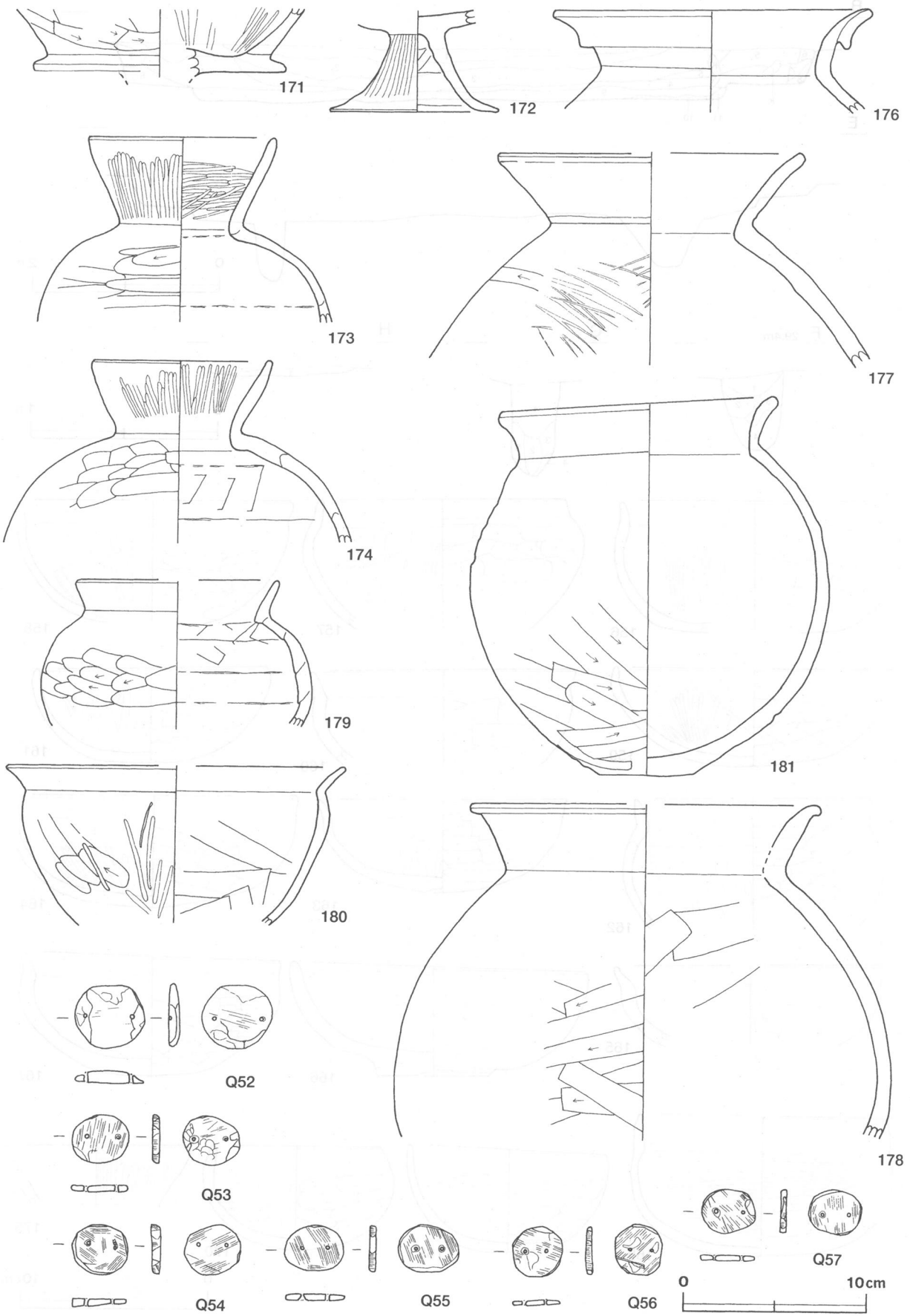
所見 本跡は,南西壁を除く壁際に,地山をそのまま利用した棚状施設が付設されている。棚状施設をもつ住居跡は本跡のみである。遺物は,遺構全体に破片の状態で散在し,出土層位が中層から下層にかけて集中していること,位置的に離れた土器の破片が接合していることなどから,投棄された可能性が考えられる。時期は,遺構の形態や覆土下層及び床面の出土土器から判断して中期(5世紀中葉)と思われる。



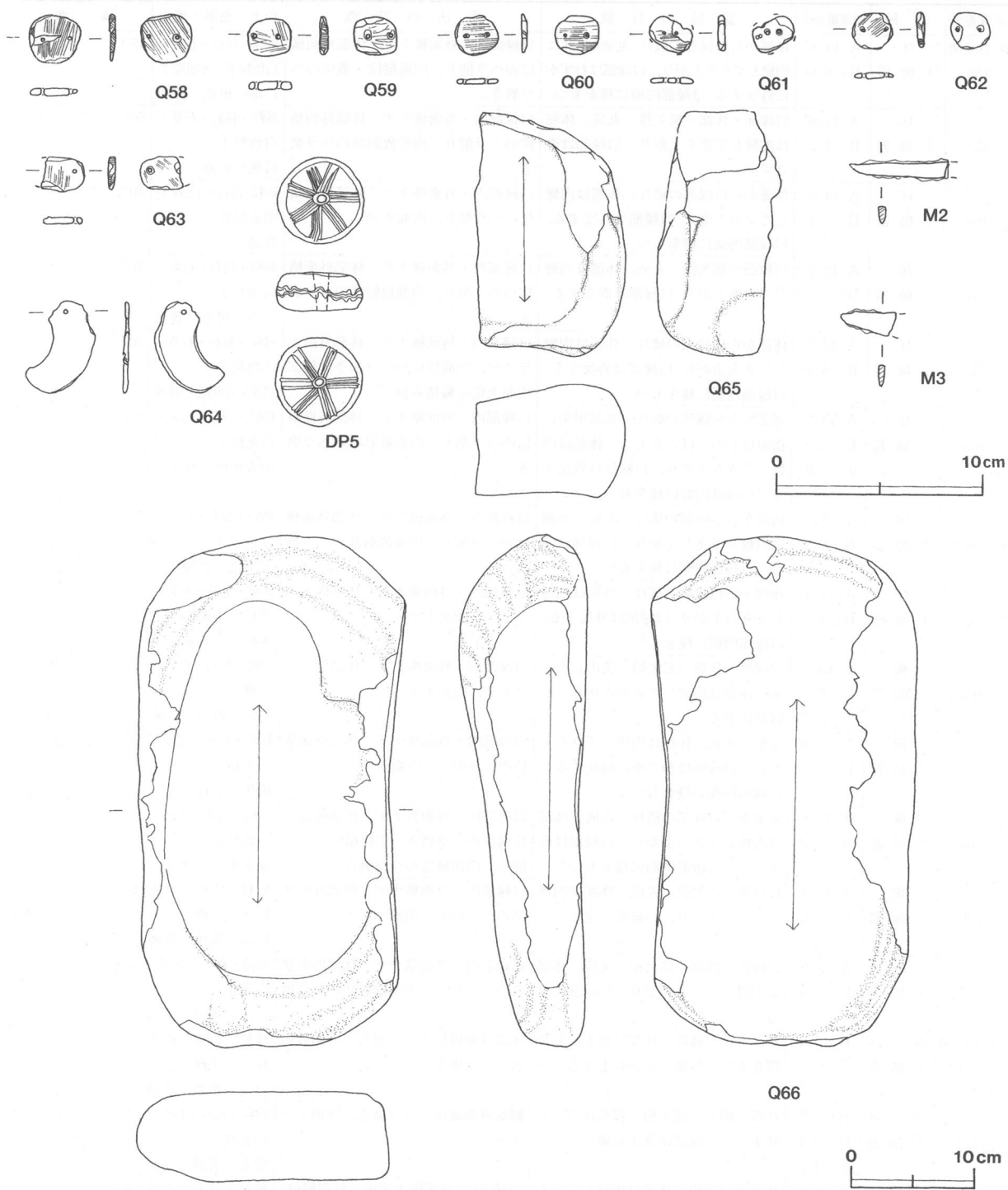
第105图 第24号住居跡実測图(1)



第106图 第24号住居迹(2)·出土遺物実測图(1)



第107图 第24号住居跡出土遺物実測図(2)



第108図 第24号住居跡出土遺物実測図(3)

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 156	坏 土師器	A 14.4 B (7.1)	口縁部一部・底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 におい橙色 普通	70%
157	坏 土師器	A 12.9 B 7.0	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ後、放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	60%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 158	坏 土師器	A [14.8] B (6.6)	体部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面縦位・横位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子・赤色粒子にぶい橙色 普通	45%
159	坏 土師器	A [14.8] B 5.2	口縁部・体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 橙色 普通	70%
160	坏 土師器	A 14.0 B (5.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・白色粒子 明赤褐色 普通	40%
161	坏 土師器	A 12.2 B 5.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	70%
162	坏 土師器	A [12.5] B (6.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面横位のヘラ磨き。体部内面上位に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	30%
163	坏 土師器	A [13.2] B 5.0 C 1.8	底部から口縁部の破片。底部中央に指頭ほどのくぼみをもつ。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	25%
164	坏 土師器	A 15.0 B 6.0	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 赤褐色 普通	60%
165	坏 土師器	A [14.4] B (4.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 赤褐色 普通	15%
166	碗 土師器	A 15.7 B 6.2 C 5.7	口縁部・体部一部欠損。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・小礫 にぶい橙色 普通	95% P L 23
167	碗 土師器	A 13.4 B 6.7	完形。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 橙色 普通	100% P L 23
168	碗 土師器	A [13.1] B 7.6	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位横位のヘラ磨き、下位横位のヘラ削り、内面横位のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 淡赤褐色 普通	65%
169	碗 土師器	A 10.4 B 5.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	95%
170	碗 土師器	A 8.9 B 5.6	口縁部・体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 にぶい褐色 普通	80%
第107図 171	高坏 土師器	B (3.6)	坏部下位の破片。坏部外面下位に突帯をもち、外傾して立ち上がる。	坏部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	25%
172	高坏 土師器	B (5.5) D 9.1 E 4.3	坏部・脚部一部欠損。脚部はラッパ状を呈し、裾部は水平に開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 橙色 普通	45%
173	埴 土師器	A 10.0 B (10.0)	体部下位欠損。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ後、外面縦位・内面横位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ削り後、ヘラナデ、内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	60%
174	埴 土師器	A 9.5 B (9.9)	体部下位欠損。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ後、縦位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	50% P L 23
第106図 175	埴 土師器	A [9.8] B (3.4)	口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部は、つまみ上げられている。	口縁部内面横ナデ、外面横ナデ後、縦位のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 橙色 普通	10%
第107図 176	壺 土師器	A 17.0 B (5.7)	口縁部の破片。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 浅黄褐色 普通	20%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 177	甕 土師器	A [16.6] B (11.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 灰褐色 普通	20% P L 23 体部外面砥石転用痕
178	甕 土師器	A [18.7] B (18.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ、内面ヘラ削り後、横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい褐色 普通	20%
179	甕 土師器	A [10.8] B (7.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面ヘラナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 赤褐色 普通	30%
180	甕 土師器	A [18.2] B (8.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り後、縦位のヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・白色粒子・小礫 橙色 普通	30%
181	甕 土師器	A 14.8 B 20.5 C 5.0	口縁部・体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・礫 にぶい橙色 普通	85% P L 23

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第108図D P 5	紡錘車	4.2	1.7	0.4	42.0	土製	断面は長方形で、4本単位の平行線文が放射状に、側面には波状文が施されている。	P L 27

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第107図Q 52	双孔円板	3.4	3.7	0.6	0.2	12.6	滑石	2孔が空けられている。	
Q 53	双孔円板	2.6	3.1	0.4	0.2	5.3	滑石	2孔が空けられている。	
Q 54	双孔円板	2.7	3.0	0.5	0.2	7.0	滑石	2孔と1つの途中孔が空けられている。	
Q 55	双孔円板	2.5	3.2	0.4	0.2	4.9	滑石	2孔が空けられている。	
Q 56	双孔円板	2.7	2.6	0.3	0.2	3.6	滑石	2孔が空けられている。	
Q 57	双孔円板	2.4	2.8	0.3	0.2	4.4	滑石	2孔が空けられている。	
第108図Q 58	双孔円板	2.3	2.3	0.4	0.2	3.4	滑石	2孔が空けられている。	
Q 59	双孔円板	2.1	1.9	0.4	0.2	2.5	粘板岩	2孔が空けられている。	
Q 60	双孔円板	1.9	2.1	0.2	0.2	1.6	滑石	2孔が空けられている。	
Q 61	双孔円板	1.8	(2.1)	0.3	0.2	(1.9)	滑石	2孔が空けられている。1 / 3欠損。	
Q 62	双孔円板	1.7	1.9	0.4	0.1	1.4	粘板岩	2孔が空けられている。	
Q 63	双孔円板	1.6	(2.1)	0.3	0.2	(1.6)	滑石	片方の小孔半分から先は欠損。	
Q 64	勾玉	4.5	3.2	(0.3)	0.2	(3.4)	粘板岩	基部に小孔が空けられている。表裏面剝離。	P L 28
Q 65	砥石	(11.9)	(7.4)	(5.6)	—	(782.3)	砂岩	断面は長方形を呈す。研ぎ面は1面。	
Q 66	砥石	41.8	21.5	10.3	—	1,300.0	砂岩	断面は長方形を呈す。研ぎ面は3面。	P L 27

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		刀身(cm)	身幅(cm)	重ね(cm)	重量(g)			
第108図M 2	刀子	(4.8)	1.0	0.4	(4.3)	鉄	刃部の破片。	
M 3	刀子	(2.7)	1.2	0.3	(2.0)	鉄	刃部の破片。	

第27号住居跡 (第109図)

位置 調査区の北部，B 4 d1区。

重複関係 南東壁を第29号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 一辺6.4mほどの方形である。

主軸方向 N-35°-E

壁 壁高は27~38cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 西コーナー付近から南コーナー部を除いて巡っている。上幅16~30cm、下幅6~13cm、深さ13~18cmで、断面形はU字状である。

壁溝土層解説

8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

9 暗褐色 ローム粒子少量

床 ほぼ平坦で、コーナー部を除いてよく踏み固められている。北西部や北東部の床面から、炭化材小片が出土している。

ピット 6か所(P1~P6)。P1・P3は径34・57cmの円形で、P2・P4は長径28・32cm、短径22・24cmの楕円形で、深さは58~64cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P5は径30cmの円形で、深さ12cmである。P6は径42cmの円形で、深さ14cmである。いずれも住居跡の中央部に位置し、掘り込みも浅いことから、性格は不明である。

ピット土層解説

P1

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物・炭化粒子微量

P4

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・今市軽石粒子・七本桜軽石粒子少量

炉 中央部から南西壁寄りに位置している。長径93cm、短径53cmの楕円形で、床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は住居跡の主軸と同じである。炉内の覆土に焼土粒子や炭化粒子を中量から少量含む程度で、炉床は硬くない。

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量、焼土中ブロック・炭化粒子微量

貯蔵穴 南西コーナー部に位置し、長径95cm、短径77cmの楕円形で、深さは18cmである。

貯蔵穴土層解説

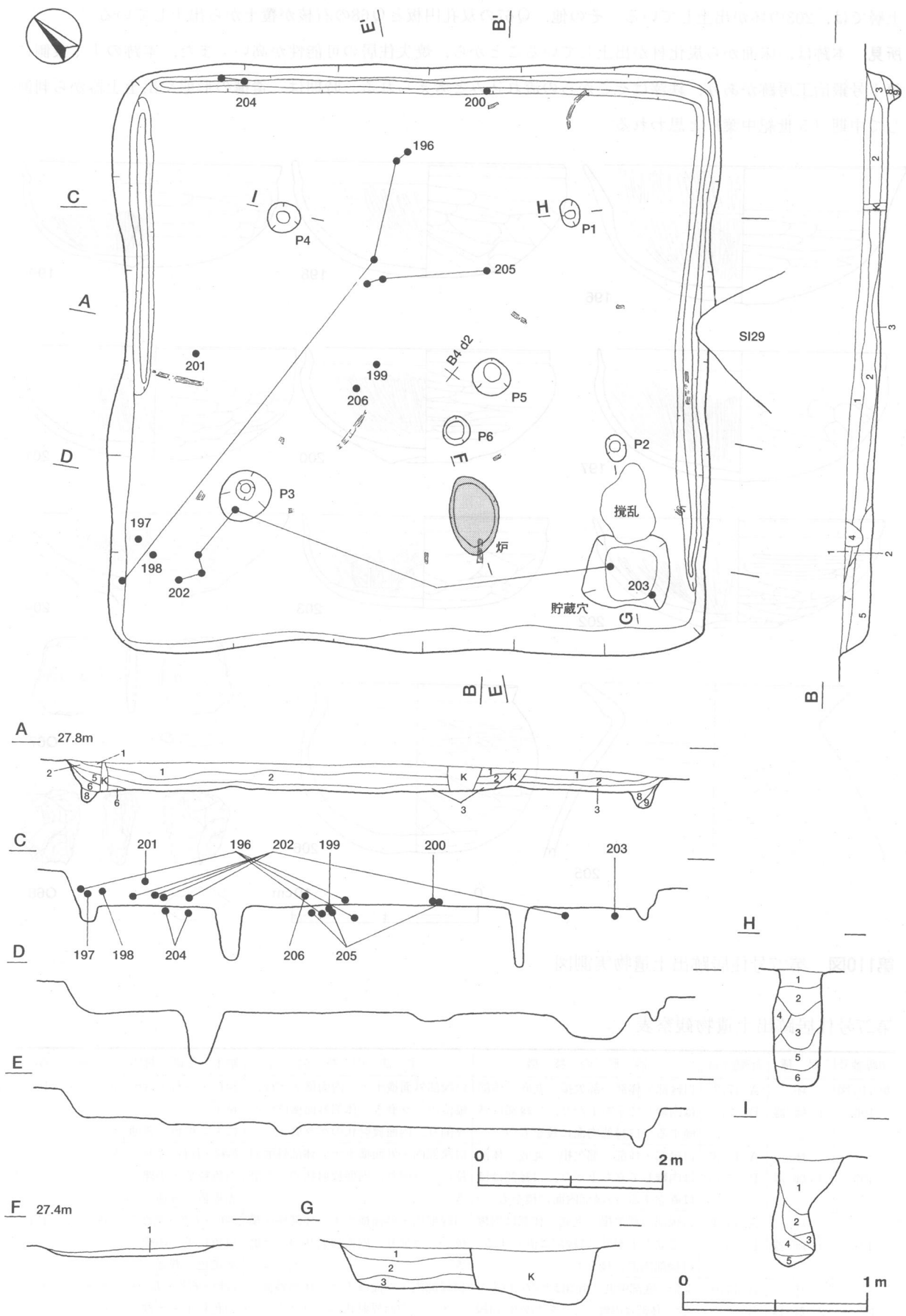
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
- 3 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・ローム粒子微量

覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・白色粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・白色粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、炭化物・白色粒子微量
- 4 黒褐色 白色粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・白色粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・白色粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子・白色粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量

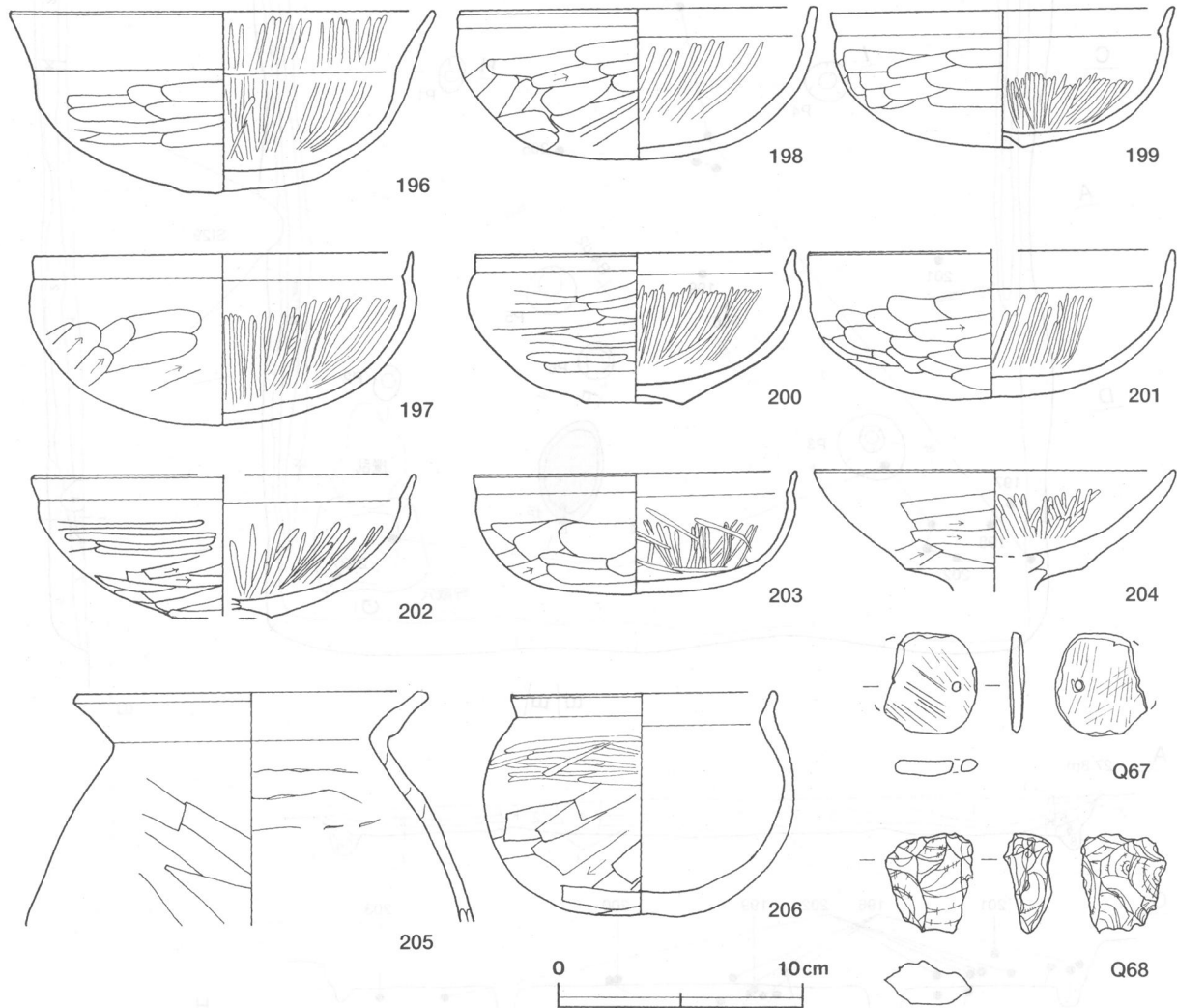
遺物 土師器片275点、石製品1点(双孔円板)、石核1点、礫16点、鉄滓353g、炭化材、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片5点、弥生土器片16点が出土している。これらの遺物は、遺構全体の覆土に散在した状態で出土している。第110図の196~206は土師器である。覆土上層では、201の坏が北西壁寄りから逆位の状態で出土している。覆土下層では、197・198の坏が西コーナー付近から正位のつぶれた状態で、200の坏が北東壁際から正位のつぶれた状態で、206の小形甕が中央部から斜位の状態でそれぞれ出土している。196の坏は中央部から西コーナー部付近の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。床面では、199の坏が中央部から正位の状態で、204の高坏が北東壁際から、205の甕が中央部から破片の状態でそれぞれ出土している。202の坏は、P3の西側と貯蔵穴覆土内から出土した破片が接合したものである。貯蔵穴の覆土



第109图 第27号住居迹实测图

上層では、203の坏が出土している。その他、Q67の双孔円板とQ68の石核が覆土から出土している。

所見 本跡は、床面から炭化材が出土していることから、焼失住居の可能性が高い。また、本跡のすぐ東側に第1号鍛冶工房跡があり、鉄滓はそこからの流れ込みと考えられる。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



第110図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第110図 196	坏 土師器	A 17.2 B 7.5	口縁部・体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部外面横ナデ、内面横ナデ後、縦位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・白色 粒子 にぶい橙色 普通	70% P L 23
197	坏 土師器	A 15.3 B 7.0	口縁部・体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子・小礫 赤褐色 普通	95%
198	坏 土師器	A 14.4 B 6.3	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子・小礫 赤褐色 普通	95% P L 23
199	坏 土師器	A 14.0 B 5.7	完形。底部中央に指頭ほどのくぼみをもつ。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子・小礫 明褐色 普通	100% P L 23

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第110図 200	坏 土師器	A 13.0 B 6.3 C 3.8	口縁部一部欠損。底部にくぼみをもつ。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	95%
201	坏 土師器	A [15.0] B 6.0	口縁部・体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・赤色粒子・小礫 赤褐色 普通	90%
202	坏 土師器	A [15.5] B 5.7 C [4.0]	口縁部・体部一部欠損。底部中央にくぼみをもつ。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ、下位横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・白色 粒子・小礫 明赤褐色 普通	70%
203	坏 土師器	A 13.2 B 5.0	口縁部・体部一部欠損。丸底。体部下位は緩やかに内彎し、中位から直立する。口縁部は外傾して立ち上がり、内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面縦位・斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	70%
204	高坏 土師器	A 14.8 B (4.9)	脚部欠損。坏部は外面下位に稜をもち、内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	40%
205	甕 土師器	A 14.0 B (9.5)	体部下位欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子・礫 赤褐色 普通	25%
206	小形甕 土師器	A 10.6 B 9.2 C 3.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。口縁部は短く、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位横位のヘラ磨き、下位斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	95% 体部外面煤付着

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第110図Q67	双孔円板	(4.0)	(3.8)	0.6	0.3	(13.5)	粘板岩	片方の小孔半分から先は欠損。	

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第110図Q68	石核	4.0	3.6	1.8	24.5	石英	横長剥片・縦長剥片の剥離痕がある。	

第30号住居跡（第111図）

位置 調査区の北東部，B5il区。

重複関係 中央部を東西方向に第9号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 北東側が調査区域外のため確認できなかった。南北方向は確認できた長さで5.04m，東西方向は6.8mで，方形または長方形と推定される。

主軸方向 N-22°-W

壁 壁高は11~20cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，踏み固められた部分は確認できない。

ピット 6か所（P1~P6）。P1・P2は径29・38cmの円形で，深さ15・34cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P3・P4は径27・40cmの円形で，深さ36・46cmである。北西の壁際に位置していることから，壁柱穴と考えられる。P5は径26cmの円形で，深さ17cmである。P6は，長径40cm，短径34cmの楕円形で，深さ46cmである。いずれも住居跡の中央部に位置していることから，性格は不明である。

ピット土層解説

P1

1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

P2

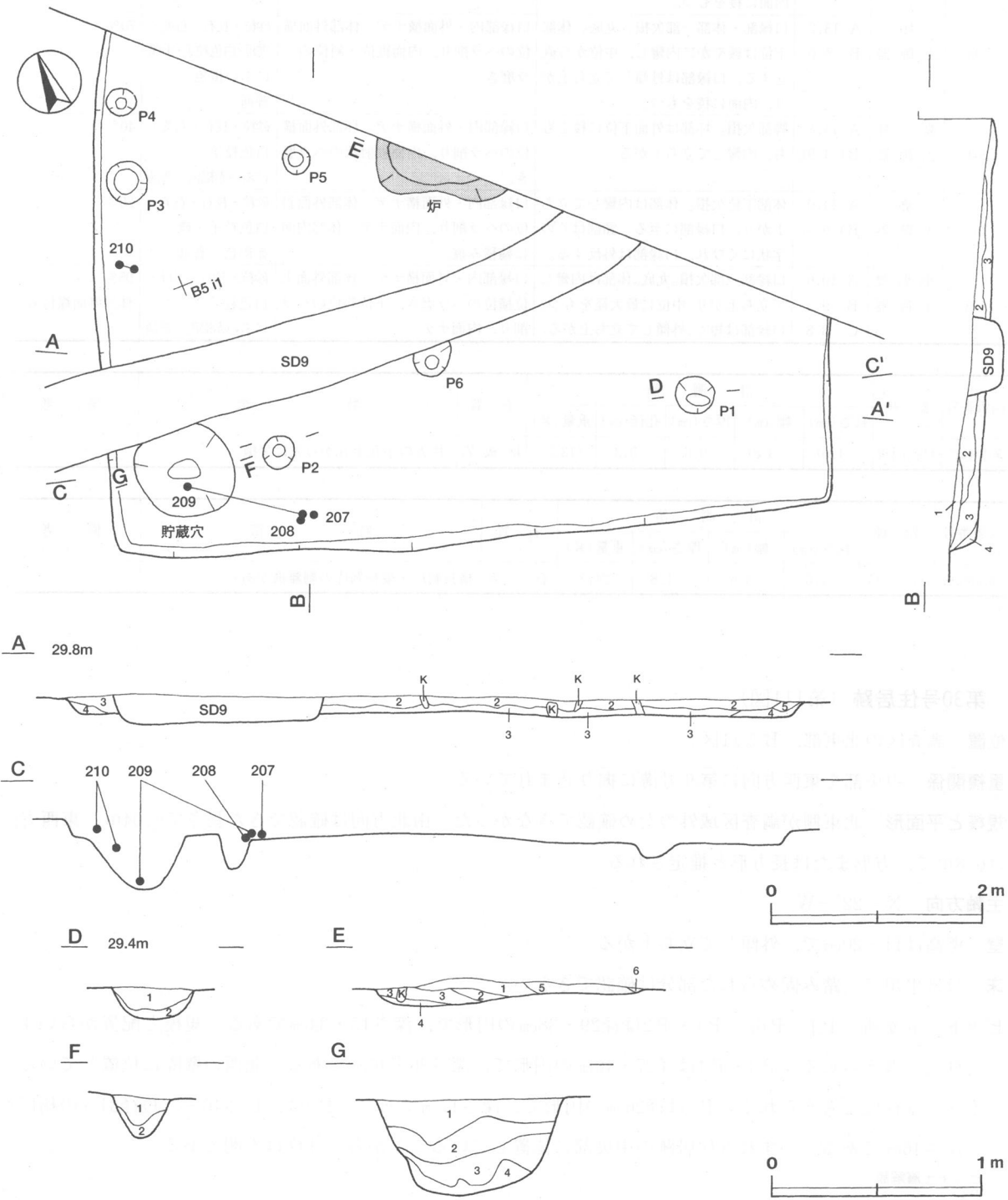
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴 南西コーナー部に位置し、径87cmほどの円形で、深さは55cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 炭化物・炭化粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化材微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

炉 住居跡の約半分が調査区域外であるが、住居の東西方向の長さから、ほぼ中央部に位置していると推定される。長径130cm, 短径は確認できた長さで21cmであり、形状は不明である。床面を14cmほど皿状に掘りくぼ



第111図 第30号住居跡実測図

めた地床炉で、覆土に焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量から微量含む程度で、あまり赤変硬化していない。

炉土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------------|---------|------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量 | 4 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 にふい赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量 | 5 極暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 極暗赤褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 極暗赤褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・焼土小ブロック微量 |

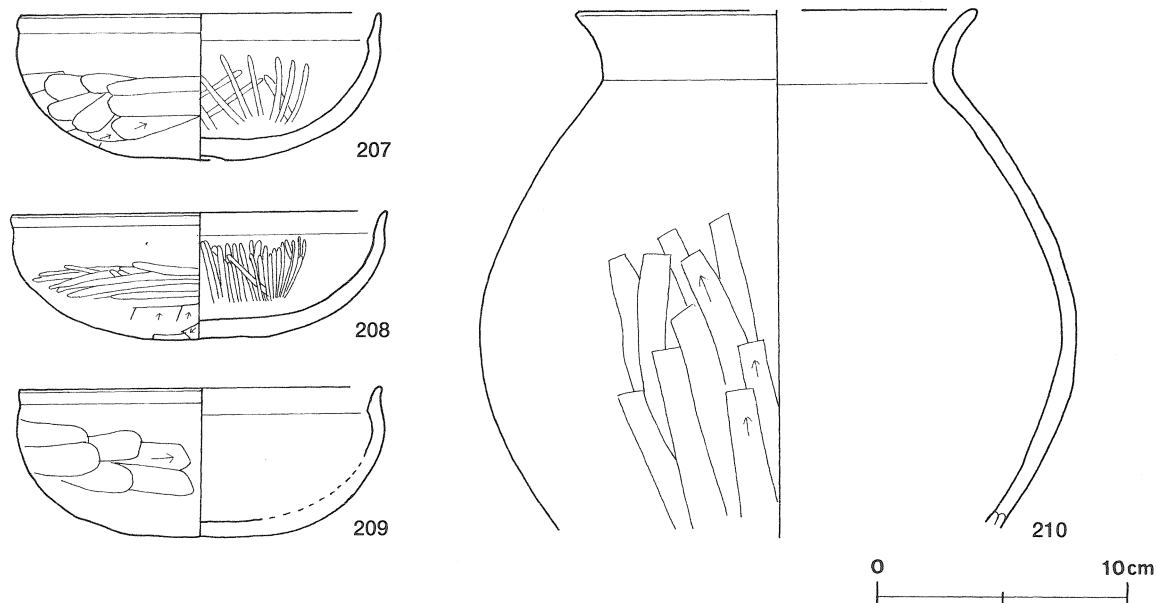
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，赤色粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・赤色粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・赤色粒子微量 | | |

遺物 土師器片250点、礫5点が出土している。遺物は壁際を中心に出土している。第112図の207～210は土師器である。床面では、207・208の坏が貯蔵穴近くの南壁際から正位の重なった状態で、210の甕が西壁際からそれぞれ出土している。209の坏は貯蔵穴の覆土下層と南壁際の床面から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や床面の出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



第112図 第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 207	坏 土師器	A 14.1 B 5.9	口縁部一部欠損。底部中央に指頭ほどのくぼみをもつ。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 におい赤褐色 普通	95% P L 23
208	坏 土師器	A 14.8 B 5.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ，下位縦位のヘラ削り。内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 赤褐色 普通	95% P L 23
209	坏 土師器	A 14.2 B 5.9	口縁部・体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。内面剝離のため調整不明。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	90% P L 23
210	甕 土師器	A [16.0] B (21.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり，中位に最大径をもつ。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・雲母・白色粒子・小礫 明赤褐色 普通	40% P L 23 体部外面下位煤付着

第32号住居跡 (第113図)

位置 調査区の北部, B 3 a9区。

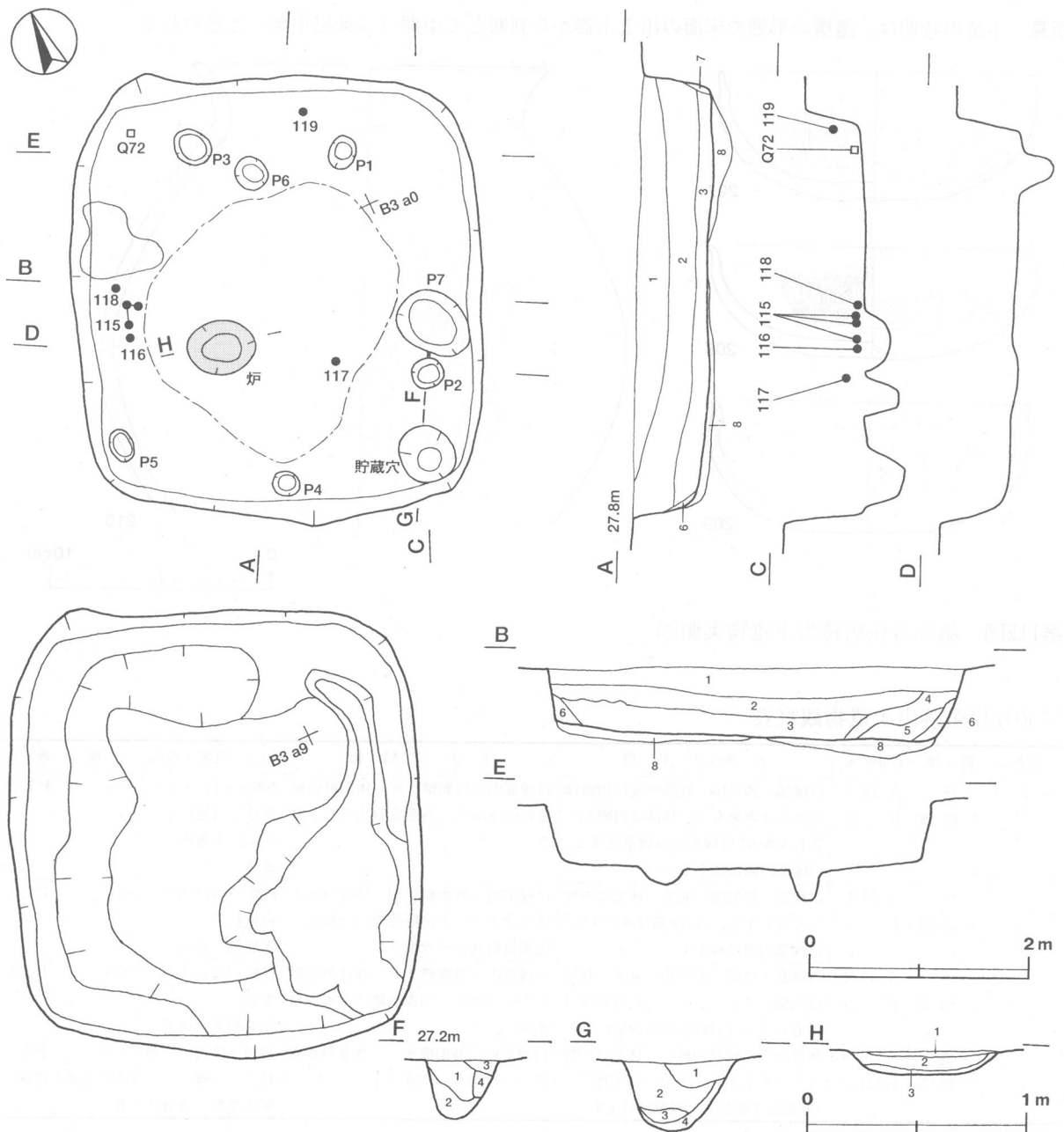
規模と平面形 長軸4.05m, 短軸3.73mの隅丸方形である。

主軸方向 N-26°-E

壁 壁高は48~67cmで, やや外傾して立ち上がる。西壁際から, 焼土塊が確認された。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められている。床面の構築は, 中央部を残し四隅を掘り下げたあと, 暗褐色土にローム土と炭化粒子を混ぜた土を埋め戻して貼床としている。

ピット 7か所 (P1~P7)。P1・P3は長径29・38cm, 短径24・31cmの楕円形, P2は径30cmの円形で, 深さは15~33cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P4は径25cmの円形で, 深さ10cmである。南西壁寄りに位置していることから, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5は, 長径31cm, 短径21cmの楕円形で, 深さ12cmである。南西コーナー部の壁際に位置していることから, 壁柱穴と考えられる。P6は,



第113図 第32号住居跡実測図

径30cmの円形で、深さ15cmである。配列から補助柱穴と考えられる。P7は、長径70cm、短径52cmの楕円形で、深さ10cmである。掘り込みも浅く、位置的に柱穴とは考えにくいいため、性格は不明である。

ピット土層解説

P2

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 4 褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |

炉 中央部から南西コーナー寄りに位置している。長径63cm、短径50cmの楕円形で、床面を23cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉の長径方向は、出入口施設を通る住居跡の主軸と直交する。炉内の覆土に焼土小ブロックや焼土粒子が少量含まれる程度で、炉床は赤変していないが硬化している。

炉土層解説

- | | |
|--------|---|
| 1 暗赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 |

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径54cm、短径49cmの楕円形で、深さは38cmである。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 | 4 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 |

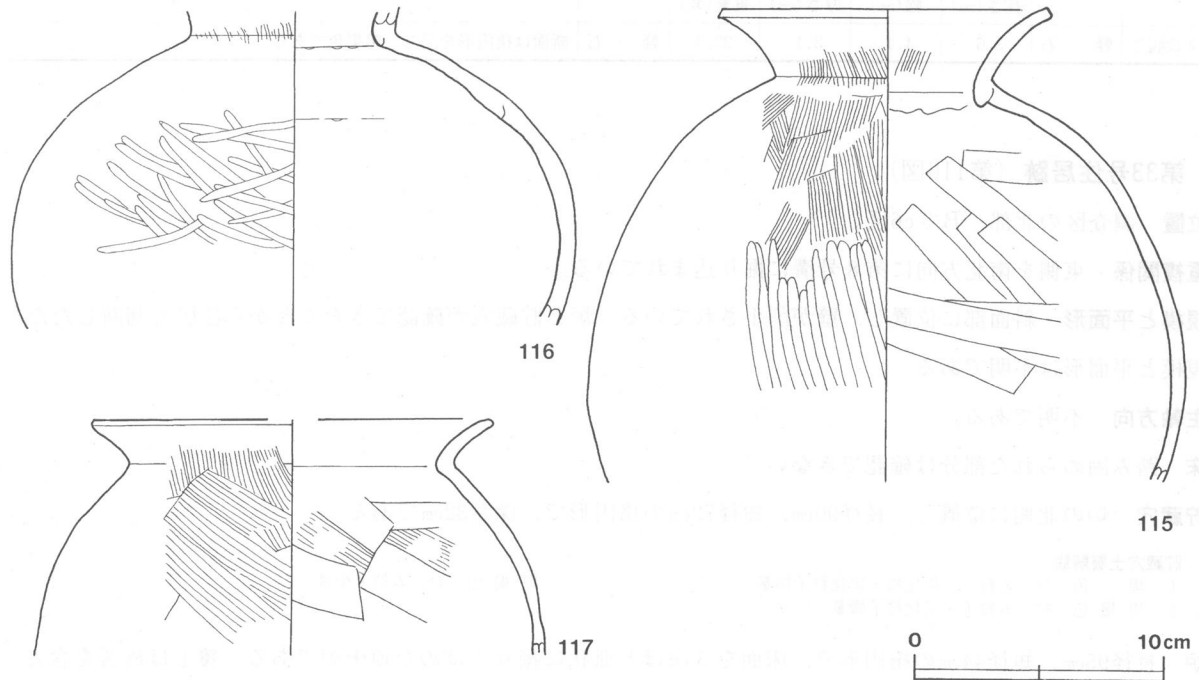
覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。第8層は貼床の土層である。

土層解説

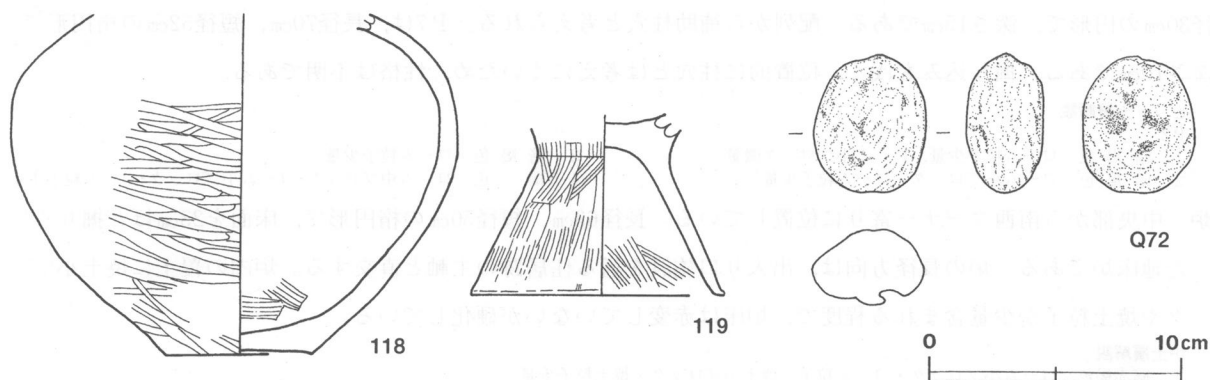
- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・白色粒子・赤色粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 白色粒子・赤色粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・白色粒子・赤色粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック・白色粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック・白色粒子少量, ローム中ブロック・赤色粒子微量 | 7 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 白色粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・白色粒子・赤色粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量 |

遺物 土師器片565点、礫59点、軽石1点、炭化材、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片86点、弥生土器片5点が出土している。遺物は細片が多く、北西壁際を中心に出土している。第114・115図の115～119は土師器である。覆土中層では、117の甕が中央部から、119の台付甕が北東壁寄りから出土している。床面では、115・116の壺と118の甕が北西壁寄りから、Q72の軽石が北側コーナー部からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や床面の出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と思われる。



第114図 第32号住居跡出土遺物実測図(1)



第115図 第32号住居跡出土遺物実測図(2)

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 115	壺 土師器	A 13.0	体部下位欠損。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面斜位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整後、縦位のヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	30% P L 23
		B (19.0)				
116	壺 土師器	B (12.7)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面斜位のヘラ磨き。内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・小礫 浅黄橙色 普通	30%
117	甕 土師器	A [15.6]	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面斜位のハケ目調整後、ヘラナデ。	砂粒・長石・赤色 粒子 にぶい橙色 普通	15%
		B (9.5)				
第115図 118	甕 土師器	B (13.6)	底部から体部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、やや上位に最大径をもつ。	体部外面横位のヘラ磨き、内面下位横位のハケ目調整。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 灰褐色 普通	30%
		C 5.7				
119	台付甕 土師器	B (7.2)	脚台部の破片。脚台部はハの字状に開く。	脚台部外面斜位のハケ目調整後、ナデ、内面斜位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・白色粒子 橙色 普通	10%
		D 10.0				
		E 6.0				

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第115図Q72	軽石	5.6	4.4	3.1	22.3	軽石	断面は楕円形を呈し、暗褐色である。	

第33号住居跡 (第116図)

位置 調査区の北部、B 3 c6区。

重複関係 東側を南北方向に第8号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 斜面部に位置し、壁が削平されている。炉と貯蔵穴が確認できたことから住居と判断したため、規模と平面形は不明である。

主軸方向 不明である。

床 踏み固められた部分は確認できない。

貯蔵穴 炉の北側に位置し、長径90cm、短径72cmの楕円形で、深さ32cmである。

貯蔵穴土層解説

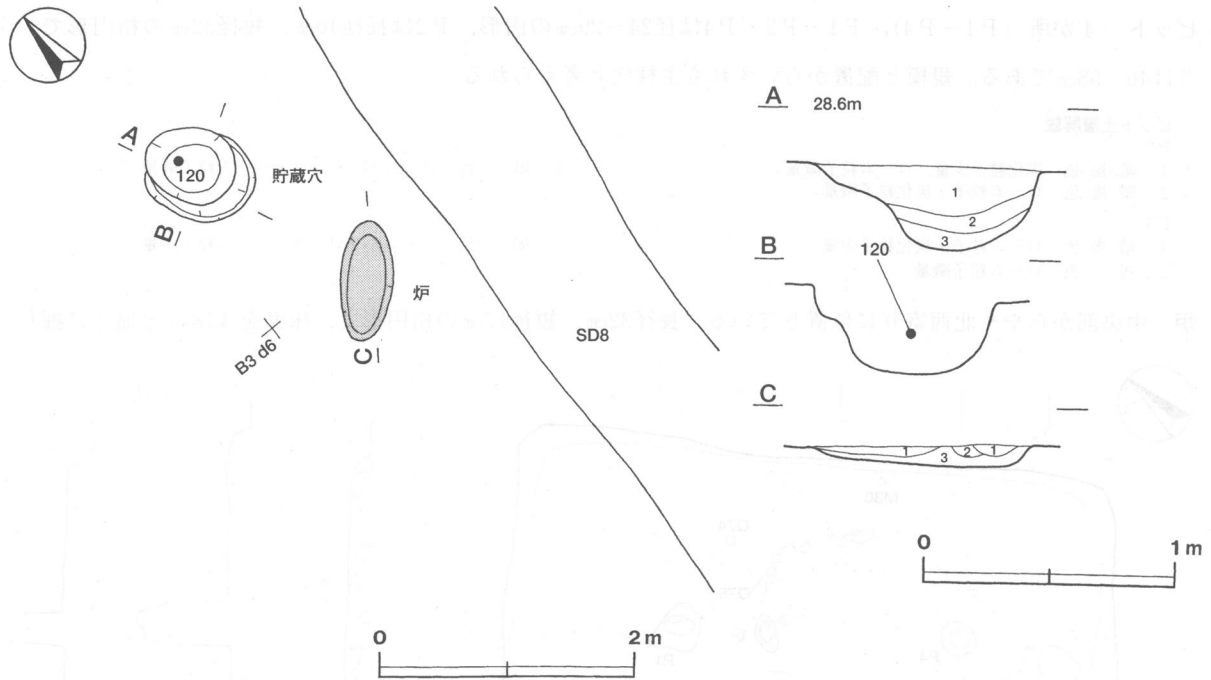
- 1 黒色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

炉 長径95cm、短径44cmの楕円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。覆土は砂質を含んだ焼土粒子が少量含まれる程度で、炉床は硬くない。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, 砂質粒子微量
 2 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量

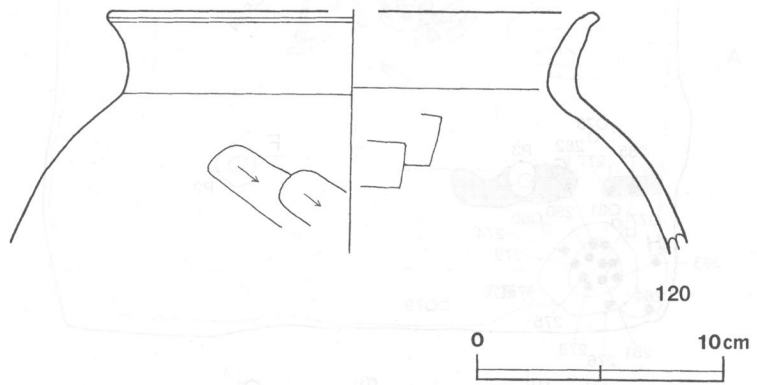
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量



第116図 第33号住居跡実測図

遺物 出土遺物は、土師器片38点が出土している。第117図の120は土師器の甕である。貯蔵穴の覆土中層から破片の状態出土している。

所見 本跡のすぐ西側には、第22・24号住居跡が位置している。出土した土師器の甕や、周囲の住居跡から判断して、中期（5世紀中葉）の可能性が高いと思われる。



第117図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第117図 120	甕 土師器	A(19.8) B(9.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子・小礫 明赤褐色 普通	10%

第36号住居跡（第118図）

位置 調査区の東部、C 5 e3区。

規模と平面形 長軸4.96m, 短軸4.82mの方形である。

主軸方向 N-40°-W

壁 壁高は8~30cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、南西壁際から中央部にかけてよく踏み固められている。中央部の床面から炭化材の小片

が内側に倒れた状態で、中央部と南西壁側から焼土塊が検出された。貯蔵穴の北側から、長軸1.7m、幅0.25mほどの粘土の高まりが、貯蔵穴と床面とを区画するような状態で検出された。

ピット 4か所 (P1~P4)。P1・P3・P4は径24~29cmの円形、P2は長径40cm、短径32cmの楕円形で、深さは46~58cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P2

- 1 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

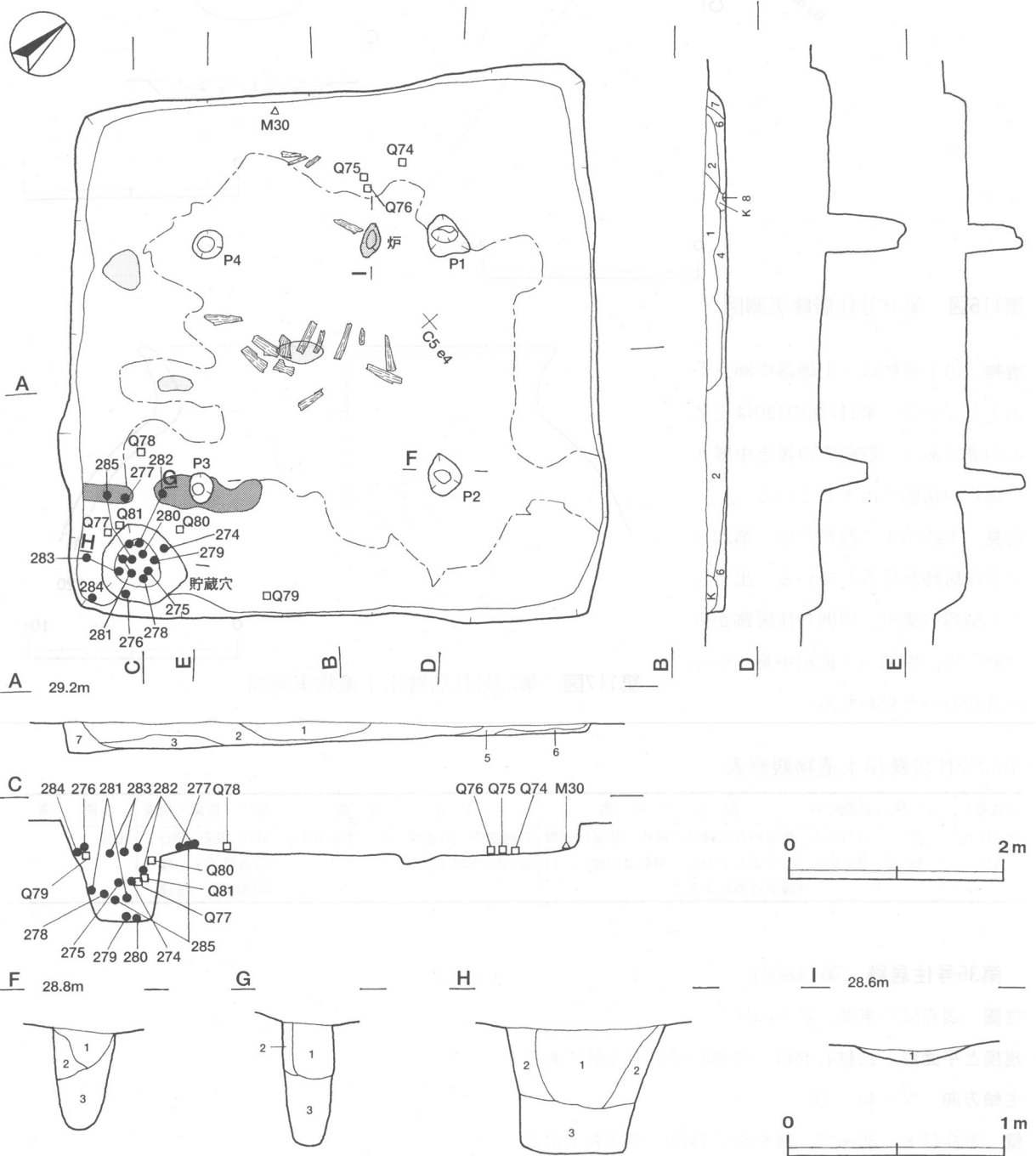
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

P3

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子微量

- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

炉 中央部からやや北西寄りに位置している。長径32cm、短径17cmの楕円形で、床面を4cmほど皿状に掘りく



第118図 第36号住居跡実測図

ほめた地床炉である。炉の長径方向は、住居の主軸方向とほぼ同じである。炉床の中央部は、赤変しているがあまり硬化していない。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・ローム粒子微量

貯蔵穴 南コーナー部に位置し，長径82cm，短径74cmの楕円形で，深さは58cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量
3 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック微量

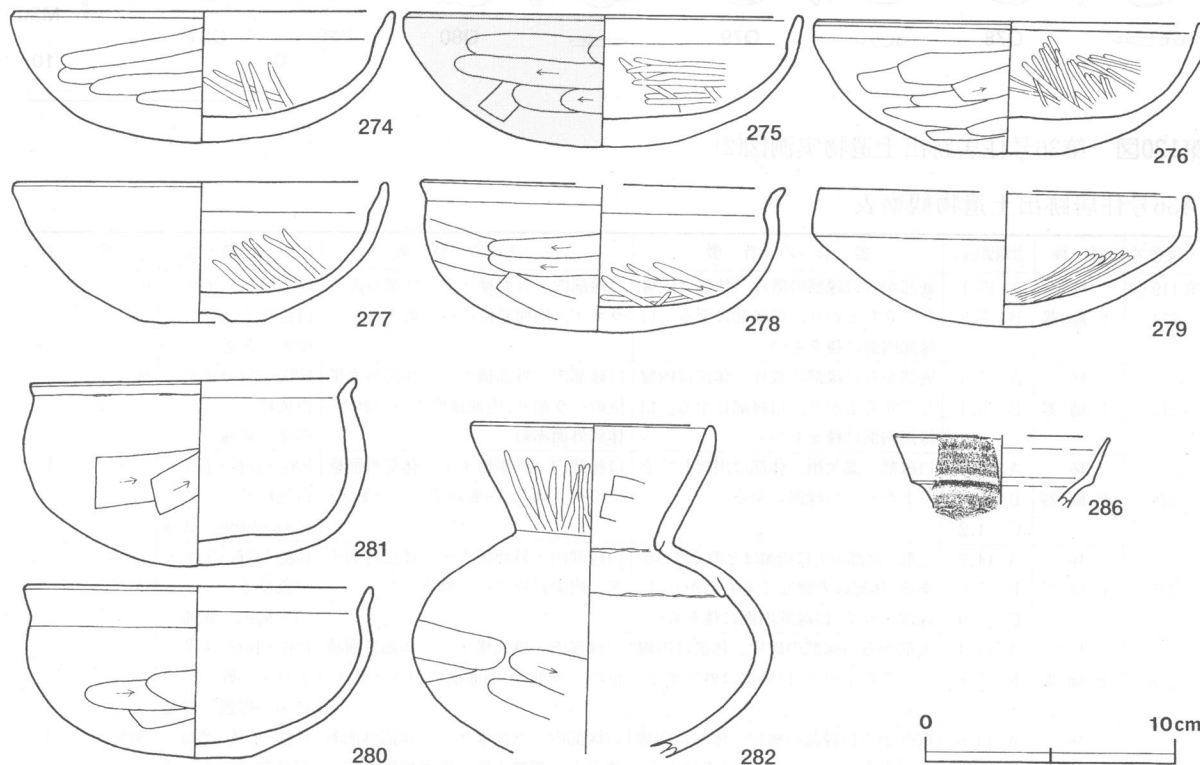
覆土 8層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

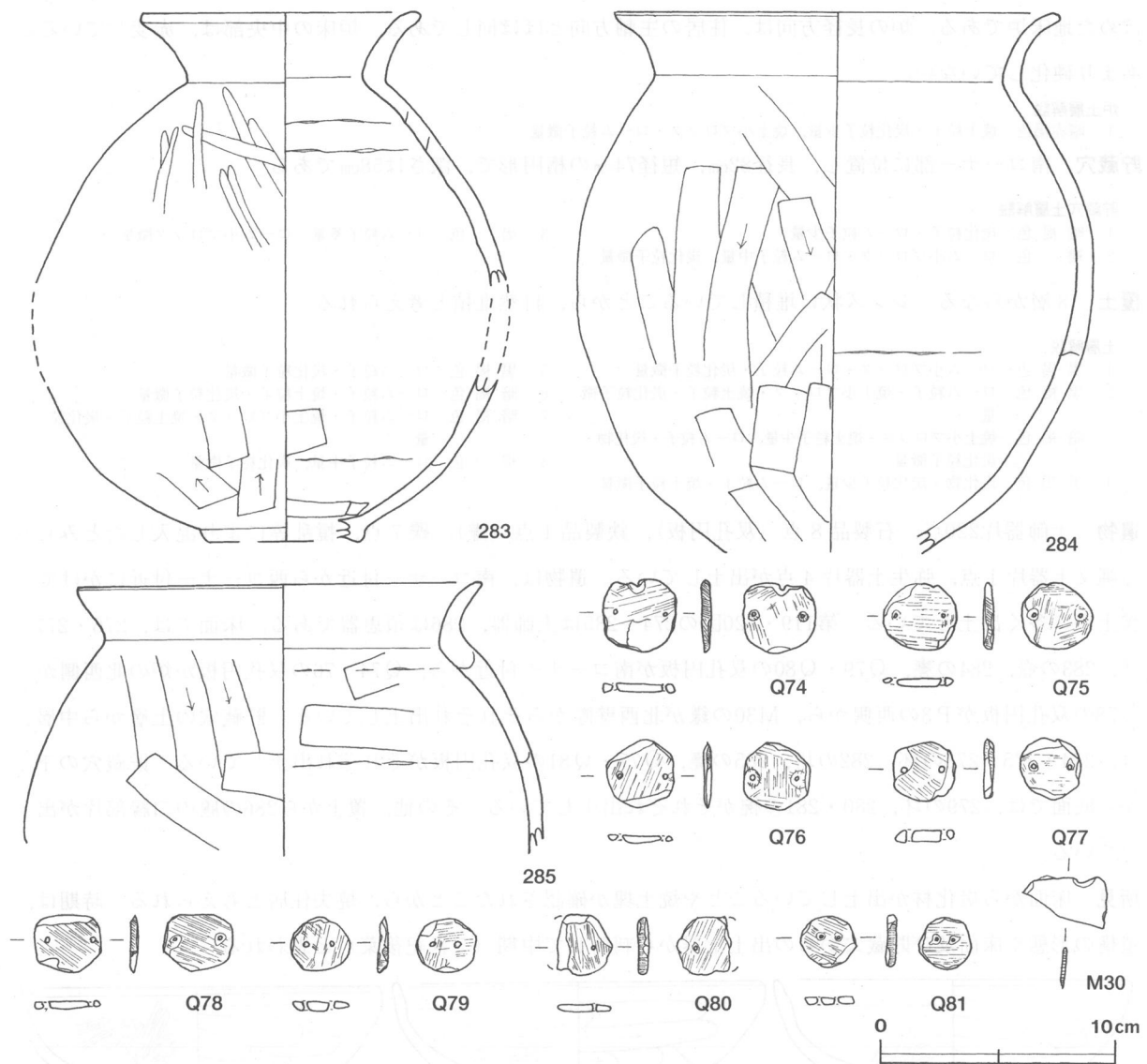
- | | | | |
|-------|---------------------------------|-------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | 炭化物・炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子微量 |

遺物 土師器片220点，石製品8点（双孔円板），鉄製品1点（鎌），礫7点，攪乱等により混入したとみられる縄文土器片1点，弥生土器片4点が出土している。遺物は，南コーナー付近から西コーナー付近にかけての覆土から多く出土している。第119・120図の274～285は土師器，286は須恵器である。床面では，276・277の坏，283の壺，284の甕，Q79・Q80の双孔円板が南コーナー付近から，Q74～76の双孔円板が炉の北西側から，Q78の双孔円板がP3の西側から，M30の鎌が北西壁際からそれぞれ出土している。貯蔵穴の上層から中層では，274・275・278の坏，282の柑，285の甕，Q77・Q81の双孔円板がそれぞれ出土している。貯蔵穴の下層から底面では，279の坏，280・281の椀がそれぞれ出土している。その他，覆土から286の甕の口縁部片が出土している。

所見 床面から炭化材が出土していることや焼土塊が確認されたことから，焼失住居と考えられる。時期は，遺構の形態や床面及び貯蔵穴からの出土土器から判断して中期（5世紀後葉）と思われる。



第119図 第36号住居跡出土遺物実測図(1)



第120図 第36号住居跡出土遺物実測図(2)

第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 274	坏 土師器	A 15.1 B 5.3	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 橙色 普通	60%
275	坏 土師器	A 15.6 B 5.3	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面横位のヘラ磨き。体部外面赤彩。	砂粒・長石・石英・白色粒子 橙色 普通	60%
276	坏 土師器	A 15.4 B 5.4 C 4.2	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	95% P L 23
277	坏 土師器	A 14.7 B 5.6 C 4.9	完形。底部中央に指頭ほどのくぼみがある。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	100% P L 23
278	坏 土師器	A [14.4] B 5.8	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面横位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 にぶい橙色 普通	50%
279	坏 土師器	A [14.6] B 5.4	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。体部外面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面剝離のため調整不明、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 明赤褐色 普通	60% P L 23

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 280	碗 土師器	A 13.7 B 6.9	体部・口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 橙色 普通	80%
281	碗 土師器	A 12.8 B 7.6	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・小礫 浅黄橙色 普通	95% P L 24
282	罎 土師器	A 9.5 B (13.5)	体部一部・底部欠損。体部は算盤玉状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部横ナデ。口縁部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子 赤褐色 普通	70% P L 24
第120図 283	壺 土師器	A 11.6 B (22.5) C [6.4]	体部中位・底部一部欠損。突出した平底。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位縦位のヘラ磨き、下位縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 明赤褐色 普通	50%
284	甕 土師器	A 18.7 B (23.1)	口縁部一部・底部欠損。体部は中位に最大径をもつ球状を呈する。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り、内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 にぶい橙色 普通	85% 体部外面煤付着
285	甕 土師器	A 16.8 B (11.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 浅黄橙色 普通	25%
第119図 286	甕 須恵器	A [8.4] B (2.8)	頸部から口縁部の破片。口縁部外面下位に明瞭な稜をもち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面口クロナデ。頸部上位に櫛歯状工具による波状文が施されている。	砂粒・雲母・白色粒子 黄灰色 普通	5%

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第120図Q74	双孔円板	(3.0)	3.2	0.4	0.1	(6.9)	滑石	3孔が空けられている。	P L 28
Q75	双孔円板	2.8	3.1	0.4	0.2	5.2	滑石	2孔が空けられている。	P L 28
Q76	双孔円板	2.8	2.8	0.3	0.2	4.2	滑石	2孔が空けられている。	P L 28
Q77	双孔円板	2.6	2.6	0.5	0.2	4.2	滑石	2孔が空けられている。	P L 28
Q78	双孔円板	2.4	2.8	0.3	0.2	3.5	滑石	2孔が空けられている。	P L 28
Q79	双孔円板	2.3	2.4	0.4	0.2	3.6	滑石	2孔が空けられている。	P L 28
Q80	双孔円板	2.2	2.2	0.4	0.2	2.7	滑石	1孔が空けられ、1/2欠損。	P L 28
Q81	双孔円板	2.6	2.2	0.4	0.2	3.9	滑石	2孔が空けられている。	P L 28

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第120図M30	鎌	(3.6)	2.1	0.1	(2.4)	鉄	刃部片。	

第37号住居跡（第121図）

位置 調査区の東部，C 5 b1区。

重複関係 南東壁側を第395・398号土坑に，南東コーナー部を第396号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 斜面部に位置し，北東壁側は削平されている。遺存する北西壁及び支柱穴の配置から，長軸4.11m，短軸4.08mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N - 8° - Eと推定される。

壁 壁高は，北西壁が12cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床 ほほ平坦であり，中央部がよく踏み固められている。

ピット 4か所（P1～P4）。P1・P2は長径31・34cm，短径24・27cmの楕円形，P3は長径28cm，短径20cmの不整楕円形で，深さは18～35cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P4は長径48cm，短径35

cmの不整楕円形で、深さ20cmである。性格は不明である。

ピット土層解説

P1・P2・P3

1 黒褐色 ローム粒子少量

2 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量

3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

覆土 2層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

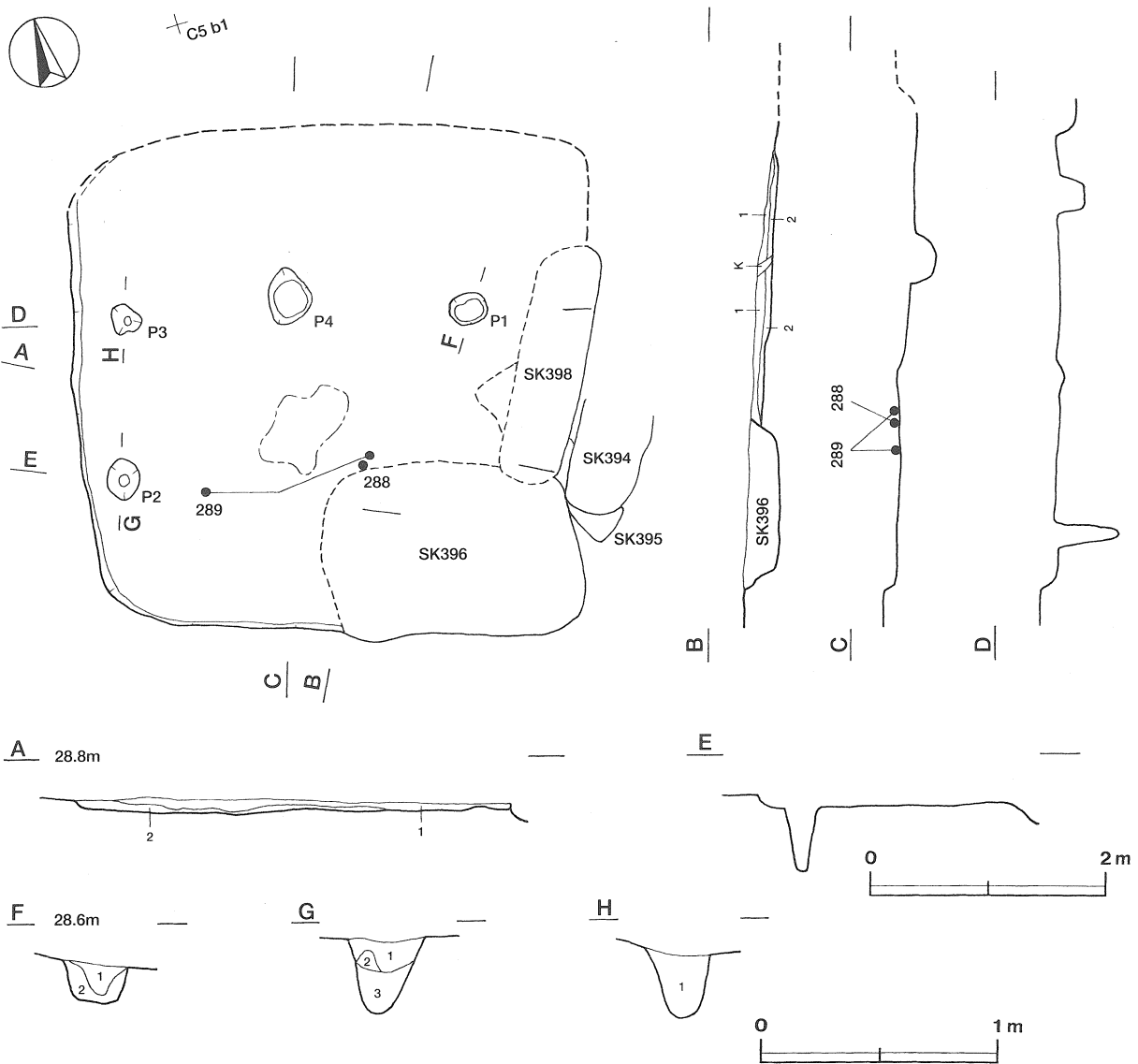
土層解説

1 暗褐色 炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量

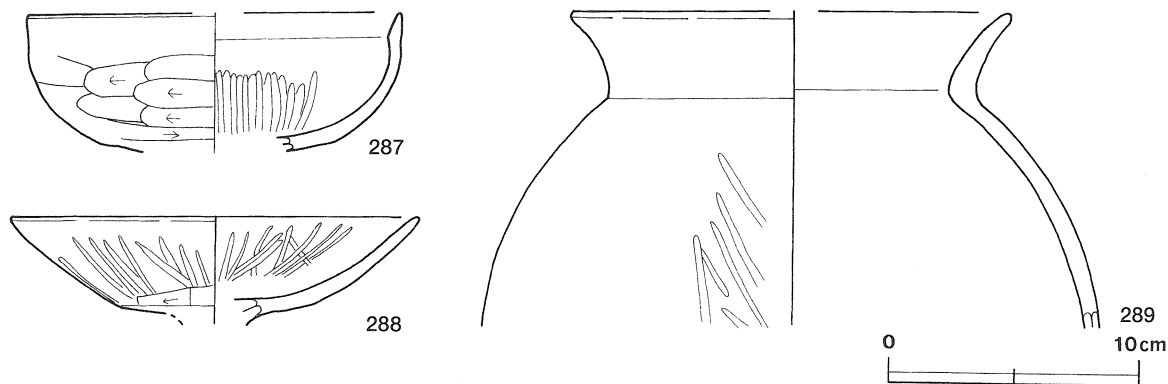
2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物 土師器片460点、礫12点、攪乱等により混入したとみられる弥生土器片4点が出土している。細片が多く、図示できたものは3点のみである。第122図の287～289は土師器である。288の高坏，289の甕はいずれも中央部の床面から出土している。その他、覆土から287の坏が出土している。

所見 傾斜地に位置しているため、北壁側が削平されており、正確な規模は不明である。時期は、遺構の形態や床面からの出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



第121図 第37号住居跡実測図



第122図 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 287	坏 土師器	A [14.8] B (5.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・雲母・白色 粒子・小礫 明赤褐色 普通	30%
288	高坏 土師器	A 16.1 B (4.2)	坏部一部・脚部欠損。坏部外面下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位縦位のヘラ磨き、下位横位のヘラ削り、内面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 明褐色 普通	40%
289	甕 土師器	A [17.4] B (12.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子・小礫 にぶい褐色 普通	20%

第38号住居跡（第123図）

位置 調査区の東部，C 4 a0区。

重複関係 南東コーナー付近を，第392号土坑に掘り込まれている。また，第43号住居跡と南側で重複しているが，覆土が削平されているため，新旧関係は不明である。

規模と平面形 斜面部に位置し，削平されており，支柱穴及び貯蔵穴のみが遺存している。支柱穴及び貯蔵穴の配置から，長軸5.18m，短軸4.52mの長方形と推定される。

主軸方向 N - 6° - Eと推定される。

床 削平されているため遺存していない。

ピット 4か所（P1～P4）。P1・P3・P4は径30～35cmの円形，P2は長径35cm，短径25cmの楕円形で，深さは7～16cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P1・P2・P3・P4

1 黒褐色 ローム粒子少量

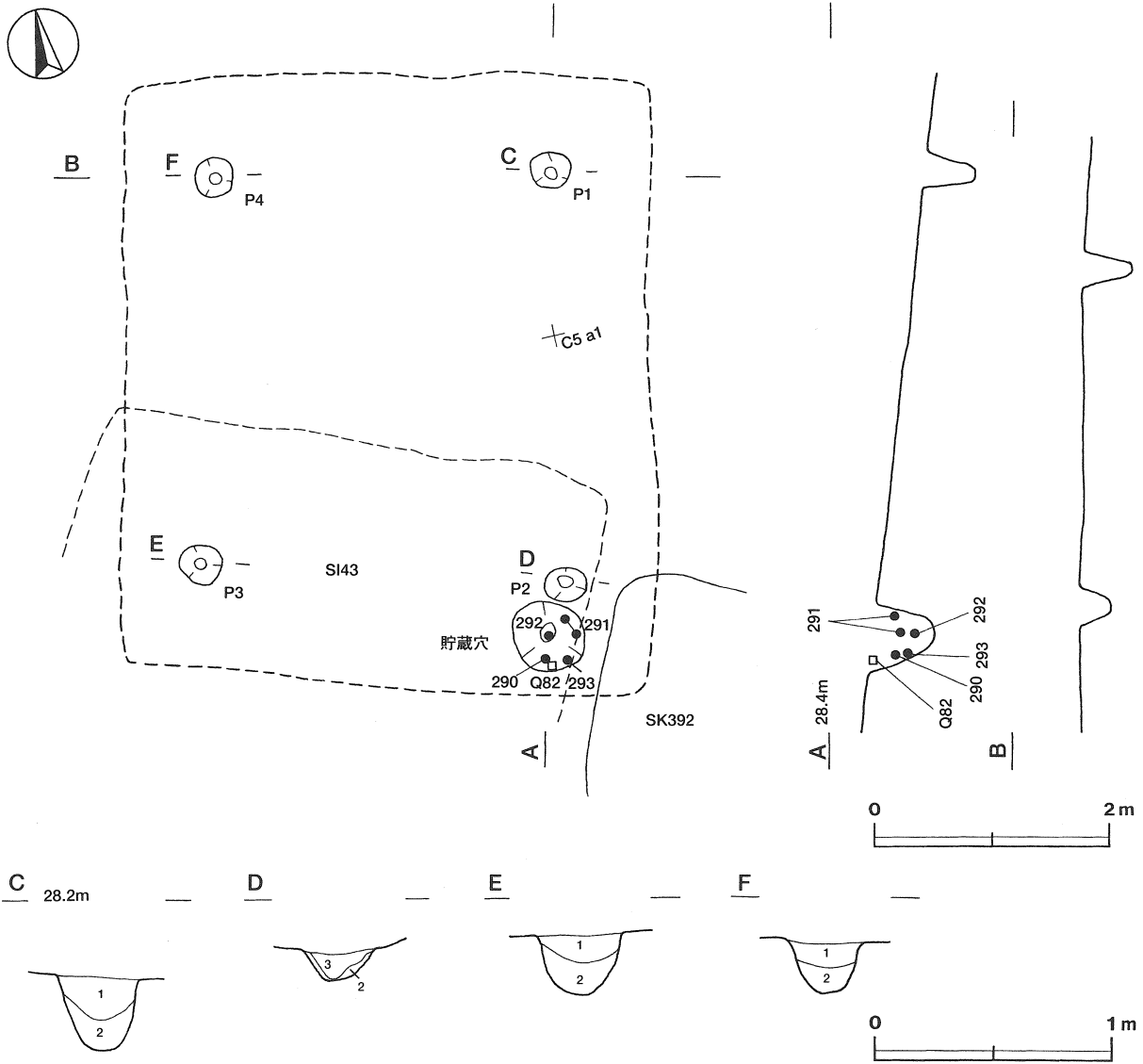
2 褐色 ローム粒子中量

3 黒褐色 ローム粒子中量

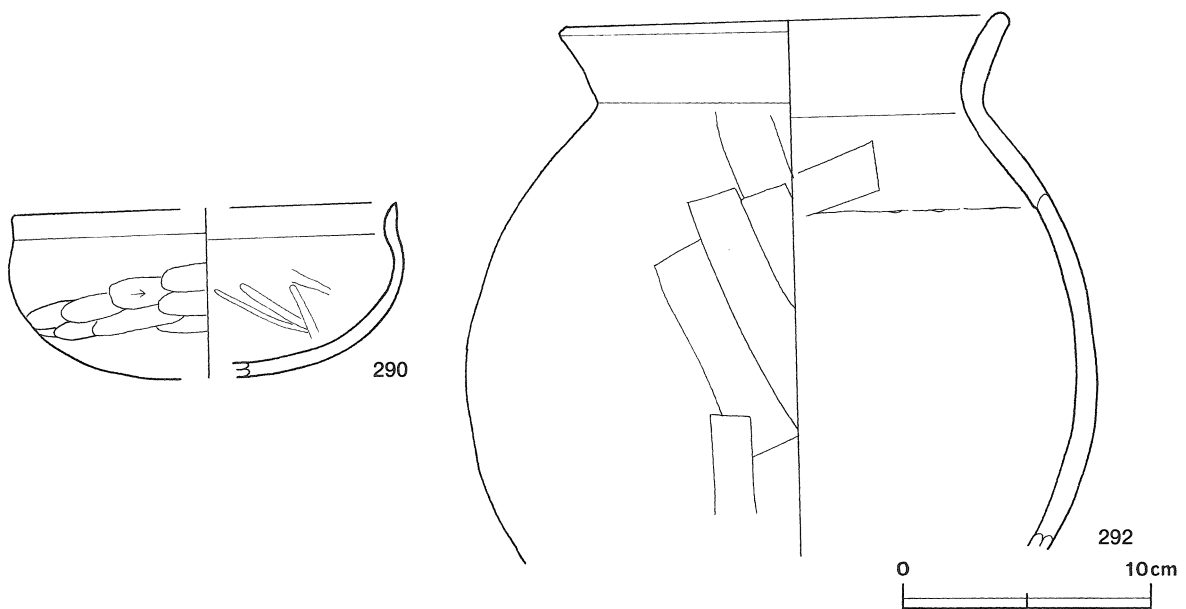
貯蔵穴 南東コーナー部に位置し，長径76cm，短径59cmの楕円形で，深さは31cmである。

遺物 土師器片29点，石製品1点（双孔円板），礫2点，攪乱等により混入したとみられる弥生土器片3点が出土している。第124・125図の290～293は土師器である。貯蔵穴の覆土中層では，290の坏が破片の状態で，291の甕が横位の状態でそれぞれ出土している。貯蔵穴の覆土下層では，292の甕が斜位の状態で，293の甕が横位の状態でそれぞれ出土している。その他，貯蔵穴の覆土からQ82の双孔円板が出土している。

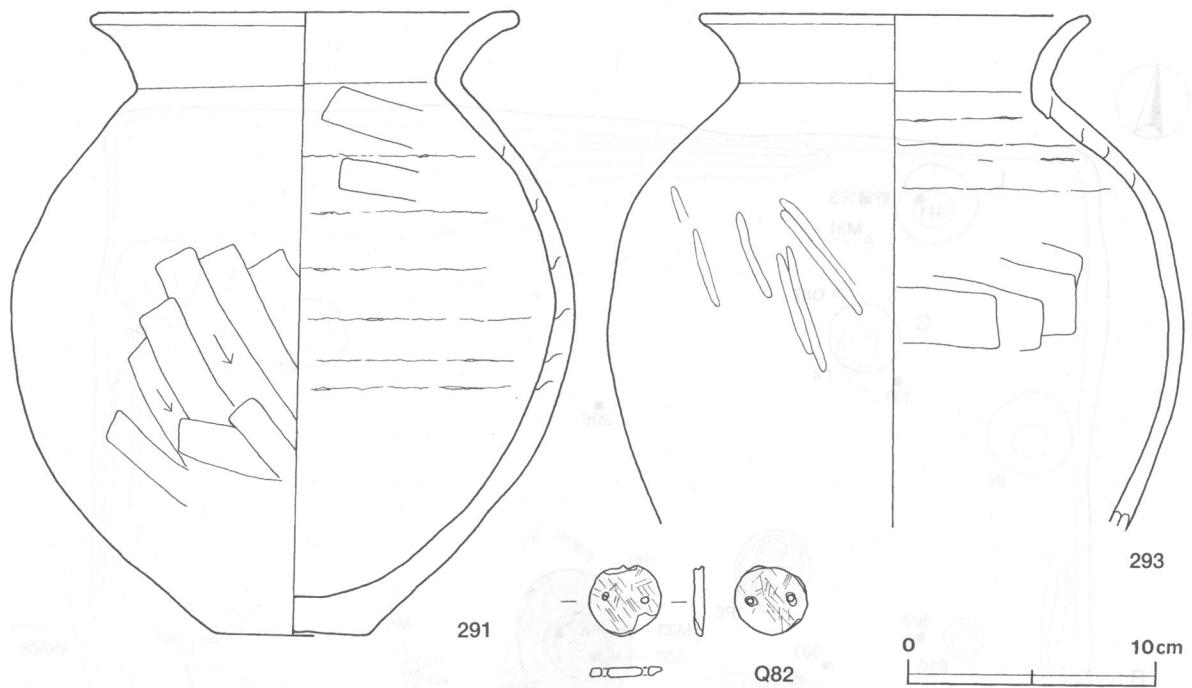
所見 傾斜地であるため，覆土が削平されており，正確な平面形は確認できなかった。時期は，貯蔵穴内から出土した290の坏，291の甕から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。重複している第43号住居跡とはほぼ同時期であることから，新旧関係は不明である。



第123图 第38号住居跡実測図



第124图 第38号住居跡出土遺物実測図(1)



第125図 第38号住居跡出土遺物実測図(2)

第38号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 290	坏 土師器	A [15.4] B (6.8)	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子・礫 赤褐色 普通	25%
第125図 291	甕 土師器	A 16.8 B 25.3 C 6.0	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。体部内面輪積み痕。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・小礫 明赤褐色 普通	65% P L 23
第124図 292	甕 土師器	A 17.5 B (21.8)	体部下位欠損。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 黄橙色 普通	65%
第125図 293	甕 土師器	A 15.5 B (20.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横ナデ、内面ヘラナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 褐灰色 普通	55%

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第125図Q82	双孔円板	2.9	2.9	0.4	0.2	5.6	滑石	2孔が空けられている。	

第39号住居跡 (第126・127区)

位置 調査区の東部，C 4 f6区。

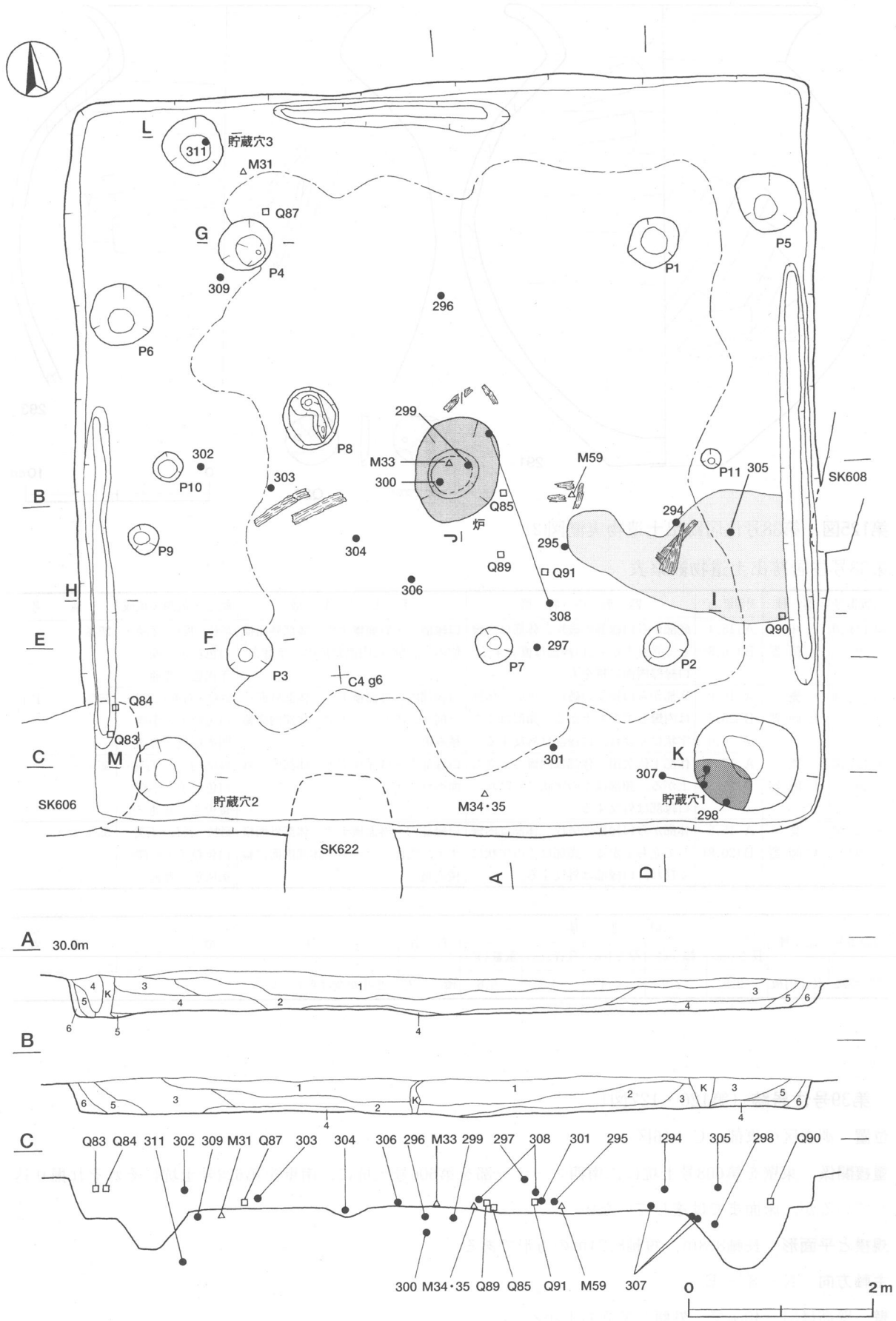
重複関係 東壁を第608号土坑に，南西コーナー部を第606号土坑に，南壁を第622号土坑にそれぞれ掘り込まれているが，床面までは達していない。

規模と平面形 長軸8.8m，短軸8.24mの方形である。

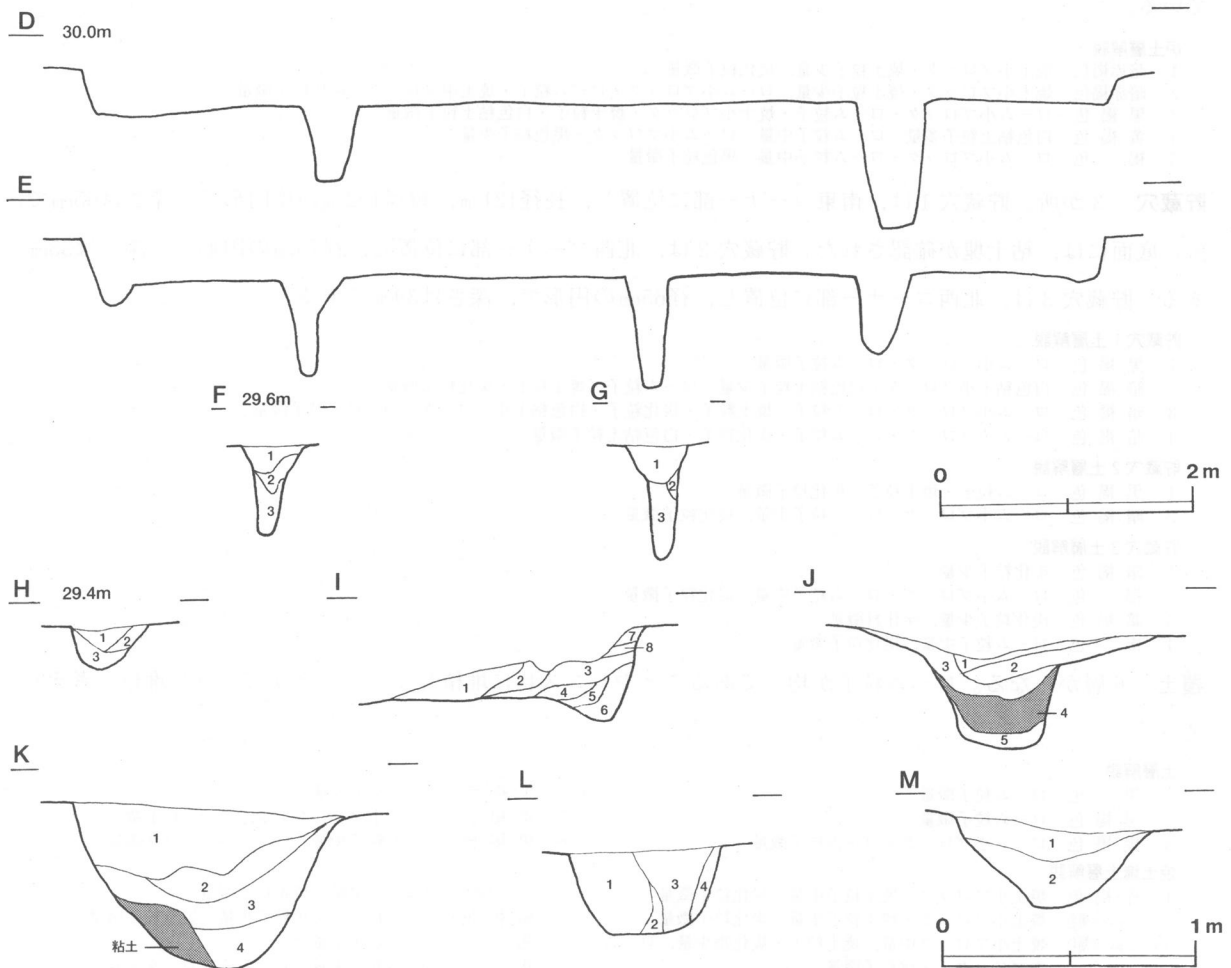
主軸方向 N-8°-E

壁 壁高は31~40cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁側と各コーナー付近を除く部分が掘り込まれている。上幅22~28cm，下幅8~13cm，深さ5~15cm



第126图 第39号住居跡実測図(1)



第127図 第39号住居跡実測図(2)

で、断面形はU字状である。

壁溝土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物・炭化粒子微量 | | |

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。中央部の床面から、長さ50cmほどの炭化材が内側に倒れた状態出土し、東壁の中央部から焼土塊が確認された。

ピット 11か所 (P1~P11)。P1~P4は径45~57cmの円形で、深さ63~103cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P5は長径76cm, 短径68cmの楕円形で、P6は径70cmほどの円形で、深さは38・48cmである。いずれも壁際に位置していることから、壁柱穴と考えられる。P7は径40cmの円形で、深さ87cmである。P2とP3を通る直線上に位置していることから、補助柱穴と考えられる。P9~P11は径20~32cmの円形で、深さ20~23cmである。いずれも性格は不明である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|------|------------------|
| P3 | | | |
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 | | |
| P4 | | | |
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 | 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量 | | |

炉 中央部に位置している。長径118cm, 短径93cmの楕円形で、床面を30cmほど掘り込み、厚さ18cmほど粘土を入れて構築している。炉の覆土は、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量から微量含み、赤変硬化し

ている。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・白色粘土粒子微量
- 4 黄褐色 白色粘土粒子多量、ローム粒子中量、ローム小ブロック・黒色粒子少量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、黒色粒子微量

貯蔵穴 3か所。貯蔵穴1は、南東コーナー部に位置し、長径121cm、短径102cmの楕円形で、深さは65cmである。底面には、粘土塊が確認された。貯蔵穴2は、北西コーナー部に位置し、径73cmの円形で、深さは35cmである。貯蔵穴3は、北西コーナー部に位置し、径65cmの円形で、深さは39cmである。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 白色粘土小ブロック・白色粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・白色粘土小ブロック・白色粘土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量

貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

貯蔵穴3土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 炭化粒子少量、炭化材微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

覆土 6層からなる。ローム粒子が均一であることやレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

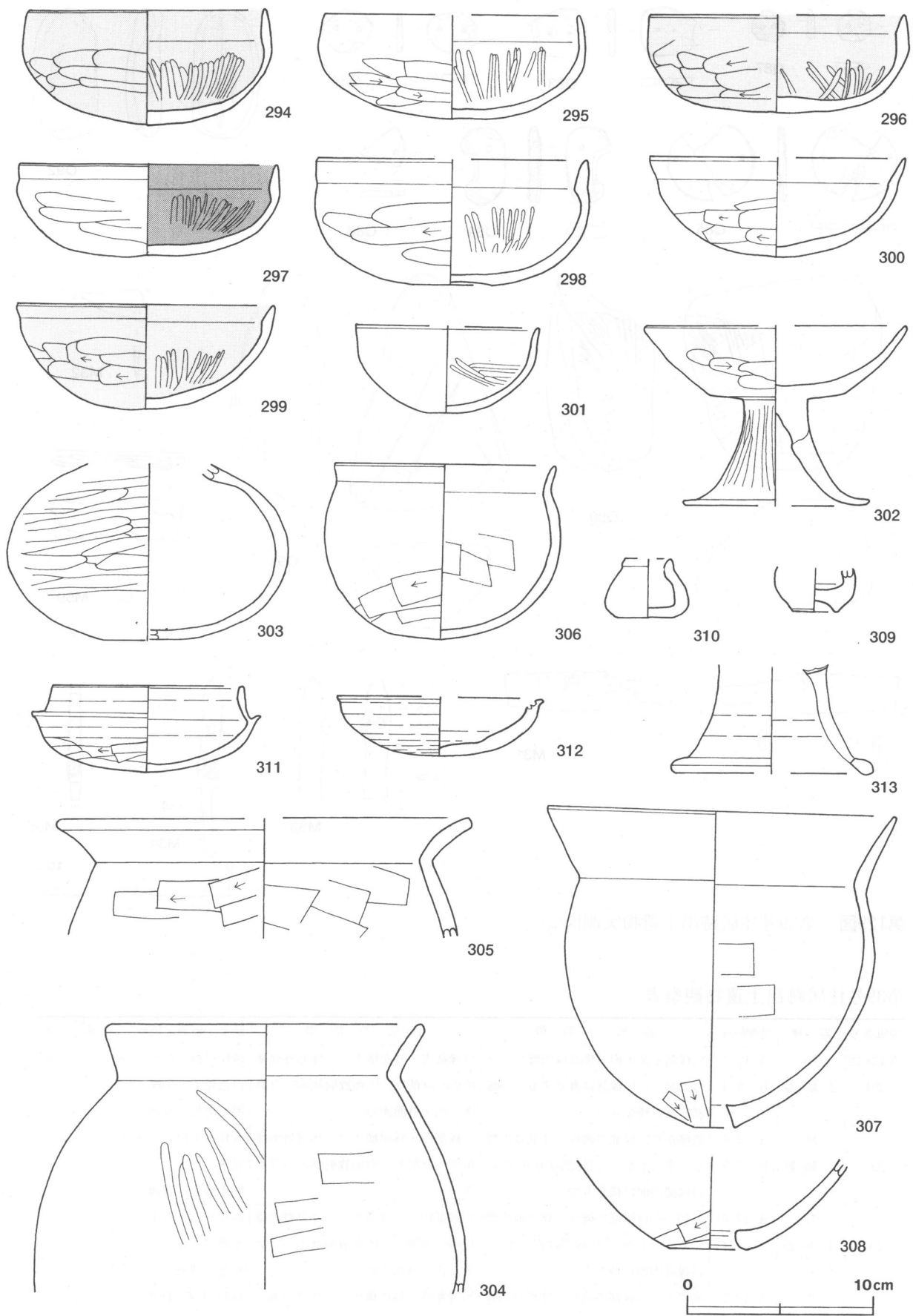
- | | | | |
|-------|------------------|-------|--------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |

焼土塊土層解説

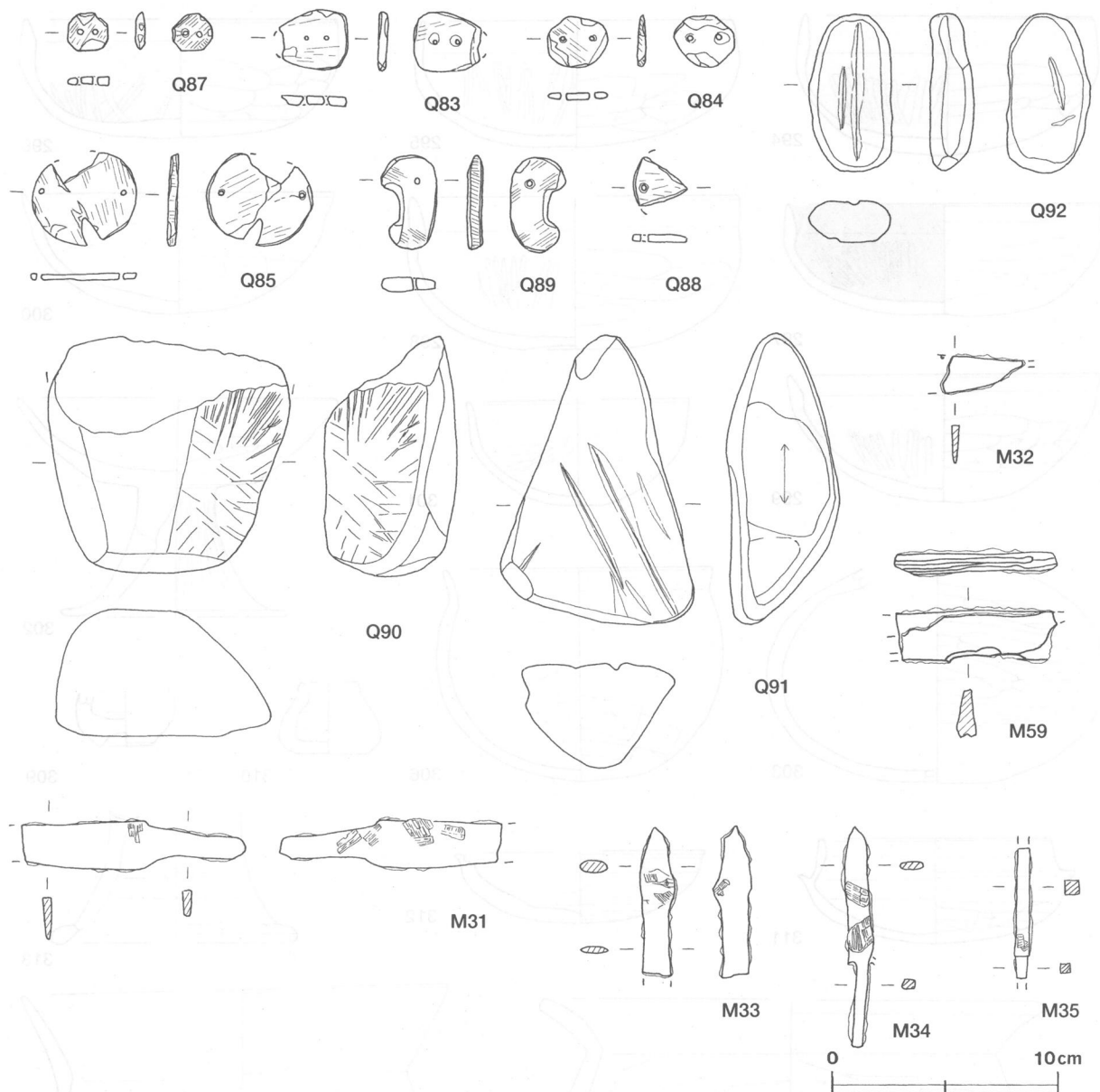
- | | | | |
|----------|--------------------------------------|----------|---------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子微量 | 5 にぶい赤褐色 | 炭化粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土小ブロック中量、焼土粒子・炭化物少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 にぶい赤褐色 | 炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック少量 |

遺物 土師器片3,175点、須恵器片2点、石製品6点（双孔円板5点、勾玉1点）、石器3点（砥石）、鉄製品6点（刀子2点、鏃3点、鎌1点）、鉄滓60g、礫77点、炭化種子1点、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片28点、弥生土器片78点が出土している。遺物は、遺構全体の覆土に散在した状態で出土している。第128・129図の294～310は土師器、311～313は須恵器である。覆土上層では、294の坏、305の甕がP2の北側から、297の坏がP7の東側から、302の高坏が中央部の西寄りから、Q83・Q84の双孔円板が南西コーナー付近からそれぞれ出土している。308の甕は、中央部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。覆土下層では、295の坏、Q89の勾玉、Q91の砥石、M59の鎌が炉の南東側から、Q87の双孔円板がP4の北側から、303の罎が中央部から、Q90の砥石が東壁際から、301の坏が南壁寄りからそれぞれ出土している。床面では、中央部から296の坏、304の甕、306の小形甕が、P4の西側から309の手捏土器が、炉の南東からQ85の双孔円板が、M31の刀子がP4の北側から、M34・M35の鉄鏃が南壁寄りからそれぞれ出土している。炉の覆土上層では、M33の鉄鏃が、覆土中層では、299の坏が、底面では300の坏がそれぞれ出土している。貯蔵穴1の覆土上層では、298の坏、307の甕が、貯蔵穴3の底面では、311の坏が正位の状態それぞれ出土している。その他、覆土から310の手捏土器、312の坏、313の高坏、Q88の双孔円板、Q92の砥石、M32の刀子がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、床面に炭化材が出土し、東壁中央部から焼土塊が確認されたことから、焼失住居と考えられる。覆土上層及び中層から出土した土器は、出土状況から流れ込みと考えられる。時期は、遺構の形態や覆土下層、床面及び貯蔵穴内からの出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



第128图 第39号住居跡出土遺物実測図(1)



第129図 第39号住居跡出土遺物実測図(2)

第39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 294	坏 土師器	A 12.7 B 6.3	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 明赤褐色 普通	80% P L 23
295	坏 土師器	A [13.6] B 5.7	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・雲母・白色粒子 明赤褐色 普通	60%
296	坏 土師器	A [13.6] B 5.4	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・小礫 橙色 普通	55%
297	坏 土師器	A 13.7 B 5.0	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面放射状のヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	55%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 298	坏 土師器	A [14.4] B 6.8 C 4.4	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 赤褐色 普通	55%
299	坏 土師器	A 13.8 B 5.6	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	50%
300	坏 土師器	A [13.8] B 5.3	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 橙色 普通	40%
301	坏 土師器	A [9.8] B 4.8	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面横位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	25%
302	高坏 土師器	A [14.0] B 9.8 D [9.4] E 5.8	坏部一部欠損。脚部はラッパ状を呈し、裾部は大きく開く。坏部外面下に稜をもち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。脚部内面に輪積み痕。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 にぶい橙色 普通	70%
303	坩 土師器	B (9.5) C [4.5]	体部の破片。体部は算盤玉状を呈する。	体部外面横位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明褐色 普通	30%
304	甕 土師器	A 16.7 B (14.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	35%
305	甕 土師器	A [22.0] B (6.5)	体部から口縁部の破片。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 明黄褐色 普通	10%
306	小形甕 土師器	A 11.9 B 9.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 浅黄褐色 普通	95%
307	甗 土師器	A 18.6 B 17.3 C 2.2	体部一部欠損。単孔式で、底部は卵形を呈する。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 にぶい橙色 普通	90% P L 24
308	甗 土師器	B (5.0) C 4.0	底部の破片。単孔式で、体部は内彎して立ち上がる。	体部外面下位斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 橙色 普通	10%
309	手捏土器 土師器	B (2.4) C 2.4	底部から体部の破片。底部中央にくぼみがある。体部は直立する。	体部内・外面指頭による粗いナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	50%
310	手捏土器 土師器	A [2.5] B 3.2 C [3.2]	底部から口縁部の破片。鉢形。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は軽く摘み上げられている。	体部内・外面指頭による粗いナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	50%
311	坏 須恵器	A 10.1 B 4.6	口縁部一部欠損。底部は内彎して立ち上がる。受部は外方にのびる。口縁部は内傾する。	体部から口縁部内・外面ロクロナデ。底部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・石英・小礫 灰色 普通	95% P L 24
312	坏 須恵器	A [11.0] B 3.1	底部から受部の破片。底部は内彎して立ち上がる。受部は短く外方にのびる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 暗灰色 普通	5%
313	高坏 須恵器	B (5.8) D [10.6]	脚部の破片。脚部はハの字状に開き、裾部端部は、肥厚している。脚部に透かし孔が空けられている。	脚部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・石英 黄灰色 普通	5%

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第129図Q83	双孔円板	2.6	(3.1)	0.4	0.2	(5.4)	滑石	2孔が空けられている。一部欠損。	
Q84	双孔円板	2.3	2.7	0.4	0.2	3.8	滑石	2孔が空けられている。	
Q85	双孔円板	(4.1)	4.6	0.3	- 0.2	(11.0)	滑石	2孔が空けられている。一部欠損。	
Q87	双孔円板	1.7	1.8	0.4	0.2	2.0	滑石	2孔が空けられている。	
Q88	双孔円板	(2.2)	(2.5)	0.4	0.2	(2.5)	滑石	1 / 4 遺存。小孔はひとつ遺存。	
Q89	勾玉	4.2	2.5	0.6	0.2	8.5	滑石	基部に小孔が空けられている。	P L 28

図版番号	種別	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第129図Q90	砥石	(10.5)	(10.7)	(5.5)	(822.7)	凝灰岩	研ぎ面は1面。研ぎ面に不規則な刻み有り。	
Q91	砥石	12.8	8.5	4.8	428.3	砂岩	有溝砥石。	P L 27
Q92	砥石	7.1	3.7	1.9	66.9	砂岩	有溝砥石。	

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		刀身(cm)	身幅(cm)	重ね(cm)	重量(g)			
第129図M31	刀子	(9.7)	2.1	0.4	(23.3)	鉄	刃部から茎部の破片。多方向の木質部遺存。	P L 28
M32	刀子	(3.7)	1.7	0.3	(4.3)	鉄	刃部から茎部の破片。	

図版番号	器種	計測値(cm・g)						材質	特徴	備考
		鎌身長	鎌身幅	筥被部長	筥被部幅	厚さ	重量			
第129図M33	鎌	(6.6)	1.6	—	—	0.3	(10.1)	鉄	鎌身部の破片。	P L 28
M34	鎌	9.8	1.2	(3.6)	0.5	0.4	(10.9)	鉄	筥被部低位欠損。多方向の木質部遺存。	P L 28
M35	鎌	—	—	(5.8)	0.8	0.6	(5.3)	鉄	筥被部の破片。	

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第129図M59	鎌	(7.2)	2.4	0.9	(25.4)	鉄	刃部が折れ重なった状態の破片。	

第40号住居跡 (第130図)

位置 調査区の南東部，C 4 j7区。

重複関係 北西コーナー付近を第418号土坑に掘り込まれているが，床面までは達していない。

規模と平面形 東側が調査区域外のため確認できなかった。南北方向は8.32m，東西方向は確認できた長さ3.82mで，方形または長方形と推定される。

壁 壁高は39～44cmで，外傾して立ち上がる。

床 凹凸があり，中央部がよく踏み固められている。

ピット 4か所 (P1～P4)。P1は径47cmほどの円形で，深さ46cmである。P2は長径71cm，短径60cmの楕円形で，深さ81cmである。各コーナー部に寄った位置であることから，いずれも主柱穴と考えられる。P3は径28cmほどの円形で，深さ74cmである。P1とP2をとおる直線上に位置していることから，補助柱穴と考えられる。P4は長径100cm，短径60cmの楕円形で，深さ40cmである。性格は不明である。

ピット土層解説

P 1

1 褐色 ローム粒子中量，炭化粒子微量

2 褐色 ローム粒子中量

P 2

1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

4 褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

2 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

5 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子微量

3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土 9層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

5 暗褐色 炭化粒子少量，ローム粒子微量

2 暗褐色 炭化粒子少量，ローム中ブロック・ローム粒子微量

6 暗褐色 炭化粒子中量，焼土粒子微量

3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子微量

7 暗褐色 炭化粒子少量，ローム粒子微量

8 褐色 ローム大ブロック多量

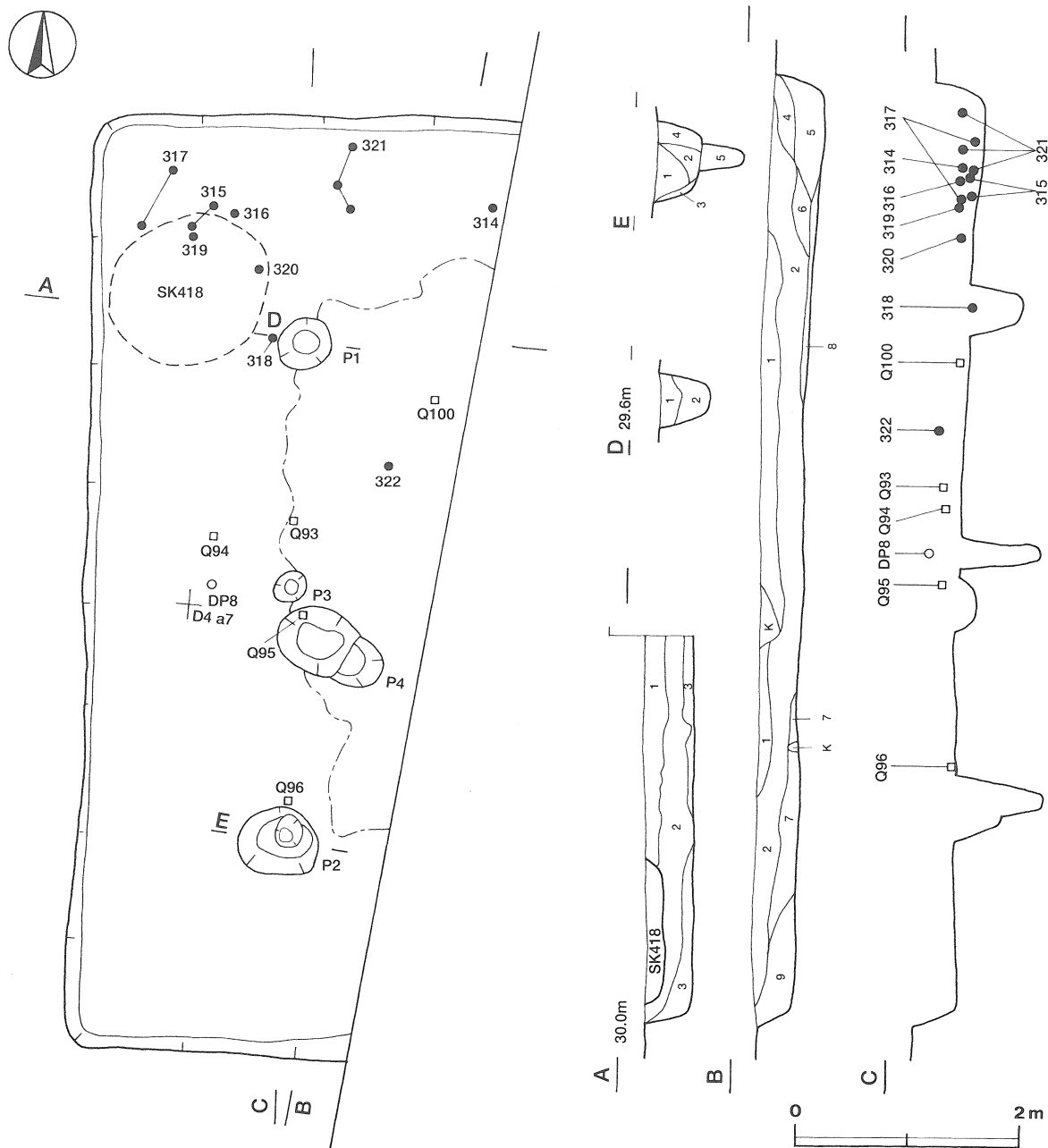
4 暗褐色 炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子微量

9 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量

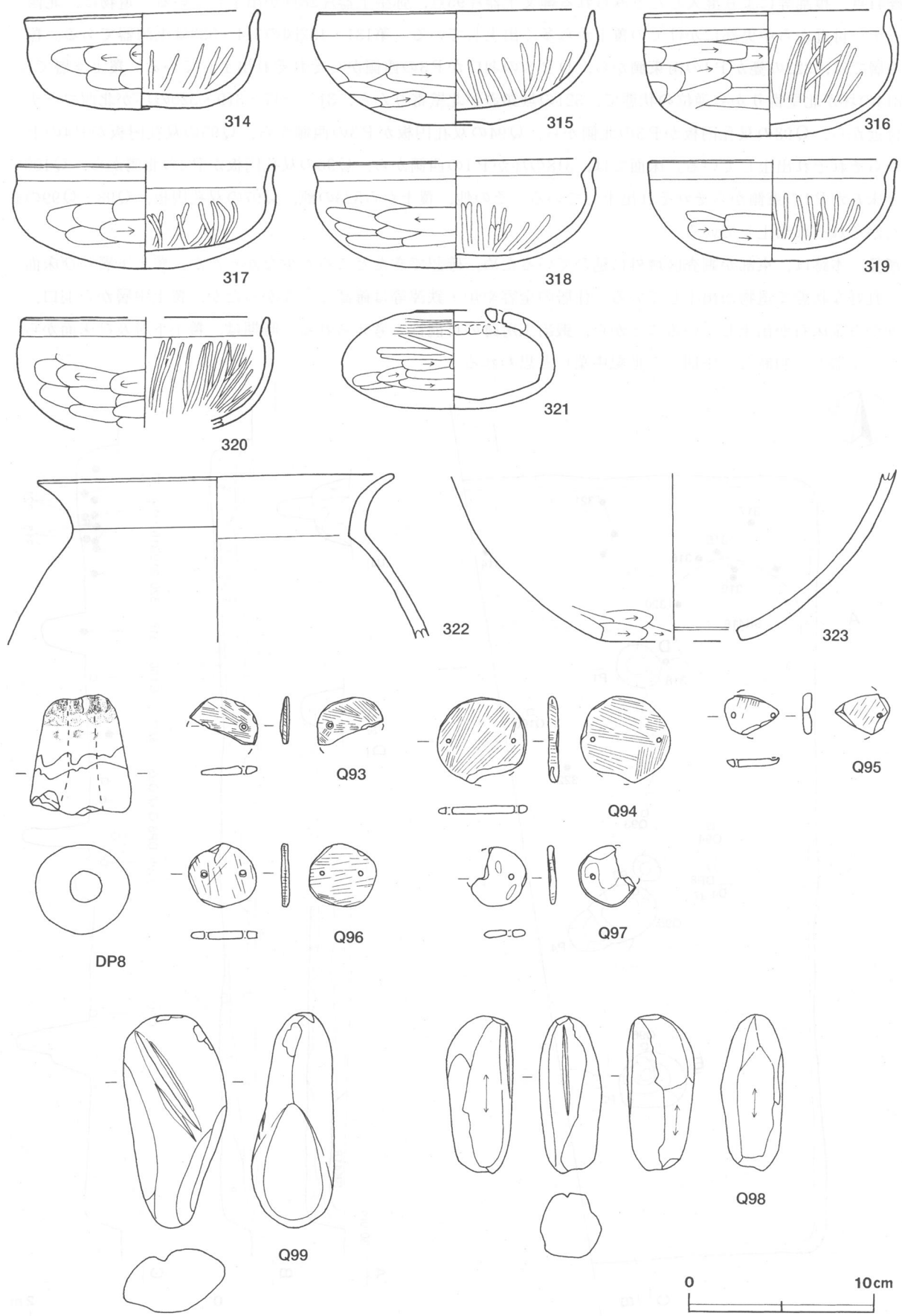
遺物 土師器片1,537点，土製品1点(羽口)，石製品5点(双孔円板)，石器3点(砥石2点，金床石1点)，礫

礫41点、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片95点、弥生土器片28点が出土している。遺物は、北西コーナー付近から中央部にかけての覆土から多く出土している。第131・132図の314～323は土師器である。覆土中層では、322の甕がP1の南東側から、DP8の羽口がP3の西側からそれぞれ出土している。覆土下層では、314の坏が北壁寄りから逆位の状態で、321の無頸壺が北壁寄りから、315～317・319・320の坏が北西コーナー付近から、Q93の双孔円板がP3の北側から、Q94の双孔円板がP3の西側から、Q95の双孔円板がP4の上面からそれぞれ出土している。床面では、318の坏がP1の西側から、Q96の双孔円板がP2の北側から、Q100の金床石がP1の東側からそれぞれ出土している。その他、覆土から323の甑、Q97の双孔円板、Q98・Q99の砥石がそれぞれ出土している。

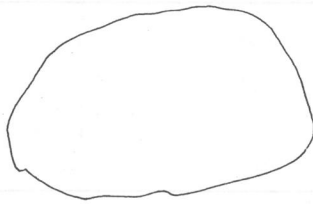
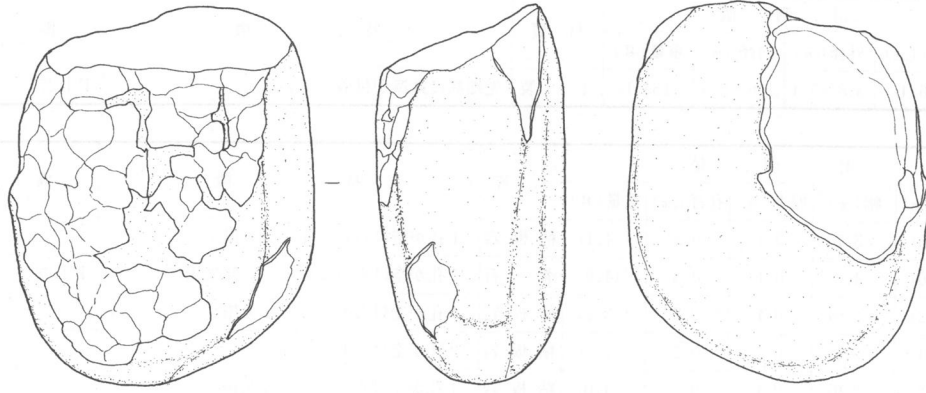
所見 本跡は、東部が調査区域外に延びているため、確認できたところが少なかったが、覆土下層及び床面から良好な状態で遺物が出土している。住居の全容や炉・鉄滓等は確認できなかったが、覆土中層から羽口、床面から金床石が出土していることから、鍛冶工房跡の可能性も考えられる。時期は、覆土下層及び床面からの出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



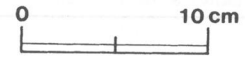
第130図 第40号住居跡実測図



第131图 第40号住居迹出土遗物实测图(1)



Q 100



第132図 第40号住居跡出土遺物実測図(2)

第40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第131図 314	坏 土師器	A 12.6 B 5.4 C 3.0	完形。底部中央にややくぼみをもつ平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 橙色 普通	100% P L 24
315	坏 土師器	A 14.9 B 6.1 C 3.9	口縁部一部欠損。底部中央にくぼみをもつ平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 橙色 普通	90% P L 24
316	坏 土師器	A 13.2 B 6.6	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・白色粒子・赤色粒子 赤橙色 普通	60%
317	坏 土師器	A [13.8] B 5.7	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・雲母・白色粒子 橙色 普通	60%
318	坏 土師器	A [15.0] B 5.8	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 にぶい褐色 普通	45%
319	坏 土師器	A [13.2] B 5.5	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 橙色 普通	45%
320	坏 土師器	A [13.0] B (6.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	25%
321	無頸壺 土師器	A 3.8 B 5.3	底部から口縁部の破片。体部は算盤玉状を呈する。体部上位に、孔が空けられている。	体部外面上位横位のヘラ磨き、下位横位のヘラ削り、内面ナデ。体部内面に指頭痕、輪積み痕。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	50% P L 24
322	甕 土師器	A 19.0 B (8.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	20%
323	甌 土師器	B (9.1) C [7.2]	底部の破片。無底式。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面下位横位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・雲母・白色粒子 褐灰色 普通	10%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)			
第131図DP8	羽口	(6.4)	3.8~5.4	1.6~2.3	(133.1)	土製	先端部に鉄滓が付着している。	P L 27

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第131図Q93	双孔円板	(2.5)	(3.7)	0.4	0.2	(4.1)	粘板岩	1孔が空けられ、1/2欠損。	
Q94	双孔円板	(4.6)	4.8	0.4	0.3	(14.9)	滑石	2孔が空けられている。一部欠損。	P L 28
Q95	双孔円板	(2.2)	(2.9)	0.4	0.2	(3.9)	粘板岩	1孔が空けられ、3/4欠損。	
Q96	双孔円板	3.4	3.6	0.4	0.2	7.3	粘板岩	2孔が空けられている。	
Q97	双孔円板	3.2	(2.9)	0.4	0.3	(4.0)	粘板岩	1孔が空けられ、1/4欠損。	

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第131図Q98	砥石	8.4	3.3	3.5	127.8	砂岩	有溝砥石。	
Q99	砥石	11.6	5.4	4.4	281.2	砂岩	有溝砥石。	P L 28
第132図Q100	金床石	20.5	(16.2)	10.1	(4,743.1)	砂岩	表面が赤変し、剝離している。	

第41号住居跡 (第133図)

位置 調査区の東部，C 4 a8区。

規模と平面形 斜面部に位置し，北東壁側が削平されている。遺存する南西壁及び柱穴の配列から，長軸5.02m，短軸4.65mの方形と推定される。

壁 壁高は遺存する北西壁・南西壁は3～5cmで，外傾して立ち上がる。



第133図 第41号住居跡実測図

床 ほぼ平坦である。中央部に焼土塊を2か所確認した。

ピット 4か所 (P1~P4)。P1~P4は長径31~35cm, 短径20~28cmの楕円形で、深さ20~73cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。

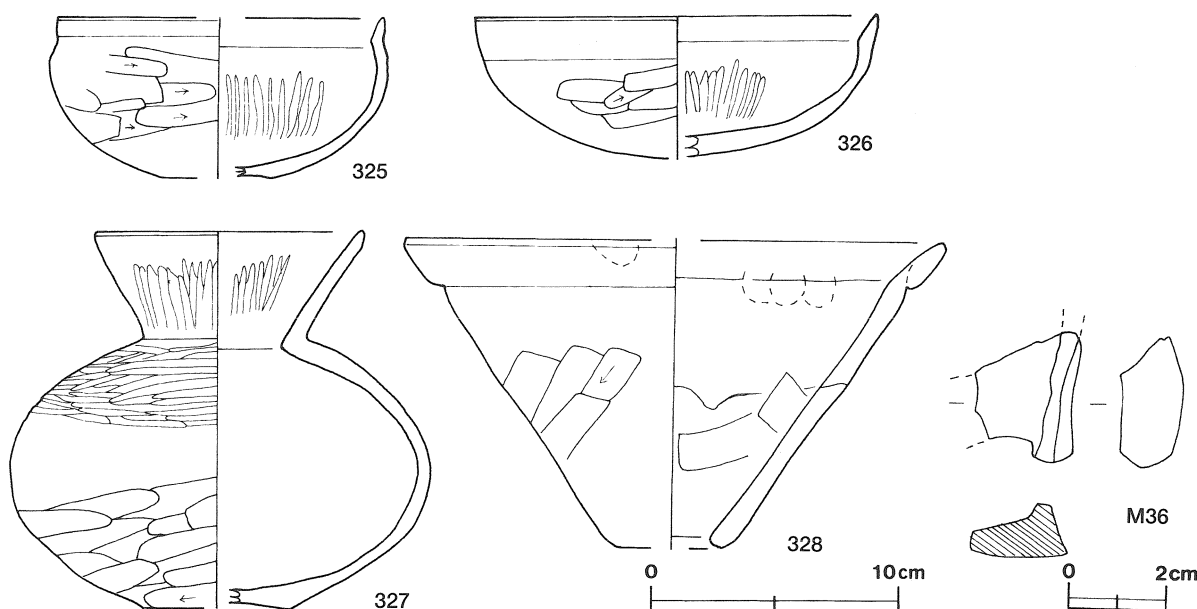
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

遺物 土師器片119点, 鉄製品1点(鎌), 礫5点, 鉄滓(210g), 攪乱等により混入したとみられる縄文土器片2点, 弥生土器片2点が出土している。第134図の325~328は土師器である。覆土下層では, 327の罎, 328の甗がP4の東側からそれぞれ出土している。床面では, 325の坏が北西壁際から, M36の鎌がP2の西側からそれぞれ出土している。その他, 覆土から326の坏, 鉄滓が出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や覆土下層及び床面からの出土土器から判断して, 中期(5世紀中葉)と思われる。



第134図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 325	坏 土師器	A [13.0]	底部から口縁部の破片。底部はややくぼむ平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り, 内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子・赤色粒子 赤褐色 普通	40%
		B 6.5				
		C [4.5]				
326	坏 土師器	A 16.2	底部・口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り, 内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	85% P L24
		B 5.7				
327	罎 土師器	A 10.5	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は算盤玉状を呈する。頸部は屈曲し, 口縁部は外傾する。	口縁部内・外面縦位のヘラ磨き後, 横ナデ。体部外面上位横位のヘラ磨き, 下位横位のヘラ削り, 内面ナデ。	砂粒・長石・白色 粒子・小礫 にぶい赤褐色 普通	70% P L24
		B 15.3				
		C [5.8]				
328	甗 土師器	A [21.4]	底部から口縁部の破片。単孔式。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。口縁部は折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り, 内面ヘラナデ。口縁部内・外面に指頭痕。	砂粒・石英・白色 粒子・赤色粒子 橙色 普通	50%
		B 12.4				
		C [4.0]				

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第134図M36	鎌	(2.1)	(2.6)	(1.1)	(9.2)	鉄	柄の折り返し部の破片。	

第43号住居跡 (第135図)

位置 調査区の東部, C 4 a0区。

重複関係 北東壁側が第38号住居跡と重複しているが, 覆土が削平されているため, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 斜面部に位置し, 削平されており, 支柱穴及び貯蔵穴のみ遺存している。支柱穴及び貯蔵穴の配置から長軸5.34m, 短軸4.12mの長方形と推定される。

主軸方向 N-28°-Eと推定される。

床 削平されているため遺存していない。

ピット 4か所 (P1~P4)。P1・P3・P4は径26~30cmの円形で, 深さ33~45cmである。P2は長径33cm, 短径25cmの楕円形で, 深さ30cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。

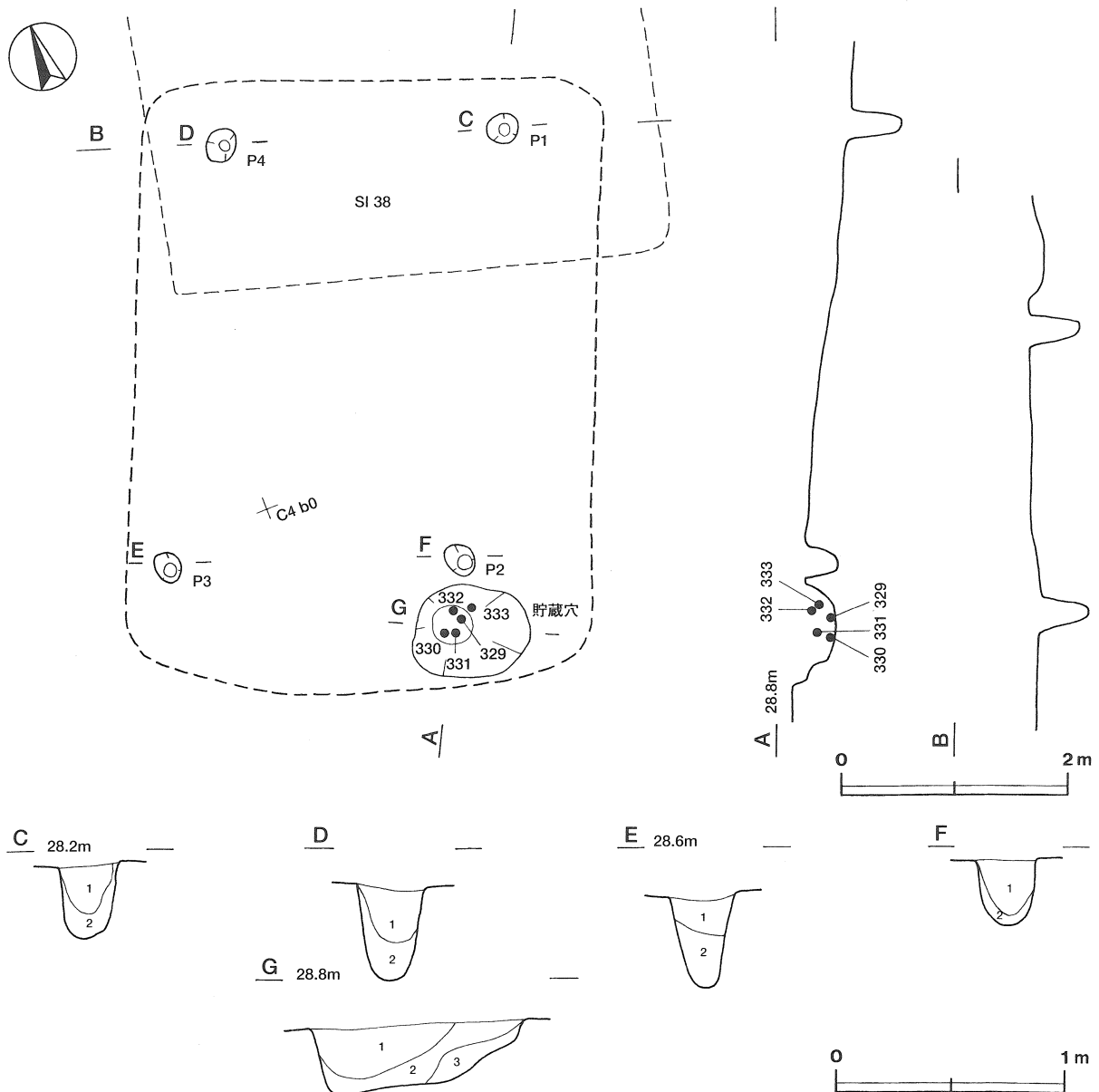
ピット土層解説

P1・P2・P3・P4

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子中量

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し, 長径102cm, 短径83cmの楕円形で, 深さは60cmである。



第135図 第43号住居跡実測図

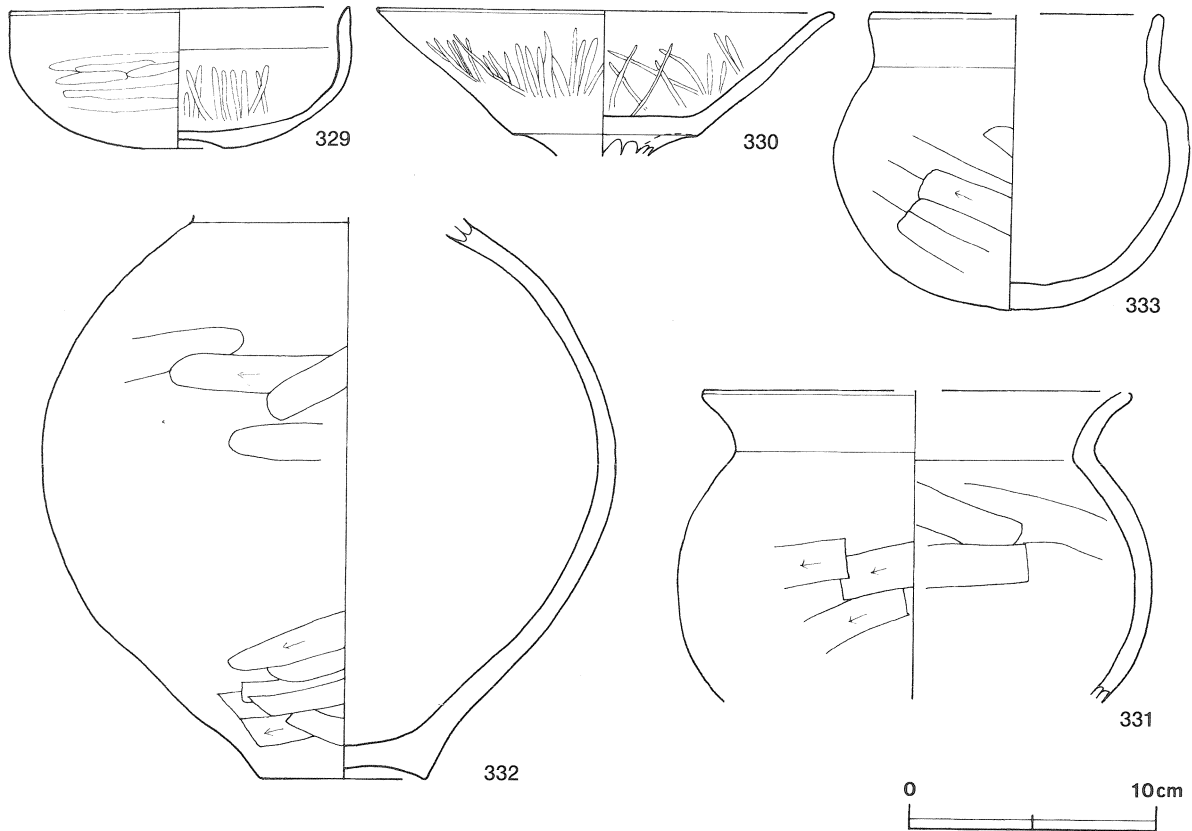
貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

- 3 褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子多量

遺物 土師器片40点, 攪乱等により混入したとみられる弥生土器片1点が出土している。第136図の329~333は土師器である。いずれも貯蔵穴からの出土である。覆土中層では, 331・332の甕が破片の状態, 333の小形甕が斜位の状態で, 底面では, 329の坏が破片の状態, 330の高坏が正位の状態それぞれ出土している。

所見 傾斜地に位置しているため, 覆土が削平されており, 正確な平面形は確認できなかった。時期は, 貯蔵穴から出土した329の坏, 330の高坏から判断して中期(5世紀中葉)と思われる。重複している第38号住居跡とはほぼ同時期であることから, 新旧関係は不明である。



第136図 第43号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 329	坏 土師器	A 13.4	底部から口縁部の破片。底部中央に指頭ほどのくぼみがある。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ, 内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 明赤褐色 普通	60% P L 24
		B 5.6				
		C 3.0				
330	高坏 土師器	A 18.4	坏部は, 外面下位に稜をもち, 外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面縦位のヘラ磨き, 内面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 にぶい褐色 普通	50% P L 24
		B (5.3)				
331	甕 土師器	A (17.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部は屈曲し, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り, 内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 にぶい赤褐色 普通	30%
		B (12.6)				
332	甕 土師器	B (22.6)	底部から体部の破片。やや突出した平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面横位のヘラ削り, 内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 暗赤褐色 普通	40%
		C 6.6				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 333	小形甕 土師器	A [11.8] B 12.1	口縁部・体部一部欠損。体部は球状を呈する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・雲母・白色 粒子・赤色粒子 暗赤褐色 普通	80%

第46号住居跡 (第137図)

位置 調査区の西部, C 1 g7区。

重複関係 南壁を第806号土坑に掘り込まれているが、床面まで達していない。

規模と平面形 長軸4.14m, 短軸3.76mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-21°-W

壁 壁高は30~35cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、炉の北西側を除く中央部がよく踏み固められている。

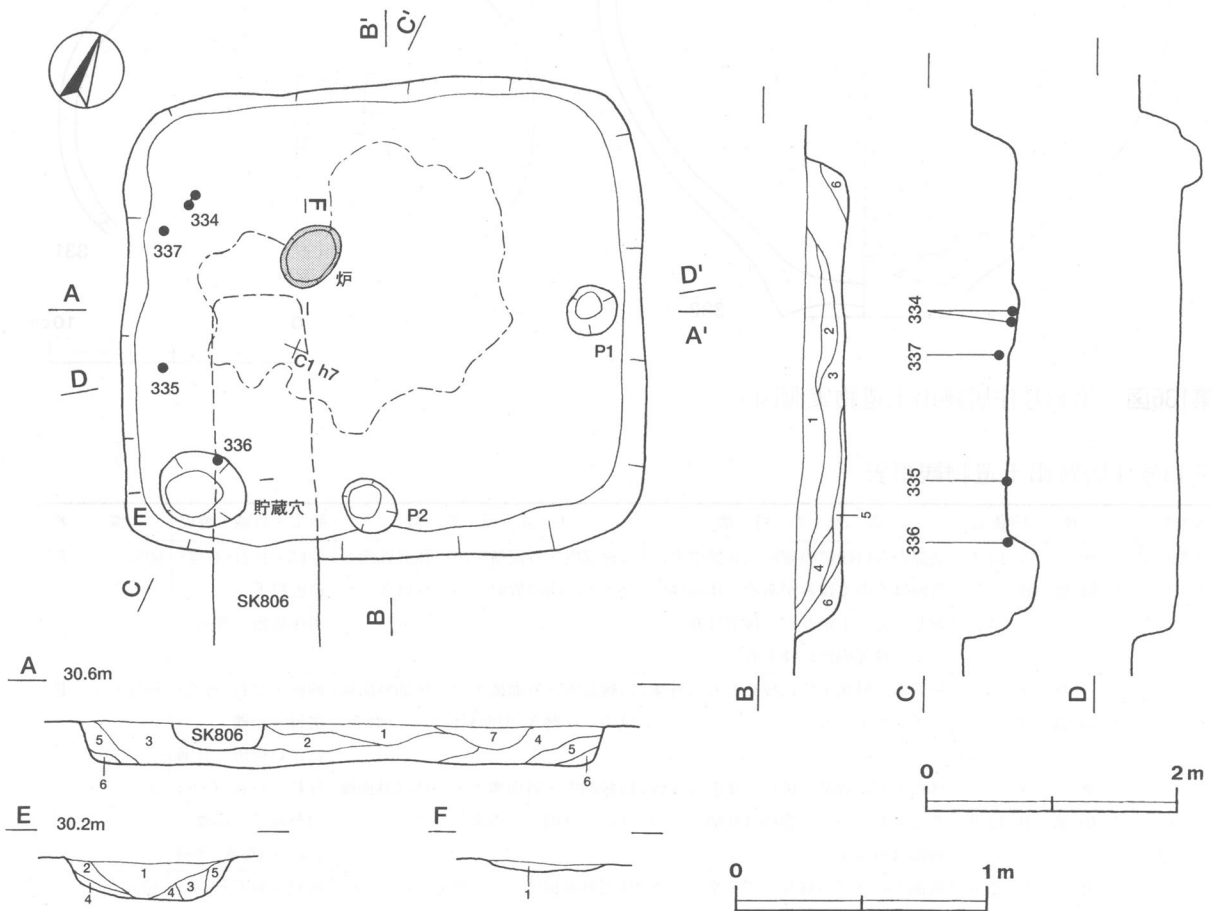
ピット 2か所 (P1・P2)。P1は径38cmの円形で、深さ16cmである。P2は径42cmの円形で、深さ19cmである。

P1は北東壁際の中央部に、P2は南東壁際中央部に位置している。性格は不明である。

炉 中央部からやや北西寄りに位置している。長径53cm, 短径42cmの楕円形で、床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。覆土は、焼土粒子・炭化粒子を微量含む程度で、炉床は硬くない。

炉土層解説

1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量



第137図 第46号住居跡実測図

貯蔵穴 南西コーナー部に位置し、長径70cm、短径60cmの楕円形で、深さは16cmである。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化物微量 | 4 褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | |

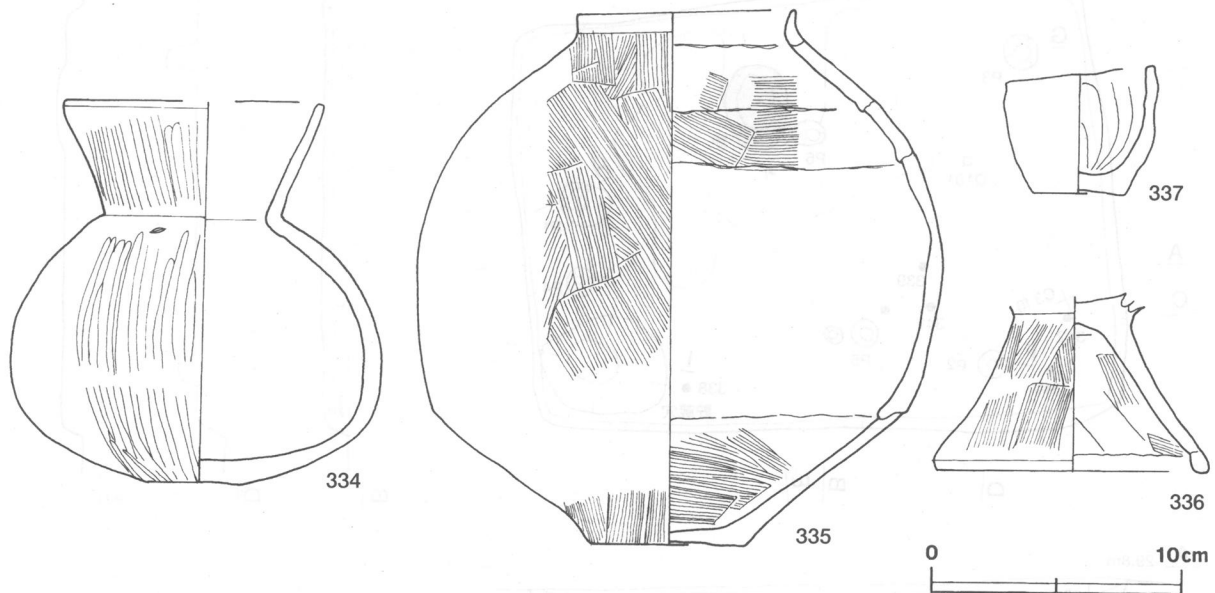
覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 6 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 7 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | |

遺物 土師器片85点、礫8点、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片4点、弥生土器片1点、陶器片1点が出土している。遺物は、遺構全体の壁際付近に散在している。第138図の334～337は土師器である。覆土下層では、337のミニチュア土器が北西コーナー付近から出土している。床面では、334の罎が北西コーナー付近からつぶれた状態で、335の壺が西側壁際から斜位の状態で、336の台付甕が南西コーナー付近からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や覆土下層及び床面からの出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と思われる。



第138図 第46号住居跡出土遺物実測図

第46号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 334	罎 土師器	A [10.1] B 15.3 C 4.0	口縁部一部欠損。平底。体部は下位に最大径をもつ球状を呈する。頸部は屈曲し、口縁部は外傾する。	口縁部外面縦位のヘラ磨き後、横ナデ、内面ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。体部外面上位に靱圧痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子 浅黄橙色 普通	80% P L 24
335	壺 土師器	A 8.2 B 21.5 C 6.2	やや突出した平底。体部は球状を呈する。	体部外面斜位のハケ目調整、内面横位のハケ目調整。体部内面輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい黄橙色 普通	95% P L 24
336	台付甕 土師器	B (7.1) D 10.7	脚台部の破片。脚台部はハの字状に開き、端部は内側に折り返す。	脚台部外面縦位のハケ目調整、内面斜位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・白色粒子 淡橙色 普通	40%
337	ミニチュア土器 土師器	A 5.7 B 5.2 C 3.6	完形。鉢形。平底。体部は直立し、口縁部に至る。	体部外面指頭による粗いナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	100% P L 24

第48号住居跡 (第139図)

位置 調査区の中央部, C 3 f0区。

規模と平面形 長軸4.82m, 短軸3.46mの長方形である。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高は18~20cmで, 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 炉の北側を除く中央部がよく踏み固められている。

ピット 6か所 (P1~P6)。P1~P3は径23~27cmの円形で, 深さ12~22cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P4・P5は径22cmほどの円形, P6は長径27cm, 短径20cmの楕円形で, 深さは10~27cmである。いずれも性格は不明である。

ピット土層解説

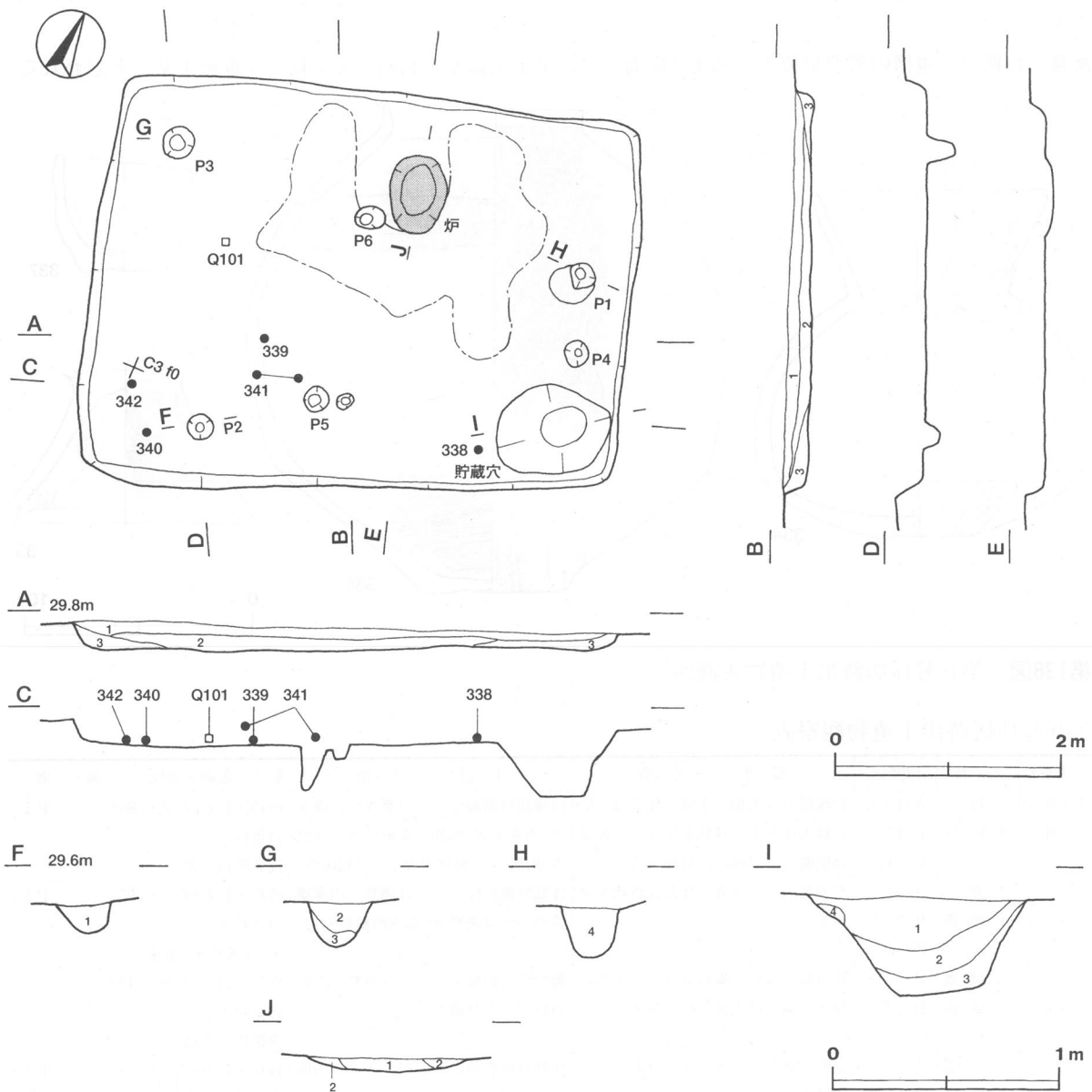
P1・P2・P3

1 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子微量

3 黒褐色 炭化粒子少量・ローム粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

4 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量



第139図 第48号住居跡実測図

炉 北西壁寄りの中央部に位置している。長径70cm，短径53cmの楕円形で，床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。覆土は，焼土小ブロック・焼土粒子を少量から微量含む程度で，炉床は硬くない。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・白色粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック少量，焼土粒子微量

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し，長径98cm，短径82cmの楕円形で，深さは44cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

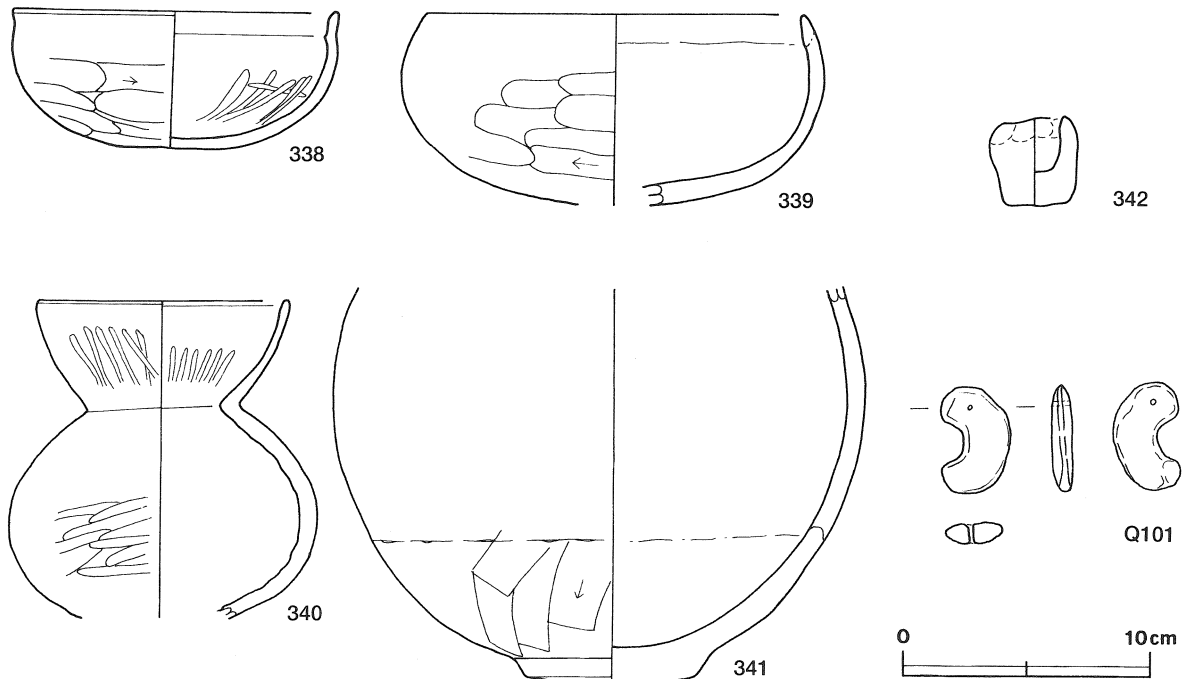
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック中量，焼土粒子微量

遺物 土師器片84点，石製品1点（勾玉），礫2点，攪乱等により混入したとみられる縄文土器片5点，弥生土器片2点が出土している。第140図の338～342は土師器である。341の甕は，P5の北西側の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。覆土下層では，339の椀が中央部から破片の状態で，340の埴が南西コーナー付近からつぶれた状態で，342の手捏土器が南西コーナー付近から，Q101の勾玉がP2の南東側からそれぞれ出土している。床面では，338の坏が貯蔵穴の西側から正位の状態で出土している。

所見 時期は，遺構の形態や覆土下層及び床面からの出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



第140図 第48号住居跡出土遺物実測図

第48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第140図 338	坏 土師器	A 13.0 B 5.7	口縁部・体部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面縦位・横位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・白色 粒子・小礫 明赤褐色 普通	70% P L 24
339	椀 土師器	A 15.1 B (7.8)	口縁部・底部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい褐色 普通	80% P L 24

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第140図 340	埴 土師器	A 9.8 B (12.9)	体部から口縁部の破片。体部は球状を呈する。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面縦位のヘラ磨き後、横ナデ。体部外面横位のヘラ磨き、内面剝離のため調整不明。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫にぶい橙色 普通	45% PL24
341	甕 土師器	B (16.0) C 6.9	底部から体部の破片。突出した平底。体部は球状を呈する。	体部外面下位斜位のヘラ削り、内面ナデ。体部内・外面下位に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子にぶい黄橙色 普通	30%
342	手握土器 土師器	A 2.6 B 3.6 C 2.3	完形。平底。体部は直立し、口縁部はやや内彎する。	口縁部内・外面に指頭痕。体部内・外面指頭による粗いナデ。	砂粒・長石・石英・暗赤褐色 普通	100%

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第140図Q101	勾玉	4.4	2.9	0.9	0.2	16.1	滑石	基部に小孔が一方から空けられている。	PL28

第49号住居跡（第141図）

位置 調査区の南部，E 3 e4区。

重複関係 北壁を第8号火葬施設に，中央部を第682号土坑と第758号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.13m，短軸5.04mの方形である。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高は20～25cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 南西コーナー部と南東コーナー部を除き，巡っている。上幅15～22cm，下幅6～15cm，深さ4～12cmで，断面形はU字状である。

壁溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量

床 ほぼ平坦で，南側の壁際中央部がよく踏み固められている。

ピット 4か所（P1～P4）。P1～P3は径31～47cmの円形，P4は長径49cm，短径37cmの楕円形で，深さは42～59cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P1

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

P4

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子中量
3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し，長径80cm，短径75cmの円形で，深さは28cmである。底面から，厚さ5cmほどの粘土の層が確認された。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量

- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
4 オリーブ黄色 白色粘土粒子多量

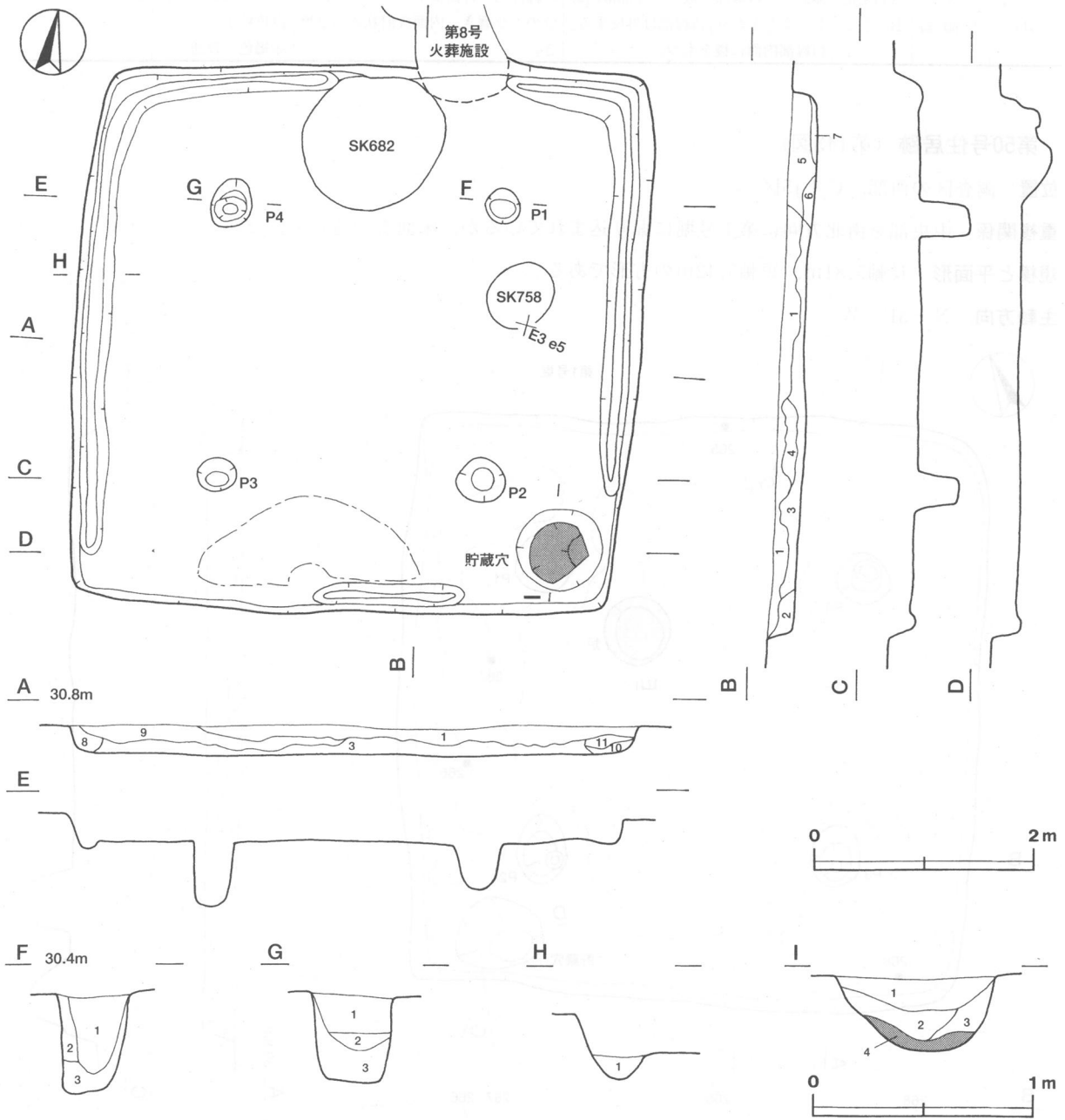
覆土 11層からなる。ロームブロックが多いことや不自然な堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

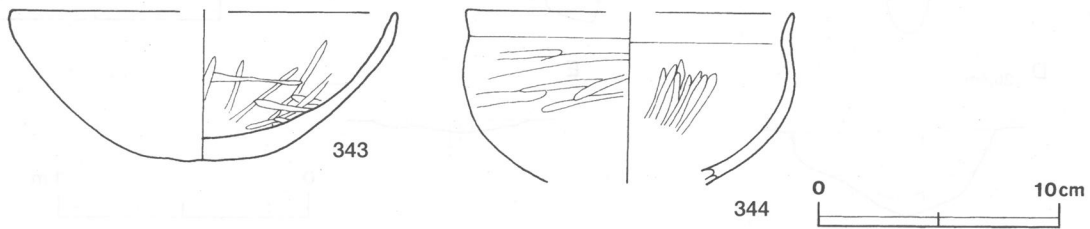
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
4 黒褐色 炭化粒子少量，ローム粒子微量
5 黒褐色 炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
6 黒褐色 炭化粒子中量，ローム粒子微量
7 暗褐色 ローム中ブロック・炭化粒子少量・ローム粒子微量
8 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
9 暗褐色 炭化粒子少量
10 褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
11 暗褐色 炭化粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片180点，礫2点が出土している。いずれも細片で図示できる土器は2点のみであった。第142図の343・344は土師器の坏である。どちらも覆土中からの出土である。

所見 第39号住居跡の貯蔵穴1と同様に，貯蔵穴の底面から粘土が確認されている。時期は，遺構の形態や覆土からの出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



第141図 第49号住居跡実測図



第142図 第49号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図 343	坏 土師器	A [15.9] B 6.2	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面縦位・横位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・白色 粒子・小礫 明赤褐色 普通	20%
344	坏 土師器	A [13.8] B (7.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 赤褐色 普通	15%

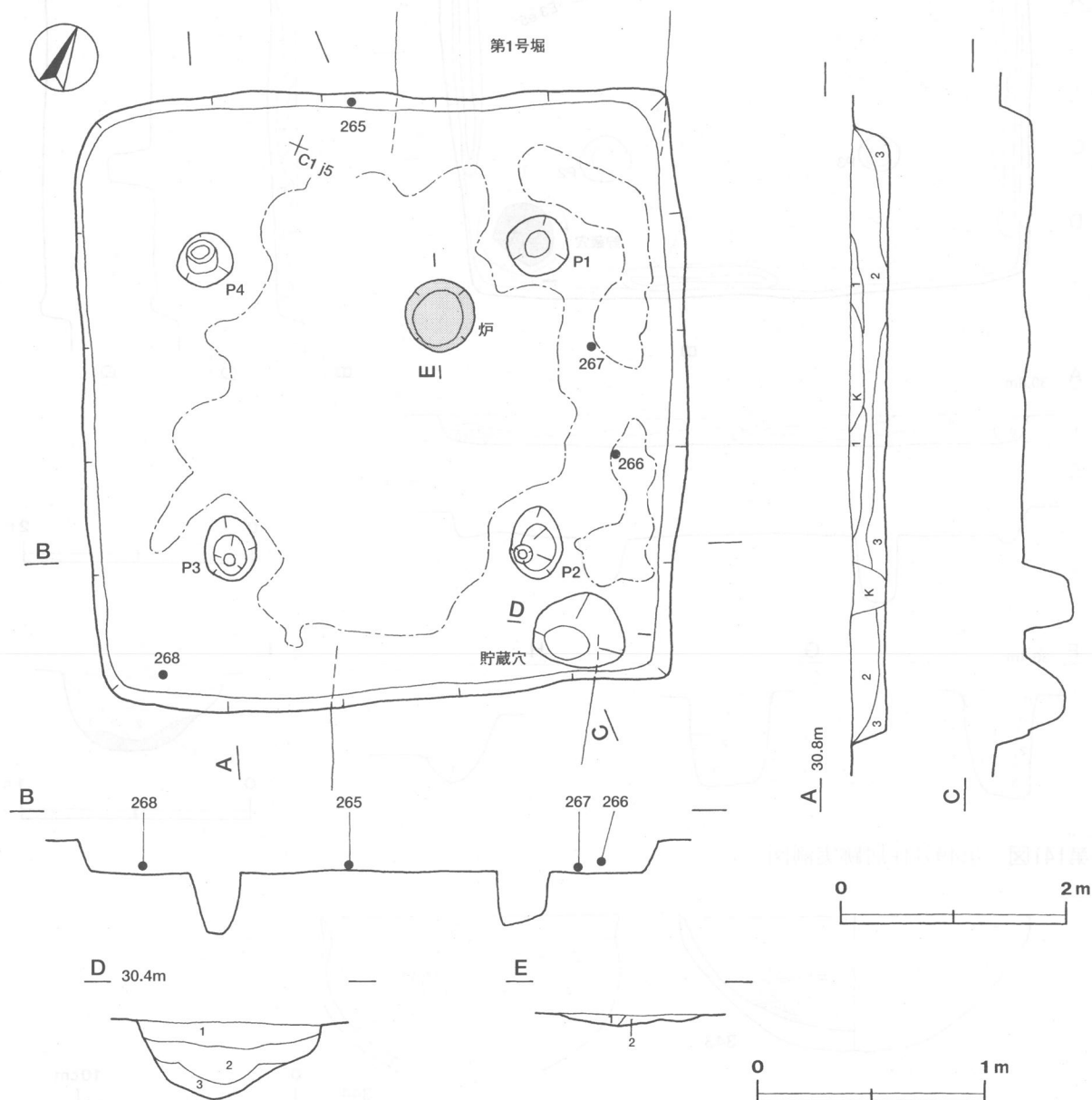
第50号住居跡 (第143図)

位置 調査区の西部, C 1 j5区。

重複関係 中央部を南北方向に第1号堀に掘り込まれているが、床面まで達していない。

規模と平面形 長軸5.81m, 短軸5.42mの方形である。

主軸方向 N-31°-W



第143図 第50号住居跡実測図

壁 壁高は25～30cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、支柱穴を結んだ中央部と北東壁寄りがよく踏み固められている。

ピット 4か所（P1～P4）。P1・P4は径48・52cmの円形，P2・P3は長径56・65cm，短径46・48cmの楕円形で、深さは37～56cmである。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。

炉 中央部のやや北東寄りに位置している。径62cmの円形で、床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。覆土は焼土粒子を少量含む程度であり、炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子少量 2 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径83cm，短径61cmの楕円形で、深さは35cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量 3 褐色 ローム粒子中量
2 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

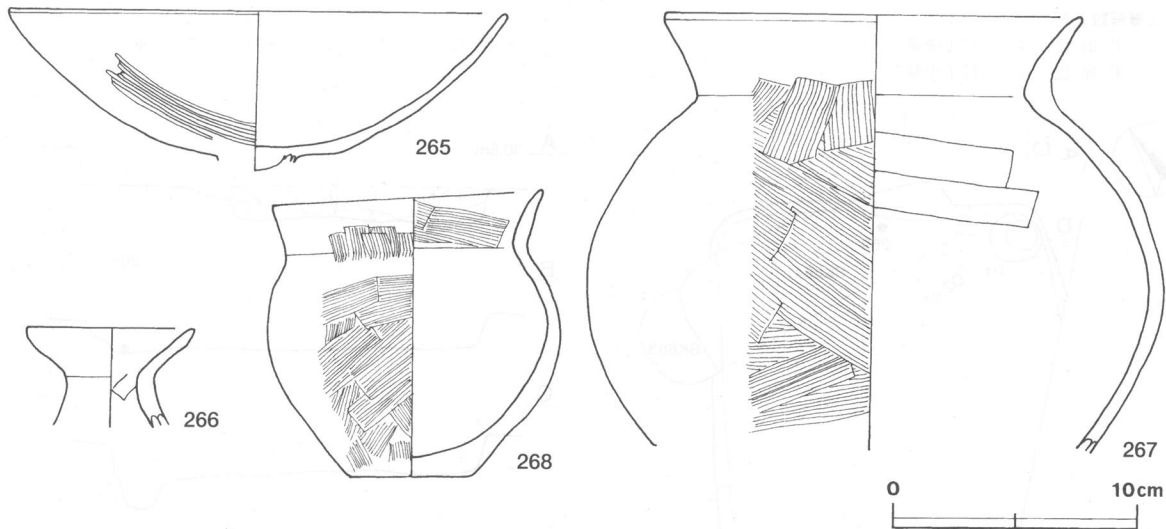
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片100点，礫1点が出土している。第144図の265～268は土師器である。いずれも床面で確認され、265の高坏が北西壁際から正位の状態で、266の器台が北東壁寄りから逆位の状態で、267の甕が北東壁寄りから正位のつぶれた状態で、268の小形甕が南コーナー部から横位の状態でそれぞれ出土している。

所見 床はよく踏み固められ、炉床は赤変硬化していることから、長期間使用された住居と考えられる。時期は、遺構の形態や床面からの出土土器から判断して中期（4世紀中葉）と思われる。



第144図 第50号住居跡出土遺物実測図

第50号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 265	高坏 土師器	A 20.0 B (6.5)	坏部の破片。坏部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面斜位のヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・石英・白色粒子 浅黄橙色 普通	35%
266	器台 土師器	A 6.6 B (4.0)	脚部欠損。器受部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。器受部中央に単孔がある。	器受部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	30%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 267	甕 土師器	A 16.8 B (17.8)	体部下位欠損。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位・斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	70%
268	小形甕 土師器	A 10.8 B 11.8 C 4.9	完形。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面横位のハケ目調整。体部外面横位・斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	100% P L 25

第51号住居跡（第145図）

位置 調査区の西部，D 2 g1区。

重複関係 北東壁を第863・864号土坑に掘り込まれているが，床面まで達していない。

規模と平面形 南西コーナー部は，調査区域外のため確認できなかった。長軸3.18m，短軸2.42mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-38°-W

壁 壁高は18~30cmで，ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で，特に踏み固められた部分はみられない。

ピット 1か所。P1は径48cmの円形で，深さ20cmである。北西コーナー部壁際に位置している。性格は不明である。

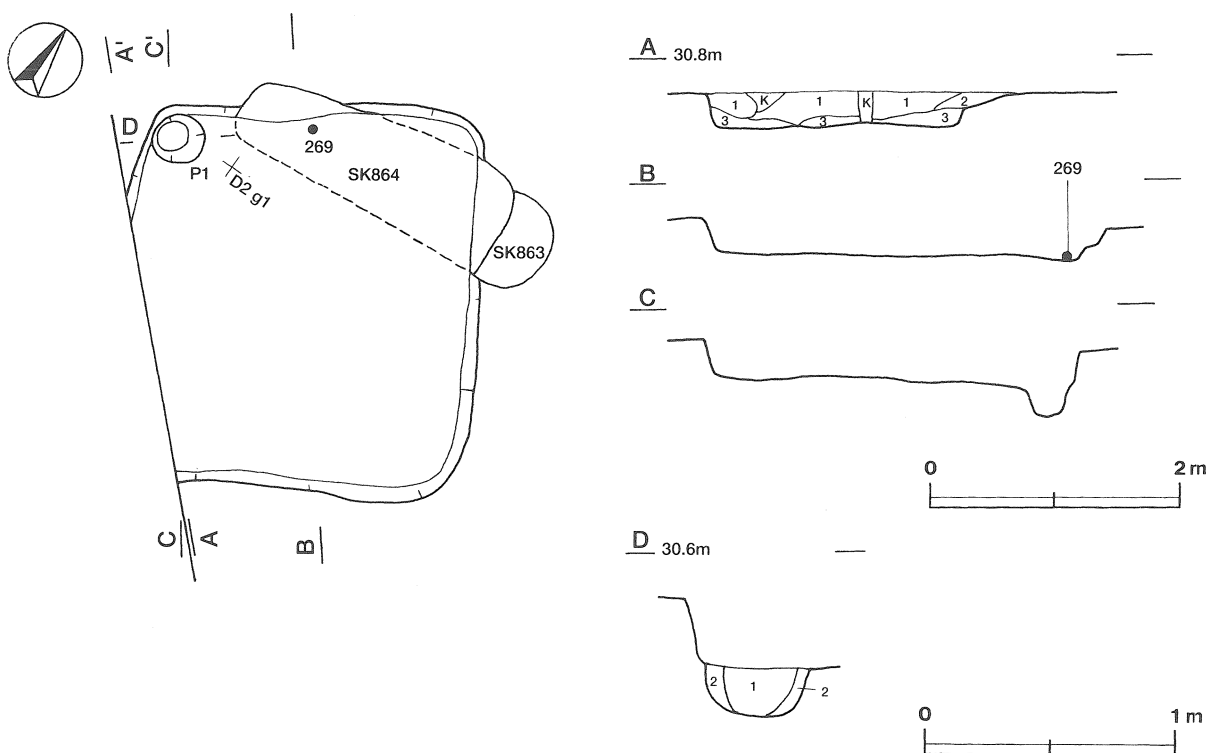
ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子 微量
2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

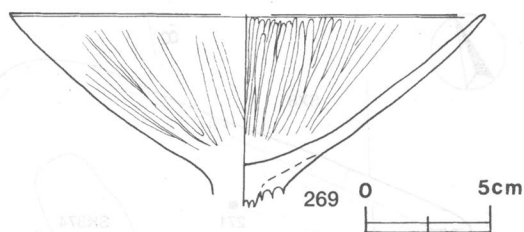
- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子中量
3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量



第145図 第51号住居跡実測図

遺物 土師器片 5 点, 礫 1 点, 攪乱等により混入したとみられる縄文土器片 2 点が出土している。第146図の269は土師器の高坏である。北西壁際の床面から逆位の状態で出土している。

所見 出土遺物が少なく時期は断定できないが, 床面からの出土土器から判断して前期 (4 世紀中葉) の可能性が高い。



第146図 第51号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第146図 269	高坏 土師器	A(17.9) B(7.8)	脚部欠損。坏部は脚部との接点から開き, 口縁部に至る。坏部と脚部の接合は, ソケット式。	坏部外面縦位のヘラ磨き, 内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・小礫 橙色 普通	40% P L 25

第52号住居跡 (第147図)

位置 調査区の西部, D 1 c0区。

重複関係 上部を第8号不明遺構に, 西側コーナー付近を第847号土坑に, 南コーナー付近を第866号土坑に, 中央部を第867・第874号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 一辺4.12mほどの隅丸方形である。

主軸方向 N-52°-E

壁 壁高は30~55cmで, 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 踏み固められた部分は確認できない。

ピット 1か所。P1は長径45cm, 短径34cmの楕円形で, 深さ24cmである。性格は不明である。

炉 東コーナー寄りに位置している。径47cmの円形で, 床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内の覆土に焼土粒子や炭化粒子を中量から微量含む程度で, 炉床は硬くない。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1 にい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 炭化粒子少量 | 3 暗褐色 炭化粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |

貯蔵穴 南コーナー部に位置し, 径60cmの円形で, 深さは24cmである。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 1 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量 | 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量 |
|--|-----------------------------------|

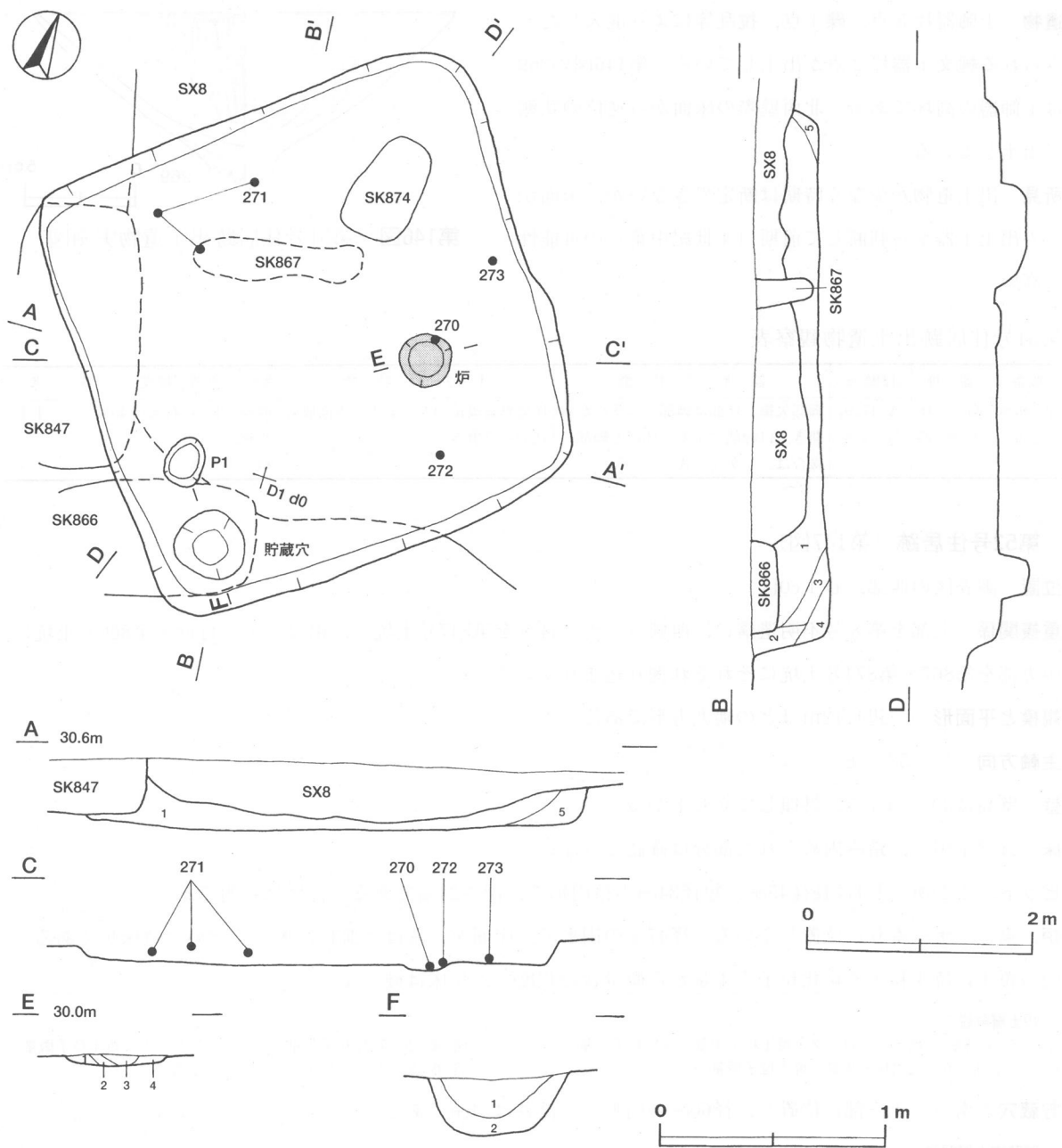
覆土 5層からなる。中央部は第8号不明遺構に掘り込まれているが, 壁際の堆積状況から, 自然堆積と考えられる。

土層解説

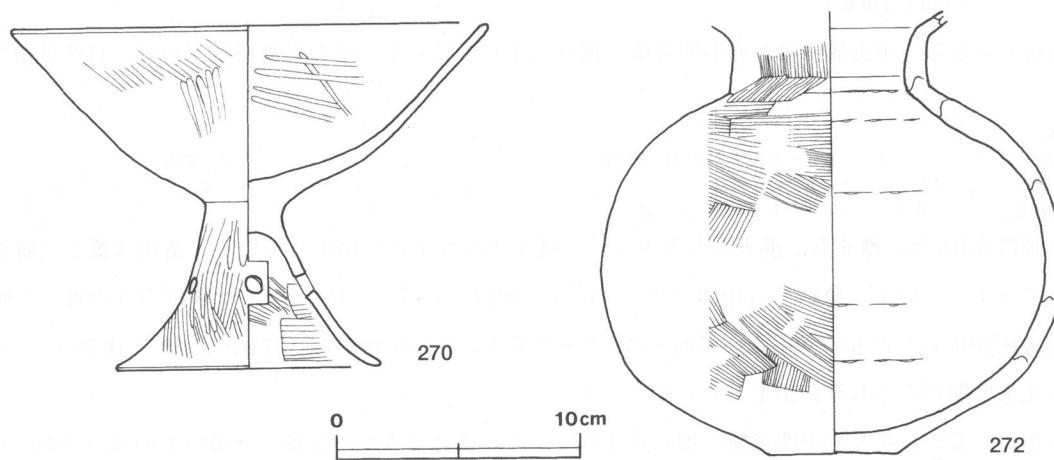
- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム中ブロック・炭化粒子微量 | 5 褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 | |

遺物 土師器片107点, 礫6点, 混入したとみられる縄文土器片1点が出土している。遺物は覆土下層から床面にかけて出土している。第148・149図の270~273は土師器である。271の壺は, 北西壁寄りの覆土下層から出土した破片が接合したものである。床面では, 270の高坏が炉の北側から, 272の壺が炉の南側から, 273の台付甕が北東壁際からそれぞれ出土している。

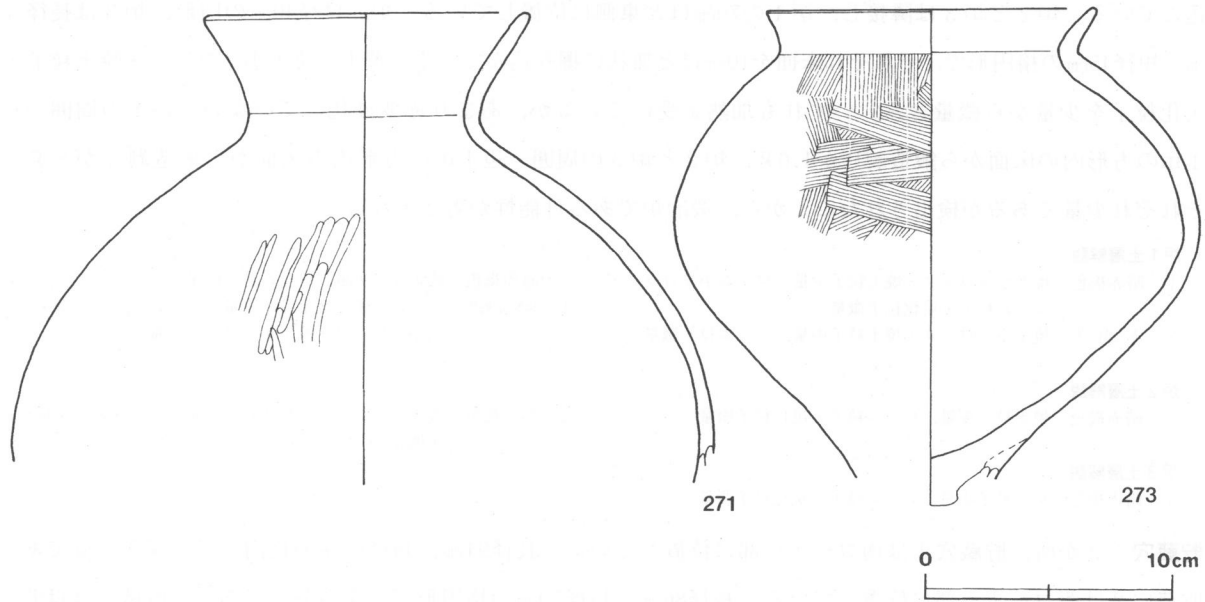
所見 本跡の上部が, 第8号不明遺構に掘り込まれている。確認できたのは覆土下層以下の部分であった。遺構形態や覆土下層及び床面からの出土土器から判断して前期 (4 世紀中葉) と思われる。



第147图 第52号住居跡实测图



第148图 第52号住居跡出土遺物实测图(1)



第149図 第52号住居跡出土遺物実測図(2)

第52号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 270	高坏 土師器	A 19.5 B 14.2 D 10.6 E 6.9	坏部一部欠損。脚部はラッパ状に開き、中位に4孔が空けられている。坏部は、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ハケ目調整後、縦位のヘラ磨き、内面横位のヘラ磨き。脚部外面ハケ目調整後、縦位のヘラ磨き、内面ハケ目調整。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 浅黄色 普通	90% P L 25
第149図 271	壺 土師器	A 13.0 B (19.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 浅黄橙色 普通	25%
第148図 272	壺 土師器	B (18.2) C 5.3	口縁部・体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は直立する。	頸部外面縦位のハケ目調整、内面ナデ。体部外面ハケ目調整後、ナデ、内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 浅黄橙色 普通	70% P L 25
第149図 273	台付甕 土師器	A 13.4 B (20.1)	脚台部欠損。体部は上位に最大径をもつ球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位縦位・斜位のハケ目調整、下位ナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・小礫 灰黄褐色 普通	90% P L 25

(2) 鍛冶工房跡

第1号鍛冶工房跡 (S I 28) (第150・151図)

位置 調査区の北部、B 4 c4区。

重複関係 南西コーナー部を第345号土坑に、中央部を第316号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長軸7.1m、短軸6.96mの方形である。

主軸方向 N-40°-E

壁 壁高は22~51cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 炉1から主柱穴を結んだ範囲がよく踏み固められている。南西壁際から、焼土塊が確認された。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1・P2・P4は長径30~33cm、短径22~25cmの楕円形、P3は径30cmの円形で、深さは38~65cmである。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P5は長径90cm、短径74cmの楕円形で、深さ11cmである。東側コーナー部に位置し、掘り込みが浅いことから、性格は不明である。

炉 3か所。炉1は南西壁寄りに位置している。長径79cm、短径45cmの楕円形で、床面を11cmほど皿状に掘り

込んでいる。炉2と炉3は隣接し、炉1の70cmほど東側に位置している。炉2は径40cmの円形、炉3は長径58cm、短径45cmの楕円形で、それぞれ床面を10cmほど皿状に掘り込んでいる。覆土に焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量から微量含み、いずれも加熱を受けているが、あまり赤変硬化していない。炉1の周囲一辺1mの方形内の床面から鍛造剥片が4.6g、炉2と炉3の周囲一辺1mの方形内の床面から鍛造剥片が8gとそれぞれ少量であるが検出されたことから、鍛冶炉である可能性が考えられる。

炉1土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------------|---------|--|
| 1 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子微量 | 4 極暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック微量 |

炉2土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|--------|-----------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 2 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
|--------|---------------------|--------|-----------------------------|

炉3土層解説

- | | |
|--------|---------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
|--------|---------------------|

貯蔵穴 3か所。貯蔵穴1は南コーナー部に位置している。長径94cm、短径83cmの楕円形で、深さ53cmである。貯蔵穴2は西コーナー部に位置している。長径86cm、短径70cmの楕円形で、深さ53cmである。貯蔵穴3は北コーナー部のやや東寄りに位置している。長径85cm、短径74cmの楕円形で、深さ40cmである。

貯蔵穴土層解説

貯蔵穴1

- | | | | |
|-------|------------------------------------|-------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量 | | |

貯蔵穴2

- | | | | |
|-------|----------------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量 | | |

貯蔵穴3

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |

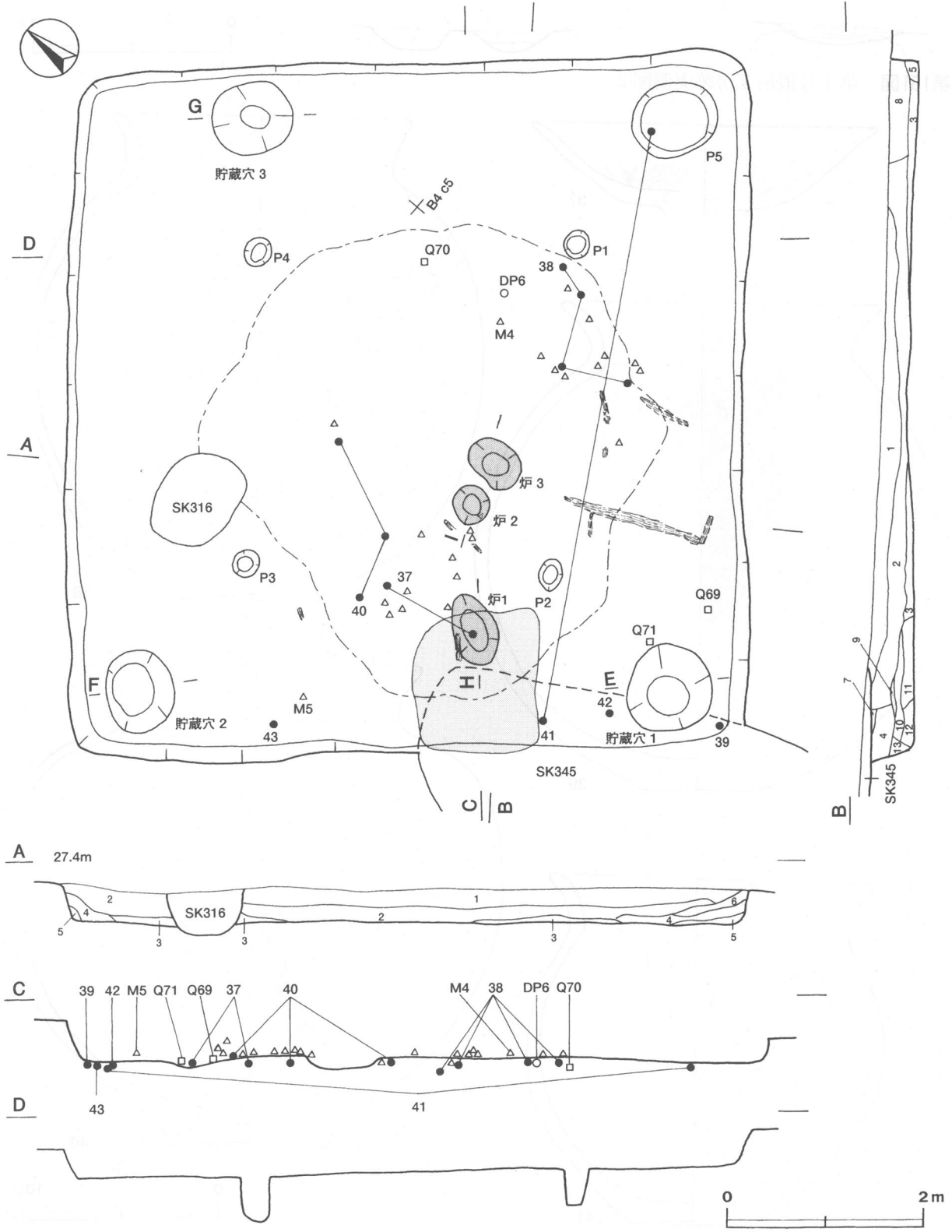
覆土 13層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

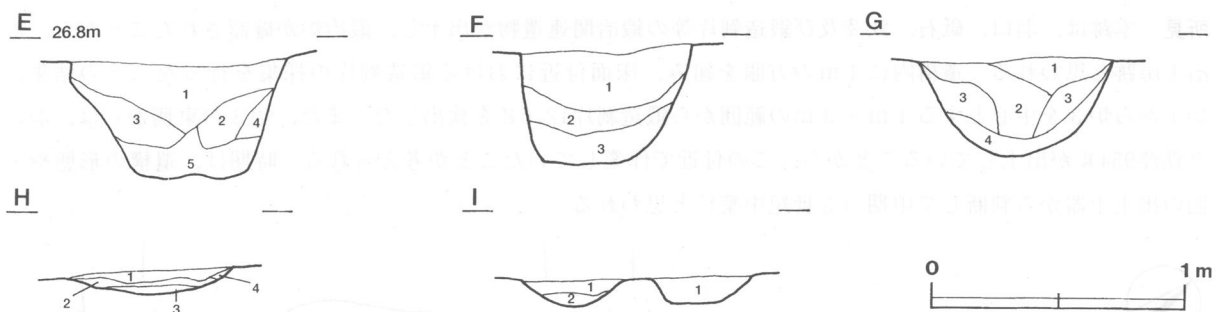
- | | | | |
|-------|---------------------------------|--------|---|
| 1 黒色 | ローム粒子・白色粒子中量、炭化粒子微量 | 10 褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック中量、炭化物少量 | 12 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 4 黒色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 13 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量 | | |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | | |
| 7 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 | | |
| 8 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | | |
| 9 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | | |

遺物 土師器片380点、礫16点、土製品1点(羽口)、石製品1点(剣形品)、石器2点(砥石)、鉄滓1,663.1g、鍛造剥片12.6g、炭化材、攪乱により混入したとみられる縄文土器片3点、弥生土器片69点がそれぞれ出土している。遺物は南コーナー部から中央部にかけての床面近くから出土している。第152・153図の37～43は土師器である。37の高坏は中央部の南寄りから逆位の状態で、38の甕、Q70の砥石、DP6の羽口、M4の椀状滓は炉3の東側から、39の甕、Q69の剣形品、Q71の砥石は南コーナー部から、40の甕は中央部から、42の甕は南コーナー付近から斜位の状態で、43の甕は南西壁際から横位のつぶれた状態で、M5の椀状滓は南西壁寄りからそれぞれ出土している。41の小形甕は南西壁際と東コーナー部から出土した破片が接合したものである。また、炭化材は南東壁付近から、鉄滓は炉1と炉2の間と炉3の東側から多く出土している。

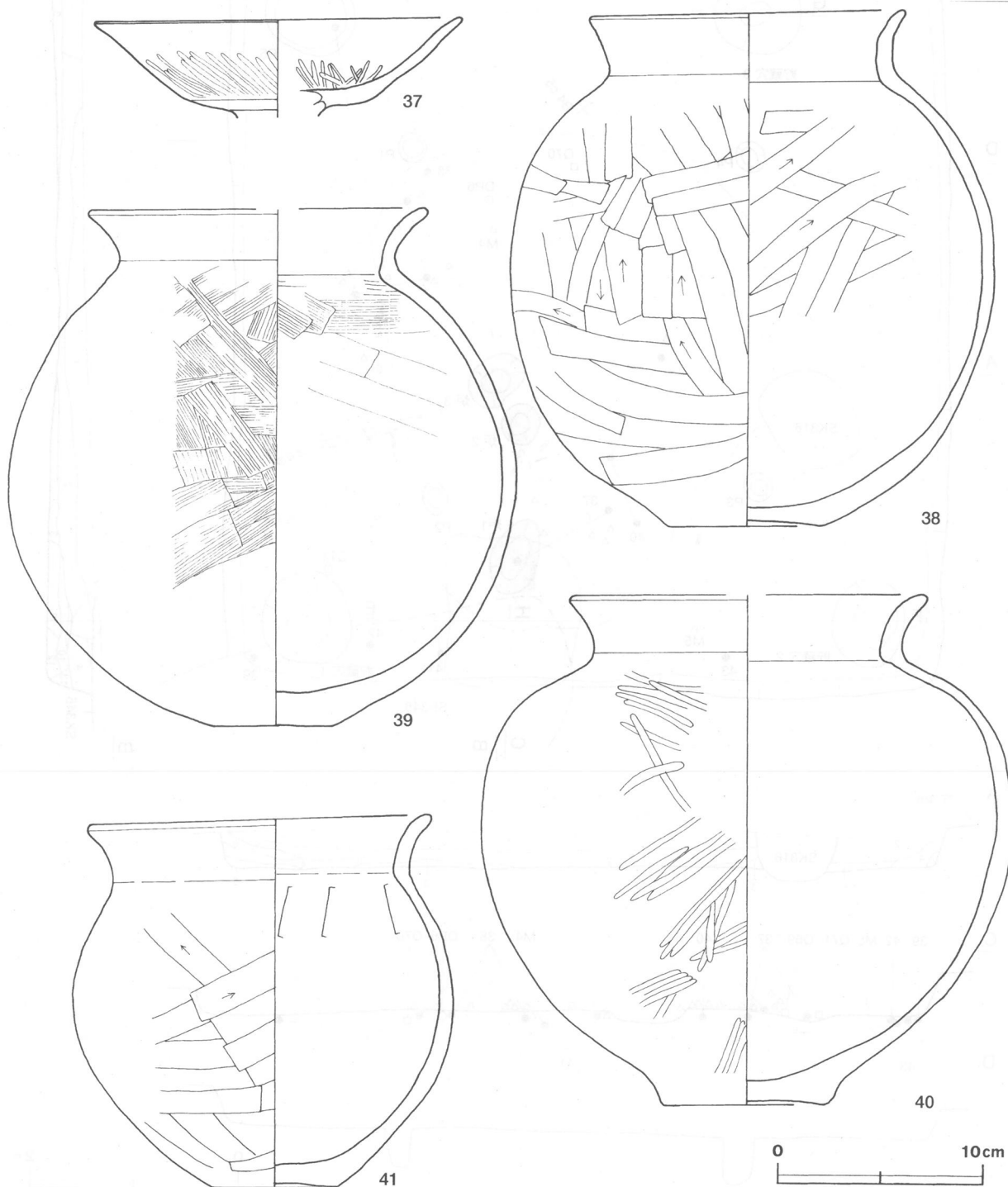
所見 本跡は、羽口、砥石、鉄滓及び鍛造剥片等の鍛冶関連遺物が出土し、鍛冶炉が確認されたことから、鍛冶工房跡と思われる。遺構内に1mの方眼を組み、床面付近における鍛造剥片の採集を行った。その結果、炉1から炉3を中心とする4m×3mの範囲から鍛造剥片12.6gを検出した。また、炉3の東側からは、羽口と鉄滓954gが出土していることから、この付近で作業していたことが考えられる。時期は、遺構の形態や床面の出土土器から判断して中期（5世紀中葉）と思われる。



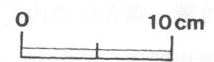
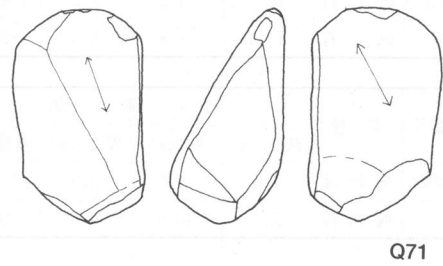
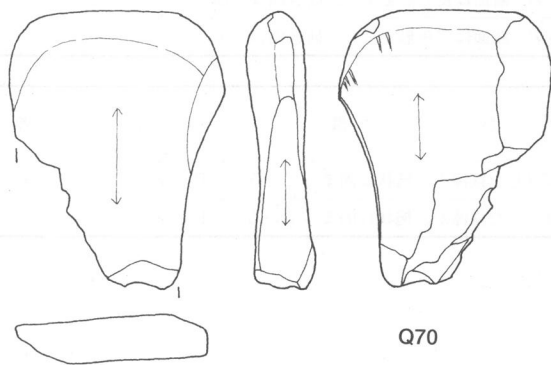
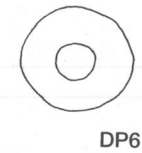
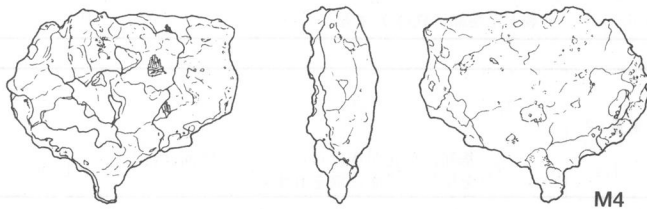
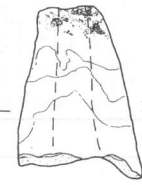
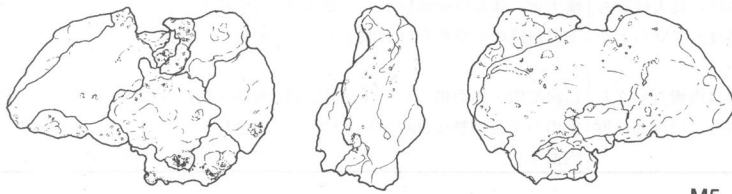
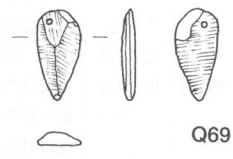
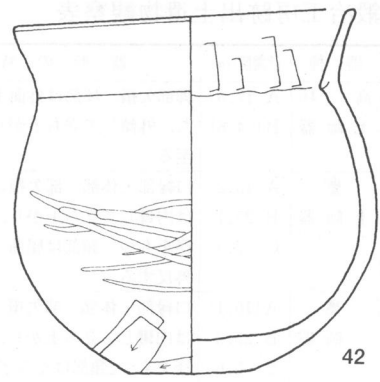
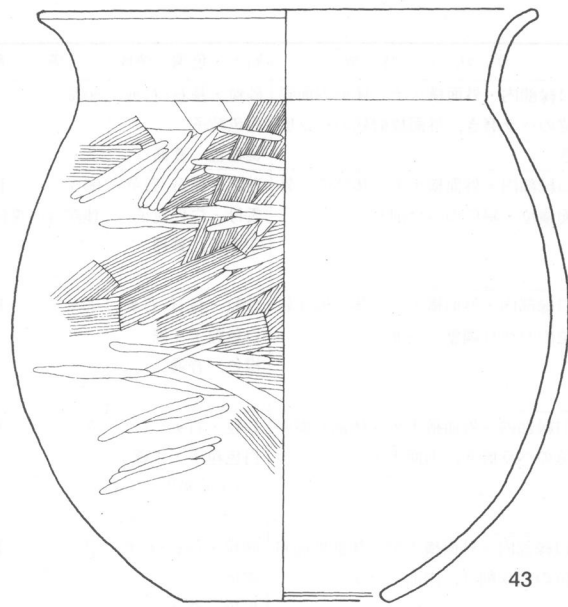
第150図 第1号鍛冶工房跡実測図(1)



第151图 第1号鍛冶工房跡実測図(2)



第152图 第1号鍛冶工房跡出土遺物実測図(1)



第153図 第1号鍛冶工房跡出土遺物実測図(2)

第1号鍛冶工房跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 37	高坏土師器	A 17.8 B (4.8)	脚部欠損。坏部は外面下位に稜をもち、外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内面斜位のヘラ磨き、外面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 黄橙色 普通	50%
38	甕土師器	A 15.2 B 25.1 C 7.3	口縁部・体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面横位・斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 赤褐色 普通	90% P L 25 体部外面煤付着
39	甕土師器	A [16.1] B 25.3 C 5.6	口縁部・体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・礫 橙色 普通	90% P L 25
40	甕土師器	A [17.0] B 25.0 C 8.0	口縁部・体部一部欠損。中央部がくぼむ突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子・小礫 にぶい赤褐色 普通	70% P L 25
41	小形甕土師器	A 16.4 B 18.1 C 5.9	体部一部欠損。中央部がくぼむ平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	75% P L 25
第153図 42	小形甕土師器	A 13.7 B 14.7 C 4.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。口縁部はやや外反して立ち上がる。	口縁部外面横ナデ、内面ヘラナデ後、横ナデ。体部外面横位のヘラ磨き、下位斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 灰褐色 普通	95% P L 25
43	甗土師器	A 19.7 B 23.7 C 8.0	完形。無底式。体部は内彎して立ち上がる。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整後、横位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	100% P L 25

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)			
第153図DP6	羽口	(7.3)	2.6~4.8	1.1~1.8	(106.6)	土製	先端部に鉄滓が付着している。	P L 27

図版番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第153図Q69	剣形品	3.7	1.8	0.6	0.2	4.1	滑石	基部に小孔が空けられている。断面は台形状を呈し、片面に錆を有する。	P L 28

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第153図Q70	砥石	(18.7)	14.2	4.7	(1,238.4)	砂岩	断面は長方形を呈し、研ぎ面は3面。	P L 28
Q71	砥石	14.4	8.8	8.3	946.5	砂岩	断面は三角形を呈し、研ぎ面は2面。	

図版番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第153図M4	椀状滓	7.6	9.2	3.0	173.7	ゴツゴツした鉄滓が、椀状に固まっている。	P L 28
M5	椀状滓	7.1	10.6	4.3	298.9	ゴツゴツした鉄滓が、椀状に固まっている。	P L 28

(3) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (第154図)

位置 調査区の西部、C1d0区。

重複関係 P2が第220号土坑を掘り込んでいる。

規模 桁行2間、梁行1間の側柱構造の建物跡である。柱穴は6か所(P1~P6)で、柱間寸法は、桁行2.05~

2.32m, 梁行4.22~4.31m, 面積は18.06㎡である。柱穴は, P1~P4が長軸70~85cm, 短軸60~66cmの長方形, P5・P6が一辺72~79cmの方形で, 深さ43~64cmである。

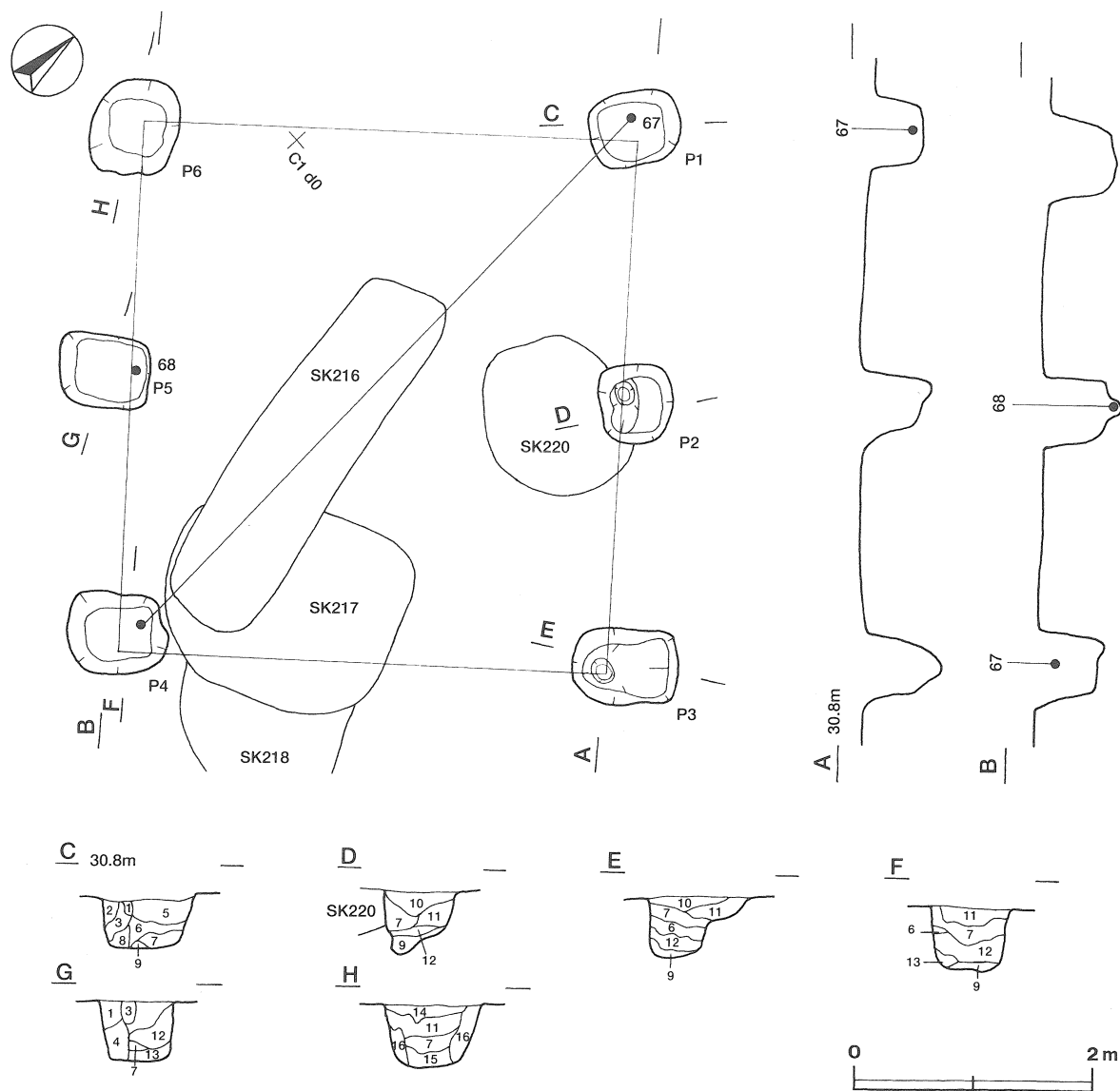
桁行方向 N-43°-W

覆土 16層からなる。ブロック状の堆積がみられる埋土と考えられる。

土層解説

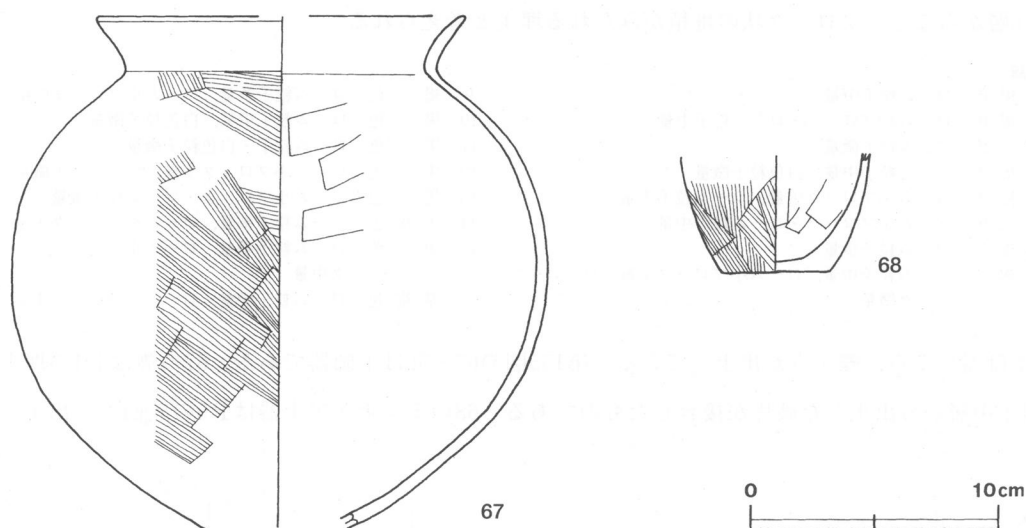
- | | | | |
|-------|---------------------------------|--------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量 | 9 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | 10 黒色 | ローム粒子少量, 白色粒子微量 |
| 3 黒色 | ローム粒子微量 | 11 黒色 | ローム粒子・白色粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量, 白色粒子微量 | 12 黒色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック中量, ローム粒子少量 | 13 黒色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | 14 黒褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子少量 | 15 黒色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック・ローム小ブロック中量 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量 | 16 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |

遺物 土師器片7点, 礫1点が出土している。第155図の67・68は土師器である。67の甕はP1の埋土下層とP4の埋土中層から出土した破片が接合したものである。68のミニチュア土器はP5の底面から出土している。



第154図 第2号掘立柱建物跡実測図

所見 P5内から出土した68のミニチュア土器と同様の土器が第13号住居跡からも出土し、同時期と考えられる。この時期の掘立柱建物跡として、確認できたものは本跡のみであり、出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と思われる。



第155図 第2号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図 67	台付甕 土師器	A(14.8) B(20.7)	体部から口縁部の破片。体部は球状を呈し、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい褐色 普通	55% P L 25
68	ミニチュア土器 土師器	B(4.8) C 4.4	鉢形。口縁部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 灰黄褐色 普通	60%

(4) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓（第156・157図）

位置 調査区の北西部，C1 d5区を中心に検出された。北側に谷が入り込む，台地上の縁辺部に位置している。

重複関係 東コーナー溝が第889号土坑を，南西溝が第888号土坑をそれぞれ掘り込み，南コーナー溝付近を第890号土坑に，方台部の南西側を第891・892号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 規模は，方台部上面は南北方向5.24m，東西方向5.12mで，周溝を含めた上面は南北方向7.52m，東西方向7.43mである。平面形は隅丸方形で，外周部の西コーナー溝付近がやや膨らみをもつ以外は，各コーナーとも整った弧状を呈している。方台部上の南西側には，第891号土坑と第892号土坑が存在するが，本跡との関係は不明である。また，主体部は確認できなかった。

方位 南北方向N-30°-Wで，西に傾いている。

周溝・壁 溝は全周している。南西溝を除く三方は，上幅104~144cm，下幅79~88cmで，深さ32~51cmである。南西溝は，上幅95cm，下幅83cmで，深さ10cmである。南西溝が最も狭く，掘り込みも浅い。周溝の断面形は逆台形状を呈し，方台部側と外周部側の壁は，ほぼ同じように外傾して立ち上がる。底面は平坦であり，北東溝と南西溝は南東溝に向かって緩やかに下がっている。

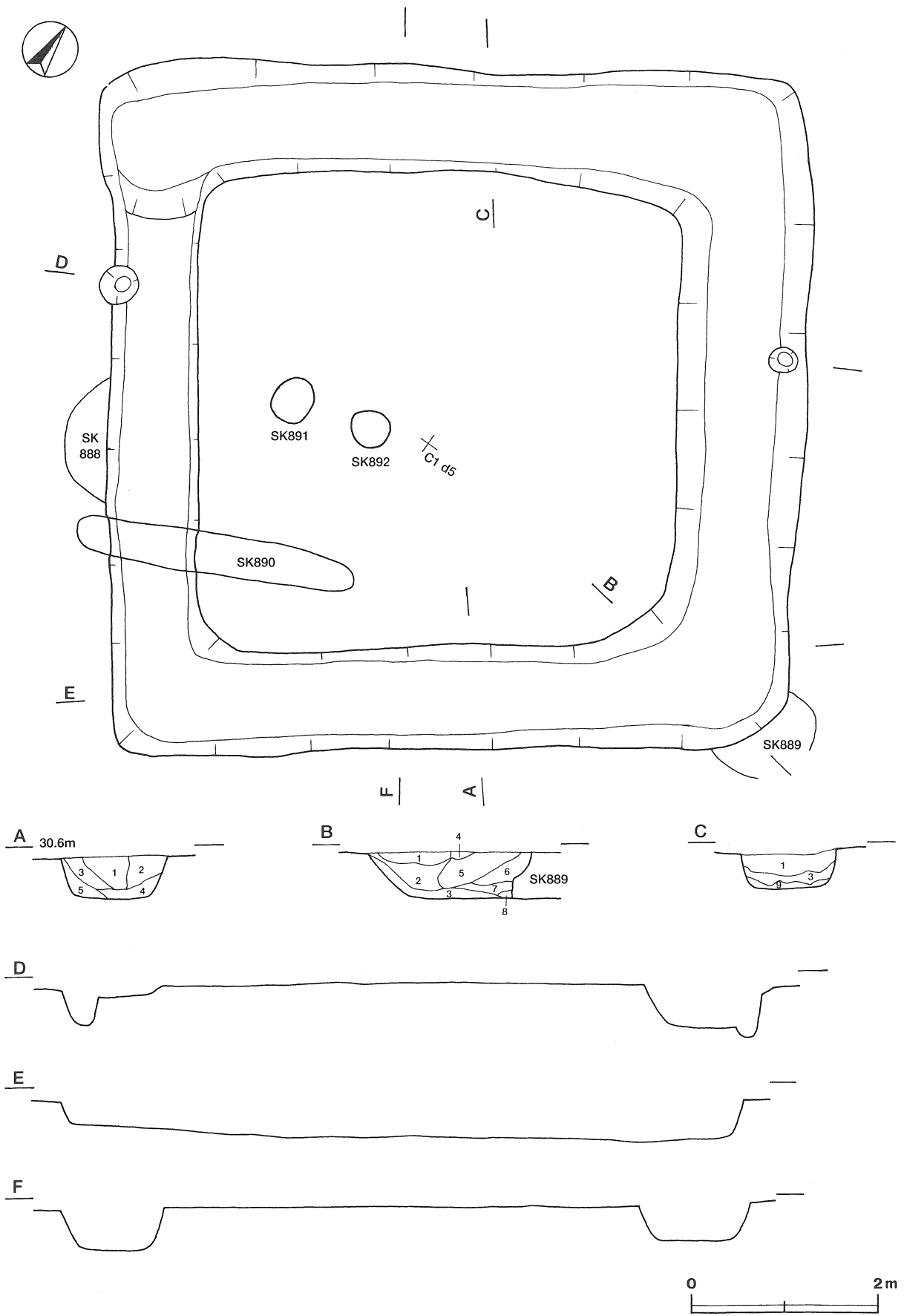
覆土 9層からなる。レンズ状を呈していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

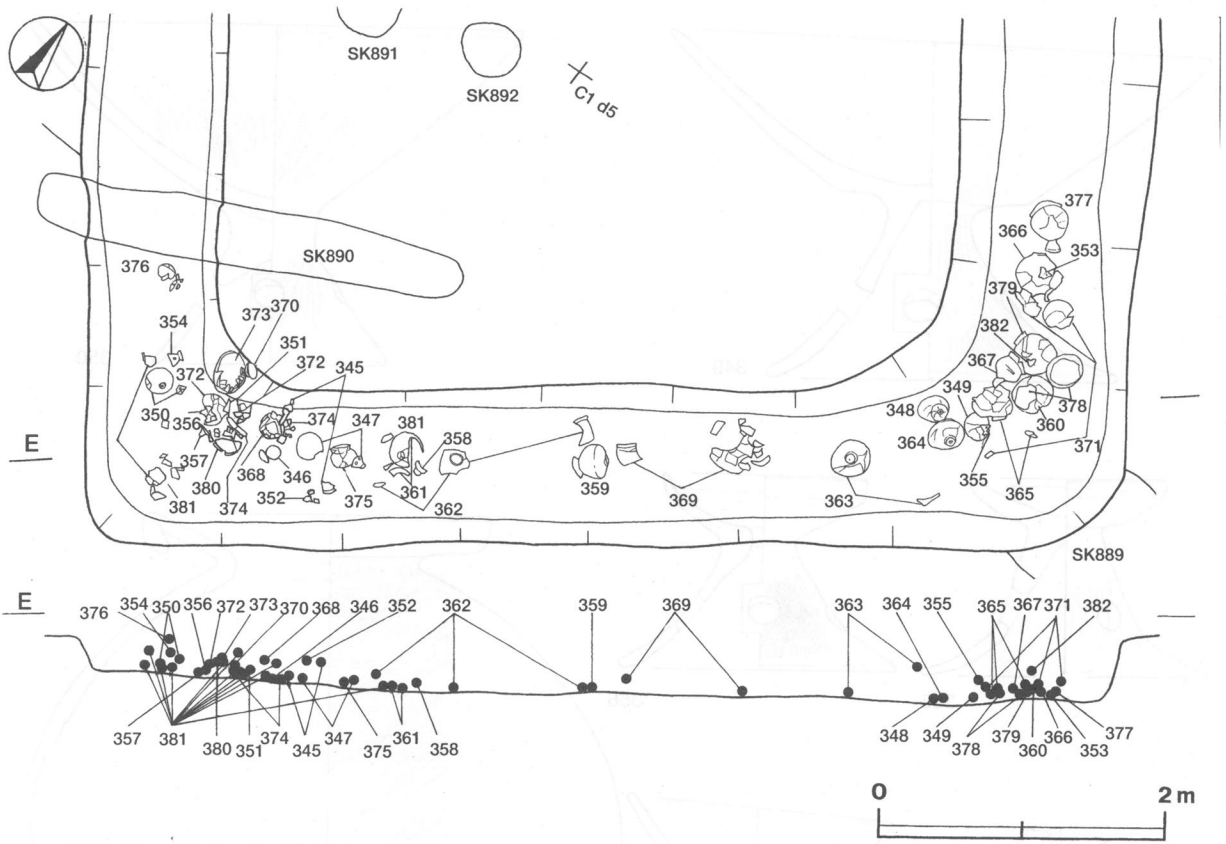
- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・白色粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 黒色 白色粒子中量
- 7 黒色 白色粒子中量、赤色粒子少量
- 8 褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片603点、礫7点が出土している。第158～163図の345～382は土師器で、周溝内の南東コーナー溝付近から南西コーナー溝付近にかけて出土している。南東コーナー溝付近では、348・349の高坏が覆土下層から逆位の状態で、353の高坏が底面近くから破片の状態で、355の器台、367の甕が覆土下層から横位の状態で、360の壺が覆土下層から正位のつぶれた状態で、364の壺が底面近くから正位の状態で、366の壺、379の台付甕が覆土下層から横位のつぶれた状態で、371の甕が覆土下層から破片の状態で、377の台付甕が覆土下層から斜位の状態で、378の台付甕が底面近くから逆位の状態で、382のミニチュア土器が覆土上層から横位の状態でそれぞれ出土している。また、363の壺は覆土上層から底面にかけて出土した破片が接合したもので、365の壺は覆土下層から出土した破片が接合したものである。南東溝では、358の埴が覆土下層から横位の状態で、359の壺が底面近くから横位の状態で、361の壺が底面近くから斜位の状態でそれぞれ出土している。また、362の壺は覆土下層から底面近くにかけて出土した破片が接合したもので、369の甕は底面近くから出土した破片が接合したものである。南西コーナー溝付近では、346の小形鉢が底面近くから正位の状態で、351の高坏が覆土下層から破片の状態で、352の高坏が覆土中層から破片の状態で、354の器台が覆土中層から横位の状態で、356・357の器台が底面近くから破片の状態で、368の甕が覆土中層から横位のつぶれた状態で、370・373の甕、380の台付甕が覆土下層から破片の状態で、375の小形甕が底面近くから横位のつぶれた状態で、376の小形甕が覆土上層から破片の状態でそれぞれ出土している。また、345の小形鉢は覆土上層から覆土下層にかけて出土した破片が接合したもので、347の高坏は覆土下層から出土した脚部と底面近くから出土した坏部が接合したもので、350の高坏は覆土下層から出土した坏部と脚部が接合したもので、372の甕は覆土下層から底面近くにかけて出土した破片が接合したもので、374の甕は底面近くから出土した破片が接合したもので、381の台付甕は覆土中層から底面近くにかけて出土した破片が接合したものである。

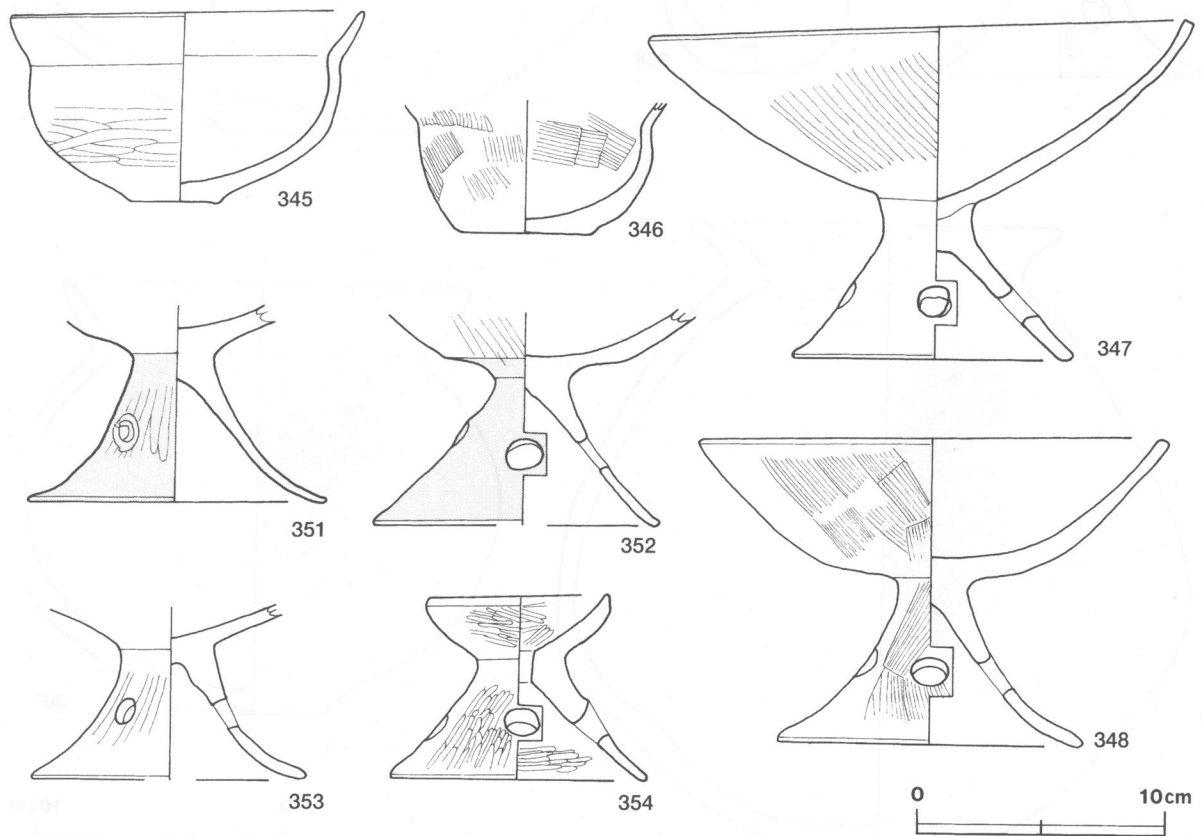
所見 主体部は確認できなかったが、周溝内から多量の土器が良好な状態で検出された。土器の内訳は、小形鉢が2点、高坏が7点、器台が4点、埴が1点、壺が8点、甕が8点、小形甕が2点、台付甕が5点、ミニチュア土器が1点である。これらの土器は、覆土下層から底面近くにかけて出土し、347～350の高坏、354の器台、359～361・364の壺、367・368の甕、375の小形甕、377～379の台付甕のように、ほぼ完形あるいは土圧でつぶれた状態で出土している。出土した土器と底面との間には、黒褐色土が薄く確認されている。このことから、方台部の縁辺上に置かれていたものが、周溝内に落ちたものと考えられる。土器が出土している南東溝側は、平坦な台地が広がり、そこから同時期の住居跡も検出されていることから、集落との関連性が考えられる。時期は、周溝内の出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と思われる。



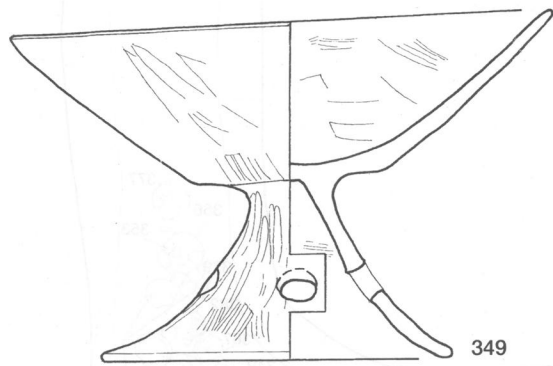
第156图 第1号方形周沟墓实测图(1)



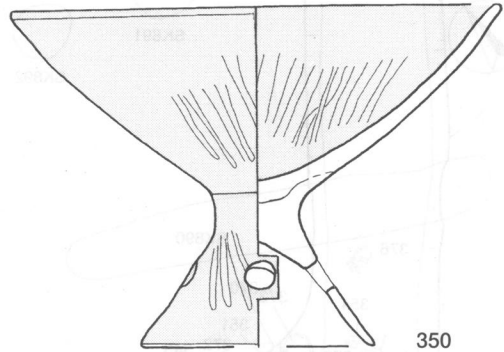
第157图 第1号方形周沟墓实测图(2)



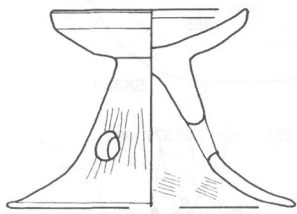
第158图 第1号方形周沟墓出土遗物实测图(1)



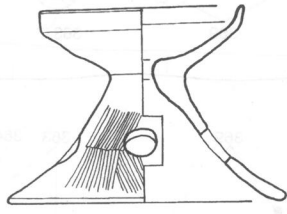
349



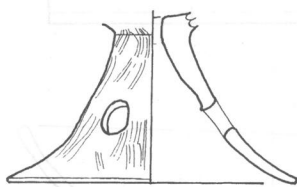
350



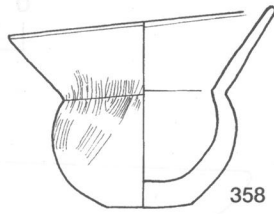
355



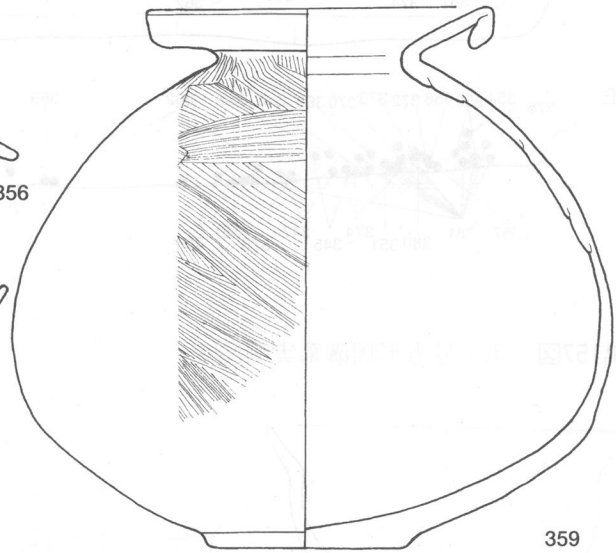
356



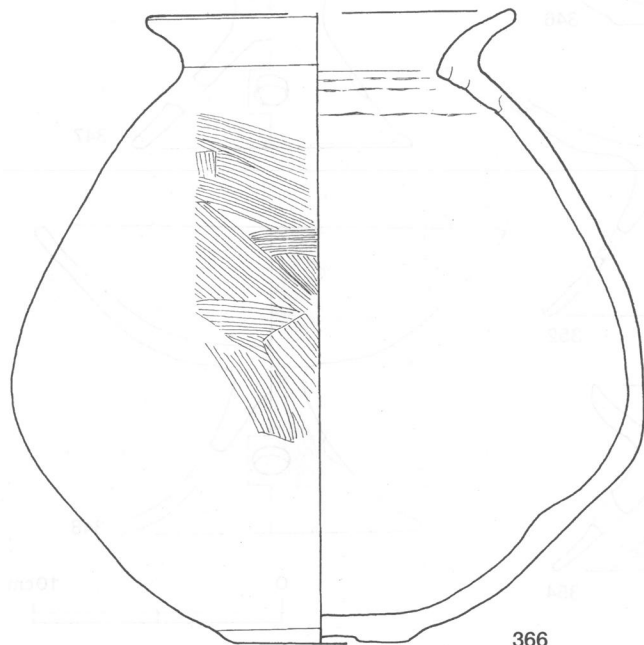
357



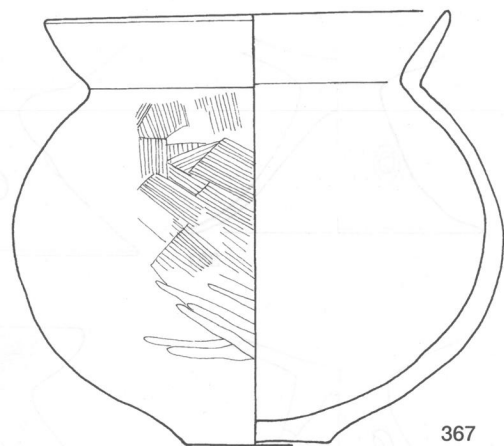
358



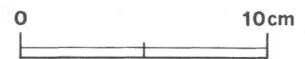
359



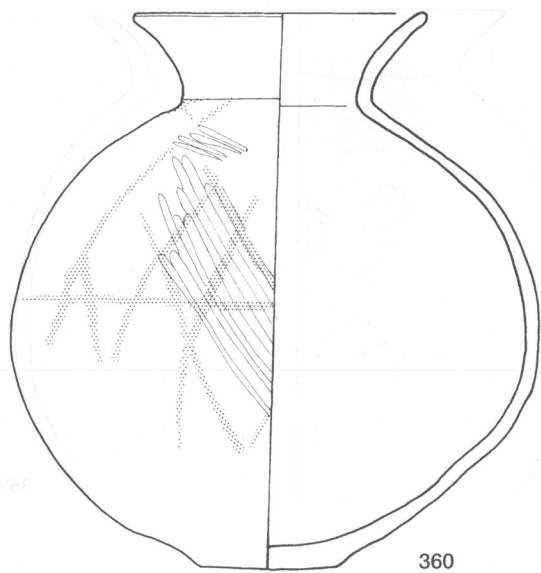
366



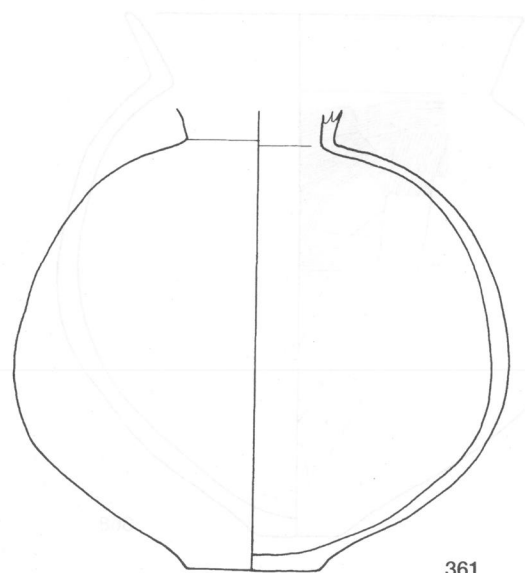
367



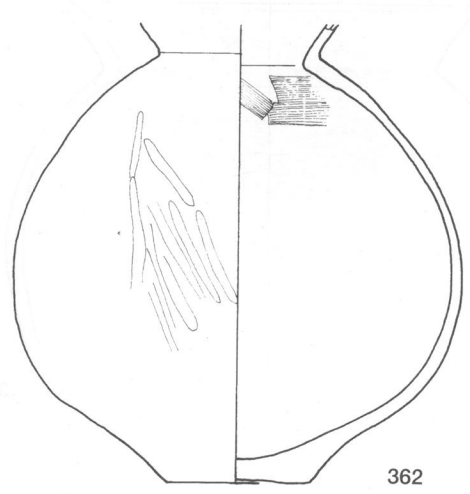
第159图 第1号方形周沟墓出土遗物实测图(2)



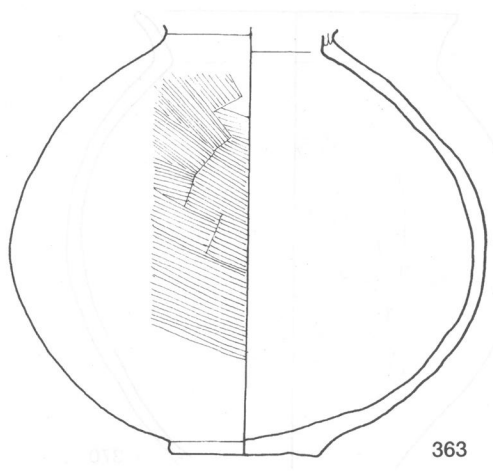
360



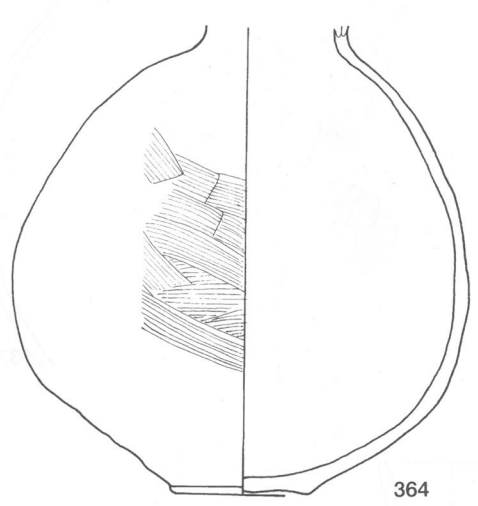
361



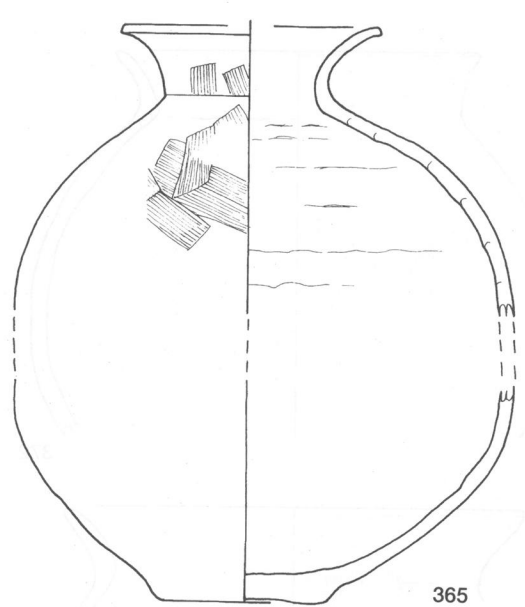
362



363



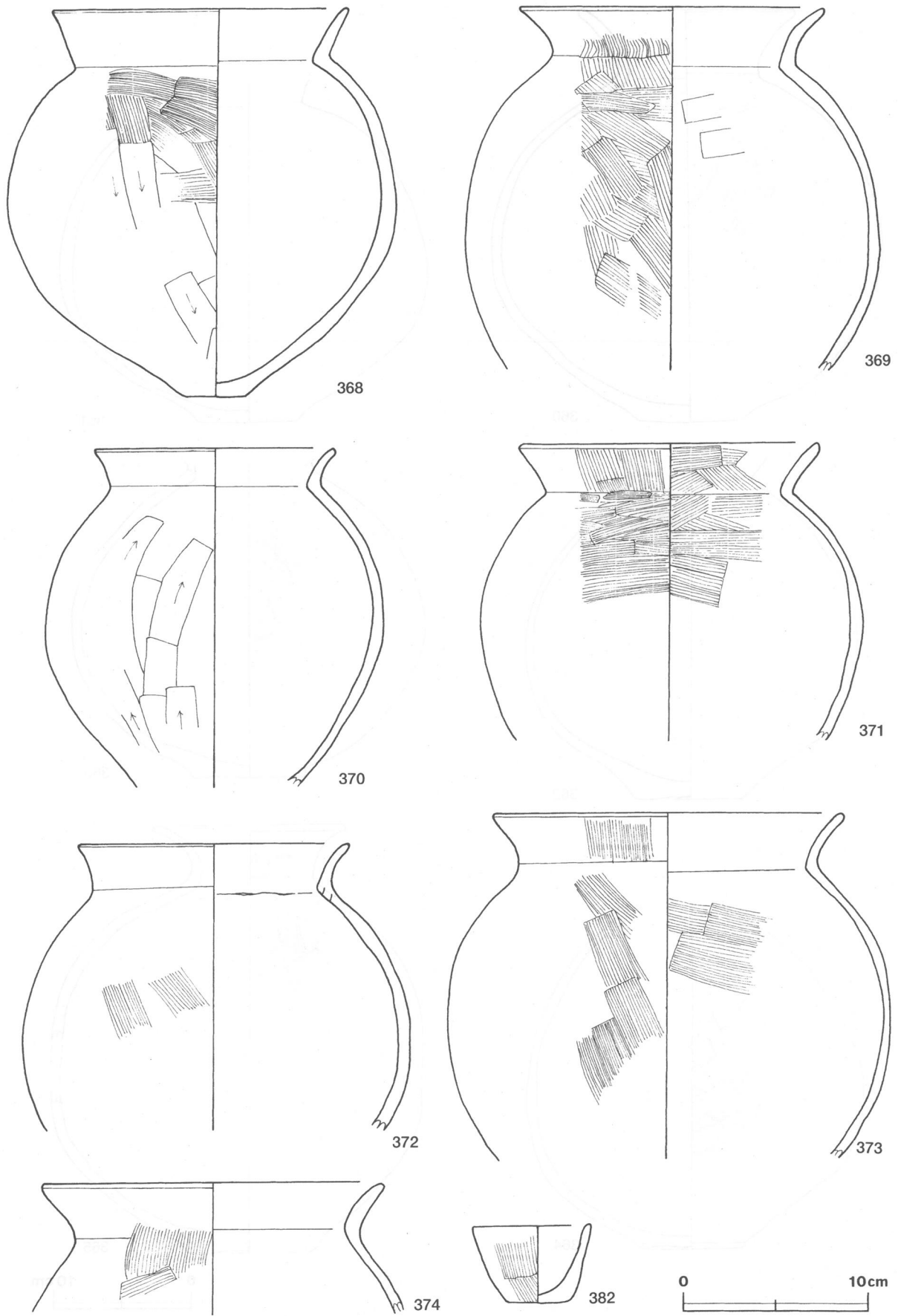
364



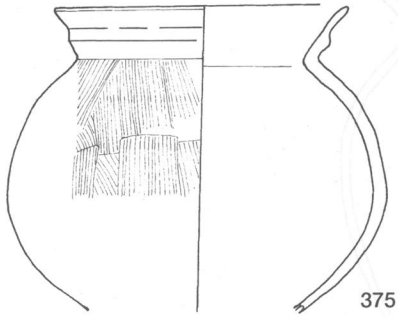
365



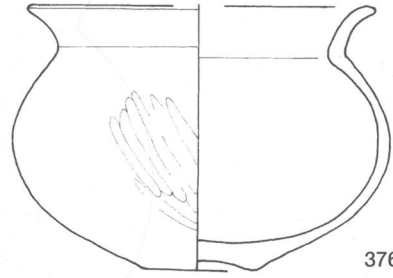
第160图 第1号方形周沟墓出土遗物实测图(3)



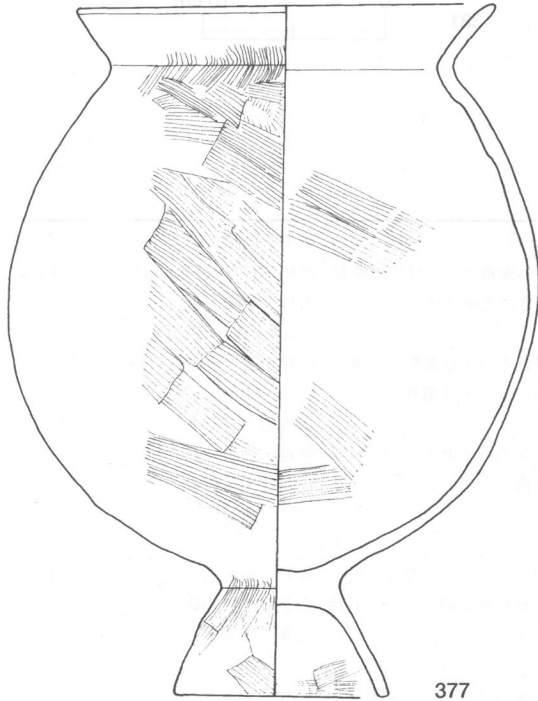
第161図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図(4)



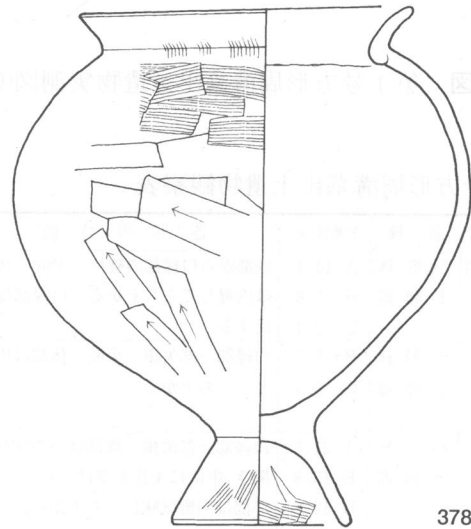
375



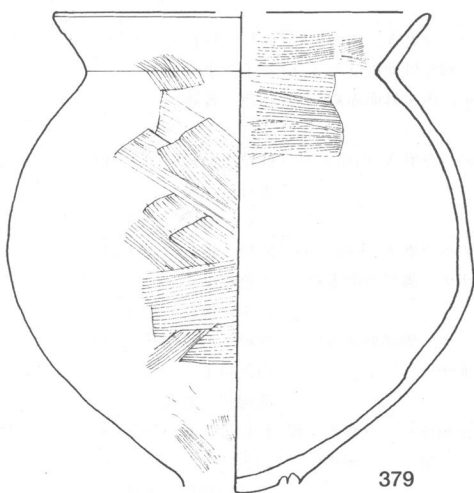
376



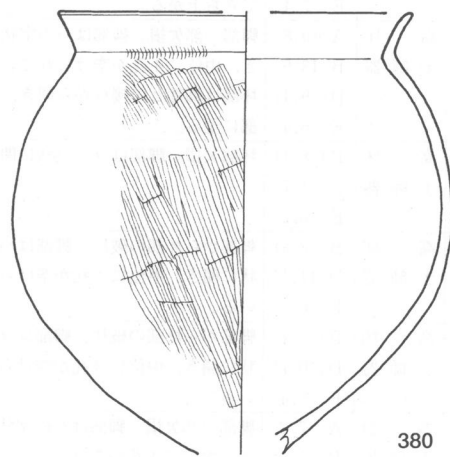
377



378



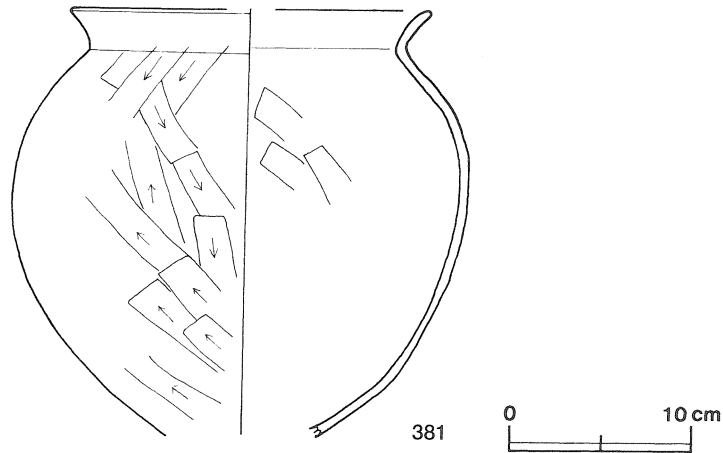
379



380



第162图 第1号方形周沟墓出土遗物实测图(5)



第163図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図(6)

第1号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第158図 345	小形鉢 土師器	A 14.1	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 にぶい黄橙色 普通	50% P L 25
		B 7.8				
		C 3.4				
346	小形鉢 土師器	B (5.5)	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面斜位のハケ目調整後、横ナデ、内面横位のハケ目調整。	砂粒・雲母・白色粒子・赤色粒子 褐灰色 普通	60%
		C 5.3				
347	高 坏 土師器	A 21.5	口縁部一部欠損。脚部はハの字状に開き、中位に4孔が空けられている。坏部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面斜位のヘラ磨き、内面ナデ。脚部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・礫 橙色 普通	90% P L 26
		B 13.8				
		D 10.9				
		E 6.3				
348	高 坏 土師器	A 18.6	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開き、中位に4孔が空けられている。坏部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面斜位のハケ目調整後、ナデ、内面ナデ。脚部外面縦位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 浅黄色 普通	95% P L 25
		B 12.6				
		D 12.0				
		E 6.8				
第159図 349	高 坏 土師器	A 21.6	口縁部一部欠損。脚部はラッパ状に開き、中位に4孔が空けられている。坏部は外面下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面斜位のハケ目調整後、横ナデ。脚部外面縦位のハケ目調整後、ヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 浅黄橙色 普通	80% P L 25
		B 14.2				
		D 13.8				
		E 7.4				
350	高 坏 土師器	A 19.8	脚部一部欠損。脚部はハの字状に開き、中位に4孔が空けられている。坏部は脚部との接点から開き、口縁部に至る。	坏部外面縦位のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・白色粒子・小礫 赤色 普通	85% P L 26
		B 13.9				
		D [9.4]				
		E 6.4				
第158図 351	高 坏 土師器	B (8.1)	坏部欠損。脚部はラッパ状に開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。脚部外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 にぶい赤褐色 普通	40%
		D 11.7				
		E 6.2				
352	高 坏 土師器	B (8.8)	脚部から坏部の破片。脚部はハの字状に開き、中位に4孔が空けられている。	坏部外面斜位のヘラ磨き、内面ナデ。脚部内・外面ナデ。脚部外面赤彩。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	40%
		D [11.1]				
		E 6.0				
353	高 坏 土師器	B (7.1)	脚部から坏部の破片。脚部はラッパ状に開き、中位に3孔が空けられている。	坏部内・外面ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 明褐色 普通	40%
		D [10.7]				
		E 5.4				
354	器 台 土師器	A 7.2	脚部一部欠損。脚部はハの字状に開き、中位に4孔が空けられている。器受部は皿状を呈す。器受部中央に単孔が空けられている。	器受部内・外面横位のヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	85% P L 26
		B 7.5				
		D 10.2				
		E 5.0				
第159図 355	器 台 土師器	A 7.8	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開き、中位に3孔が空けられている。器受部は皿状を呈し、端部は摘み上げられている。	器受部内・外面横ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のハケ目調整後、横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・小礫 にぶい橙色 普通	80% P L 26
		B 8.0				
		D [11.6]				
		E 5.8				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159図 356	器台 土師器	A 8.1	器受部・脚部一部欠損。脚部はハの字状に開き、中位に4孔が空けられている。器受部は皿状を呈し、端部は摘み上げられている。器受部中央に単孔が空けられている。	器受部内・外面横ナデ。脚部外面縦位のハケ目調整後、ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・白色粒子 にぶい橙色 普通	80% P L 26
		B 7.9				
		D 11.0				
		E 5.2				
357	器台 土師器	B (7.0)	器受部欠損。脚部はラッパ状に開き、中位に3孔が空けられている。	脚部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・白色粒子 淡黄色 普通	60%
		D 11.6				
		E 6.0				
358	罎 土師器	A 10.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外傾して直線的に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整後、ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	85% P L 26
		B 7.9				
		C 3.4				
359	壺 土師器	A 13.4	口縁部一部欠損。やや突出した平底。体部は下位に最大径をもつ球状を呈する。口縁部は外傾して立ち上がり、端部は折り返している。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位斜位のハケ目調整、下位横位のヘラ磨き、内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 にぶい黄橙色 普通	95% P L 26
		B 22.0				
		C 7.8				
第160図 360	壺 土師器	A 15.5	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は球状を呈する。頸部はやや立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子・小礫 橙色 普通	70% P L 26 体部外面に籠目の痕を残す
		B 30.2				
		C 7.7				
361	壺 土師器	B (24.9)	口縁部欠損。平底。体部は球状を呈する。	体部外面斜位のハケ目調整後、ナデ、内面横位のハケ目調整後、ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・白色粒子 浅黄橙色 普通	80%
		C 6.8				
362	壺 土師器	B (24.4)	底部から頸部の破片。やや突出した平底。体部は下位に最大径をもつ球状を呈する。	体部外面縦位のヘラ磨き、内面上位横位のハケ目調整、中位以下ナデ。	砂粒・長石・石英・小礫 にぶい黄橙色 普通	50% 体部外面煤付着
		C 7.5				
363	壺 土師器	B (22.5)	底部から体部の破片。やや突出した平底。体部は球状を呈する。	体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・白色粒子・赤色粒子 灰白色 普通	60%
		C 8.0				
364	壺 土師器	B (25.5)	口縁部欠損。やや突出した平底。体部は下位に最大径をもつ球状を呈する。	体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・白色粒子・小礫 にぶい黄橙色 普通	80%
		C 7.3				
365	壺 土師器	A [13.8]	底部から口縁部の破片。突出した平底。体部は内彎して立ち上がる。頸部はやや立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 浅黄色 普通	60% 体部外面煤付着
		B [31.8]				
		C 8.8				
第159図 366	壺 土師器	A [14.5]	底部から口縁部の破片。平底。体部は球状を呈する。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・赤色粒子・小礫 浅黄色 普通	70% 体部外面煤付着
		B 25.6				
		C 7.0				
367	甕 土師器	A 16.3	体部一部欠損。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整後、ヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・赤色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	90% P L 26 体部外面煤付着
		B 17.5				
		C 5.7				
第161図 368	甕 土師器	A 16.0	体部・口縁部一部欠損。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整後、縦位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・小礫 橙色 普通	85% 体部外面煤付着
		B 20.9				
		C 3.2				
369	甕 土師器	A 16.4	体部下位欠損。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位・斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	60%
		B (19.6)				
370	甕 土師器	A 12.8	底部欠損。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	70%
		B (18.2)				
371	甕 土師器	A 15.8	体部から口縁部の破片。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面縦位のハケ目調整、内面横位のハケ目調整。体部内・外面横位のハケ目調整。	砂粒・長石・赤色粒子・小礫 橙色 普通	40% P L 26
		B (16.0)				
372	甕 土師器	A 14.6	体部から口縁部の破片。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・白色粒子 橙色 普通	40% P L 27
		B (15.5)				
373	甕 土師器	A 18.8	体部から口縁部の破片。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面縦位のハケ目調整、内面横ナデ。体部内・外面斜位のハケ目調整。	砂粒・雲母・白色粒子・小礫 にぶい橙色 普通	30%
		B (18.6)				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第161図 374	甕 土師器	A 17.9 B (7.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・赤色 粒子 浅黄橙色 普通	10%
第162図 375	小形甕 土師器	A 11.6 B (12.6)	体部から口縁部の破片。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・石英・白色 粒子・小礫 にぶい橙色 普通	40% P L 27 体部外面煤付着
376	小形甕 土師器	A [13.9] B 10.7 C 4.4	底部から口縁部の破片。底部はややくぼむ平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子・小礫 橙色 普通	50%
377	台付甕 土師器	A 22.4 B 37.1 D 11.4 E 6.8	体部一部欠損。脚台部はハの字状に開く。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面斜位のハケ目調整。脚台部外面斜位のハケ目調整、内面横位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 浅黄橙色 普通	90% P L 26 体部外面煤付着
378	台付甕 土師器	A 17.6 B 28.3 D 9.4 E 6.0	体部一部欠損。脚台部はハの字状に開く。体部は上位に最大径をもつ球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上横位のハケ目調整、中位以下斜位のヘラ削り、内面ナデ。脚台部内・外面斜位のハケ目調整。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 浅黄橙色 普通	80% P L 27 体部外面煤付着
379	台付甕 土師器	A (19.8) B (26.0)	脚台部欠損。体部は球状を呈する。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部外面横位・斜位のハケ目調整、内面横位のハケ目調整。	砂粒・長石・白色 粒子 にぶい橙色 普通	60% 体部外面煤付着
380	台付甕 土師器	A (18.7) B (24.0)	脚台部欠損。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・赤色 粒子 にぶい橙色 普通	30% 体部外面煤付着
第163図 381	台付甕 土師器	A (19.4) B (23.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子・小礫 褐色 普通	30%
第161図 382	ミニチュア土師器	A 6.2 B 4.2 C 3.3	鉢形。口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面縦位のハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石・石英 灰黄褐色 普通	95% P L 27

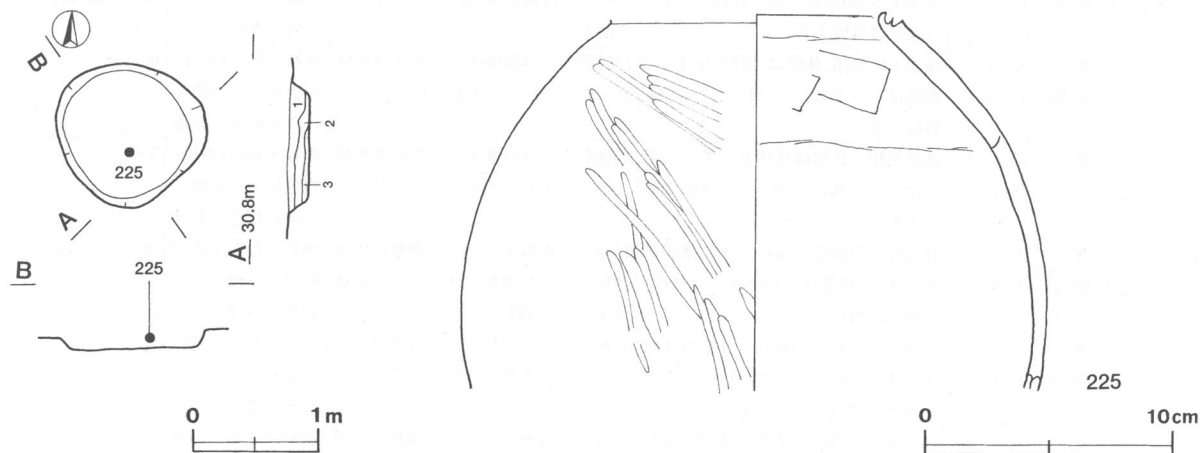
(5) 土坑

第278号土坑 (第164図)

位置 調査区の北西部, C 2 b9区。

規模と形状 径1.15mほどの円形で、深さ13cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。



第164図 第278号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

遺物 土師器片25点, 流れ込んだとみられる縄文土器片5点が出土している。第164図の225は土師器の甕で, 覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から判断して, 中期(5世紀中葉)と思われる。

第278号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第164図 225	甕 土師器	B(15.2)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 中位に最大径をもつ。	体部外面斜位のヘラ磨き, 内面ヘラナデ。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	35%

第318号土坑(第165図)

位置 調査区の北東部, B4h6区。

規模と形状 径0.48mほどの円形で, 深さ37cmである。底面は皿状を呈し, 壁は外傾して立ち上がる。

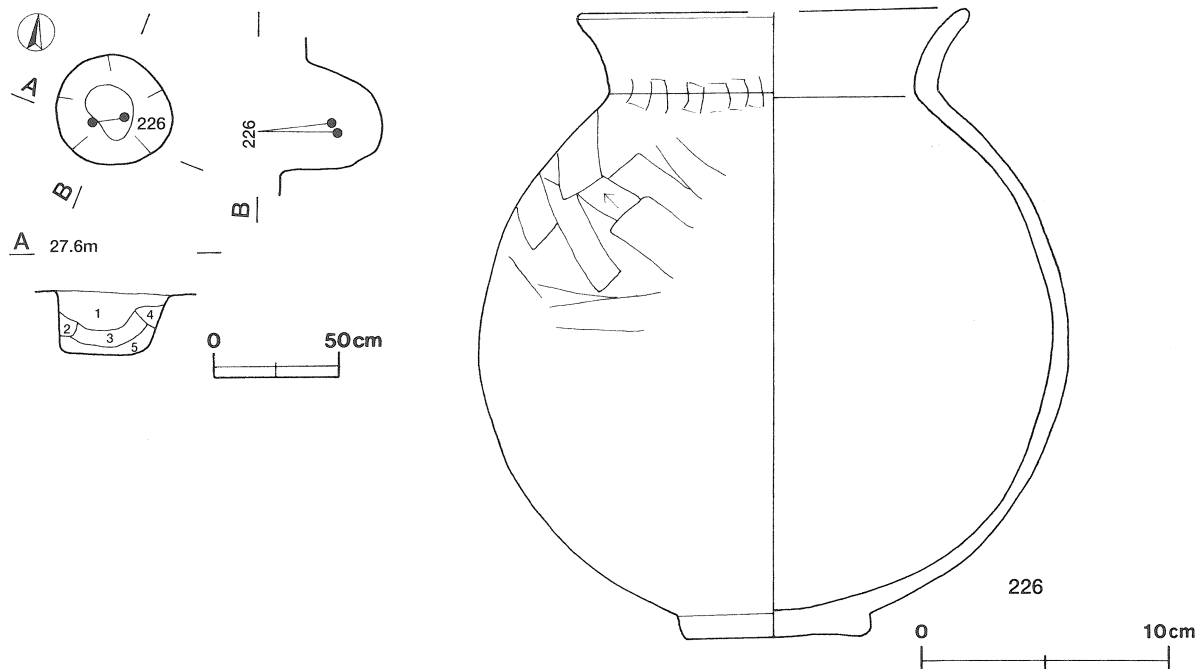
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・赤色粒子微量 4 暗褐色 ローム粒子少量, 赤色粒子微量
 2 黒褐色 ローム粒子微量 5 暗褐色 ローム粒子・赤色粒子少量
 3 暗褐色 ローム粒子中量, 赤色粒子微量

遺物 土師器片6点が出土している。第165図の226は土師器の甕で, 覆土中層から横位の状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から判断して, 中期(5世紀中葉)と思われる。



第165図 第318号土坑・出土遺物実測図

第318号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 226	甕 土師器	A [15.6] B 25.5 C 7.2	底部から口縁部の破片。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り後、ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 礫 赤褐色 普通	45% 体部外面煤付着

第320号土坑 (第166図)

位置 調査区の北東部, B 4 i0区。

重複関係 北側を第9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 径1.3mほどの円形と推定され、深さ44cmである。底面は凹凸で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 2層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

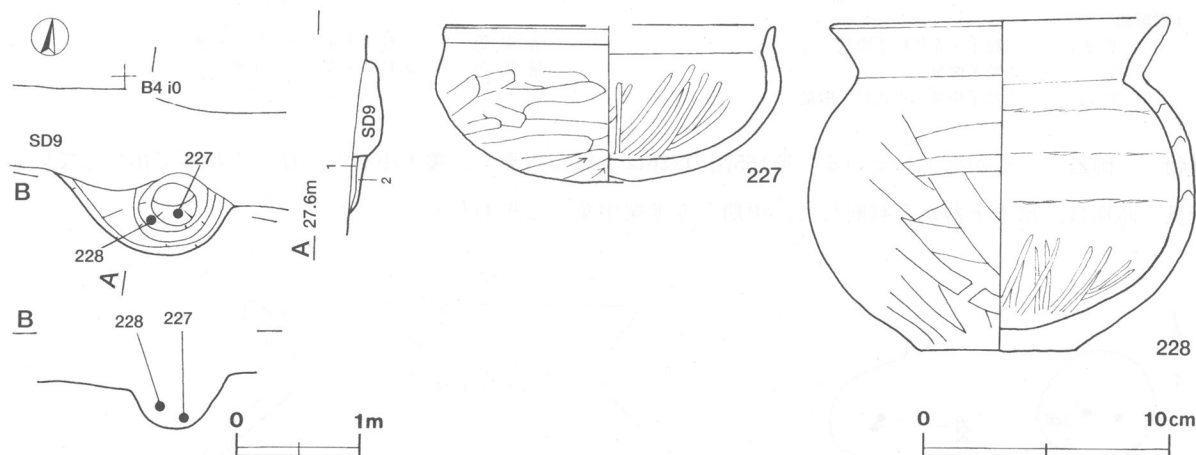
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・赤色粒子微量

遺物 土師器片50点、礫1点、流れ込んだとみられる弥生土器片2点が出土している。第166図の228は土師器の甕で覆土中層から横位の状態で、227は土師器の坏で覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から判断して、中期(5世紀中葉)と思われる。



第166図 第320号土坑・出土遺物実測図

第320号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第166図 227	坏 土師器	A [13.0] B 6.3	底部から口縁部の破片。底部中央に指頭ほどのくぼみをもつ。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母・ 白色粒子 明赤褐色 普通	60% P L 27
228	甕 土師器	A 13.6 B 13.5 C 6.1	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部はくの字状にくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。内面下位放射状のヘラ磨き。体部内面に輪積み痕。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子・小礫 明赤褐色 普通	100% P L 27

第321号土坑 (第167図)

位置 調査区の北東部, B 4 h7区。

重複関係 北側を第9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径は1.9m, 短径は1.6mほどの楕円形と推定され, 深さ25cmである。底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-25°-E

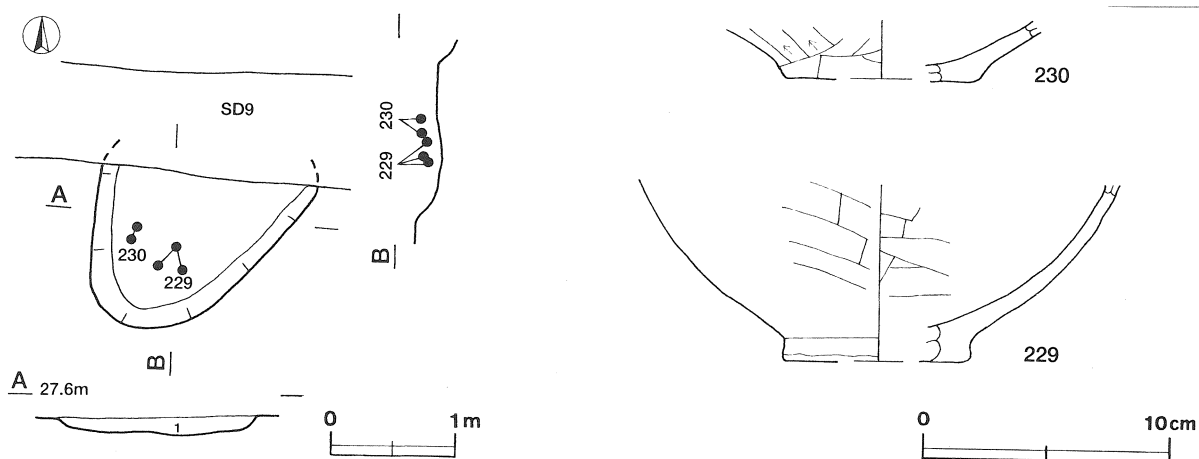
覆土 単一層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・赤色粒子微量

遺物 土師器片91点が出土している。いずれも破片の状態, 重なり合っ出て出土している。第167図の229・230は土師器の甕で, 覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から判断して, 中期(5世紀中葉)と思われる。



第167図 第321号土坑・出土遺物実測図

第321号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第167図 229	甕 土師器	B(7.2) C(7.4)	突出した平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・石英・雲母・ 白色粒子 にぶい赤褐色 普通	15%
230	甕 土師器	B(2.5) C(7.8)	平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面斜位のヘラ削り, 内面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 小礫 にぶい赤褐色 普通	5%

第700号土坑 (第168図)

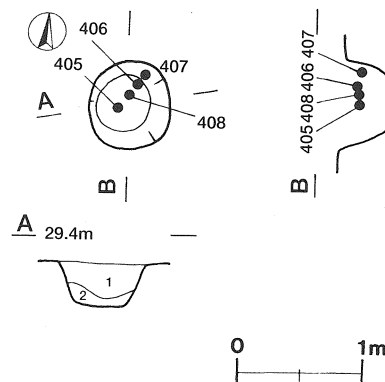
位置 調査区の中央部, C4c2区。

規模と形状 径0.68mほどの円形で, 深さ38cmである。底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がる。

覆土 2層からなる。レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と思われる。

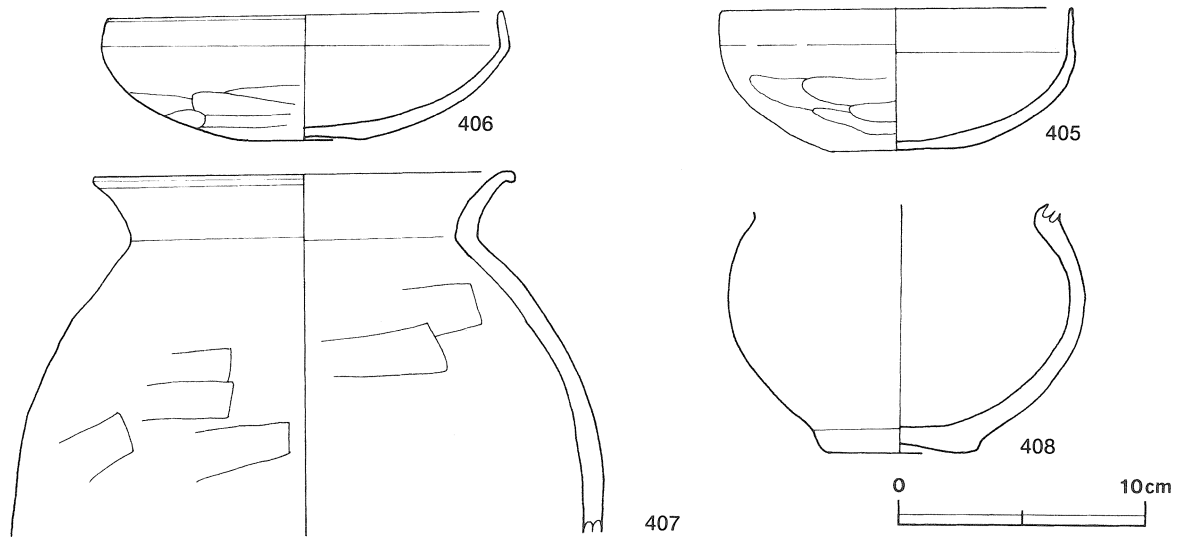
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量



第168図 第700号土坑実測図

遺物 土師器片75点が出土している。いずれも破片の状態で、重なり合って出土している。第169図の405・406は土師器の坏，407は土師器の甕，408は土師器の小形甕である。いずれも、覆土中層から出土している。
所見 時期は、出土土器から判断して、中期（5世紀後葉）と思われる。



第169図 第700号土坑出土遺物実測図

第700号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第169図 405	坏 土師器	A 14.0 B 5.8 C 4.8	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・石英・白色 粒子 明赤褐色 普通	90%
406	坏 土師器	A 15.9 B 5.2 C 4.0	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり，体部外面に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母・ 小礫 にぶい赤褐色 普通	50%
407	甕 土師器	A 16.7 B (14.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状にくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・ 小礫 明赤褐色 普通	35%
408	小形甕 土師器	B (10.1) C 5.5	底部から口縁部の破片。やや突出した平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 明赤褐色 普通	45%

5 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡2軒を検出した。以下、遺構の特徴と出土遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第4号住居跡（第170図）

位置 調査区の南部，D4h1区。

重複関係 北西コーナー部を第202号土坑に，中央部北西コーナー寄りを第201号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 床面の広がりや竈の位置などから判断して，長軸4.17m，短軸4.14mの方形と推定される。

主軸方向 N-12°-E

床 ほぼ平坦で，竈の南東部からP1付近にかけてよく踏み固められている。